

新しい風俗文献誌

9



奇譚クラブ

1971-9

奇蹟クラブ

昭和四十六年八月 昭和四十一年四月	十日印刷 二十日發行	昭和四十六年九月一日發行 昭和四十二年西曆十一月	九頁 第二十五卷第九号一冊月一回	北條
	三橋康徳監修 昭和四十二年西曆十一月	日本放送協會編輯部承送諸君見 二〇五		

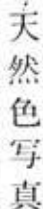
Osaka Japan



9月号 ¥350

Ⅱ△女体緊縛写真集ⅤⅡ 定価 一〇〇〇円 (送50円)

本 鈔 三



~~~~~女体緊縛の華

~~~~~ 緊縛女体の光と影

| | |
|---------|---|
| 痛打の一瞬 | 責の果の諦観 |
| ホステス裸人生 | |
| 佐々木真弓 | 関谷富佐子
前田真知子
シラ・グエー |
| | 長井葉津子
川路薫子
奥谷富佐子
関谷富佐子
前田真知子
藤田真知子
花悠紀子
梨井美津子
佐々木真弓 |
| | 酒の肴に目天使
妖蛇の洗心なる
奔弄されるまに
海老縛りごた妙味
痛さをこらえる異国女 |
| | 荒縄の海老責
美と縛の女神
可憐な置物猿書
泣かぬ目の天使 |
| | 住手破方閑情
前手の彼方の天国
三浦純恵子
中河常佑子
廣瀬祐子 |

▽賞金△

▽内 容△

女性モデル募集

勇敢な女性の出現を望む

集部宛

女子大生前田真知子天然色緊縛フオート

本誌上に姿を現して以来、その手記と共に非常に人気を博しました。美貌の女子大生前田真知子嬢のカラーフオートは、広くファンの方々に要望されていきましたが、ここに新しく特写の機会を持ちましたので好事家のお目にかけます。

柱縛りと脚挙縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八すき
肉づきのよいふくよかで美しい太腿を引き上げられて柱に全裸で縛られたM女の本領をあばく。

麻縄高手小手首縄

大手札三枚一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八すめ
黒ずんだ麻縄が真白い柔肌に喰い込んでピンク色に染まった美しいカラ―でまた格別である。

荒縄強烈エビ縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八すけ
トゲトゲとした荒縄で情容赦なく強烈なエビ縛りに責められたれば流石のM女も白肌を赤く彩る。

荒縄悦虐羞恥責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八すら
赤い絨氈の上に荒縄でぎゅうぎゅう縛られた全裸の女体が芋虫のように浅間しくうごめいている。

悶える強烈海老責

大手札三枚一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八すへ
高手小手に縛られた上二つ折りに屈曲させられた女体は秘所もあらわに畳の上を転々と悶える。

柔肌をくびる縄目

大手札三枚一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八すれ
正面と側面と横臥と、その姿勢は変れども全裸の美しい女体に厳重に掛った縄目はむごたらしい。

緊縛女体をいびる

大手札三枚一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八する
身動きも出来ない縛られた裸身を目の下にして、思うがままにいたぶるのはS男子の本望である。

羞恥を晒す女体柱

大手札三枚一組 一〇〇〇円
前田真知子 略号八すそ
立柱に棒縛りになった女体は、加虐者の思いのままに、その嗜虐心の欲望の犠牲となって哭く。

◎右に掲げました総天然色のカラープリントは、美人女子大生前田真知子嬢の一糸まとわぬ緊縛フオートばかりです。必ずや女体緊縛フオート蒐集家の方のお気に召すものと信じます。

☆深田菊子浣腸悦虐責めフェチフオート

〔悦虐浣腸写真〕

溶液を圧入される

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八みは
エネマと硝子シリンドラーで浣腸液を圧入される時の姿態と表情。

全裸で受ける浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八みふ
三種の浣腸器具でお尻を突っ立てたあられもない姿で施す浣腸。

イルリの嘴管挿入

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八みほ
二千CCのイルリガートルからドクドクと注ぎ込まれる溶液。

刺す浣腸器の恐怖

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八みち
百CCの硝子製ポンプの先端がズブリと突き刺さる浣腸の恐怖。

自ら施す浣腸悦楽

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八みそ
強制されて自分自ら浣腸器を握って施す浣腸の羞恥と被虐悦楽。

体内に奔流する液

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八みや
浣腸液が体内に奔流する。

尻つき出した四つ這いで浣腸液はグングンと体内に奔流する。

浣腸を楽しむ美女

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八みぬ
羞かしい浣腸もやがては自ら慰め楽しむ悦楽の小道具となる。

〔オシメ着用写真〕

オシメからカバー

大手札十二枚一組 二〇〇〇円
深田 菊子 略号八みめ
浣腸のあとオシメを当てて生ゴム製のオムツカバーを着着する。

おムツに排便する

大手札十二枚一組 二〇〇〇円
深田 菊子 略号八みし
オムツを当ててカバーを着けるまでの段階を順序を追って見せる。

生ゴムのオムツへ

大手札十枚一組 一八〇〇円
深田 菊子 略号八みせ
ヌメヌメとした生ゴムのカバーとオシメとの奇妙な組合せ。

◎以上発表しました浣腸写真の要望によりまして、特にこの種のSMに興味と関心を抱く深田菊子嬢を煩して作成しました。郵便局私書箱第14号天屋社宛へ、略号記載の上、どうぞ。



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文獻を研究する平和で
穩健な社会生活を営む真面目な成人を対象
として編集しておりますが、青少年の保護
育成に關する条例には抵触しないよう、十
分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
次整えて参りましたが、更に挿入写真の検
討及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いもの
は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
載した文章は十二分に検討を加え、いやし
くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
数は最低限度にとどめ、その増大を企てるた
めの努力はいたしません。

ク サ ロ ン

...(232)...



SM随想「新しい分野」.....小杉 千恵
妊娠腹プレイ「最後の記録」.....阪東 太郎
サロン楽我記「第八十七回」.....辻村 隆
フォト「悦虚のポーズ」.....高村 浩子
尽きぬ悩み「急々緩々」.....清和 音孤
私の香港ハント.....高柳 浩二
純子のプレイ・フォト.....三浦 敬一
詩「輝くおまえ」.....佐渡 黄門
マンネリ脱出「緊縛と限界」.....和田 平助
まり子の裸になの方.....北川 まり子
イメージ画「細腰無残」.....古留 節人
寸時のプレイ「屋上での戯れ」.....野津 敏生
編集部だより.....編集部
夢想のうた「縄と私」.....納屋 名鶴
マニヤ記「慶子を縛る心」.....早木 夢二
告白「おしめ性夜尿症」.....杉 並夫
フォト「宙に浮く振袖」.....山本 五郎
深田菊子羞恥責めの構想.....川口 治
阪東太郎氏へ「妊娠腹礼讃」.....高野 原美
短信往来 中宮栄さまへ.....佐野 みさ子
金塚えり子様へ「継母とお灸」.....三井 健児
イメージ画「みみず責めの女」.....府和 糸男
責太造の五つの願い.....責 太造
ある新聞記事「似て非な事件」.....くにもんと

奇譚クラブ

△第二五卷 第九号・通刊第二八三号△

(昭和四十六年) 九月号 目次

△本 文△

- 扉で一言「憧憬と願望」.....石川 馨 (9)
- 贗作「花と蛇」小説.....山光 純 (10)
- 懸賞入選告白「縄に憑かれた青春」.....名和 好男 (18)
- 新連載・時代S小説「紫蘭の門」(1).....風流極道軒 (28)
- 懸賞入選告白「欲びの追憶」.....溝口 友子 (44)
- 切腹研究夜話「眠れぬ夜の対話」.....中康 弘通 (51)
- 懸賞創作 恍惚のバタフライ.....工月 洋一 (54)
- 連載小説「大噴火」△第三十六回△.....千葉 青鬼 (66)
- 古文書より「宝曆美女相撲」(下).....須田 司 (74)
- SMカメラ・ハント△竜珠子の巻△.....
- 「化身」(けしん).....辻村 隆 (84)
- そのウソ・ホント? 「ピンクの輝」.....八代 令子 (110)
- 連載・アブ紳士行状記「M派交友録」(19).....鬼山 絢策 (112)
- 体験告白「A感覚に溺れて」.....黄 好夫 (123)
- 被虐の旅シリーズ△異国の椅子△.....由利美千子 (126)

女責め図絵の系譜「紅絹地獄秘図」

- コント・オツな生首人形.....南 彦造 (136)
- 懸賞入選告白「地平線の彼方に」.....有幹 五郎 (144)
- 連載・青春の陥穽「女の意地」.....荒尾 慶子 (146)
- 読切創作「猟奇のみずどり」.....芳野 眉美 (156)
- 淋しい情慾「虚しき期待」.....座頭木之介 (163)
- 懸賞創作「夜の妖精」.....陶山 祝生 (166)
- 告白小説「夜の水滴」△M女の仮面△.....銀河 三郎 (188)
- 水田真紀子「看護婦」.....佐原陽一郎 (197)
- 習作シリーズ.....水田真紀子 (200)
- ゴムと皮と苛責「五つの門」.....志保 亮吉 (208)
- フンドチズム・レズ「ふんどし女の肌と体臭」.....鈴木ゆり子 (213)
- 連載小説「花と蛇」△続篇第七十八回△.....団 鬼六 (216)
- 尿憶告白「青春の軌跡」.....麻曾比須人 (222)
- 創作・秘戯「紐狂奏曲」.....長田 二郎 (224)
- 読者通信.....編集部選 (252)
- 読者ギャラリー.....「胎動とともに」須坂 旭・「きよう
九重の...」岡 たかし・「人形じごく」室井亜砂路・
「甘い痛撃」春川ナミオ・「昼と夜の縮図」志羽 利
也・「密戯発覚」岡 たかし・「不安の腕き」府和
糸男・「捕われた肢体」伊達 忍・「スベリ台附属
品」春川ナミオ・「詰合せ進物」小川 茂正・「無題」
室井亜砂路・「最後の抵抗」須坂 旭

目次カット「踊」保曾川喧児.....「涙」あらい・かず
扉カット「艶」.....前田真知子

☆読者通信のうら若き美女を緊縛する

読者通信に或は本文の告白文に登場した若々しい本誌愛読者の鮮明な印画紙焼付の変わった緊縛姿態を要求される方々に捧げます。

逆エビ縛吊り上げ

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八ろて
後手首と足首を締めつけた切点を吊り上げ弓のように反らせる。

縄付きで愛してネ

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八ろせ
縛られたままで愛されるのが最高という彼女のマゾヒズム要望。

棒責めの開股縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八ろひ
棒の両端に左右の足を括りつけた開股羞恥責めの最高傑作姿態。

可愛い牝犬の珍芸

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八ろり
両手の自由を奪われた可憐な牝犬が全裸の肢体で演ずる珍芸。

開股責めの種々相

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八ろみ
羞恥責めの極致である開股縛りの数々を三枚で御覧に入れます。

肌に喰い込む麻縄

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八ろし
もがけばもがく程黒ずんだ麻縄はぐいぐい柔肌に喰い込みます。

海老責めで虐める

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八ろめ
全裸の海老責めは両腿を一直線に開ききって羞恥の中心を晒す。

責め抜かれた結末

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八ろに
あくなき羞恥責めの末、ぐったりと放心状態になった緊縛肢体。

股間縛りにあえぐ

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八ろち
柔らかき女体を縦に真つ二つに割った妖しくも艶やかな縄一筋。

高手小手首縄悦楽

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八ろと
首縄は顔面を紅潮させマゾヒズムの女の薔薇の花をしとど濡す。

脚吊り柱強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八ろも
柱を利用して脚線美の片足を或は両足を吊り上げた羞恥の姿態。

白ロープの亀甲縛

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八ろへ
鮮やかな白縄がふくよかな肌を妖しい亀甲縛りの綾模様で彩る。

逆エビに晒す美形

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八ろす
柔軟な若々しい肢体が逆エビ縛りで悶えながら美しくうねる。

開股開陳羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八ろは
そこを露出するのが目的の羞恥責め好みの開股縛りを披露する。

白縄強烈縛り地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八ろそ
白太縄が強烈に肌を埋め弘田三枝子ばりの美貌が苦痛にゆがむ。

牢舎へ引回す囚女

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八ろい
牢舎へ通う冷たい階段を全裸の囚女を縛ったままで引回す。

菱縄縛りで責める

大手札三枚一組 四〇〇円
深田 菊子 略号八ろふ
麻縄を用いて整然とした菱縄を白肌にきびしく喰い込ませる。

荒尾慶子のすべて

大手札三枚一組 四〇〇円
荒尾 慶子 略号八ろふに
可憐な慶子未亡人のすべてをばっちりと捉らえた緊縛フォト。

浣腸溶液受入態勢

大手札三枚一組 四〇〇円
荒尾 慶子 略号八ろし
この格好で浣腸液をドクドクと体内に注ぎ込まれるのです。

剃毛の美女を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円
荒尾 慶子 略号八ろん
童女のようにスベスベと剃毛された跡もあざやかに晒して……

私をよく觀賞して

大手札三枚一組 四〇〇円
荒尾 慶子 略号八ろふな
全裸で縛られた私の隅々までを穴の開くほどよく御覧になって。

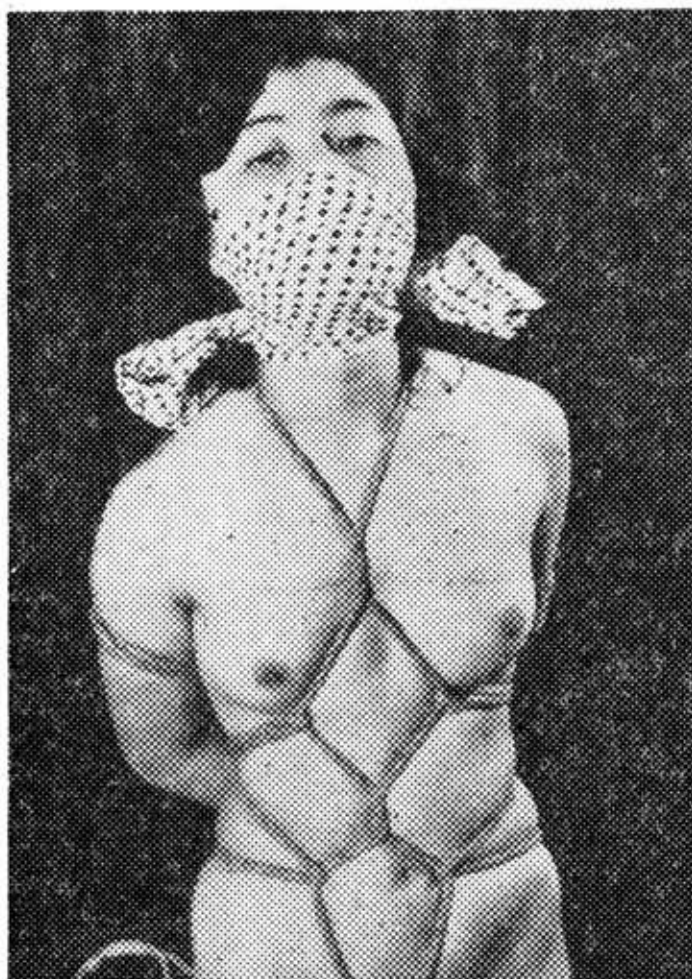
ベッド上での狂態

大手札三枚一組 四〇〇円
荒尾 慶子 略号八ろは
全裸で縛られた彼女がベッドの白いシーツの上でもだえ抜く。

強烈菱縄股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
荒尾 慶子 略号八ろふい
麻縄で厳しく締めつけた菱縄と股間縛りは柔肌を痛めつける。

◎御注文はすべて前金にて略号記載の上、大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社宛お申込み下さい。送料当方負担にて急送致します。



前 田 真 知 子

憧 憬 と 願 望

私たち男性が女性の柔肌を縛り上げたり、反対に女性が異性から縛られたいと願ったりすることをSMというそうなので、一応私もそれに従って、自分の性傾向をSMと言っておこう。

私の憧憬はといえば、生温かき若き女性の柔肌を縄で縛り上げたいということであるが、さりとて、私は人形のような女を縛ったり責めたりしたいとは思わない。やはり理想的な美しさを具えていないくとも、血の通った生身の女体を縛り上げた上でネチネチと責めてみたい。

といって、抵抗する相手を無理矢理力づくで責めたいというような悪趣味は持ち合せていない。小説や映画の上でならいざ知らず、自分が直接SMプレイを演ずるとなると、相手の女性も、それ相応の反応を示してくれないことには、こちらのプライドが許さない。

さて、それ故に願望ということになると、常識的ではあるがM傾向の女性とめぐり会いたいということになる。欲をいえば自分にだけM性向を発露するような女性がいらないものかと至ってムシのよいことを考える昨今である。だから、たとえ誌上でだけであっても、M女性が活躍してくれることを私は念願している。

(石川 馨)



贗^{がん}作^{さく}「花^{ハナ}と蛇^{ヘビ}」小^{しょう}説^{せつ}

山 光 純

餓狼と京子

ヒマラヤシーダや樟の大樹が、こんもりと茂り、高い塀に囲まれた庭は、ひっそりと静まりかえっているが、邸内は、なんとなく妖しい、ざわめきが感じられた。

邸の三階の間では、京子をあてがわれた清次と三郎、それに五郎を加えたチンピラどもは、もう既に抵抗を見せない京子の従順さに図にのって、徹底的に楽しんでやろうと、浮き浮きした気分になっている。

豪華なジュウタンを敷きつめた部屋の中央に、一糸もゆるされていない生贄^{いけにえ}の裸女が、

団鬼六作、連載小説「花と蛇」の人気にあやかっ、偽鬼六^{にせおにろく}こと山光純が、贗作を試みました。決して団先生の傑作を凌駕しようなどという気は毛頭なく、これすべ、鬼六先生の優雅な筆に心酔した余りの筆のすさびで、若し読者の皆様の共感を得るようでしたら続稿を物したく思います。

匂うような、なまめかしい女体の曲線を見せている。

一方に等身大の鏡があり、アームチェアと片隅に円形ベッド、バスルーム。天井には奇妙な仕掛けの滑車が、とりつけられている。いうまでもなく、思うさまに女体を弄び、いじめつくすための装置である。ベッドのそばにトイレットの道具などが入っている小物入れがあった。

スポーツできたえた京子の全裸の肢体は、まったく贅肉というものがなく、均斉のとれた、すばらしさである。

思いきりくびれたウエスト、張りきってぷりぷりと躍動するヒップ、ツンと上を向いて

ピンク色に染まり如何にも男の欲情をそそる乳房——。糸まとわぬヌードにされて、三人の男にとり囲まれている若い女は、こよなく美しく、エロチックだった。

さきほどから執拗につづけられてきた色責めのため、京子はすっかり上気し、首筋からなだらかな肩にかけて羞恥のくれないをみなぎらせている。

成熟しきった女のおいが、脂でにぶく光っている弾力のある肌からだよい、やわらかな下腹部のヘソの、きゅっと細くなっているあたりが、あらくなっている呼吸につれて盛りあがったり、へこんだりしている。

十九才になったばかりの生意気ざかりの五郎は、ながい睫毛をふせて、憐れみを乞うようにぴったり正座している京子のふくらとした尻の感触を楽しみ、空いた右手で、タップと微妙にゆれうごく隆起を、いつまでも撫でまわしてやまないのだ。

ついに、年かさの清次が言った。

「余興はこれくらいにして、本番をおっぱじめようや。さっきから、やたらにカッカしていけねえや。はじめに一对一で楽しみ、次に二対一もしくは三対一、最後にスタミナのつづくかぎり、まわしといこうじゃないか。京

子も異存はない筈だな。ええ？」

「はい、おっしゃることに異存はありませんわ。皆さんのお好きなように、カラダのお相手をしていただきます。こんなことくらいは、お詫びですむとは思いませんが、今の京子には、ほかに何もできないのですもの。お許しになって……」

むせぶように京子は言う。

じっさい、京子の豊満な裸身のどこにも、その使用方法は書いてないが、使いようによつては、無限の楽しみが、ひきだせるものがある。

この成熟しきった抜群のヌードに、何をしてもかまわないのだ。どんな荒唐無稽な、どんな残忍な性戯をしかけても、一向にかまわないのだ。

それを身体一杯に受けとめるのは京子であり、カサにかかって責めたてるのは清次たちヤクザである。

いちばん若い五郎は、もう夢中だった。彼は京子の裸身にへばりつくようにして、あちこちと執拗な、いたぶりをつづけ、彼女が白の咽喉もとを大きくのけぞらして呻くたびにさらに新しいところにふれてゆくのだ。

静脈の青く浮いた太腿をひらかせてみると

さきほど特製の道具をやさしく包みこんだあたりから、溢れた愛液がねっとりと光ってみえている。

それにしても、京子の男心を蠱惑してやまない滑らかな裸身の麗しさはどうだろう。静子夫人のような雪をあざむく白さはないが、健康美にあふれた若々しい色っぽさが、むんむんと満ち満ちている。

巷にあふれているヌード雑誌のヌードでもなく、ストリップ劇場のすれっからしでも勿論ない。五郎は夢と現実のあいだをさまよっているようで、京子のうしろにまわり、硬直しきった彼自身を持て余して、スベスベとした京子の背中に飛びかかりざま、グミのように朱い両の乳首を、指先に力をこめてつまんだのだ。

「……ああ、……五郎さん——つらいわ。そこは——」

言わせもはず、のけぞる京子の半開きの唇を自分のぶ厚い口でふさぐ。ピンクの舌が男の歯のあいだで、うろたえたように、はげしく、うちふるえる。

チラチラと歯のあいだから舌がのぞくたびに、京子の、なんともいいようのないセクシ——な呻きが、もれるのだ。

五郎のはげしさに先手をとられた三郎は、ムダ毛一つなく艶々とした、美しい京子の肌の腋の下をくすぐりながら、不満そうに清次を、みあげる。

清次は、

「まあ、いいってことよ。お前は、兄貴じゃないかよ。五郎は、いちばん女が珍しい盛りだ。最初に娛^もしませてやんな。次にお前だ。どうやって、この女を料理^{すけ}するか、今のうちに考えておきな。さあ、あっちで一杯やりながら見物^{みぶつ}といこうぜ」

なおも不服そうな三郎に、

「京子のサービスが悪けりや、美津子もいるんだぜ。美津子はお前が最初に相手してやりやいい。おっと、これはお姉さんには内証^{うちしやう}だったっけ」

どうやら代わりをみつけてもらえそうな口ぶりが氣にいった三郎は、

「それにしても、五郎の奴、こんなにおっぱいばかり責めていると、この女、しまいに垂れ乳^{ちち}になっちまうぜ」

甘美なすすり泣きを咽喉もとから、もらしている美貌の女にも、ふと、それがきこえたのか、京子はうるんだような眼眸を清次にむける。

「それがどうだっていうんだ。ええ？ どっちにしたって、最下等稼業のスケじゃねえかよ。おれの知ったことか。氣持よくなって、面白けりや、おれたちは、それでいいじゃねえか。かりにおれたちが、このスケの乳房を大事にとつといたって、そこらへんの誰かがよ、好きなようにやっちまうんだ。三郎、これからしばらくは、五郎と京子のお時間だ。おめえはおめえで、どうやって、このスケを樂しむかを考えておきや、いいじゃないか。どっちにしろ、このメスは絶対逃げられねえのよ、金輪際……」

ようやくのことで納得しかけ、しかしまだなかば不満そうな三郎をひきずって清次たちが、かなり離れた洋酒の置いてあるコーナーに去ると、あとは年下の加虐者と年上の被虐女との肉の交わりが、いちだんとはげしくたかまるのだった。

しかし、五郎は徒らに焦^{あせ}らない。

この公然と与えられた、こよなき快樂を、とことんまで、この美しい裸女から、むさぼろうとして、女体を、どうにもならない絶対の境地にまで追い込んでゆくことに、全力をあげる。

京子のすすり泣きが一段とたかまると、い

ままで加えていた攻撃を一時中断する。といって、そのまま中止してしまうわけではない……又しても、ゆるゆると攻撃を開始する。女の生理などは、まったく無視して自分だけの樂しみを追求するために、ヌード女をあくまで、むさぼる。

京子はいま、いちめんに立ちこめているピソク^{もや}の霧の中をさまよいながら、大浪のように打ちよせては返す恍惚の中に、一糸まとわぬ裸身を慄^{おそ}わせていた。

霧の中から、こだまのようにきこえてくる二種の音のききわけも定かではない。

一つは、彼女の乳房や腋の下や、双臀、朱唇、そしてもっとも羞かしい内腿をもみほぐす粘液性の淫靡^{いんぴ}きわまりない肉の溜息。

そしてもう一つは、又しても京子の量感あるカラダをしゃぶりつくす年下の男の、ねばりつくような睦言^{むつご}であった。

△おまえ、清次の兄貴に、はじめて抱かれたとき、どんなスタイルだったんだ？▽

△ねえ、かんべして、おねがいですから……あたくしはオンナですから……。あたくしはオンナなの、ああ、そこは——そこは。京子はずかしい。死んでしまいたいくらい。ああ……あたくしはオンナですもの、殿方の……

お氣に召すように……五郎さん、ご、五郎さん——京子ネ、京子ネ、悪かったわ。どうか許して——おねがい……V

京子は五郎の指先がでるだけ、いじりやすいように四肢を、くまなくひろげる。

羞恥のはてに目をとじ、ヌメヌメと光っている唇をひらいて官能の炎に全身をあぶられながら、乳房と尻、首筋、顎の下、黒髪、耳たぶ、腋の下、太腿の内側、足裏をたまらなく、ゆるゆると刺戟されるのだ。

ぼつとりと脂ののった臀部が、ヘソを中心にして“の”の字を描いて、いちだんと、はげしく、うごめきだす。

それが次第に高まり、ますます昂進する性感のなかに没入してゆく京子は、むせびもだえるセクシーボイスを、ひそかにもらしながら、蠱惑にみちた濡れそぼった腰をタワタワと、うちふるのだった。

五郎は京子より三つ四つ年下のニキビだらけの小僧で、自分ではいっぱしのヤクザぶっているが、ろくに新聞も読めない程の、どうしようもないチンピラである。

粗暴なふるまいがあまりに多く、中学校を卒業前に放校されてからは兄貴の清次に拾われ、中華料理店の皿洗い、露天番、パチンコ

屋の玉運び、シキテン切り（見張り）など、森田組の下働きで、ろくでもないことばかりをやらされてきている。

常日頃、鼻汁^{はな}をすすりあげているラーメン屋の小娘くらいにも相手にされないため、三郎と共同で寝起きしている屋根裏の三畳に、ベタベタとやたら雑誌のヌード絵をはりめぐらして、女の夢ばかりを追いまわしている手合いである。

京子に、清次たち三人がたたきめされたのは、三郎が露天でトウモロコシを売っていた頃であった。“別嬪のねえちゃん”にたかろうとして、その報いをうけたわけで、いわば当然のむくいだった。

しかし、あの時のスタイルのよい京子の姿は、今日まで執念ぶかく忘れたことはなかったのだ。

——いま、その女は、懸命に全身で媚態を示しながら、掩うものひとつない、ハダカの各部分をさらけだして、お慈悲を乞うている。

こんな又とない機会が、これから、そう何度もあるとは思えない。おさえられっぱなしの、うす汚い情欲と、京子に対するうらみが一緒に燃えて一気に爆発しているのだ。

京子はいま四ッん這いにならされている。

みどりなす黒髪がみだれて、汗にぬれた額にはりついている。男が含み嗤ってピンクのヌードはスタイルをかえる。右足を五郎の肩にかけ、左足が極端にひらかれる。

プロレスのように、もつれこんで生臭い男の股間に美貌をうずめる。まざりあった粘液で女の双乳がテラテラとひかる。

ひらききった内腿の筋肉がピクピクと痙攣してやまないようだ。それでも京子は、唾液にぬれた唇を半開きにして、ときれどきれに男の御気嫌をとることを口に行っているのだ。

玩弄されつくし、その極致になって、京子はやがて、断末魔のときをむかえる。五郎は京子をかかえあげ、一つになったまま部屋を走った——。

序幕をおろした部屋の中には、みるも淫猥な姿態で、ながながと失神したままになっているハダカの女と、勝ちほこったニキビ面と貪欲な眼で女をみおろしている、ハゲタカのような二人の男たちがいた。

白い玩具たち

バス・ルームのシャワーで、全身をくまな

く洗い清めた裸女は、ようやくのことで人心地をとりもどして、こんどは三郎好みの濃目の化粧をはじめのだった。

前にある大きな姿見に、京子の張りきった乳房が写っている。何人もの男たちのはげしい色責めにも耐えて、それは奇跡的な形くずれのない美しさを保っている。

しかし、この荒淫としかいいのようない被虐の日々で、京子の肉体はいつまで、この艶やかさを保っていられるだろうか。

裸の彼女のうしろでは、順番を待ちかねている三郎が、もうモゾモゾと京子の豊満な尻に手をやり、鏡をのぞきこんでニタニタしているのだ。

京子はルージュを手にとる。男のための化粧である。

身体はもうまったく彼女自身のものではないが、心には消そうとしても消すことのできない屈辱感がある。ここで、こうして三人のチンピラたちに、代わる代わる凌辱され、何一つ抵抗できないでいるお俠な娘の心のうちを察してみるとよい。

世のなかで、こんな不条理きわまること、神をおそれざる行為が、許されてよいものだろうか。

何一つとして罪をおかしたことのない京子が、この邸で野卑な男女の興味のつきないオモチャとして這いずりまわらなければならぬというのは、一体、どんな理由があるというのだろうか。

静子夫人をエサに、京子、美津子の美貌の姉妹が無法にも拐わかれた。脱走もこころみたが空しく失敗した。

つい昨日まで、ミニスカートのトップモードで言いよる男を蹴ちらす勢いで銀座のペーブメントをさっそうと闊歩していた明朗快活な彼女は、いま、一糸すらあたえられず、目に涙をうかべて魔窟の生贄として投げだされているのだ。

芳紀まさに二十三才のチャーミングな京子は、その処女をろくでなしのヤクザに捧げ、何者とも知れぬ二人のシスターボーイと乳くりあわされ、最下等の売春婦もおよばぬ体験を味あわされた。

神などというものは、所詮こしらえものにしてはならないのだろうか。

鉄火肌の京子の空手を使った抵抗は、もったもはげしく、森田組の兄貴分の吉沢さえ、すっかり手を焼いたものだったが、結局、そうした抵抗は妹の美津子と彼女自身の肉体へ

の、きびしすぎる返礼となってもどってくることを、したたかに味あわねばならなかったのは、すでに周知の通りである。

こうした性の地獄の中にあっても、なお強気な彼女は、すこしでも妹を守ろうとしている。守る手段は、たった一つしかない。

——美津子のカラダに加えられる凌辱を、自分のカラダで受けとめることだけである。

そうすれば、美津子への色責めは、すこしは、やわらげてもらえるかもしれない。

京子は、『お邸の方たち』に一片の憐みを期待している。……ほんとうは、まったく空しいのぞみなのに。

京子にとって、もっとも耐えられないのは邸の男女たちが、単なるお遊びの道具としてしか彼女たちをみていないことである。

みんな、ふざけきった調子で、その場その場のゆきあたりばかりに美女たちの貞操を弄んで笑いこける。

日頃のちょっとしたヒントから浮かんだ、どんな放埒なセックスでも、ここではただちに試みられる。拐われの美女たちは気まぐれきわまる男の悪ふざけにも、全身全霊をうちこむように馴致され、肉の饗宴のあとであたえられるのは、彼らのさげすんだ淫らな高笑

旭板須『胎動とともに』読者ギャラリー



いでしかないのだ。

一条もゆるされず、乳房をゆすって暴行者にひたすら奉仕するだけの女になりさがった京子には、よほどの幸運にめぐまれないかぎり、この邸でいつまでも飼われつづけてゆくしか道はあるまい。

白い玩具、女奴隷、セックス・スター、淫

乱婦……。それぞれ、京子のありのままの姿なのだ。

地下にある牢獄のなかで眠る一刻をのぞいて、身辺には、つねにねばりついてくる男のいやらしい眼がひかっている。

それには必ず「あわよくば……」という下心がつきまといっているため、たくましく格

段にすぐれた監視網がはりめぐらされている感じだった。義務や責任などから生じている普通の警戒網なら、必死の京子には、あるいは破れたかも知れないのだが……。

京子の一挙一投足は、あますところなく男たちに見張られている。束の間、男が彼女の身体にあきると、こんどは勝ちほこっているズベ公たちの「悪ふざけ」が、おそいかかってくる。

いずれにせよ、京子とそして同じように拐われている美女たちの全世界は、この邸である。しかし、いまや女王のように彼女らの上に君臨している千代にとっては、この邸のなかでの慰みは、ちょっとしたエピソードにかすぎない。

たとえば、この京子を三人の男どもにあてがう際にも千代は二つ返事でうなずいているのだが、京子に恨みをもっている大人になったばかりの若僧たちが、どんな目にあわせようとしているのかなど、考えてやろうとはしなかった。裸女たちから奪える限りのものを奪う。その結果、静子や京子がどうなろうと、それはその時になって、改めて思いつけばいいのだ。

化粧室の等身大の鏡の前で化粧をつづけ

る京子は、ボサボサの長髪の三郎に、好きなように成熟しきった裸身をゆだねている。

唇に笑みをたたえて胸の谷間やヘソのあたりをさまよっている男の指先の愛撫にたえている。

「三郎さん、お化粧、これでいいかしら。羞かしいわ、鏡の前ですもの……」

「今さら何を世迷言をいつてるんだ。誰とでも見さかいなく寝てるじゃねえか。オレとなら、鏡の前ではいやだというのか？」

さきほどの五郎との交渉の余韻を、まだとどめている裸女の明眸に、たちまち狼狽のいろが、さっとはしる。

どんな無残な要求でも、こぼむことはできない。どんなことをされても、今は、この三人の男たちのご気嫌をとりむすぶことだけしか、京子には残されていないのだ。

「ごめんなさい、三郎さん。京子、ついとりみだしちゃって。あたくしは女だから、羞かしいの」

京子は白い腿をひらいたカガミのなかの自分のみじめさに、咽喉をのけぞらせる。

「でも、三郎さんがご覧になりたれば、京子はいいの。どう？ 京子のオッパイ、あったかくて、やわらかいでしょう。京子はこれか

ら、あなたの姉さん女房ね」

三郎も五郎に似たようなチンピラだ。ただ栄養不良のような蒼白い三白眼で、乞食のような長髪をしている。

アカじみた手、むきだした上半身もへんに蒼ぐらい感じである。みるからに頭の悪そうな、ヤクザ予備軍にぴったりの顔つきをしている。小便くさい流行歌手アッチャんの大のファンで、ファン会に入っていて、先日はパントリーの贈物をしたと得意気である。

京子のもっとも弱いところを、ゆるゆるとふれながら、しきりにアッチャんの話をしていく。京子がよく知らないので自慢そうにいろいろ教えながら、じわじわと責めさいなんでゆく。

鏡の上の蛍光灯が、そんな二人の、責められる女と、責める男の姿を、くまなく写しだしている。

「三郎さん、京子はアッチャんのような処女でなくて、ほんとにごめんなさいね。もっと清純なカラダだったら、三郎さん、もっと楽しいでしょうね。三郎さんと他人でなくなるなんて、京子、夢にも思わなかったわ。いいえ、うれしくって……ああ……京子、もうだめだわ——」

「目をとじるんじゃないって、いってるじゃねえか。オレさまの顔をとっくり拝ませてやってるんだぜ。もう、アッチャんの話はよしな、アッチャんがかわいそうだぜ。そうそうさっき、五郎のヤツがいったな、吉沢の兄貴にやられたとき、どんなスタイルだったって？ 改めてきかせろよ、ええ？」

「かんべんして……お願い。羞かしくて、もうおぼえていませんわ」

「言えといってるんだ。言うんだッ」

京子はもうさからえない。星のような瞳にみるみる泪があふれてくる。

三郎がどんな下等な三下やくざであれ、彼は千代奥さまにつながっている、この邸の間だった。

吉沢との初夜——あの、あらゆる羞かしめと悲しみ、それにつづく痴情の果ての、あのいまわしい日々は、哀れな裸女の脳裏に切なくも、ありありと灼きついてはなれない。

吉沢の欲する歓楽は暴力をとめない、すべて彼女の麗わしの全身であがなわなければならなかったのだ。

つづいて、どっとわきおこる哄笑がきこえてくる。……淫虐なショーのはじまり、あの涕泣、あの身悶え、あの痙攣は、誰でもない

すべて京子のカラダのなかでおこったことなのだ。それ以来——、すべての強制に京子はしたがっている。ぜったいに抗えられないように、美肌にくりかえし、たたきこまれてきているのだ。

わななき、わななき京子は答える。

「お尻のほうからのスタイルでしたわ。京子をはじめたので、もう羞かしくて、消え入りたい気持ちでしたわ。でも、一晩中、なんどもおいたされたの。——五郎さん、そ、そこはゆるして——。縛られたきりで、あぐくのはてに、何枚も何枚も写真をうつされたんですの。脚をひらききった姿でポーズしたり、重なったままのところや、片足をたかくさしあげたところ、お尻をふっているポーズなど。写されているのが京子だということ、ハッキリわかるようにしないとダメだとおっしゃって、レンズに、たえず顔をむけてほほえむのよ。そう、今みたいに——。京子の全部をカラーでお撮りになって、一通りおわると縛られたままでもたカラダのお相手を……」

「ああ、あの連続写真か、あれはオレも捌いたことがあるぜ。いくらで売ったっけ？ 忘れたな。そうそう、その次のヤツが又、凄いポーズだったな、椅子にすわってた……のや

つ。あんなのは、いままでみたこともなかったっけ。しかし、これからは、おまえもスターの一人として、一段と精を出して研究しねえとダメだぜ」

「ええ、京子、いっしょうけいめいにやりますわ。だから五郎さん、教えてね」

「鏡をみるといってらる。そうだ、今日はいいチャンスだ。あのときの復習と、新しいポーズの研究に、オレが全面的に協力してやろうじゃねえか」

ウイスキーをやりながら、二人の睦言をきいている清次と三郎は、酔いも手つだって目をギラギラさせている。

手ぐすねをひいている清次と、女遊びがおもしろい盛りの五郎は、簡単に京子を放しはしない。三人三様に、ゲップの出るほど女体を楽しもうとしているのだ。

豊満な肢体をほこる京子だが、どこまで、この相手がつとまるだろうか？

あえぎあえぎ身をくねらせる京子は、大きな双臀をビロード張りの椅子からはみださせるようにしながら、一心に男の歓心を買おうとしながら、

「ねえ三郎さん、キスして……」

と紅く濡れた唇をひらいて、野卑な男と舌

をからませる。

京子の肉感にあふれた唇は、男の唾液が糸をひいて、キラキラ光る。チンピラの手は、その間もムチムチと固肥りの胸の隆起を楽しんで止まない。

「京子、まだまだ、これから、いろいろなカラダの経験をするのね。五郎さん、ねえ、五郎さん。京子、あなたと離れない仲になるのを、心からよろこんでいるよ。信じてちょうだい。お願い——。それから、京子と睦みあったあとで、京子の味がどんなだったか教えてちょうだいね。あなたのセックスはどんなことでもためしてもらってもいいのよ。そのかわり、美津子だけは、ゆるしてやってほしいの。ね、ね……」

「おめえも、うるせう女^{すけ}だな。それは、つまりサービスしたっていうわけかな。ええ、そうだろう？ 兄貴、五郎——」

酒をあおりながら、淫らな想像をエスカレートしている控えの二人は、三郎のからかいに応ずるように、ただ、しれしれと囁くばかりだった。

(この項おわり)

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

繩に憑かれた青春

名 和 好 男

(一)

それは確か五才の時でした。わたしの育った町に、かなり大がかりなサーカス団や、いろいろの見世物小屋がかかり、わたしは有頂天になったことがありました。ろくろ首の娘や一寸法師などの見世物、それまでは絵本でしか見たことのないライオンやトラ、タヌキなどの動物を、物珍しく見て廻っているうちに、わたしはふと、サーカス小屋の入口の所に異様なものがあるのを見て、ドキリとしま

した。それは、苦い腰元風の美しい人形なのですが、どういう訳か、後手高手小手に荒縄で縛りあげられ、井戸の上に吊るされているのでした。後になって、これが番町皿屋敷の場面であったことを知ったのですが、何故かこの縛られた人形が、幼ないわたしの心に強い衝撃を与えたのでした。

同じような強い印象を受けた出来事は、幼稚園の時で、市内の全幼稚園の合同発表会の時のことでした。舞台では、花咲じじいの劇が終末に近づいて、意地悪じじいのまいた灰

が殿さまの目に入り、意地悪じじい役の可愛らしい少年が、殿さまの家に真紅のヒモで後手に縛られて引き回されました。母親達は笑い声をたてて拍手をし、幕がおりたのですが、何故か、わたしは激しい羞恥を感じ、顔がほてるのを感じたのでした。

小学校の三年の時、わたしの組に、Tという色の白い美少年が転校してきたのですが、どういうわけかクラスの者に嫌われ、除け者にされていました。わたしはTに同情し、かばっているうちに、自然と仲よくなって、T



春 川 ナ ミ オ ・ 画

の家にもよく遊びに行くようになったのですが、Tの家では、わたしが行くと母親が大変な歓待をしてくれるのでした。ところが丁とこの母親とはあまり仲がよくならしく、時々、わたしの目の前で猛烈な口論が展開されることが再々でした。Tの父は海軍の軍人であり、家には月に一度ぐらいしか帰ってこないのです。ふだんは、Tと母親（継母だということが後に分かったのですが）そして母親の連れ子のTの弟の三人暮らしでした。

もっと驚いたのは、Tと母親の口論もさることながら、その中で交される普通の家庭では想像もできないような悪罵でした。

「この前、お父さんにお仕置されて、泣いて謝ったくせに未だ分かんのだね、もう一度お仕置してもらおうから、おぼえときなさい」と母親がいうと、Tも負けていません。

「ふん。自分こそ〇〇町の家に行った時、逆さに吊るされて泣いたくせに。去年も、裸で縛られて庭に吊るされたのを忘れたか。また吊るされるぞ」

Tが、クラスで除け者にされるのは、このような家庭環境を知っている親達が嫌って、子供にいい含めたからだだったのでしよう。Tの母親が、わたしを歓待してくれたのは、そ

ういうTの家にも仲良く遊びに行ったからだ。と今では思うのです。

わたしがTの家に遊びに行くと、Tの母親は、わたし達に留守番を頼んでよく外出し、夕方にならないと帰ってこないのです。家の中で、Tとわたし、それにTの弟と三人で遊ぶことは限度があります。そういう中で、丁の発案で始めたのは、わたしたちだけで名づけた遊びなのですが、ハダカ遊びでした。三人が素裸になり、家中を鬼ごっこして走りまわり、つかまえた相手を縛って柱につないでいたり、縛られたまま走りまわったりするのでした。

わたしは、Tの母親が帰ってきたような不安で、縛られてもすぐほいてもらうのでしたが、Tは、ほいてやろうとすると、まだいいといって、半時間でも一時間でも素裸で柱に縛りつけられたまま、じっとしているのです。

今から思うと、Tは縛られることが好きだったのに違いないと思います。そういえば、Tは、「誰それは先生に叱られて、教室の前で先生にくくられて立たされていた」とか、「誰それは家の金を盗んでお父さんにくくられて、天井から吊るされた」といった話を、

よくわたしにしたものです。しかし、それは全部嘘だということが後でわかり、わたしはTが嘔吐きの少年だということを知ることになり、やがて遊ばなくなってしまったのです。

その頃のことだと思のですが、デパートで奇妙な展示会を見たのです。

おそらく防犯運動か何かの展示会だったのだらうと思うのですが、いろいろの展示物にまじって、江戸時代の拷問刑罰の様子を示す絵が展示されていました。海老責めにされている男や女、後手高手小手に縛られて、床からつま先が浮いている吊り責めの男女の絵がありました。この時も、わたしは、五才の時に見た、番町皿屋敷の人形を思い出し、何故か妖しい感情におそわれたものでした。

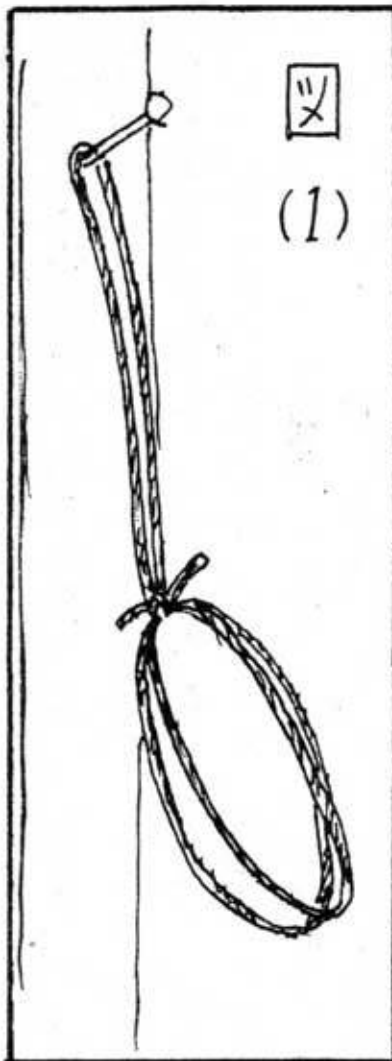
やがて中学生になったわたしが経験したのは、米軍の空襲に逃げまわり、終戦直後は、教具も教室すらない荒廃した生活でした。

遊ぶ道具もないままに、わたし達の間にははじめは鬼ごっこのような遊びが発端で、つかまえた相手を木に縛りつけておくような遊びがはやりだしたのです。この時も、わたし自身の心の中にひそむ、縛られたい、縛られて皆の前にさらされてみたいという気持とは

逆に、縛られそうになると必死に抵抗して逃げ、反対に相手をつかまえると、高手小手にして、がんじがらめに縛りあげるようなことをしたものです。

わたしは、小柄な、一寸女性的な感じのするSという少年をよく、荒縄や、麻縄で高手小手に、きびしく縛りあげたのですが、縛られて恥ずかしそうに、真赤になってうつむいているSの姿態に、わたしはひどく興奮したものでした。

そんな遊びも、学年がすすむにつれてだんだんとしなくなりましたが、その頃にはわたしの心の中に、はっきりと縄に対する執着が根づいてしまい、いろいろの本や雑誌などで少年が縛られる場面が出てくると興奮して、そういう場面の絵などが載っていると、切り取っておいたりしたものでした。谷崎潤一郎の「少年」は、わたしが、もっとも好きな小説の一つでした。



やがて高校生になったわたしは、一層縄への執着が強くなり、ひそかに自縛を試みるようになってきたのでした。さいわい、わたしの勉強部屋は二階の一番奥の部屋で、入口に鍵をかけてしまうと誰も入れなくなるので、深夜、家人が寝静まった頃、ひそかに吾とわが裸身に縄を巻きつけてみるのでした。

丁度その頃でした。わたしは家族の目を盗んで、父の書庫から性に関する本や雑誌を持ち出して自分の部屋で見ているうちに、全裸で縛られた女の写真を発見したのでした。そして、伊藤晴雨という責め絵師の存在を知ったのでした。物語や空想の世界でしか、また幼い遊びの中でしか知らなかった「縛られた人間」が、大人の世界で現実に存在し、写真に撮られているということは、大きな驚きでありました。

わたしの自縛秘戯は回を重ねて行きましたが、だんだん身体に縄を巻きつけるだけでは縛られた感じには程遠く思われ始め、いろいろの方法を考えているうちに、体重を

利用して、縄を締めることを考えついたのです。

昼のうちに押入れの柱の上に太い五寸釘を打ち込んでおき、図(1)のような仕掛けを作った。縄の輪に上半身を腕ごと入れ、後手は太いゴム輪に突っ込んで静かに体重をかけると今までにない強い緊縛感を感じたものの、五寸釘は簡単に曲って縄が外れてしまいました。わたしは、がっかりしてしまったのですが、一旦、火のついた欲望は、もはや燃えあがる一方となり、ついに部屋の中の畳と板の間の間の長押の壁に穴をあけ、鴨居に縄を掛けて吊り下がることを考えついたのでした。

次の日、家人に気づかれないように、一時間ばかりもかかって、長押に穴をあけ、壁とよく似た紙を張って見つからないようにしておき、いよいよその夜、自分自身の肉体の吊り責めの実験を試みました。まず、全裸になり、図(2)の1のように、両腕の上から上半身を四巻きするような縄の輪を作り、縄の輪全体を吊るすように別の縄を結びつけ、できるだけ音をたてないように椅子を鴨居の下に置き、椅子の上に立って縄の輪を身体にはめられ、吊りさがった時に足が下につかないような位置に縄の輪をぶらさげて、吊りさがっ

た時に縄が切れるようなことがないかどうか縄を手に持ってぶらさがってみました。ギシギシと音がしてハツとなりました。実際にはそれ程大きな音ではないのですが、妖しい情熱というか、暗い情欲に身を焦がすわたしの耳には、かなり大きな軋み音として響いたのです。それでも、吊り縄は充分にわたしの体重を支えることが分かった、別の縄で図(2)の2のように、手首を縛る縄をとりつけました。

秋も末の、普通ならとても裸ではいられないような時期でした。しかし、素裸でこれだけの作業をしながら、わたしの胸は激しく動悸をうち、身体中が燃えるように熱していました。

いよいよ、吊り責めの実験です。吊り縄から三十センチばかり椅子を横にずらし、椅子の上に全裸のまま立ち、頭から縄の輪をかぶるように通し、二の腕の上で、乳首の上下に二巻きずつ縄をずらし、手首を後に回して2の縄の輪の中にこじ入れました。いよいよあとは椅子から降りるようにして吊りさがるだけです。身体は燃えるようにほてり、口の中はカラカラに乾き、夜の静けさが耳につきさすように鋭く感じられ、自分の胸の鼓動が

あたりに、ひびくような感じでした。

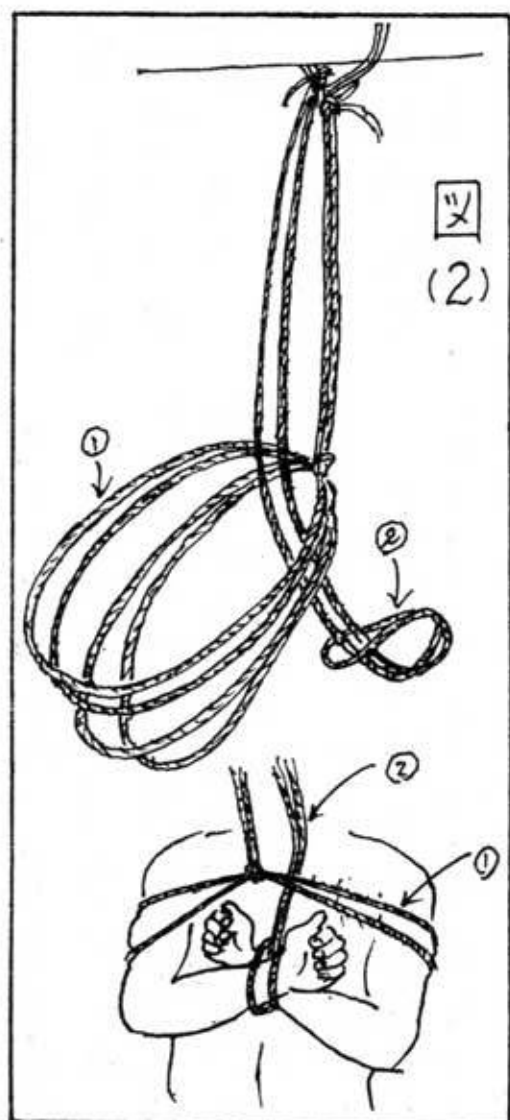
わたしは、静かに吊り縄にもたれかかるように体重をあずけ、まず片足を椅子からはずしました。ミシミシと縄が軋み、後手の手首が高くあがり、縄が二の腕から胸を締めつけます。思いきって、残る片足を椅子からはずすと、吊り縄がギシギシと音をたてて軋み、後手高手小手の姿でわたしの肉体は宙に浮きました。しかし、縄が伸びたのか、わたしはすぐ、つま先立って床に立つことができました。そして、今まで経験したことのないきびしい緊縛感とともに、しびれるような快感に襲われたのです。しかし、その快感が過ぎ去ると、手首、二の腕、胸を締めつける縄の痛みには耐えられず、再び椅子の上にもどってしまいました。

吊り責めは、想像していたものとは違い、はるかに苦しいものだったのです。縄をはずして、身体を見ると、二の腕の上、手首には縄目のあとがくっきりと残っているばかりか、かすかに血がにじんで

いました。吊りさがっていた時間は、ほんの二、三分に過ぎなかったと思うのですが、吊り責めがどんなにきびしいものであるかを、わたしは自ら体験したのでした。

でも、この実験の成功が、わたしを一層自虐の地獄に追い込んでいきました。わたしはそれ以来、毎夜のように自らの肉体を吊り責めにかけて陶醉したのでした。わたしの二の腕、手首には、縄目のあとが消えず、わたしはひそかに人目を怖れるようになっていました。また、このような浅ましい快樂のとりこになっている自分自身に対して激しい自己嫌悪さえ感じ、昼間はもう二度とするまいと誓いながら、夜になると縄の誘惑に負け、自らの肉体を宙に吊るしてしまうのでした。

そんなわたしを一層苦しめたのは、その頃



親しくなった同級生の女生徒に対する慕情でした。

その女生徒への慕情が、強まれば強まるほど、親しくなればなるほど、己れの異常な性癖に対する嫌悪、罪悪感が強くなり、時には自殺すら考えるほど悩んだものでしたが、そのような苦悩の生活の中で、わたしは、わが身を責めさいなみ、そしてついに、女生徒より縄の方を選んでしまったのです。

大学に入って、わたしは下宿をすることになったのですが、秘密を持つわたしとしては他の学生との同居ということは嫌なので、いろいろ探しているうちに、実に都合のいい下宿が見つかりました。市の中心部からは、かなり離れた郊外で、近所には四、五軒の家があるだけで、家の前の細い道路をへだてて、松林が広がっている静かな所で、主人に先立たれた老婆が一人で住んでいる家なのです。老婆の住んでいる部屋と、わたしの部屋との間は、タンスと襖で二重に閉ざされているので、往来できないし、家への出入口は両方にあるので、わたしは全く自由になれるという理想的な下宿でした。しかし、他人の家という遠慮もあり、また他人の家を傷つけることも気になって、自分の家にいた頃のような吊

り責めの実験ができないのが残念でした。

ある日のことでした。大学の帰りに、ふと町の本屋に入り、何気なく手にとった一冊の雑誌に、わたしは呼吸がとまるくらい驚き、つぎに鼓動が激しくなり、口の中が燃えるように熱くなってしまうました。それまで、わたしが想像もできなかったような世界が、その中に展開されているのです。高校生の時、父の書庫から持ち出して、始めて見たような全裸の女の縛られた写真が、折り込みグラビアの中に満載され、その裏には、縛られた女や少年の絵が一ぱいあり、記事も、今までわたしが、どんな本でも雑誌でも読んだことのない、わたし自身が悩んできた性癖と同じような欲望についての告白や体験、そしてまた読者の声の欄には、まるでわたしの気持を代弁するような呼びかけや希望が満載されているではありませんか。この雑誌を知ったことが、わたしの悩みを幾分柔らげたことは事実です。同じような悩みを持ち、同じような快樂におぼれている人間が他にもいるということとは、わたしに勇気を与えたのです。

この雑誌、即ち奇譚クラブについては語りたいことが多くありますが、それはさておき或日、この下宿の押入れを開いて、何の気な

しに上を見ると、押入れの一番隅の天井板が他の部分と様子が違うのに気づいたのです。押しあげてみると、簡単に外れるようになっていたではありませんか。たちまちわたしの頭の中に、わたしの部屋の天井板を一枚外れるようにして、再び吊り責めの楽しみを味わうことを思いつき、ペンチと釘抜きを用意して天井裏にはい上がり、縄を吊るすのに適当な太い梁の下天井板を簡単に外せるように細工をしたのでした。

鴨居と違って天井の梁から吊り下がるので机を下に持ってきました。夜になるのを待ちかねて、戸口に錠をし、戸の隙間から覗かれた場合の用心に毛布やシートで遮蔽し、例の如く全裸になって、用意をすませました。机の上に立つと、鴨居と違い、天井の梁は高く古い机はギシギシと小さな音を立ててきしむのでした。机から足を離すと、畳の上から三十センチ以上も、つま先が離れて空間に身体が浮いているのでした。

(一)

わたしは再び自虐の泥沼に落ち入ってしまったのです。部屋の中での、自分一人の行為に物足らなくなったわたしは、一層強い刺激

を求めて、野外で実行する計画をたてたのです。といっても、人に見付かつては大変なので、下宿の家の前の松林をその場所を選んだのです。

昼間のうちに、散歩がてらに、道から三、四十メートルばかり入った所に吊り下がるのに都合のよい松の木を見つけると、リング箱を一個、木の下に用意をしておきました。はじめての野外実験は、十月の初旬頃で、その夜は小雨が降る、うすら寒い日だったのを覚えています。

人里離れた所とはいえ、三百メートルばかり離れた所に、二十戸ばかりの住宅があり、夜遅く、その住宅へ帰る人が通ったりするので、注意しなければなりません。室内で吊り縄の仕掛を作ると、電灯を消し、辺りの様子をうかがって、静かに、全裸のまま、小雨の中を松林の中に入り込みました。はじめての冒険に、身体は燃えるように熱していました。遠く町の灯が赤く空に映え、五十メートルばかり先の街灯が、松林の中まで射し込み、白くわたしの裸身を照らし出していました。

わたしは、昼間のうちに定めておいた松の木の下に行き、枝に吊り縄を固定し、いつも

のようにリング箱の上に立って、後手縛りになると、吊りさがりました。しかしその時、遠くから近づいてくる自転車のライトに気づきました。胸の中を見つかりはしないかという不安が高なり、体重で締まってくる縄が痛く感じられました。幸い、自転車はそのまま数分後には通り過ぎ、ホッとわたしは急いで自由になると、辺りの様子に気をつけながら部屋にもどったのでした。野外での自縛は、その後も時々行なったものでした。

こういう暗い快楽に、最初の危機がおとされたのは、それから何十回かの自縛の後でした。

より完全な緊縛感を求めて、上半身を縛る方法を気付く度に改良していったのですが、ある夜、足を縛って吊りさがったのです。その頃には、机も吊り縄の下から五十センチばかりも横に離して吊りさがっていたので、再び机の上にもどる時は、吊り縄にもたれて、大きくそり返るような形で立ちあがっていたのですが、その夜も、そのような位置で机の端に立ち、吊り縄の輪に頭から上半身を通すと、腕を一度抜き出して身体を折りまげ、別の縄で足首をそろえて固く縛り、更に太ももも固く縛りました。そして再び吊り縄の輪に

両腕をさし込み、いつものように後手縛りにしようとしたのですが、足を縛ってあるので身体が不安定で、いつものように簡単にできないのです。

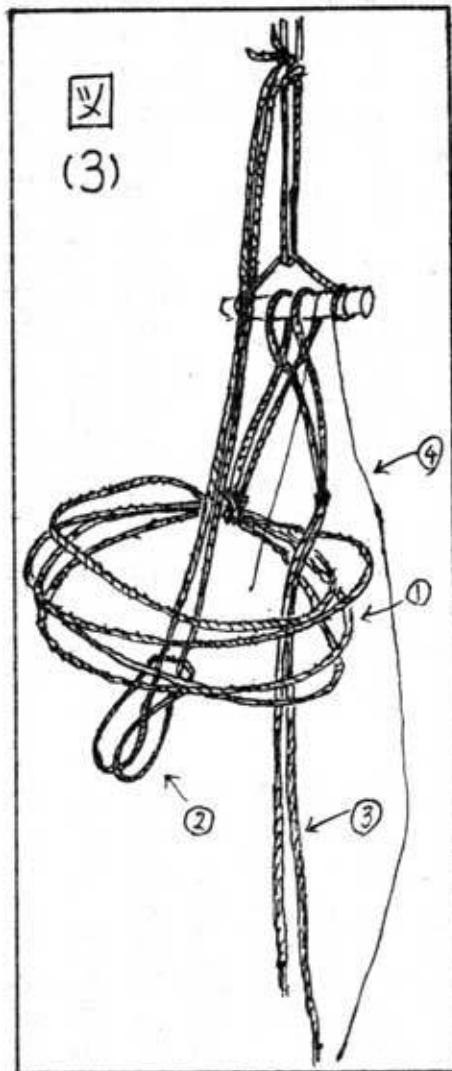
それでも、どうにか後手縛りになり、静かに足を机から離そうとしたのですが、これも両足をそろえて縛ってあるために、いつものような調子にいかず、あっという間にバランスを失って、机の上から投げ出されるように宙に吊りさがってしまったのです。

瞬間、わたしの胸に激しい不安が横切りました。このまま元へ戻ることができないのではないかと……わたしはあわてて机に足を乗せようとしましたが、ところが、勢いよく吊りさがったので、身体はぐるぐると回転し、机の方に向いた時に不自由な両足を机に乗せようとすると向きが変わってしまい、又ゆっくりと一回転するのを待たなければならせん。何度か失敗して、ようやく成功しかかっても、今までと違って両足が縛られていると身体の安定がとれず、再び宙に投げ出されてしまいました。五十センチという距離が、ひどく遠いのです。

あわてたわたしは、足首と太ももを縛った縄を解こうと、吊りさがった状態で、膝を折

り曲げ、口を繩の結び目に近づけようとした
り、必死になってもがくのですが、どうにも
ならないのです。しかも、回転していた身体
は、最後に机に背を向けて停止してしまいま
した。何とか向きを変えようとしても、上半
身から太もも、さらに足首まで緊縛され、し
かも宙に浮いている身体は全く動かないので
す。

時々、かすかに軋みながら、手首と二の腕
を縛った繩が一層締めまり、指は感覚がなくな
ってきました。不安は恐怖に変わり、どうし
てよいか分かりません。このまま吊りさがっ
ていたら死んでしまう……老婆を呼ぼうか。
いや、非力な老婆はダンスを動かす力もない
から、知ればきっと近所の人に助けを求めに
行くだろう。そしたら、この浅間しい姿を皆
に見られてしまう。でもこのままでは死んで



しまう……今更のように激しい悔恨と、もし
こんな姿で死んだら驚くに違いない家人、友
人のことが、わたしの心を責めつけます。
吊りさがってから何分たったのでしょうか
手首は完全に感覚を失い、二の腕、胸を締め
つける繩が息苦しく、乗物に酔ったような感
覚がしてきました。

どうしようもなく切羽詰まったわたしは、
その時ふと足を後へ伸ばして机の上に乗せる
事を考えついたのです。夢中でやってみると
どうにか届きました。そうしておいてから身
体の向きを変え、必死になって体を反らし、
やっとの事で立ち上がることができた時の嬉
しさ。まるで本当に敵の手から脱出し得た思
いでした。きびしく喰い込んだ縄から逃がれ
机の上から降りたわたしは、そのまま、ふと
んの中にもぐり込むのがやっとでしたが、翌

朝、目が覚めて身体を見
ると、恐ろしいような縄
目のあとと、すり傷が、
手首、二の腕に残ってい
ました。

これで懲りればよかつ
たのですが、逃がれる方
法を見つけた事から自信

を得たわたしは、懲りるところか更に危険な
実験を試みるようになっていったのでした。
足を縛ったり、股間縛りで吊りさがったり、
縄も最後には、もっぱら棕櫚縄を用いるよう
になったのですが、やがてそれすら物足りな
くなって、遂に自ら駿河責めの形で吊りさが
る方法を考えるようになったのです。

でも、さすがに、これは解く方法を充分考
えておかないと駄目だと思い、慎重に考えま
した。なにしろ、完全に自由を失ってしまう
のですから、解けなかったら、それこそ大変
です。

わたしは、いろいろ工夫した結果、図(3)の
ような方法を考えました。そして、一夜、実
験を試みようとして、まず仕掛けを天井の梁に
吊るし、高さを机の位置とあわせて調節し、
念のため両手でぶらさがってみて切れないか
どうか試してみました。そして、いつものよ
うに着ているものを全部脱いで、椅子から机
の上に乗る、机の端に立ったのでした。いよ
いよ実験の始まりです。心臓が、どきどきし
始めました。

この仕掛けは、①の縄を頭からかぶるよう
に上半身に通し、両腕を抜いて、別に机の上
に用意しておいた縄で足首を縛るといふ、今

までのやり方に、今度は③の縄をできるだけ引っ張って、縄の先端を足首を縛った縄に連結し、結び目の一端を引っ張ると足首を縛った縄から外れるようにして、別の細い丈夫な紐をその一端に結びつけて後手の手で持てるようにしておいたのです。

大きく深呼吸して気持を落ち着けたわたしは、上半身に縄の輪をはめ、手を後ろに回して②の縄の輪にさし込み、④の紐を片方の手でにぎりしました。足首を縛った縄に連結した③の縄は、①の縄にも連結しているので、①の縄を上半身にはめると、一層強く引っばられ、今にも机から身体が落ちそうな感じになりました。このまま体重を吊り、縄にあずければ、重い上半身を縛った①の縄は下にさがり、反対に足首に連結している③の縄は上にあがるので、足首は背中の方に引っばりあげられ、また、手首を後手に縛っている②の縄は高さが変わらないので①がさがるにつれて相対的に高くなり、上半身は完全に高手小手に縛られて吊るされることになるはずなのです。

でも、いきなり実験するのは危険だと思っただけは、後手の手でにぎっている紐を引っばって、③の縄が、予定通りに足首を縛っ

た縄から外れるかどうか試してみました。引っばるといっても、既に両手を後ろに重ねて縛ってあるので指でたぐるようにして引いたのですが、予定通りうまくいきました。わたしは嬉しくなっていました。これが外れさえすれば、駿河責めの形から、いつもの後手吊りの形になるのですから、あとは今までの経験からうまくいくという確信があったからです。

いよいよ実行です。新しい試みを行なうたぎに激しい興奮で身体中が燃えるようです。でも、今度は、吊り縄が上下に動くので、そのまま体重をかけると、机から投げ出されるように激しくぶらさがってしまうはずですので、後手の紐を持っていないもう片方の手で③の縄をにぎり、それにぶらさがるようにして机から両足をはずしました。それだけでも足は後の方に曲がって吊りさがるので、縄をにぎっていた手を離すと、たちまち予想していたように、上半身は下へさがり、足首は高々と背面にあがって、わたしは駿河責めの形で、宙に浮いてしまいました。ぐるぐると回転しながら、ミシミシという縄の軋る音とともに、次第に足首は背面高くあがり、手首は肩近くまで二の腕と共に締めあげられて

いき、たちまち充血して、しびれてきます。五分ばかりで、紐を引っばりました。ずしんという音と共に、背後に高くあがっていた足がはずれて、後手吊りの形になりました。自信はあったものの、やはりホッとして、椅子から机の上に乗る、上半身を縄から外しました。成功です。

駿河責めの形の吊りは、後手吊りより楽でした。これは見かけの激しさは後手吊りより大きいのですが、力学的に考えても、身体を吊るす支点が二カ所になるのですから、本当に辛いのは、むしろ後手吊りの方でした。

こうして、わたしは、自分自身で、自分の肉体を、後手吊り、駿河責め、逆さ吊り、等の形に吊るしては、暗い快楽を楽しむようになったのでした。

そして、卒業間近いある冬の夜、第二の、そして、もっとも恐ろしい危機におち入ったのです。今でも、その時の恐怖と、死直前の快楽を忘れることができません。

その夜、十時過ぎ、わたしは駿河責めの準備をし、火の気の無い部屋の中で全裸になると、椅子から机の上に立ち、いつもの要領で足首から上半身を縛りました。いつもなら、足首を縛った縄に吊り縄を連結した時、必ず

一度引っぱって解けるかどうか試してみるのですが、その夜は、上半身をもっときびしく縛る方法を考えていて、それをつい忘れてしまったのが失敗のもとでした。

さすがに室内とはいえ、火の気のない冬の夜は、寒気が全身にしみるように感じます。それが一層責められるという感覚を増し、わたしはがたがたふるえながら、机の上に立って、わが身を吊るす準備に余念がありませんでした。しかも、その夜は、胸から二の腕の上を二巻きずつ巻いた棕櫚縄の他に、更にその縄がずれないように、別の縄を仕掛けて、吊りさがったままでは絶対に縄が外れないようにしておいてから、いつものように駿河責めの形に吊りさがりました。そうして一時の陶酔の後、胸や二の腕の縄の痛みを十分に味わってから、いつものように殆どしびれてしまった手で解き紐を引いたのです。ところがずしんという、いつもの手応えと共に、背後に吊りあがっていた足が、おりることはおりたものの、どうしたことか途中でとまってしまったのでした。更に引っぱってみましたがそれ以上は全然引っぱれないし、足もさがらないのです。丁度、ノの字の形に吊りさがったままでもとまってしまい、どうにもならなく

なってしまうたわけです。

すっかりあわてたわたしは、まず近くの椅子の上に立ってみようと、全力をあげて、膝を前かがみに曲げてやってみました。しかしそろえて縛った両足のつまさきだけが辛うじて椅子の端にとどくだけで、立とうとすると上半身がぐらつき、すぐ椅子から離れてぐるぐる回転してしまふのです。しかも何度か同じことを繰り返しているうち、椅子の端につまさき立って力を入れた途端、身体が大きくゆれて椅子を倒してしまったのでした。

近くにあった椅子にさえ届きかねたのですから、その向こうにある机には絶望的です。椅子が倒れた瞬間、恐怖がわたしを襲いました。しかもその時、わたしには激しい快樂が襲いかかったのです。わたしはしばらくの間われを忘れてぐったりと吊りさがってしまいました。しかしその切羽詰まった快樂の過ぎ去った後、足首が下方に下がってしまったために上半身を締めつける縄の痛みが次第に激しくなってきました。その間にも、時々ミシミシと軋みながら、手首は一層上の方にあがり、感覚は完全になくなってしまいました。どうしようもないのです。今度こそ、本当にわたしは死の恐怖に晒されました。

もちろん、必死で足首を縛った縄から足を抜き出そうともがきました。しかし、ノの字の形に吊りさがった身体は、足を背後に曲げることもすらできません。夢中で、上半身を縄の輪から抜け出せないものかやってみました。しかしその夜は、わざわざそれができないような縛り方をしてあったのです。後手の手首を縄の輪から抜きだそうとしてみましたが、これもこれは、他のどの方法より不可能なことでも一層きびしく締めあげるのに役立ったただけでした。

ずいぶん永い時間がたったような気がします。とうとうわたしは「おばあさん……」と声を出してしまいました。やはり死にたくない……。返事はありません。こんなに長時間、吊りさがっていたことは、今までにありません。

しかし、その時、再びわたしは助かる方法を思いつきました。ノの字で吊りさがったまま、足を後へのぼし、机のふちに引っかけて机を引きよせるのです。最後の力をふりしぼって身体を回転させ、机に後向きになると、できるだけ足をのぼしてみましたが、それこそ死にもの狂いの努力でした。辛うじてかがとが、机の裏側のふちにとどきました。「しめ

た」静かに足を曲げながら引きよせました。

第二の危機は、幸いにもこうして、どうにか脱出することができました。だが、さすがに懲りたわたしは、二度とこのような危険な快楽を繰り返す気持はなくなりましたが、それは、自縄自縛の頂点だったと思います。もし、縄を解く全ての方法をとらずに、このようにして吊り下がって自殺を計るとしたら、恐らくマゾヒストとしては十分に満足できる最期ではないかと思ったりしました。

思えば、五才の年に見た「縛られた人形」以来、年と共に昇進してきたわたしのマゾヒズムも、自縄自縛という行為の中で、行きつく所まで来た感じでした。これ以上すすめば、他人の目の前で行なうという、自尊心も恥も投げ棄てて、社会的地位も、家庭も失ってしまふところまで行きつくか、さもなくば、地獄の快楽の内にこの世を去るか、いずれかし、ありますまい。

わたしは幸に、そのどちらもとらず、その後、社会に出て会社に入り、人並みに結婚をしました。そして今度は、妻を縛ることによって、縛られた女体の魅力を知ることになったのです。サディズムとマゾヒズムは別々の性格ではなく、一個の性格の両面だと、わ

たしは思います。この半生の自虐の生活の中で時に激しく悩みながら、人間の性の地獄を生きてきて、わたしなりに多くのことを考えできました。しかし、どうしても逃れることができなかった。逃れることができないならその病と共に生きていこう。社会に害をおよぼさない範囲でなら、それは許されるのではないでしょうか。

わたしが、このような秘密を持った男であることは、わたしの勤めている会社の同僚も近所の人も、誰も知りません。わたしがこんな告白を書いたのは、わたしと同じような悩みを持つている人達に、行き過ぎに伴う危険性を知らせたかったからです。極端にエスカレートした一人遊びは破滅のもとです。

なお最後に、わたしの体験から得た吊り責めの場合、注意しなければいけないことを申し上げると、遊びである限り、出来るだけ合理的に苦痛を少なくするようにしなければなりません。吊るす場合、身体にかける縄は、ただ縛りあげる場合と違って幾分ゆるいめにしなければ、痛くて我慢できるものではありません。

この場合の縄ですが、細引きや、綿ロープより、むしろ荒縄や棕櫚縄の方が、見た目の

残酷さとは逆に、伸縮性があって楽なように思います。

また、後手の縄と吊り縄を連結するのは、脱臼の恐れがあるから、しない方がいい、と書いてあるのを読んだ事がありますが、わたしは反対に、後手や二の腕、胸の上を縛った縄を吊り縄に連結した方が、体重を支える支点が増すので、苦痛は少ないという経験をしています。それと胸の上を縛った縄だけで吊ると、胸を強く圧迫するので、かえって危険です。

次に吊るしておける時間の限度ですが、よく一時間も二時間も、また半日、一日吊るしておいたというような実験記を見ますが、どんなに苦痛を少なくするようにしても、まず五分から十分、せいぜい半時間が苦痛を快感として感じられる限度でしょう。それ以上は本当の拷問になってしまい、生命の危険が生じます。

いろいろと書きたいことは、まだたくさんありますが、今回は、これくらいにしておきたいと思います。

新連載・時代小説

紫

蘭

の

門

(1)



岡 たかし・画

菊 灯 台

久我雅子が、はじめて裸にされ、縛りあげられたのは、この部屋であった。
黒漆の折上格天井、竜虎の高肉彫りで飾られた欄間、三方の襖には四君子の花が濃絵で

描かれ、真新しい備後畳の青々とした美しさを、白綾に黒紋様とした高麗縁が、くっきりと際立たせていた。長い金具ひとつ、角柱の木肌ひとつにまで数寄を凝らした造作である。

ただ、異様なのは――、
千鳥棚に並んだ人形、いや、はたして人形と云えるかどうか、小直衣雛、享保雛、それに当世流行の古今雛人形とは、まったく無縁

風 流 極 道 軒

白蘭の丘をくだりて
黒蘭の園に出づ
わけ入りて、わけ入りて
初めて紫蘭の門に立つを得む

の白磁の女体裸像が十体、素地のよく焼きしまった玻璃化された肌の色艶を、掛燭の光に曝して、鬱金色に、まるで生あるもののように輝かせている。

ただ、それだけならば、さほど異様なことではなからう。金に糸目をつけない豪商は多い。その一人が、高名な窯元に命じて特につくらせたと云えば、それですむ。
異様なのは、その姿態であった。

海老、逆海老、吊り、胡座、立て膝……と生身の女では耐えられそうもない屈辱の姿態をとり、しかも、絹、麻、木綿、荒縄と、色とりどりの縄で緊縛されている光景は、妖しくもなまめかしい風情をただよわせている。(妾は、どの人形に似せて、いま縛られているのだろう……)

雅子は右から三番目のそれに目をとめた。

ひととき琥珀色に輝くその人形は、両手を水平に横木に沿ってのばし、両手首と肘に三筋の麻縄を巻きつけられ、首は立柱に固定され、両足を左右に引かれて台座の金輪に足首を、しっかりと捕えられていた。

雅子は、頬が、かあっと、ほてってくるのを感じて、豊かな腰をくねらせる。

雅子が、はじめて素裸にされたとき、相手の男たちは五人いた——その五人にお身体改めとか云われて、必死の抵抗も空しく、とらされた姿態が、その人形に似せてであり、その時から二十日程すぎた今日、曝しものにされている姿態も同じである。

(ア、アッ……)

雅子は、誰にも見られていない安心感もあって、凝脂のむっちりとした裸身を思う存分、動かしながら、屈辱の最初の思い出のな

かに没入し、嫌悪とも後悔とも、諦観ともわかつた感情が、襲ってくるのに、まかせた。

人形と同じくその両足首は、がっちり白木の台の鉄輪に、三尺も開いて捕えられ、肉づきのいい肢体を、四方に立てられた菊灯台のあかるい光線のなかで悶えさせているのである。

従三位民部大録久我親元の娘として生れ、正三位大蔵大輔柳原宗忠の妻となったやんごとなき身とは云え、雅子も女盛りの三十歳。次第に、「女の香りは沈丁花の花の如し」と一休禅師が喝破した、その蠱惑の匂いが漂ってくるのを、どうしようもなかった。

雅子が、屈辱の思い出を、再び、(アアウ……アッ……)と、ひとり噛みしめたとき、ゆっくりと襖が開いて、

「いかがかな、雅子姫」

入ってきたのは、雅子始めてこの部屋で裸にしてお身体改めを行なった五人——御公儀金銀為替御用をつとめる元禄屋重右衛門と昭吉・和吉の番頭、蔵宿利倉屋庄右衛門と戯作者為永種彦であった。

「男は心をひらき、女はまたを開いて、はじめて仲良くなると申すが、まことであった。あなたを裸にひんむくときには、こりゃあと

あとどうなることかと思うくらいのじ、やじ、や馬振りじゃったがのう……」

為永種彦は、長さ二尺はあろう、唐人が使うという箸を器用にあやつって、雅子の、たおやかな白絹のような肌を、はさみこむ。

「ほれほれ、この手の感触。魚釣りのとき、コツリとくるあの手応えも、この楽しさには到底およばぬ」

しゃがみ込んだ種彦は、長い舌をペロリと出すと、雅子の内股を舐めあげた。

「僕も種彦先生にあやかっただけ」

利倉屋の手が、ふっくらとした乳房に触れると、ピクッと雅子が身をふるわせる。

「これはまた、いとも敏感な女子じゃて。もう、こんなに、熱くあつく燃えておるわい」

「そりゃあ、利倉屋さん。こんなに縛られて責められてみな。どんな女子でもたまらんやろ、のう姫御前。次回、市村座の舞台に、必ず、あなたの姿をそのままに、芳沢あやめに演じさせますぜ。あんたが、出てくれりゃあ大江戸中を唸らせることができるのだが、女歌舞伎は厳禁。手鎖くらいじゃあすみすまいい。こっちの首の座が、ふっとぶ」

「かまやあしません。こっちは、好きなとき、この部屋で、思う存分、鎖・格・子・女・之・拷・問

を見ることが出来ますものを」

鎖格子女之拷問とは、為永種彦が、かきあげた戯曲の外題であり、初日まで一月もあるというのに江戸子たちが床屋や銭湯で噂し合っているという市村座の来月興行であった。

「それにしてもこの味は、何度、吸っても、まったく、よい味で……たまたまなくなりますぜ。昭吉、和吉、かまわんから、やりな」

待ってましたとばかり二人の番頭がかじりつき、利倉屋は珊瑚樹の実のような紅い左乳首を狙う。

「あっ！ あ、ああ……や、やめてくださいませ」

弓なりに裸身を反らせる雅子であったが、言葉とはうらはらに、もう、どうしようもなく燃え上がってくるものがあつた。

「女の羞恥は初手のうち——とはよく言ったもの。二十日のあいだにこの姫さま、すっかりこちらの思うとおりに、いい音をあげてくれるようになったじゃあないか」

いままで、だまって眺めていたこの邸の主人、元禄屋重右衛門が、七尺近い巨軀をゆっくりと雅子の前に、はこぶ。

「へっへっへ……そりゃあ、もうおっしゃるとおりで……。女が恥かしかるのは、自分

を高く売りつけるための方便でして。初手のうちから男の要求をうけ入れたのでは、安く見つもられますからね。つまり、商売と同じでしょう。初手のうちは思いきり高い値をつけて、だんだんと下げていって、こちらの思う値で売りつける。それで、もともと。初手の値で売れりゃあ、丸もうけ」

利倉屋が左乳首を、ぼいんと指先ではじいて、そのぶるんぶるんとした弾力を楽しみながら云うと、種彦もやっと長い箸を手許に引き、菊灯台にかざして眺めながら、

「利倉屋さん、女は、いつも、丸もうけ……この久我雅子姫にしたって、結構、初手で羞恥を示すことによって、私どもの興味をひきつけ、ここまで、可愛がって貰えるように私どもを誘ってきた。だから、ほれ、ご覧なさい。自分は、何もしない。ただ、裸で、突っ

たってるだけで、こんなに楽しんでる。まったく、女ってやつは、丸もうけばかりするようになんてできている。私どもは、こんなに汗をながして、どんなにして喜ばせてやろうかと苦労していると云うのに、礼ひとつ云いもしないでさあ」

種彦の長口上に、女形にしたいような色白の顔と、ふだん、人からも云われ、自分でも

そう思っている昭吉が、女言葉で、
「ほんにまあ惚れ惚れするような女っぷり。ねえ、和吉さん」

和吉もまた、鼻の高い色白の華奢な男であったが、自慢のたねである人並外れて長い指を雅子の柔肌に這わし、あられもない叫喚を次々と、誘い出すのである。

「時に、元禄屋さん。ほんとうに、この女かあの女が、豊太閤五夜のロザリオのひとつを持っているのでしょうか」

利倉屋が襖の向こうに、あごをしやくる。

「間違いあるまい。御公儀神宝方探秘職棟梁折戸小左衛門が、儼に断言したのじゃ」

「それにしても、これだけ責めても知らぬ存ぜぬとならば、やはり……」

「案ずるな。利倉屋さん……京都にたてた早飛脚、ここ両日中には色よい返事を、もたらずに違いないわ。果報は寝て待てとな」

「フッフッフ、果報は女を責めて待つ、ですな。いや、こたえられませんなあ」

羞恥の極みにありながらも、二人の話が耳に入ったのか、雅子が、五尺近くも垂れさがっている御所風の髪を乱して、

「姫、姫さまは……貴子姫さまは、どこに、どこに……元禄屋さん……」

とたん、べっ甲こうがいの筭そろが、かすかな音をたてて青々とした備後畳の上におちる。

今朝ほど座敷牢で手入れをしたものの、このようにまで翻ひるがへられては、筭もおちようと云うもの——くるくると二回転した、その筭を掴つかみあげた元禄屋は、ニヤツと笑って、

「貴子姫なら、例の部屋で、鞭兵衛たちと遊んでおられるわ」

「む、むち兵衛……」

瞬間、雅子は、じいっと、血のにじむほど下唇を噛みしめたことであつた。

羅卒の鞭兵衛、下野国足利の出という。江戸にてきてぐれてゐる間に、浅草御蔵横で人入れ稼業を始めたのが当たって、渡り中間がえん ろくしやく鳶人足、臥烟がえん ろくしやく、陸尺、渡り押えと、大名や豪商にまでとり入ったが、この外、この元禄屋重右衛門に可愛がられ、元禄屋の旦那の為なら命もいらぬと自負している男であつた。

代貸し格の乾分が五人、名をきいただけで背筋が、ぞくぞくっとくるやくざもの、青縄あじなの青蛇、黒縄の黒馬、赤縄の赤狐、白縄の白豚ぶち斑縄あじなの斑猿と揃って、それぞれ異名の彫ものをしており、しかも、穴沢流捕縄術を身につけているという連中である。

「貴子姫……」

雅子は、つい昨日も、自分に加えられた淫虐な拷問を思い出して、身も世もないようにすすり哭きはじめた。

「姫……姫さまあ！」

救いに行けようはずもないのに、貴子の身を我を忘れたように案ずる雅子を、なおも颯りながら利倉屋たちは、昭吉に命じて、酒と肴をとり寄せさせると、「大」の字に開かれた裸身のまわりに半円を描いて坐り込んだ。

女中頭お松が、手代の金吉と二人で、切台盤に、鉢子、盃、鉢碗わん、大皿小皿の類を、次々と運び入れて、退っていく。二人にとって雅子の無惨な姿は、ここ二十日。もう、日常茶飯事になってるのである。別に驚きの色も見せない。それでも手代の金吉が雅子の裸身を少しでも、ながく見ようとして、襖をゆっくりと閉め、名残りおしそうに、でていった。咎めるものはおろか、氣にとめる者もない。

「京都からの返事がくるまで、ゆっくりと待つことよ」

元禄屋は、種彦が注ぐにまかせた大盃の酒を、ぐいっと、のみほす。

「まったく。されど、あの菊亭政房。それほど大切なものと知れば、簡単にさし出すかど

うか、この利倉屋どうも解しかねて」

「案ずるなど、云ったはずじゃ。いかにさきの右大臣菊亭政房といえど、娘の貴子の生命には代えられまいて。ハッハッハ……」

元禄屋の哄笑に、思わず自分も盃を干しながら、為永種彦が、

「菊亭貴子——前右大臣政房の第二の娘、中納言押小路高明のもとに嫁いだが、五年の後に、子なきによって離縁されてから弧閨を守りつづけ、当年とって二十五歳——ききしまさる美形であつた……」

「まったく同感でございます。公家の姫君というものは、やはり、どこか、こう、肌の艶ひとつとってみても、町方や、武家の女子と違って、みやびというか何というか」

「たまらねえ色気といいてえんだろ、昭吉。ふるいつきたいような色っぽさ」

「いや。そんな下世話な種彦流の言葉ではなく、もっと高貴な、けだかい」

「何をぬかす。何が、けだかいだ。けだかいというのはな、そもそも、毛が高いといつてな。男の雄々しさを示す言葉だったのだぜ」

「ヘエッ、そいつは知りませんでした」

「それによ。あの貴子姫のどこが、けだかいてんだよ。儂等の前でおっぴろげてよ、ジャ

ア、ジャアッと、お小用までしてくれなすった。ええ、そんな女のどこが、みやびだ。どこが、あでやかで、そして、けだかい！」

「だって、種彦先生。毛が長くてよ——つまり毛高い」

「そいつは毛が長い、けなげえ、つまりけなげな女というものよ。まったく自分がどうされても御父君のために、豊太閤五夜のロザリオの謎を吐かねえところはけなげ、だけだよ」

「しかし」

と合の手を入れたのは和吉であった。

「しかし、ねえ、種彦先生。毛がなげえだけでなく、高いところもありましたぜ」

「そりゃあ、どこだ」

と種彦、問いかえしてから、笑い出し、
「この野郎。いい所に目をつけやがって。なるほど、たしかに高い。儼も、あれほど立派な毛は見たことがねえ。それに、ごっこしていない。柔らかくって、艶があつて、ゆたかで……一体、公家の女というのは、毎日、手入れをやらかすものなのかね」

「まさか！」

昭吉が、驚いたように云う。

「座敷牢では、夜昼ぶっ通しで見張っておりましたが、一度もそのような手入れは」

「この野郎！ お前は、いつ見張り役を頼まれた。ありゃあ、羅卒一家の役目のはず」

「いけねえ！」

昭吉は、和吉とともに、ちよくちよく、菊亭貴子の閉じこめられている座敷牢へ出かけていったことがばれて、頭をかいた。

酒がまわるにつれて五人の男たちは、それぞれ、手に手に、貴具をもって、再び、雅子の無防備の裸身に、執拗な攻撃を始めた。それは、いつ果てるとも知れぬ淫らな宴であり雅子にとっては、法悦にも似た快楽と地獄の責苦の交錯するめくるめくような時間。

（おそろく今夜あたり、この男たちにつぎつぎと……）

輪姦という言葉も盪廻しという言葉も知らない雅子は、チラッと小耳にはさんだ利倉屋の「車懸り」という言葉も、十分、理解できないまま、ばくぜんと女の本能で、何か、今夜こそ、徹底的に責め抜かれそうだわ——と感じながら、大地がめりめりと二つに割れ、その深い淵に身を沈めさせるような自棄的な陶酔の中に溺れて行く。

それにしても——、

何故、従三位民部大録久我親元の娘という公家の姫が、こともあろうに、江戸は日本橋

四丁目にある公儀金銀為替御用元禄屋の本邸に捕われの身となっているのか。

また、より以上に高身な身分で、雅子姫ですらが姫君と呼んでいる貴子とは、誰か。

さらには、豊太閤五夜のロザリオとは。

時は、徳川十一代將軍家齊が五十余人の子息と姫を、五十余人の妻妾に産ませた所謂、大江戸文化の末期、天保三年、初鰹売りの声も聞かれようかと云う五月の事である。

五夜のロザリオ

元禄屋重右衛門が、豊太閤五夜のロザリオの謎を知ったのは、二年前の春、神宝方探秘職棟梁折戸小左衛門から奇妙な十字架を見せられたときに始まった。

神宝方探秘職とは、徳川幕府内の老中に随属して、津々浦々の神宝・秘宝・埋蔵金を探索し鑑定する重要な役職であった。代々その職を世襲している折戸小左衛門が、元禄屋に「ごく内々のことだが……」

と、厳重に南蛮錠の施された長持ちからとり出したのは、これまた南蛮錠の打たれた牡丹獅子蒔絵の手箱であった。そのなかから、珊瑚四十七箇を紫色の紐で貫いた長さ五寸ほ

どの金の十字架を掬いあげた折戸は、「生命に拘わる事」と前置きして、

「これは、ロザリオと云ってな。切支丹邪宗門の神じゃそうな。つまり神宝のひとつじゃが、ここを見てござれ」

指さした十字架の立柱の裏側には、

『甲夜、色は匂へと散りぬるを』

と、刻まれ、その下には、見たこともない奇態な文字が彫られてあったのである。

「何やら判らぬが」

という元禄屋に、

「ハッハッハ、僕とて最初は読めなんだ。そこで、それとなく探りを入れてみると、何のことはない、和蘭の文字じゃそうな。それも数字じゃ、という。ほれ、これが16。次も16次が22、次が12と3。そして13……」

げん顔をする元禄屋に、折戸が極秘じやと再び云って語り出したのは、次のような驚くべき史実であった。

慶長三年八月、六十三才を一期に、豊太閤こと豊臣秀吉が、その波瀾の生命を終えるに当たって、たったひとつ気がかりなことは、一子秀頼のこと。ためにその輔佐を、徳川家康以下の五大老に、悲痛極まりない筆の運びで依頼したことは周知の通り。そのおり、秀

吉が瀕死の床で「秀頼こと頼み申しそろ。くれぐれも頼みあげ候、五人の衆、頼み申しそろ」と、遺言するとともに、莫大な財宝を、秀頼のために埋蔵してある事実を告げ、その謎を解く鍵として、五大老ひとりひとりに自ら手渡したのが、珊瑚をつらぬいた飾緒かざりおを持つ黄金のロザリオであったと云う。

秀吉は、さきを見抜くことにおいて、稀にみる、才能を有していた。その彼が、徳川家康に天下を取ろうとする野心のあることを見抜けなかったはずはなく、自分の死後、秀頼の身に、何事か起こるであろうことを承知して、その時に備えての財宝を大坂城に蓄積する一方、五人の長老を、たがいに牽制させて秀頼に刃向かわせないために、財宝の一部を秘匿し、五人に平等にその謎を托することによって、つまり共通の謎を持たせることによって均衡を保たせ、一人抜け駆けして、天下をとろうという野心を封じようとしたと云うのである。事、天下に関わりあいのあること、秘匿された財宝は、莫大な額にのぼるであろう。

この頃、分銅金とよばれるものがあった。形が、分銅に似ているので、そう呼ばれるが純金の塊であり世界貨幣史上、最も品位の高

い貨幣である天正大判千枚を鑄潰してつくられている。秀吉が秘匿したのは、大分銅金とよばれ、天正大判千五百枚、重さにして約六十五貫。それを、実に参千箇も何処へか埋蔵したというのである。差配をしたのは、秀吉が一番信頼していた大野修理亮治長と、その弟道賢入道治房であり、埋蔵後、馬三百頭と雑兵百名はその場で射殺して、謎が後世に伝わるのを防いだと云う。

「ありうることよ」

さすがは公儀金銀為替御用の元禄屋重右衛門、こともなげに云い捨てた。

「家康様ご他界の砌りには、分銅金が五千余箇のこされていた。天下を取るために惜しみなく費消しつくされて、なお、それだけの黄金をのこされた。まして、秀吉公御出生以来金銀如湧出とまで記録されている文禄・慶長の頃、秀吉が、それだけの黄金を隠しても別に不思議ではないわ。して、折戸殿。そのロザリオは、その後、どうなりましたじゃ」

「そのことよ。秀吉は、五つのロザリオに謎を刻んだ。そして、甲夜、乙夜、丙夜、丁夜、戊夜と五更ちなに因んで、甲夜のロザリオ、乙夜のロザリオと称したと云われる」

「五つ揃わねば、駄目でござるな」

「いかにも。今ここにあるは、そのうち神君家康公が拝領なされた甲夜のロザリオ」

「あとの四つは」

「前田利家様は、翌年逝去。なぜか、そのロザリオのことは、嫡男の利長殿にも口外なされなかった様子。多分、不肖の子と思われ、やがては狸爺いに臣事する身となるであろうことを予見されて、むざむざと家康の手に渡るのを嫌われてのことであろうよ。上杉景勝様は、関ヶ原の役後、会津から米沢へ転封。勿論、徳川家をうらむこと甚だしく、何度訊ねられても、転封に際して紛失としか申されず、宇喜多秀家殿は、関ヶ原合戦で敗北後、ロザリオを渡さば、宇喜多家再興を許そうとまで誘われたのを拒絶されて、八丈島に流され、その地で他界。家康様が、石田三成、小西行長を直ちに斬罪に処したのに、宇喜多秀家のみを流刑にしたのは、いつか悔悟してロザリオを渡すであろうと一縷の望みを托されていたからだと言われる」

「して、もう一つは」

「五大老のもう一人のお方である長州は、毛利輝元様じゃが、これが、ひよんなことになつての」

「ひよんなこととは」

「関ヶ原合戦ののち、輝元公は、ロザリオをときの帝、後陽成天皇に献上してしまわれたのよ」

「それはまた、どうして」

「知ってのとおり、秀吉公は、皇室を非常に尊崇された。帝のいいつけとあれば、何事もこれを聞き入れられた。天下を取りたい以上家康様もこれをまねて、帝のお云いつけはきくであろうと」

「フッフッフ……猿智恵よな。帝にすがって関ヶ原合戦後、家康様に召し上げられた所領を回復しようとしたわけか」

「いかにも。そして、美事、失敗」

「ロザリオは、無益だったと云うわけよ」

元禄屋は、ゆっくりと珊瑚を、ひとつひとつ、まさぐりながら、

「しかし、この和蘭数字が気になるな。秀吉の頃に、この数字があったかどうか……」

「それも調べてみた。和蘭人が、日本にやってきたのは関ヶ原合戦の年じゃ。だから秀吉公は、ご存知ない。が、のう、元禄屋殿。異国では、数字は共通なのじゃ。ポルトガルでもノビスパンでもエゲレスでも、同じ数字をつかっておるのよ。されば、あの異人好みの信長さまの家来で、ごまばかり摺すっていた秀

吉のこと、南蛮紅毛人の数字を知っておっても不思議ではなからう」

「フーム。もうひとつ気にかかることが、あり申す。財宝埋蔵の差配をした大野治長・治房兄弟は、如何なり申した」

「そのことか。家康さまは、二人を捕えようと甲賀伊賀者に厳命されたが、治長の方は大坂城内で割腹。治房だけを辛うじて捕え、すさまじい拷問が加えられたが、治房は遂に白状しない。何度も何度も死をもって脅かした挙句の果てが、責めの手加減をあやまって殺してしもうた。家康様は激怒されて取調べに当たった役人十人を打首になされた上、治房の屍をひき出して、堺の町で火培りになされた。余程、お怒りになった上でのことじゃ」

元禄屋は、大きく肩を波打たせていたが、

「して、折戸殿。ここまで、おうちわけの上は、何事か新しい事実が」

「むっ……」

折戸小左衛門は、あたりを見廻し、肩をすぼめ、声を一段とひそめたうえで、

「毛利殿が、帝に献じられたといわれる丙夜のロザリオのありかが、判り申してな」

「何と云われる！」

「儂ひとりでは、どうにも重荷おもに。そこで、元

読者ギャラリー『きょう九重の』岡 たかし



禄屋殿に双肌ぬいで貰おうと思ひまして」

一膝、乗り出した元禄屋の耳元で、

「前右大臣正二位菊亭政房の邸。たしかに丙夜のロザリオがあり申す」

その言葉に、いつわりのないことを、深く

刻まれた皺や、真剣な眼眸から十分に察する

ことのできた元禄屋重右衛門は、大きく頷き

返すと、何事か密談に入った。

春もなかばを過ぎた四月、王子飛鳥山の桜

も散って、藤の花が、上野山王の台、大塚の

藤寺、芝増上寺山内に、うすむらさきの花をつけ初め、四方を筵でかこんだ蜜柑箱のなかに各種の苗を揃えた苗売りたちが、「朝顔の苗や、夕顔のーない、へちまの苗、なすびの苗や唐茄子の苗!」と、威勢よく江戸の町々を触れ廻り始める頃であった。

穴沢流猿廻し

二年後の天保三年春――。

土一升金一升と云われる日本橋四丁目、間口二十間、奥行百間はあるうと思われる土蔵造りの豪勢な邸を構える元禄屋の店先に、ひっそりと六人の男女と三コの長持ちが到着すると、土間から内庭にとおり、主客と思われる二人の女は、そのまま、離れ座敷に姿を消した。あとを見送った四人は、ホッとした表情で顔を見合せ急ぎ足で主人、元禄屋に無事使命を果たしたことを報告したのである。昭吉を始め、四人のものに与えられた使命とは……。

外ならぬこと。菊亭貴子を元禄屋重右衛門の妻として、江戸まで連れてくることであつた。

折戸小左衛門から豊太閤五夜のロザリオに

ついて聞かされた元禄屋は、その謎の追求に乗り出すことに決め、勘定奉行から若年寄、さらには筆頭老中水野出羽守忠成をも動かし、京都の公卿たちに斡旋を依頼し、関白・左右の大臣にまで莫大な贈物をしたあげく、菊亭政房の心をとらえ、一旦、貴子を、大坂の豪商道明寺屋吉兵衛の養女とした上で、まんまと、江戸に連れ出すことに成功したのであった。

尋常ならば、正二位前右大臣の息女を商人が妻にすることなど考えられない。が、文化文政から天保に入れば、身分秩序は、崩壊しはじめており、金さえだせば、商人が旗本株を買って武士になることも可能なきになった。まして、昨年から始まった全国的な凶作は飢饉となり、餓死者が、ぼつぼつと京都の町にさえ出始めているところである。公卿たちが、金に目がくらみ、菊亭政房は、出もどりの娘である貴子を、日本で一、二を争う豪商がもらってくれることに、何がしかの安堵の気持すら持ったのかも知れなかった。ともかくも、貴子は、大きく云えば京都の公卿たちのために、小さくは、父や菊亭一家のために、身を犠牲にして江戸に下ってきたのである。

「雅子様、やっと着きました！」

貴子は、今までの調度とは全く異なった座敷のなかを興味深く見廻しながら、「どこまでもお供いたします。菊亭右大臣家の息女のお興入れ、侍女の一人は是非とも必要」と、自ら望んで、付き添ってきた雅子に、ねぎらいの言葉をかけた。

「姫様こそ、さぞお疲れでござりましょう。

京から数えて十日目……」

ふっくらとした指を折りながら雅子は、明日からの生活に、不安ながらも未知のものに対する興味を見せて、茶簞笥やら、櫛宮やら文机の上の硯箱にまで、初々しい眼眸を向けるのである。

ところが――

半刻たつても一刻経つても、誰一人、やってこない。

違い棚の南蛮時計が、ボーン、ボーンと、四回鳴り、雅子だけでなく貴子までが、始めてみる精巧な器械に、あらためて驚きの目を見交す。

「せめて、お湯殿くらい案内にくるのが至当でござりましょうに……」

雅子が、焦立ちを、慎しみ深くかくしながら、云った時――

廊下を踏む足音とともに、昭吉が、女中とともに入って来て、

「貴子姫さま。まずは、こちらへ」

と、うやうやしく頭を下げる。軽く頷いて立ち上がる貴子を見て、雅子もあとに続くようにすると、昭吉が、

「雅子姫はしばらくここにて。主人の重右衛門が、御婚儀について詳細な打ち合せがしたいと申しておりますゆえ。そこは、それ、主人と、未来の御内儀さまとお二人だけの水入らずにしてさし上げたいと存じまして」

昭吉の言葉に一理がある。雅子は、チラッと振り返った姫の嬉しそうな眼眸に、（これでよかった……よくぞ二百里の道程をこまで）と、安堵の思いで、浮き上がった腰を降ろしたのであった。

が、そのあと――何の音沙汰もない。やっと、暮も六つになって、さっきの女中が、

「お湯殿へどうぞ」

と、馬鹿丁寧に平伏しながら云う。
（姫さまは、今までお湯殿にいらしたのか。無用の心配をしたこと……）

旅の疲れが一度にでる思いで、女中のあとから、廊下をまがったところにある湯殿に向かい、鏡、手桶、箕子など、京都とは異なっ

た風情を楽しみながら、その豊満な肉体を、たつぷりと湯舟に沈めた。

あふれでた湯水が、ザァッと音をたてて、流し口から内庭へと抜けていく。

心地よい音であった。

(江戸での新しい生活も、満更ではなさそう
だわ……この分だと)

琥珀色に輝く肌から、湯気のでる水滴をは
じかせながら、洗い場にでた雅子は、糠袋の
かわりだと女中が云ったシャボンと云うもの
を、手にうっすらとつけたが、その香りを嗅
ぐと、豊かな頬に微笑が浮かぶ。

女は、化粧する動物であり、新しい化粧の
道具にはまったく目がないと云われる。雅子
も、また例外でなく、何回もシャボンを手に
つけ、手拭いにつけて、無心に髪を洗ってい
た。だが、ひとつ、雅子は大切なことを忘れ
ていた。それは、女に化粧させるのは男であ
ると云うこと——。より大きく楽しむために
男たちが、女に、化粧させるのだと云うこと
を、雅子は何ひとつ気付いていないのであっ
た。

豊太閣五夜のロザリオに直接、関係のない
雅子には、十分の化粧の暇を与えた元禄屋た
ちは、その鍵を握る貴子に対して、その頃、

短兵急な、凄淫な攻撃を開始していた。

昭吉に、貴子が案内されたのは、四畳半の
何の飾りもない、三方が壁で入口のある一方
だけが板戸と云う粗末な部屋であった。

「しばらくお待ちを」

と云う昭吉の声にも、今までとうって代わ
った、ひびきがこめられている。

(なにかが起る……普通でないことが妾の
身に……)

貴子は、このときの胸の慄えを生涯、忘れ
ることはあるまい。その直後におこった無惨
な出来事とともに——。

で行った昭吉は、すぐ二人の男を連れて
ひきかえしてきたが、

「構うこたあねえ。旦那様のお云いつけだ、
手早くやっちゃまいな。白豚さん青蛇さん」

乱暴な言葉遣いで、ぶよぶよと豚のように
ふとった男と、病的に青白く痩せた男に向か
って云い、顎を貴子に向けてしゃくる。

「合点、承知の助、のすけ！」

手に、ベェツとつばを吐いた男は、

「恨みっこなしだぜ、お姫さま。元禄屋の旦那
のご命令とあっちゃあ、人殺しでも火付け
でもやらかそうという俺たちだ」

二歩、三歩、すすみでて貴子の手首を、さ

あつと捉える。

「な、なにをなされます。妾は、この邸に
嫁いできた……」

「わかってる、わかってる。嫁いできたから
こうされるのよ。その着込んだ衣裳を脱がせ
て、下着一枚にして、お連れ申せと、ご主人
さまの、お云いつけよ」

「な、なんですって！ そのような事が」
手首を握られて、よろけようとする貴子の
横から、青蛇が抱きつく、

「滅法、珍しい着物をきてるじゃあねえかよ
平安朝の十二単とでもいうのかい」

まさか、江戸時代も末期になって、貴子が
十二単を着ているはずはなく、小桂姿で道中
をつづけていたのだが、離れ座敷で、それを
とり、単に五衣、紅平絹板引の打袴という姿
であった。その五衣の袖に手をかけて、

「破くにゃあ惜しいや、それ白豚」

と有無を云わさず襟元に手をかけて、左、
右と、ささつと脱がせていく。

ハッと襟に手をやったが、前で合せてある
だけの唐花地文の紅梅色の五衣は、何の苦も
なく白豚の手に移り、つづけて萌黄色の単も
同じように青蛇の手から、突ったってゐる昭
吉の顔へと飛んだ。

「あれっ！」

貴子の唇から迸る悲鳴を楽しむように、

「次は、その袴といくぜ」

と、燃えるような紅平絹の打袴の大腰（大紐）に手を伸ばすと、

「じたばたするんじゃあねえってことよ」

と、蹲ろうとする貴子を、白豚に抱きかかえさせておいて、器用な指先の動きで大腰をとき、小腰（小さな紐）もついでに、すらりと抜きはなつと、

「逃げてみな、どうなるか！」

冷たい声音であった。

途端、背後から抱きすくめられていた白豚の腕をかくぐって、貴子が逃げる。

二歩、三歩……大腰、小腰を解き放たれたまま、どうして歩くことができない。

「きゃあっ！」

と悲鳴をあげ、ずるずると、ずり落ちようとする打袴に手をやったが、

「おっとっと！ 落ちるにまかせなよ」

脱兎のようにとびついた青蛇が、貴子の手を払いながら、打袴の裾を強く引く。

白羽二重の下着の、腰から下を覆っていた燃えるように紅い平絹の裂地が、ぐうっと引き下げられて、そのあとは、ゆっくりと男心を誘うように畳の上におちた。

誇り高き公家階級の女たちの略礼装である小桂姿——その下着、侍女の他、誰にも見せることを許されぬ、下着姿にされてしまった貴子は、深山の白蘭にも、たとえられる風情を漂わせながら、あまりの驚愕に、何をなすすべも知らずただ佇んでいるだけであった。

「美しいな。確かに、こりゃあ上玉よ」

見惚れながら昭吉は、笄でとめられた垂髪のでっぺんから、白足袋まで、ゆっくりと眺めたあと、青蛇に、深くうなずいて見せた。

「その白羽二重は、新しい旦那の前で、ひん剥いてもらいな。そのまえに、縛らせてもらおうか」

青蛇の懷から、小蛇が鎌首を、もたげるような青色の縄が、覗いた。

「な、なにをなされまする！」

やっと、われに返ったように貴子が叫ぶのと、躍りかかった青蛇が、その弱腰を蹴ってうずくまらせ、左肩に汚れた足をかけて、黒い齒に青縄をくわえるや、左・右と、かばそい手首を、ひとつにまとめ、くるくるっと縛り上げるのが、殆ど同時であった。

青色の絹縄は手首から首にかけられ、再び手首にもどると、白羽二重の右袖に二巻き、

くるりと胸を締めあげたのち、左袖に、まるで生きているように巻きついていく。

「あっ、あっ、な、なにを、なにを！」

貴子の咽喉が反って、朱い唇から、熱い息が吐きだされ、ほんのりと漂い始めた蘭麝の香りが、青蛇たちの鼻をうごめかせる。

前に回って、首縄と、胸元の縄を、二カ所で引きしぼったあと、その香りを胸一杯、吸いこんだ青蛇は、蒼白い顔を一層あおくして「穴沢流、猿廻し……、囚人をひきだすときの縄掛けよ。さあ、昭吉」

「いつ見ても、あざやかなもの」

縄捌きに見惚れていた昭吉は、

「立ちませえ！」

と手渡された縄尻を、強く引いた。

よろよるとたち上がりはしたものの、菊亭貴子は、もう眼前が、まっくらになり、なにが、どうなっているのかわからない様子で、追いたてられるまま廊下を歩み、

「坐れい！」

と云われるまま、坐り込んでしまった。

貴子が、やっと自分の周囲に気が付いたのは、白豚が、何やら強く匂う一杯の液体を口に注ぎこんでくれたときであった。

「あっ！ あなたさまは！」

正面の床几に倚っている七尺近い巨漢に目をやって、貴子が叫んだ。

「いかにも、儂が元禄屋重右衛門。よく江戸までおいでなされた。随分と歓迎してさしあげましょうぞ、姫君」

五十才前後であらうか。精悍な顔の、鬚が濃く、眉がふとく、いかにも精力絶倫と云った男である。そばにひかえている、これまた同じように油ぎった男が、

「儂は羅卒の鞭兵衛。以後、姫のお相手をとめることになりました。よろしく」

言葉は丁重であったが、その底に、ぞっとするほど冷酷な、ひびきがあった。

「な、なにゆえに、妾を、このような……」

「フッフッフ……姫、正二位前右大臣菊亭政房の息女、貴子姫、よく聞くがよい。いいな。一言、儂の問いに答えれば縄も解こう、妾にしよう。この江戸で、幸な日々も、おくらせよう。しかし、答えぬとならば」

「羅卒の鞭兵衛さまが、ゆっくりとお相手をして、地獄の責苦をたっぷり」と

床板までとどいている七尺近い垂髪を大きく波打たせた貴子が、澄んだ眼眸をあげた。

「妾は、そなた様の妻となろうため、はるばると江戸に下ってきた女。自分の妻を、なぜ

このような目に逢わせられます」

「フッフッフ。昭吉が、そのようなことを申したか。儂は妻にすると云った覚えはない。妻妾のひとりにしようと言ったまで」

「それは！ そのようなことは！」

「儂には、すでに妻がいる。それを離縁させようとは、これはまた誇り高い女よ」

（たばかられたのか……）

貴子は、肌に粟立つ思いである。

（そのようなことが、いったいあってよいものかどうか……あまりにも非道な……）

「非道な！ 公家をないがしろになされまするか！」

「フッフッフ。そのような愚痴は、あとで、たっぷりと聞くことにして。さて、貴子姫、ひとつだけ答えてもらいたい」

元禄屋は、じいっと、貴子の眸を覗き込みながら、呼吸をはかって、突如、

「豊太閣五夜のロザリオのうち、丙夜のロザリオは、どこにある！ 答えろ！」

鋭い声であり、ピンとはりつめた空気が座敷牢に漂う。

（なあんだ……そのようなことか……）

貴子の顔に安堵の思いが、よこぎった。が、次の瞬間、

（元禄屋ほどの豪商が、あれほどの金品をばらまいてまで、妾を江戸まで連れ出したとすると、あの十字架には、やはり、父君の申されていたとおり、途方もない謎が……）

自分のおかれている立場が、おぼろ気ながら、わかりかけた貴子は、やっとあたりを見廻す心の余裕を持った。男は、五人——。四間四方の座敷牢の前、壁には、見たこともない捕方の道具が、各種の縄や、高張提灯とともにかけられている。

ずうずうと見廻した貴子は、正面を向くと、ゆっくりと元禄屋に、顔をよこ振って見せた。公家の娘であるという高貴な血が、貴子の白い顔に、みなぎりはじめる。

「フム、やはり、したたかのようなじゃ」

鞭兵衛がニタツと笑い、床几をすすめて、上から見下ろすようにすると、

「女の恥を晒して見せたいか。素っ裸に剥かれて逆さ吊りにされたいか。骨身がばらばらにされるまで鞭打たれたいか、姫君」

まさに、地獄の羅卒の声であった。

貴子の顔に、チラッと憂いの翳が刷かれたが、きっぱりと、

「妾、脅かされて、もの言う女ではござりませぬものを」

痛烈な抵抗の姿勢であったが、それが、かえって鞭兵衛たちを喜ばせることになった。

「面白え。そこなくっちゃあ、儂等の出番がなくなろうというものよ。青蛇、白豚、ゆるりとな。いいな。ゆるりと、すっ裸にしてさし上げな」

「合点でさあ、親分」

待ってましたとばかり白豚と青蛇が、貴子たちあがらせると、いったん縄をとき、左右から両手首をとって、ぐいっと、「十」の字形に開かせる。

「まずは、この帯から」

昭吉が正面に立つと、羽二重の下着の小帯に手をかけ、前結びの結び目をとき、顔を胸元につけながら左からぬきとり、ぽいと投げすてて、下着の襟に手をかけ、

「公家衆の息女を裸にするのは、生れて始めて。はて、どのような肌着を召しているか」

しっかりと、明眸を閉ざしている貴子の顔を覗き込み、左襟をずらせて白豚に、右を同じように青蛇にゆだねると、

「そおれっ！」

と、掛声よろしく、さっ、さっ、袖をぬがせる。絹独得の衣ずれの音をかすかに立てて白羽二重が床におち、貴子の足もとで、白

蘭のように舞う。

「ふーん。白い花卉の下も、また白か」

下着のしたの肌襦袢もまた、純白の白綾子であった。襟もまた白絹。腰から下を包んでいる湯文字も、これまた純白――。

「公家衆の女は、御殿女中と同じく、長襦袢は着ないで半襦袢だときいていたが、まっこと、半襦袢――」

もう、どうしようもなく漂い始めた蘭麝のけだかい香りのなかに、旅のあとの汗の匂いがまじっているのを、くんくんと嗅ぎながら昭吉は、「十」の字形の貴子を、しげしげと眺めていたが、

「まず、おみ足の足袋からにするか」

ひとり呟きながら、その腰に、両手をかけて撫でおろし、足もとに蹲みこむと、こはぜを外し、軽く足をあげさせながら、ぬがせて行く。あらわれでた素足の指は、予想どおりの美しさであった。白魚のような小指から人さし指、中指と、すんなりと汚点ひとつない肌健康な爪が、薬指、親指と並んでいる。思わず両掌で掬いあげ、昭吉は自分の頬にあててみた。熱っぽい感触に、ほんのりと汗の匂いがして、舐めてみたい衝動に駆られるのを、やっと押えて、右足の足袋にとりかかる

と鞭兵衛までが、かがみ込んできて手伝う。右膝が、わずかに曲がると、純白の綾子の湯文字の合せ目が、裾のほうで乱れて、じいんとするほど麗わしい、生身のふくらはぎが見えかくれする。

足袋をぬがせ終わった昭吉は、その足袋を手離そうともせず、しばらく、貴子の足もとで素足と見較べながら見惚れていた。

「次は、俺がやるぜ。上からだ、昭吉！」

青蛇は、そう呼びかけると、握っていた、しなやかな手首を昭吉に渡して正面に立ち、「少しは反応したら、どうなんかい、ええ。いつまでお高くとまっているつもりなんだ」

螢火のような額の皺を縦に、じいっと唇をかみしめて屈辱と必死に戦っている貴子の、か細いあごに右手をのぼし、右、左と振る。

「うっ、ううう……」

両手を左右に開かれたままの貴子が、朱い唇を喘がせるのを、小気味よさそうに、

「云う方がよいのじゃあねえのかい、豊太閤五夜のロザリオとかが、どのように大切なものか知らねえが、お前さんの軀をかけてまで守りぬくほどのものかどうか。思い切って申し上げな、ロザリオのあり場所をさ」

答は、なかった。

当然、青蛇の手が半襦袢の紐にかかる。

「ひんむくぜ、いいんだな」

「う、ううっ！」

身を守ってくれていた最後の一枚を剥ぎとられることへの本能が、貴子の胸を早鐘のようには鳴らせはじめた。

が、その躰のうごきには、屈伏の徴候はない。青蛇が、紐をむしり取ると、右、左から白豚と昭吉が、これに応じて半歩ちかより、両腕を背後に回して、両袖を、する、する、と脱がせてしまう。白綸子の半襦袢は、ふんわりと二間ばかりとんで床板に舞い、菊亭貴子の上半身が、なにおおうものもなく、眩いばかりに、裸蠟燭の光のなかに曝けだされて

しまったのである。

輝くばかりに美しく、白い肌であった。白い肌と云っても白絹のそれではなく、血のかよった生身の、乳白色に艶々ときらめくような、あでやかな肌――。

何百人という女を知っている元禄屋までが床几から思わず腰をうかせた。ましてや羅卒の鞭兵衛は、ゴクンと生唾をのみおろす。

その音とともに白豚と昭吉は、貴子のふくよかな双腕を背後に回して手首を交差させ、青蛇の懷から青縄がとんだとみるや、

「穴沢流帯解！」
おびとけ

貴子の両手首は、きびしく縛りあげられていた。青蛇は、あまった縄尻を、ぽいっと天

〔伝言板〕

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます。尚、今暫くお待ち下さるようお願いいたします。フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替（切手代用は一割増）にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社へ願います。

井の梁にとおして、ひきしぼる。後手縛りの身、肩の骨が回転するはずもなく、手首が上に吊られていくに従って、両膝が自然にかがみ、上半身が前に倒れる。仮名のヒの字とフの字を合わせた形。側面からみて、ヒが上半身でフのかどのところが腰にあたる不様な恰好にして吊られてしまった貴子の、前後左右と背面を五人の男がとりかこむ。

「黒いな。この分だと……」

元禄屋が、始めて、ニタツと笑った。まったく、黒漆のように、くろぐろとした腋毛であり、純白の脇腹や、二の腕の付根の白さといまって、強烈な色彩感を漂わせる。

床板に二尺も垂れている垂髪の尖端を持ち上げた昭吉は、

「いよいよ、すっ裸にされるんだぜ。恥かしくはねえのかい、姫君」
おほこ

「姫君と云っても、処女じゃあねえ。れっきとした押小路中納言高明さまという旦那を持つた女だ。裸になることなど、たいしたことじゃあ、あるめえよ」

鞭兵衛が、すぐ目の前でゆれている紅真珠のような乳首を、指先ではじくと、

「云うか、云わねえか。……フッフッフ、どうやら、素裸にして貰いてえらしい」

どす、黒い声で云い、つづけて、

「じゃあ、儂がひとつ、そのお湯文字とかを取ってやろうじゃあねえか」

親分のお声がかかったとあっては、青蛇たちも黙って、指を銜えているほかはない。

「公卿衆と云やあ、儂等、やくざものとは雲泥の、九重のはるか彼方に在します高貴なお方。その女子衆の腰のものをひん、剥くとは、いい思い出になろうというもの」

七尺近い巨漢の鞭兵衛が、ゆっくりと床几からたち上がると、不自由な姿態で、空中に漂っているという感じの、貴子のまん前にしやがみこみ、白綸子——菊亭貴子にただ一枚のこされた白綸子の湯文字の、そこだけが、むらさきの紐に、大きな指をかける。

「女ってものはさ、結局、素っ裸にされたがってるものよ。見てな、白豚。この高貴な姫君が、どんな深山の御殿を持っていなさるかたつぷりと、拝ませてやるぜ。なあーに、女は、いづくも同じ！」

羅卒の鞭兵衛は、プツリと紫の紐をぶちぎった。その小さな動作は、この世の中の、高貴な女も、下賤な女も、全く変わりはないことを証明する遅いいうごきであり、貴子に悲鳴ひとつ挙げる余裕も許さない素早さであ

った。

紫色の紐をきられた貴子は、ハッと小腰をかがめようとしたが、とき、すでに遅く、白綸子の湯文字は、毛むくじらの掌に奪われて、不安定な姿態を、なになす所なく鞭兵衛の視野に曝そうとした。

と、——

前右大臣菊亭政房の息女であるという自意識が、彼女の胸にきらめく。

ただ、それだけではなく——、それは、貴子自身にも、まったく思いがけないことであつたが、

(自分は中納言押小路高明の妻であり、かかる下賤の輩の恣意にさらされる女ではない)と云う誇りが突如、襲ってきたのである。

押小路中納言と別れてすでに三年になる。

その間、ただ、嫌わしいものとしてのみ考えていた貴子の胸裡に、いま突如、前夫を慕う、いや、夫、高明にのみ脱がされてきた湯文字——という、想念が、脱がされることへの本能——とともに、よみがえってきたのであつた。

「ム、ムウ。あ……」

「あ」の次に、何を叫ぶべきであるのか、貴子はすでに忘れていた。いま、むつくけき五

人の東の男どもに、白綸子の——高明との尋常の夜は、浅黄木綿のそれであつたが——湯文字を、男たちの暴力のままたに、剥ぎとられて、貴子の心は支離滅裂する。心だけであれば頗る簡単。いまでも、前夫の高明を慕っている貴子であつた。

だが——

前夫と別れてより三年。しかも、自分からすすんで別れた訳ではなく、「無子即去」という四文字のために、無理矢理、離縁された仲なのであつた。公家も、武家も、庶民も、男女の間に区別はない。女は女。男は男。男は、遅しく。女は、たおやか——。

その、遅しい鞭兵衛が、三年、孤閨をまもりつづけた貴子姫の、自身さえ気付かぬ本能を引き出し、的確に襲いはじめたのである。

「予想に、まったく違わぬのお」

元禄屋は、満足気に云うと、自分の手足である羅卒の鞭兵衛たちに、犒いの言葉をかけた。元禄屋にしてみれば、全く、はだか丸儲けを地で行く思いである。公儀金銀為替御用として、日本で一、二を争う大豪商。その上に豊太閤五夜のロザリオを手に入れて、その上で——、

さて、元禄屋重右衛門、何をしようとする

のか。ある日、番頭の昭吉が、

「人生きて、何を以てか楽しみとなす」

と訊ねたことがあった。元禄屋、答えて、

「玄之又玄・衆妙之門」

昭吉は、旦那さまの言う所が理解できないまま、別れたことであつた。

(衆妙の門とは……どの門……門、中門、築地門……羅生門に武徳門、延政門に嘉陽門、宣陽門に安喜門、桜田門に……)

と、門の名を数え上げながら、今、昭吉は探しあぐねていたものに行き当たった気持ちになり、

「これぞ、衆妙の門、玄牝^{げんぴん}の門！」

と、叫ぶと、

「ねえ鞭兵衛さま。この姫君に、女子衆の本質を、ほんとうの気持ちで、身に知らせてやってくださいませな」

昭吉は、都合のいいときに、いつでも女言葉をつかう男であつた。

「ほれ、この女性に……ほうれ、このようにして」

昭吉の手が、蝶を捕えた蜘蛛のように襲いかかり、紅真珠の乳首を抓る。

「じたばたするでないぞ、昭吉！」

元禄屋は、『その後の女』に、期待するよ

うに云つた。

「女というものはノオ、その後」がたいせつ。その後——どうなるか。たかが、一瞬の戯れに、悦ぼうが苦しもうが、たいしたことではないわ。男が、女を求めると同じように女も、また、男を求めて、蠢いておる。この菊亭貴子姫は、その上に、豊太閤五夜のロザリオの夢を、この身に、いずれかに抱いておる。責めて、責めて、責めまくり、天正大判千五百枚・大分銅金の秘密を、ときあかすのじゃ」

「フッフッフ……」

鞭兵衛が、含み笑いをしながら、
「元禄屋の旦那。女は、責めても駄目でしょう。罵る、辱かしめる、凌辱する。まあ、まあ、我が流儀のほどほどを、ゆっくりと見ていて貰いましょうぞ」

と、青蛇に、目配せすると、青蛇が、
「緊縛術穴沢流荒踊！」

いま、貴子は、蘭麝の匂いと女体の香りを混じり合わせた貴子独得の薫りのなかで、帯解の縛りに、豊かに、麗わしい肉体を、曝け出さされている。

「柔踊！」

と、青蛇が云い、白豚が自分の右足首に、

木綿の縄をまといつかせても、次にどのような責苦が、待っているのか、考え及ぼうはずはなかった。穴沢流柔踊——それは女の羞恥を極限まで、試そうと云う緊縛術の一つであつた。

青蛇の青縄が、帯解のままの貴子の右足にかかり、二巻きすると、ぐいっと、縄尻が高々と、天井の梁に吊り上げられる。

「面白えやな。この縄掛けはよ」

じいっと眺めていた鞭兵衛は、徐々に吊り上げられて行く貴子の右足首を、そろっと握んで、

「これが、公卿の女性^{にょしやう}。右大臣の息女なのかよう」

鞭兵衛は何かに憑かれたようだった。

「なにか言いなよ、なあ貴子姫。そんなに、すまして、ええ。……フツ、フッフツ……まだこれくらいじゃあ、まったくなんともないって顔をしてるじゃあねえか」

なめらかで、いくらかかたく上に反った乳房を捻り上げた鞭兵衛は、五衣^{いつぎぬ}の上からは思ひも及ばなかった豊かな腰に、視線をゆっくりと這わせていった。



懸賞「告白、手記、体験」八選作品発表

憶 追 の び 歓

溝 口 友 子

フラッシュの光とシャッターの音が、異様な熱気のたちこめる部屋で、繰り返される。その光と音の焦点は、わたし――。

わたしの肌をちぎるようにくい込んでいる縄は、手足の感覚を失わせ、血の気が引いてくる。

『キリッ、キリッ』と、縄と鴨居の交わる鈍い音が響く。わたしの体は、全身がひきつれたように血が逆上する。

さかさにつるされているのです。次第に気

が遠くなり、わたしは陶酔の世界に迷いこむのでした。

○

わたしは、ふるさとを離れて会社の寮で生活しながら、単調な仕事の毎日を送っていました。そんな時です、彼と知り合ったのは。

彼は、物静かで落ちついたやさしそうな人でした。初めはドライブに出かけたり、映画を見たり、世間一般のデートコースの日々でしたが、逢う度にわたしは、彼の態度が、い

いえ、瞳の輝きが少しずつ変わってきていることを感じてきたのです。

はたして彼は、突然車の中で異常な行為を始めました。わたしの体にいきなり縄をかけてきたのです。あの時の驚きは今でも覚えています。勿論わたしは抵抗し、車から逃げ出そうとしました。すると彼は、無理にその行為を続けようとはせず、ただ寂しそうな瞳でわたしを見つめ、手を離したのです。

わたしはその、むしろあっけない彼の引き

退りように、何か彼に対して悪いことをしたような気持ちに陥ったものでした。わたしは、黙って彼に、もたれかかりました。

それから、逢う毎に彼は、わたしを縛ろうとしました。「君が好きだからこそ、こうしたいんだ。これが、おれの愛情の表現でもあるんだ」真実のこもった彼の言葉は、わたしの気持ちを混乱させました。

好きだから縛ろうとする感情は、わたしには理解できないことでした。わたしの想像していたのは、好きな人が出来たなら、いたわりの心で、やさしさのある暖かい態度で接するところから、愛は生れて来るのではないかということでした。

それが、まさか、相手をいじめることにより、又、いじめられることにより、二人の間に新たな愛が生れて来るなんてことは、思いもよらないことだったのです。

でも、わたしは彼が好きでした。愛していました。彼を失いたくない気持ちから悩みました。そして決心したのです。愛する人の望むことなのだから、出来る限り、わたしも努力してみよう……と。そして、彼の行為を許すことの出来るようになる……と。

そのために本屋へ出掛けては、精神的な研

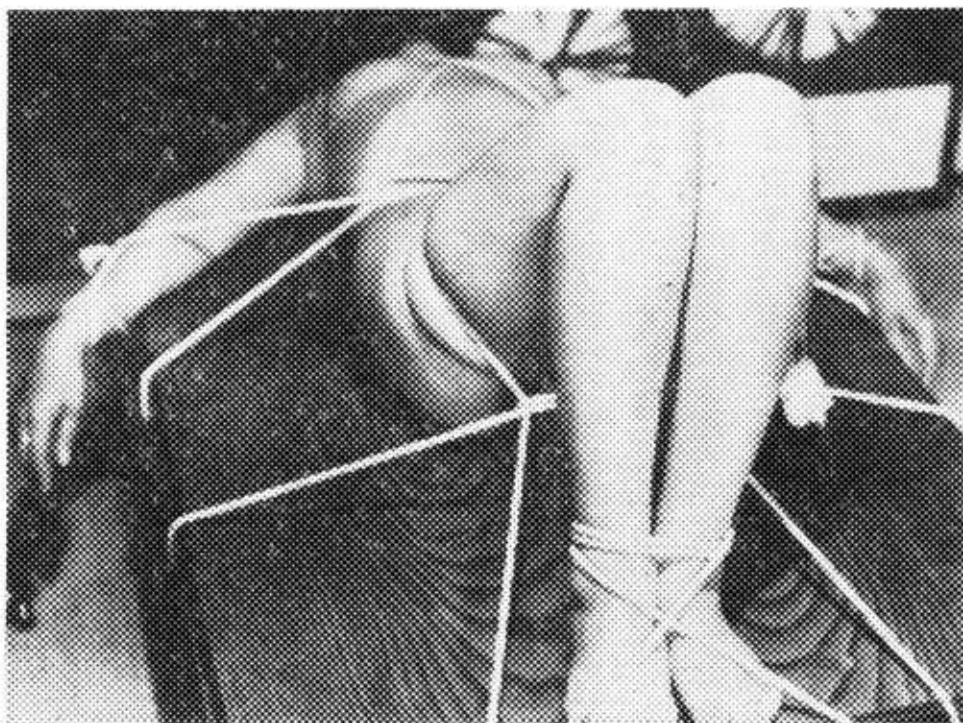
究に関するものを漁り、愛していながらいじめたり、いじめられたりする人達の気持ちを、理解しようとしたが……。

でも、その次に逢った彼は、すぐに縛ろうとはしませんでした。ただ無言で、わたしの顔を、じっと見つめるのです。その態度からわたしは感じました。彼の瞳の輝きの意味する事を……。わたしの口から「いじめてほしい」という言葉の出るのを待っているのだというのを……。

どうしよう。いじめられることは痛く、苦しい。出来ることなら、さけたい。でも彼を愛しているから、彼の寂しそうな瞳が、わたしの心の中に問いかけてくるのが、痛いほど解るのです。「いじめさせて、くれないかなあ」って……。

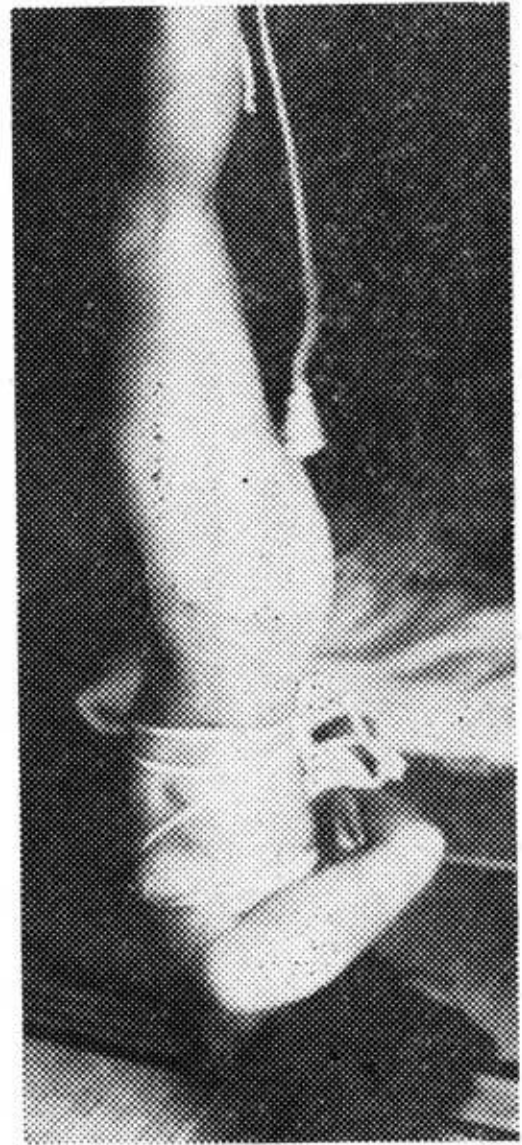
わたしは胸がつかえて、言いたい言葉のどもとで競い合い苦しくつまる思いでした。「いじめて」と、小さく彼の耳もとでささやくのが、どれほどの勇気がいったことでしょうか。そう言うことが、自分のみじめさをあらわにしているような気持ちに陥ったものでした。

——他に、わたしののような立場に立っている人が、いないのだろうか。いたら、すぐにと



んで行って話してみたい。わたしの気持ちを聞いてもらいたい。わたしの取る態度——

そんな気持ちを裏に秘め、わたしは彼の前で服を脱ぎすてる。縄は容赦なくわたしの肉体にまつわりつき、痛みと、血の通わなくなつた手足のしびれと、そして彼の目に映っていると思われる全裸のはずかしさを、歯をくいしばって耐えようとしたのですが、どうしよ



うもなくこらえることが出来なくなり、ついに大声をあげて、「やめて！」と叫んでしまふのでした。「わたしは駄目なのよ。理解できないわ。痛さと羞恥に耐えられない」そういうながら、ただただ涙があふれるばかり。

悲しい。その悲しみは、愛する人のために自分が何も出来ないという悲しさと、どうしてわたしは、こんなに苦しく痛い思いをしなければならないのか、という二つの悲しさで胸がつまるのでした。

しかし彼は許そうとはせず、「痛さの感じ方を、飲びに変えて行かなければいけないのだ」と言うのですが、わたしにとっては、むしろかしいことのように思われたのです。

痛さを飲びに変えるなんて、そんなこと出来るわけはないじゃないの。痛いものは痛い

いたくて仕方なく、わたしをいじめない時の彼のいたわりと、やさしい態度に接すると、別れることが出来ないと思い直すのでした。

○

そして、そんな世界を知ってから一年ほど過ぎた頃でしょうか。縛られることに対して拒む気持ちがなくなってきたのです。わたし自身も不思議なくらい変わってきました。

考えてみると、わたしの気持のどこかには縛られてみたいという意識がひそんでいたのかもしれない。その閉ざされた結び目を彼が解いて、次第にその意識は、あらわれてきたのでしょうか。

思い出します。幼い頃、時代劇の映画を見て縛られている女性を幼な心にもうらやましく思い、自分も、その主人公になって、みた

だけだもの。そんなむずかしいこと、わたしには理解できない。こんなに苦しむなら、いっそのこと彼と別れてしまおうか、そう思いながらも、彼からの電話がきて声を聞くと、会

いという気持があったのを。縛られいじめられることによって感じる飲びは、感情より、むしろわたしの肉体自身の飲びの方が、敏感にあらわれてきているのに気付きはじめてきたのです。

彼と会うとわたしは肉体のうずきを感じ、モーターの一室に入ると知らず知らずのうちに服を脱ぎだし、彼の行為を待ちました。

彼は袋の中から縄を幾本もとり出し、横たわっているわたしの上半身を起し、両手を後ろに回して交差させ、雁字がらめに縛りあげ、手首から血液の流れを二つに分けるほどに結ぶのでした。その縄をさらに首と肩に回し、胸の隆起を一層盛りあげるように、胸へそして腰へと、まるで体中に長いへびがまつわりつくように、固く、きつく縛ってゆくのです。彼の手によって縛られていくという気持は、痛みより、嬉しさと快さが先に立ち、愛されているんだという気持でいっぱいになってゆくのを感じました。

特にわたしの体を縦に走る縄は、体全体をしびれさせるような、不思議な力を持っています。わたしはこんなにも彼に愛されているんだわ、という意識がだんだんとおぼろげになり、体の内部から盛りあがってくる異状な



うずきが、いてもたってもいられなくさせるのでした。

そんな時、「ハッ！」と肉体が目覚める。「ヒュー」と空気を割る音とともに、力のもったムチが振り下ろされ、ジーンと骨の髄までしみ入るような感触が波紋のごとくひろがってくる。エスキモーの犬に降りかかる容赦ないムチに似て黒く光る革が「ビシッ！」という音をたてるのでした。思わず口の中に押しこめられているタオルをガチツとかみし

める。タオルが食いちぎれるかと思われるほど、幾度となくムチは肉体を求めて飛んでくる。最初の痛さは次第にまひして、痛いという感じが全くななくなってくると、肉体は燃えて熱くなってきました。

目を見開いても、あたりはぼんやりして、ムチの音が消えても、あの烈痛の残り感覚に一人で浸ってしまふのです。その時に触れてくる彼の手はやさしく、硬直した血液をやわらげてくれるしぐさが、一層わたしの飲びを増しました。

どのくらいの時間が過ぎたのでしょうか、モーターへ入った時は、窓にかかったレースのカーテンからもれる光で部屋は明るかったのに、今は薄暗くなっていました。彼が立ちあがり、電気のスィッチを入れると、まぶしくて、目があけられないほどでした。彼は縄を解きはじめたのですが、固く結んだ縄は、わたしの身の動きで一層固くなっていましたから、なかなかほどくことが出来なくて、所々

縄がゆるんでゆくと共に、体中の血液がしだいに流れてゆくを感じ、大きな深呼吸をして、その時はじめて自分をとりもどす、わたしでした。

体中のいたるところに、縄目がくつきりと赤くはれあがり、それまでの様子がしのばれました。そうした行為のあとの彼の愛撫は、なんとも言いようのない素晴らしいものであり女性としてこの世に生れた飲びを、より一層感じさせてくれるのでした。

彼はタバコに火をつけて、とても満足そうにふかすのでしたが、そんな彼の横顔をじっと見てみると、とても彼がたのもしく思われこうしてそばにいたことが一番安心できるような感じさえしました。普段の彼からは想像もできないほどの、今までの行為が、うそのように消えて、またやさしい彼に変わるからかもしれません。

やがて、身支度をして車に乗りこむと、それまで閉ざされていたシャッターがスルスルあがって、さわやかな夜の空気が膚にしみましました。

丘陵の道を走る車の窓から下の街の灯を見つめ、あの灯の下には、一つ一つそれぞれ違った生活が繰り返されているけれど、私達の

ような行為をしている人達が、何人いるのだろうか、ふと思うのでした。

寮に帰ると、出掛けた時と変わらぬ態度で部屋に入り、同僚の人達に、わたしが今まで彼と会っていた中で、あのような行為をしたきたことを気付かれないようにするのも自分自身の満足にあたいする気がしていました。

普段の生活の中で、仕事場で接する人達をわたしは今までは違った見方をするようになってきたのに気付きました。それは、人のちょっとした動作や言葉の中に、この人はいじめること、この人はいじめられることに飲びを感じるのではないかしら。わたし自身も、もしかすると解る人には、どこかで、無意識にしている動作や言葉の中に、いじめられることに飲びを感じるように見えているのではないか、などと思うのでした。

その後にも、相変わらず彼から電話がかかってきてはモーターへ入り、会うたび毎に、彼は違った縛り方や責め方をしたのですが、それがだんだんと、わたしに恥かしさを感じさせるようなことを要求し始めました。

今までとはちがって、縄ではなく、細いビニールホースで腕を後ろに回して縛り、首に回してそれから胸をぐるぐると縛り、口にタ

オルをつめ込みました。

ビニールホースで縛るなんて今まで一度もしたことがなく、タオルを口にかませられると、いつも何か不安をかきたてられるのでしたが、少しふるえる体をベッドに横たえて、じっと不安をおさえていました。

彼は、足を縛る様子もなく、お風呂場に行きましたが、湯かげんをみてきたのでしょうか、すぐに戻ってきました。わたしは、今日はお風呂場でいじめられそうだと察しました。すると、全く見当もつかないことなのに、不安と飲びで、またも心臓のおどるのが感じられました。

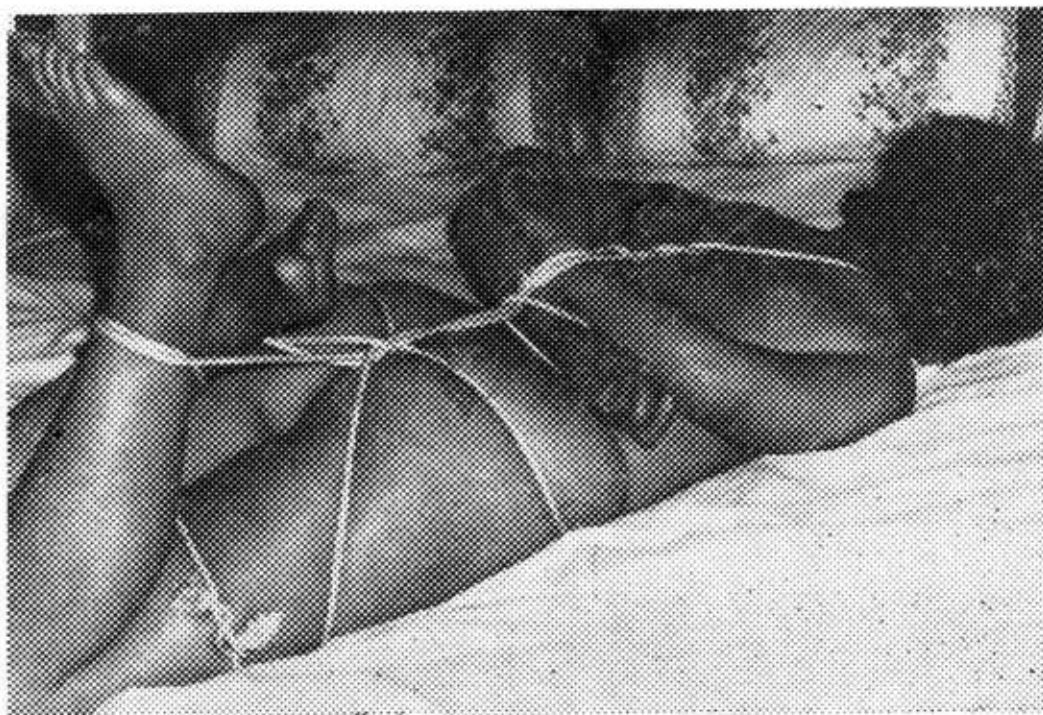
ベッドに横たわっているわたしは、予感どおり、彼にだきあげられてお風呂場につれて行かれ、タオルの上に寝かせられたのです。背中が交叉され、固く縛られている手首が痛かったのですが、血が通わなくなってくると感覚が無くなってきました。そんなわたしに彼は左右の脚を胸までまげさせると、今度は膝の裏側に回したホースで縛り、固定させた



のです。

湯舟からお湯をくみあげるとわたしの体に向け、彼はもう一本のホースをとり出しました。お風呂場は湯気でいっぱいになり、彼の顔もはっきり見る事ができないほどでしたが、彼はそのホースの端を蛇口につなぎもう一方の端には、湯気がじゃまをしてよく見えませんでした。が、何か金属性のものをとりつけたらしいのでした。どんなことをされるのか、不安と期待でふるえていたわたしは、次の瞬間、おもわず口いっぱいタオルを通して悲鳴をあげてしまいました。お尻に感じたあまりの痛さに耐えられなかったのです。彼は、「我慢してくれ!」と言いましたが、その時にはもう、痛さを通りこして、わたしは何ともいえない不気味な異物感に呻いていたのです。そして、彼は蛇口のせんをひねってわたしの顔をのぞきこみ、「どうだ気持は」と聞くのです。わたしに答えられるはずはありません。

そのうちになんだかお腹がはってくるような感じと、頭の中がジーンとしてくるような



気持ちになってきましたが、彼がせんをひねって水を多くしてくると、今度は洗面所へ行きたくってたまらなくなりました。身振りで彼に頼むのですが「もう少し我慢しろ」と言っ
て、聞いてくれません。

タオルで口をふさがれているため言葉にはならないのですが、（おねがい、もう許して

！）と言っていたのが、彼にやっと解ったのか、ようやくこのおぞましいホースから解放してくれたのですが、縛った後ろ手は解いてくれず、彼は「おれがつれて行ってやろう」と言い、洗面所までつれてきてくれたのですが、そこから動こうとはしないで、「さあ、早く用をたすんだ」と言いながら、口のタオルは外してくれました。わたしは、「お願いすぐここから出て行って！」と叫んだのに、彼は首をふり、だまって、立っているだけです。

わたしは我慢できるだけ我慢して、これだけはどうしても彼の言うことを聞くわけにはいかないと思っていました。しかし体の方が言うことをきかなくなり、もう我慢の限度がきてしまいました。恥かしさが体中にひろがり、もうどうすることもできなくなり、目をつぶって、ついに用を、たしてしまったのです。普段なら快さを感じるのに、その時は、ただただ恥かしくて、早くこの場を逃げ出したいような感じさえうけました。

こんなにまでいじめる彼に少し腹が立ちましたが、彼はすぐに縛っていた手を解いてくれましたので、わたしは洗面所を出るとお風呂にとびこみ、高なっている心をやわらげよ

うとしました。

でも、湯舟の中につかって落ちついてくると、あの我慢している時の気持ちが、何とも言葉では表現出来ない不思議な感覚となって蘇ってくるのでした。

あの恥かしさの中に、そうされたうれしさがあったのではないだろうか？ でも彼はどう受けとめていたのかしら？ ただわたしが恥かしさだけを感じているようにとられたかしら？ そんな反省めいたことを考えながらお風呂からあがり、彼の待っているベッドにゆきました。

彼はニッコリと笑い、「今夜は責めすぎたかな」と、やさしく手を差し出してくれました。

○

そんな彼とつき合っていた時に、母から手紙がとどき、父が会社の仕事で海外へ一年間出張するようになってしまったから、家に母が一人残るようになるため、わたしに帰ってくる様という内容のものでした。

迷いました。

彼と別れるのはつらい。でも母が一人きりになるのを知りながら、わたしは、この地にいることも出来ない。どうすればいいのかし

ら。彼をとるか、母をとるか、数日わたしはそんなことを考えていたために、仕事のミスが目立ちました。

結局、様子を見に帰り、直接母から「帰ってきて」という言葉を聞くと、決心したのです。

でも、彼に会って話す勇氣がなく、会えば別れるのが一層つらくなるばかりのような気がして、手紙を書いて渡そうと思いましたが、会社の方は事情を話すと気持ちよく退職を認めてくださり、ふるさとに帰ってしまったのです。

母はとても喜んでくれました。兄弟はそれぞれ独立しているため、末っ子のわたしでもそばにいれば心強いのでしょうか。

でも、彼はどうしているかしら。あの手紙を読んで、わたしの態度に腹を立てているかもしれないと思うと、彼が今までに感じていた以上に、恋しく思われました。

数日後、彼から手紙が届き、いつまでも待っているという内容でした。うれしく何度も繰り返し読みました。

母のもとで暮す生活が続きました。

そうしているうちに、父の会社から毎月、父の給料を届けに来ていた経理課の青年を、

母が気に入ったらしく、わたしとその人を二人きりにする時間を作ろうとしているらしいことを感じたのです。

たしかにその人はまじめで、誰からも好かれるタイプの好青年でした。でも、わたしにはどうしても、待っていてくれるという彼が忘れられなく、恋しくなるばかりでした。

彼も恋しかったのですが、あのいじめられる感じ、飲びの感じが忘れられなくなっているようなわたしでした。そして夜、寝つかれない時などは、あの時の飲びの追憶にひたりながら悶々とするのでした。

会いたい、どうしても彼に会いたい。そんな気持ちをおさえることができなくなり、母には悪いと思いながら、二日程友達と旅行すると言って、わたしは汽車に乗りました。

彼のところへ行く目的は、もちろん、いじめられる飲びを再び感じさせてほしいこととその時のわたしの姿を、彼に写真をとってもらおう、ということにあったのです。どうしても彼から離れなければいけないことになった時に、写真を見てその時の感じを思い出すことだけでもしたい。彼にもわたしの存在を忘れてもらいたくないためにも……。

そして、わたしは彼に会ったのです。

○

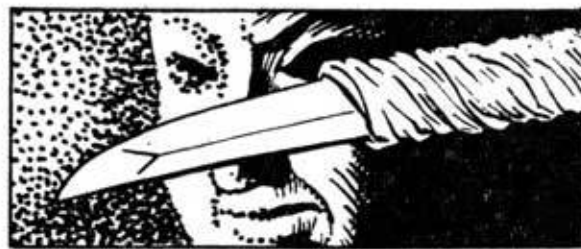
気がつくと、今までさかさかになっていたわたしの体は、彼の両腕の中にあり、ひたいに暖かい唇がふれました。つるされた時の足首の縄の縛り目が今になって痛くなり、くるぶしが赤くはれあがっています。

「よく辛抱してくれたね」と彼は言い、縄を解いてくれました。

もうフィルムの中箱が、二、三個散らかっているのが、いろんな格好での写真を、何枚も撮ったことを物語っていました。

その時わたしは初めて、こういう世界を専門的に採り上げた内容の雑誌があるのを知られました。すでに彼は前から愛読していたということでしたが、わたしと似ている女性が多いことを知り、どうして、もっと早く見せてくれなかったのか、彼をうらめしく思うほどでした。

そして、思いきってこの時の写真を送ってみようという気持ちになったのです。わたしの飲びの追憶として書き出したものですが、もちろん母には内緒ですので、彼に頼んで送付してもらうことに致します。



切腹研究夜話

眠れぬ夜の対話

中 康 弘 通

A 「なぜ眠らないのだ？」

B 「眠らないのではない、眠れないのだ」

A 「同じことじゃないか」 (嘲笑う)

B 「違う。眠らないというのは、自分の意志で眠ろうとしないことだ。だが、いまわたしは眠りたいし、眠ろうとしているのだ」

A 「なら、なぜ、いらぬことを考える？」

B 「いらぬことなど考えてはいない、生きるために必要なことを考えているのだ」

A 「そうか、それほど自殺したいと考えることが、生きるために必要なのか。死ぬために必要なんじゃないのか」

B 「自殺したいとばかり考えているのではないのだ。自殺しやしないかとも考えているのだ。もし自殺したら困るのだ」

A 「まわりくどい奴だな。自殺したいくせに、自殺するのが怖いのか？」

B 「こわい。こわいと云っても、死ぬことがこわいのではない。仕事に対する責任、家庭に対する責任、それらを捨てて自殺してしまふことが出来ないのだ。だから自殺してしまふことは出来ないのだ。だから自殺しやしないかと恐れるのだ」

A 「ばかだなあ。死んでしまえば責任もへチマもあるものか。第一、そうやって深夜ベッドに坐っていれば、解決できるのか」

B 「出来はしない。だから苦しいのだ」

A 「お前は四十年前にも、悩んだなあ」

B 「そうだった。四十年前だった……」

A 「あのとき決断していれば、今更いい年をしてクヨクヨすることもなかったのに」

B 「そのとおりだ。しかし、いくら八才の子供でも死への恐怖はあった」

A 「それがおかしいではないか。死が恐れ

れば、何故死のうと思ったのだ」

B 「わたしは小学一年だった。春三月になって、校庭の柳が芽吹きはじめていた。その枝を折りとり、わたしは級友のSと剣戯の真似をした。柳というものが、しなやかで、案外手ひどい打撃を相手に与えるものだということなど、わたしは判らなかつた——」

A 「Sのお母さんが学校へ来たなあ」

B 「担任のK訓導としばらく話をして帰って行った。そしてK訓導はわたしの親にあてて手紙を書いた——」

A 「内容を予想していたのか」

B 「わかるわけないだろう。わたしの一撃を頸部に受けたSが、そのために病気になるたということ……わたしはむしろ彼が休んでいるので、遊び相手をなくして淋しかったのだ」

A 「手紙の結果はひどいことになったな」

B 「そうだ。父は午前さまだから、わたせなかつた。母にわたした。母は怒った」

A 「あたりまえだ。教師から子供の素行について注意を受けながら喜ぶ親はいないさ」

B 「母は家を出ると云った」

A 「極端だとは思わないか。ただ一度、教師から注意されたくらいで……」

B 「そうかも知れない。しかしそのときには、そこまで考える余裕はなかつた。母は父の放蕩に愛想を尽かして家を出たがっていた

が、病身の母が家を出て、どうして生活するのか、わたしには危なっかしくてならなかった。……ものをこわすのはやさしいが作ったり持ちこたえたりするのはむづかしいのだ。子供のわたしが感じることを、大人の母が感じないはずはないにしても、辛うじて母をこの家につなぎとめているわたしが、こんな不始末を仕出かしたのだから母が激怒するのは当然だったろう。わたしはひたすらあやま

った。畳に手をついて、二度とこんなことはしませんから許して下さい、とわびた——」

A「それが聞き入れられなかったら、どうするつもりだったのだ？」

B「覚悟は決めていた、謝って聞き入れて貰えないときは男らしく腹を切ろうと……」

A「仕とげる自信はあったのか？」

B「それは判らない、いや、考えてはいなかった。ただ、力一杯切り出しを左の腹に突き刺して、横へ力の限り引く、それだけのことでしか考えなかった」

A「単純なものだなあ。もっとも今も、お前は単純な人間だが——」

B「しかし、他に方法がなかった。どうすればよかったのだ？」

A「本当に死ぬ気で、覚悟が出来ていたのなら、一旦自分の部屋へ帰って腹を切ってからあやまって、死んで行ってもよかったのではないか？」

B「陰腹か。……そこまで、八才の子供に要求するのか」

A「まあいい。それからだったなあ、お前が真新しい切り出しをいつも備えているようになったのは」

B「そうだ、そのときは許して貰えた。しかしわたしは家庭のなかでの暗い位置に自分自身処し切れなかった。それと、もう一つ、お前のために家を捨て切れぬ、という母の云い分があった。わたしが死ねばいいのか、と、いつも思った」

A「先刻の話とは矛盾するじゃないか。生活能力のない母を家から出したくない。そのためには、お前が生きていなければならぬのではなかったか」

B「だが、毎日、お前さえ居なかったら、と聞かされる身になってみる。それもまだ八つかそこの子供に、それだけの責任を負わされてみる。どうなってもいい、死んで責任を逃がれたいと思っても不思議ではないだろう」

A「今度は責任回避か」

B「何とでも云え、八才から十才まで、わたしはいつもその真新しい切り出しを使う日のことばかり考えていたのだ」

A「十才のとき何故考えなくなったのだ」

B「わたしはある小説を読んだ。ドストエフスキーの『虚偽られし人々』だった。昇曙

夢の訳だった。わたしの眼が開いた。人間に感動を与える仕事がある。ものを書くこと、それは一つの感動を拡散させる媒体だった。わたしは、死ぬ前に生きることを考えようと思った」

A「その考えが、また変わった」(冷笑)

B「小説で開かれた眼で、わたしが人を愛するということの存在を知ったからだ。親子夫婦でも冷たい無関心の世界に棲んでいるわたしの家庭もあったが、また人間は他人を愛することも出来るのだということをわたしは教えられたのだ。やがて八人は愛するもののために死ぬる」という思想を、そののち江馬修の『受難者』で教えられたのだ」

A「では、その日からお前は死をすっかり忘れ切って、生きることにとれほど徹底出来たというのだ？」

B「わたしが『受難者』を読んで間もなくだった。日本は太平洋戦争に入った。もちろん十五年戦争はとくに、わたしがはじめて自殺しようと思ったときには、もうはじまっていたのだが、年令的にも距離的にも『強制される死』は遠かった。しかし、太平洋戦争がはじまったときには、『強制される死』は近づいていた。折も折、わたしは家の近くで働いている一人の少女Y・N子に魅かれた。清純な健康美のシンボルのような少女に——そして、戦局が、日本にとって日に日に非と

うすあかく染まった頬に落ちて美しかった。わたしはこのとき、はじめて女の美しさを身にしてみて思い、彼女が死ぬなら一緒に死んでもいいと思った。――△Ｙ子……▽わたしは思わず口走った。――△Ｙさんが切腹するならばくだって……▽――瞬間、彼女は眼をみはったが、すぐ微笑に崩した。――△そんなことにならないわ。勝つわ、ね▽――うなずきながらもわたしは、心に誓った。日本は敗けるかも知れない。そのとき彼女が切腹するなら、わたしも切腹しよう……。彼女と共にする死は△強制された死▽ではない。わたしにとつては、生れてはじめて、愛する人のために思う△死▽だった。わたしが腹を切るとしたら、それは敗れた国に対する追腹ではなく、彼女に殉ずるための△死▽でなければならなかった……」

A「よくしゃべるなア。さて、日本は敗れた。お前は どうしてそのとき腹を切らなかったのだ？」

B「間もなく彼女は日赤に志願した。わたしは高等専門学校へ進んだ。やがて戦災……わたしたちの街は瓦礫の堆積になった。疎開勤労動員、疾病……敗戦のそのころ、わたしは完全に彼女の踪跡を見失っていた。彼女は言葉どおり切腹しただろうか。とすればわたしもそうすべきだ。昂ぶった感情の嵐のなかでわたしは、ハムレットのように怯懦と戦

A「つまりお前は、何と弁解しようと、あのとき腹を切ることが出来なかった、というわけなのだ。だから、今になって苦しむのだよ。憶病の罰だよ」

A「それだけ考えたら、もう眠ったらいんじゃないか。それが、お前の負け惜しみでないのなら、お前は、生きねばならないのだろう?」

B「そうだ、眠れたら眠ろう。もう夜明けが近いけれど、わたしは生きるために、Y・N子への紙碑を築き続ける日日のために、眠れたら眠ろう」

浅川則子さん。五、七月号の本誌で貴文拝見しました。小著「切腹―悲惨美の世界」をお読みになっていましたら、感想をお寄せ下さい。

— 懸賞入選創作 —

恍惚の バタフライ

工 月 洋 一



春 川 ナミオ・画

妻の玲子が、四年生の女兒を連れて、里帰りの為、家を明けたのは、ちょうど、日曜日だった。私は以前から機会があればやってみたいと思っていたことができる絶好のチャンスだと小躍りする思いだった。

妻子を送り出すと、すぐ、妻の下着の入っているタンスを開けて、衣服の位置が変わらないように注意しながら、その中を調べていくと、予想通り、ガードルやストッキング、ガーターベルト、パンティ、月経帯が見つかった。それらがあった場所をメモして、同じように返せる

ようにしてから私は裸になって、妻のパンティを手にとった。洗濯した後の爽やかな香りにうっとりしながら、そのつるつるした肌触りで、きゅうと締めつけられ、気持が良い。

次に、ガーターベルトを付けた。腰部はきつかったが、心が、きりつとさせられたようだった。これも、快かった。すべすべしたナイロンストッキングを穿いているうちに、私は興奮してくるのを感じた。ストッキングで、両足の胫もぴっちりと締めつけられた。ガーターベルトでストッキングを留めると足を動かすたびに刺戟を覚えた。ストッキングは薄いけれども案外温かい。白いパンティ、黒いガーターベルト、あめ色のストッキングだけの姿で大きな三面鏡の前に立つと、一層、私は興奮してきて、急いで解決せざるを得なかった。

少し休んだ後、パットを入れて、白いブラジャーを嵌めてみた。これも、胸が快く締められて気持良かった。

月経帯に置き替えるため、パンティを脱ぐべくガーターベルトからストッキングを外した。ピンクの月経帯に、パットを挿入して穿いてみた。動かたばに、そのパットが、月経帯を着けていることを意識させてくれた。

ピンクの月経帯、黒いガーターベルト、あ

め色のストッキング、それに、パットを入れないで純白のブラジャーを着けた上に、男性の衣服を着た。

その姿で近所を散歩した。二、三の知り人と挨拶を交したが、勿論、その人たちは、私の下着が何であるか気付く筈はなかった。気を付けて見れば、胸部が少し脹らみ、靴下が男ものらしくないことが判っただろうが、誰も、そんなことに注目する者は、いないらしい。秘かに女の下着を着けていることは、私をぞくぞくとさせた。歩きながらもつい、にやにやとしてしまうのだった。

この喜びを、妻の留守の時だけしか味わえないのは残念だと思っているうちに、いいことを思いついた。それは自分で女性の下着を買い揃え、それを妻に秘密に持っておくことだった。思いつくと矢も楯も堪まらなくなり次の日、隣り町まで汽車で行き、その百貨店で女の下着を買うことにした。妻には、会社の仕事で帰りが遅くなると言っておいた。

百貨店の下着売り場には客は少なかった。恥かしい思いはしたが、平静な風を装い、ピンクのパンティ、ピンクのブラジャー、真紅のガーターベルト、あめ色のストッキング、ピンクの月経帯を注文した。女店員の顔をな

るべく見ないようにしながら、サイズと好みに合うものを手早く選び、逃げるように、その場を去った。案外、高価だった。あとで、女店員がどう思い、どんなことを女店員同志で語り合おうと、今の私は何も害されることはないと自分に言い聞かせて、私の心を平静にしようとした。だが、胸がどきどきし、足も自分のものでないかのように、うわついた歩き方になっているのに気がついた。

汽車のトイレで、買物物の女性の下着の包みを開けて見た。そのどれもが、明るく魅惑的だった。すべすべしていて、触っているだけで、私を夢の世界に誘い込んでくれそうだった。すぐにも、身に着けたい衝動を感じたが、帰宅後、そんな姿では困ると気付き、無理矢理、我慢した。

次の日曜になるまでは、待ち遠しかった。妻が昼食の買物に外出した隙に、私は素早くパンティとガーターベルトを身に着け、上には外出着を着た。そして、ブラジャー、月経帯、ストッキングを鞆に入れ、施錠しておいた。

妻が帰宅後、私の正装姿を見て、ちょっといぶかしげにした時、私は、会社の所用の為に出かけると告げ、昼食もそこに駅へ急

いだ。

駅のトイレに入り、ブラジャーを付け、ストッキングを穿いた。臭い男子便所での着替えは、以前、家で味わったような快感を呼び起こす雰囲気ではなかったが、やはり胸をときめかしながら、それ等を身に着けた。真紅のガーターベルトに、あめ色のストッキングをパチッと留めた時は、ぞくぞくとするような心のときめきを感じた。すべすべしたストッキングが、足全体を軽く締めつけるようで気持ち良かった。

上は背広の男装であるが、下着の要所は完全な女装姿で、一時間ばかり町中を散歩し、また、駅でストッキングとブラジャーを脱いで鞆に入れて帰宅した。隙をみて、妻に知られぬように、手早く下着も男性用に替えた時は、さすがにホッとした。

それから時々、女装の下着を身に着けて町中を歩いた。しかし、初めのような興奮は起こらず、何か物足りなかった。

○

よい事を思いついた私は、今まで行った事のないボアというバーで、ぼけの花のようなぼちりとした感じの絹子という若い子を見付けて、数回通い、そのつど、その子を指名

し、絹子目当てに来る客のように振舞った。名前は工藤と交えておいた。

そんな工作をしておいて、ある夜、私はピンクのパンティ、真紅のガーターベルト、あめ色のストッキングを着け、上はワイシャツネクタイ、背広の男の正装をして、飲み屋で三合ばかり飲んだ後でボアに行き、隅のテーブルで絹子の体が空くのを待った。三十分ばかりすると、

「まあ、工藤さん、いらっしゃい。お待ちになつていたの？」

と、ピンクのぼけの花が咲いたような唇を動かした。それまで相手をしていたホステスは、氣を利かしたのか席を外した。

「絹子ちゃんは、いつ見ても可愛いね。殊に唇が、ぼけの花みたいに可愛いよ。……もう一つの唇の方はどうかな」

と、エッチな話題にもって行き、そんな冗談を暫く言い交した後、

「それはそうと、僕はね、君に是非、見てもらいたいものがあるんだよ」

「何？ 見せて」

薄暗いバーの隅のテーブルの、更に片隅に坐っている私達は、他の人から見られにくい場所だった。私はズボンの裾を少し捲り、

「これは何か判るかい？」

絹子は、私の靴下と靴の間に何か挟んででもあると思つたのか、そのあたりに目を向けていたが、

「何？ 判らないわ」

「触ってごらん」

「何も無いわね」

「靴下が、すべすべしてはいないか」

「そうね。そう言われれば、すべすべしているわね」

「この靴下、何だか判る？ 当てたら賞金をあげるよ」

と、私は笑った。それに釣られて、絹子のぱっちりした目も微笑み、ぼつてりとした白い手が、靴下を探るように、し始めた。

「わかったわ。これ、女の靴下ね」

「そう大当り……はい、賞金です」

と、かねて用意の小さく畳んだ千円札を、絹子のすべすべした白い手に握らせた。

「まあ、いいですわよ。冗談でしょう」

と一応断わった絹子も、私が再び勧めると

「サンキュウ、得しちゃった」

と、ぼけの花のような、みずみずした唇が囁いた。

「ついでに、是非、見てもらいたいものがあるんだよ」

るんだよ」

と、言いながら、手早くズボンのチャックを引き降ろした。絹子は、ちょっと驚いたようだ。すかさず、

「驚いた？ 女性のパンティを穿いているんだよ。ストッキングは、これ、このガードルで吊っているんだよ」

私は少し恥かしかつたが、小さい声で一氣に言つてのけた。

「まあ、工藤さんて、物好きなのね。……でも、いやらしいわ」

私は、ズボンの間から覗く、私の穿いているピンクのパンティと、あめ色のストッキングを吊り上げている真紅のガーターベルトを改めて見降ろした。そして、これをこの可愛い絹子に見られていると思うと胸がときめきある種の衝動を感じたが、計画から脱線すると、初期の目的を達せられなくなる恐れがあるので、手早くチャックを閉め、

「君の今、穿いているパンティを譲ってほしいのだ。勿論、充分なお礼はするし、替えのパンティも持ってきて来るから」

と、言つて、百貨店で買つて来ておいたパンティを、セロハン袋のまま膝に置いた。氣圧されたように絹子は、暫く、私の顔とパン

ティのセロハン袋を交互に見ていたが、

「いいわ、工藤さんのことから、きいてあげる。只で替えてあげるわ。でも私の、少し古くなっているわよ」

「うん、古いので結構だよ」

私は、小躍りしたい気持ちで言った。

「ちょっと待っててね」

絹子は、パンティを取り上げると席を立った。トイレに行ったらしく、暫くすると、

「はい、これ」

と、さっきのセロハン袋を私に渡してくれた。もちろん中身は変わっている。そのパンティは白かった。だが一部分は、少し黄色くなっていた。胸が、わくわくした。

「有難う。無理な願いをきいて呉れて」

「ううん、いいのよ」

絹子は、何かきまり悪そうであり、言葉に元気が無かった。でも、そんな姿も可憐で、可愛かった。

私は、次の願望も、ついでに叶えてみたくなった。うまくいかなかったとしても、既に一つの目的であったパンティは手に入れたのだから、もともとだと思った。

「これは替えて呉れた、お礼だよ」

と、改めて千円札を絹子の手に握らせた。

「いいわよ」

と、いう絹子に、

「これは、チップでもあるんだから」と、無理に押しつけ、

「ねえ、絹子ちゃん。これも穿いてみて呉れない？」

「え？」

絹子の顔は、ちょっと厳しくなった。でもそんな絹子も、また魅力的だった。

「これは生ゴムパンティだが、これを今から一時間くらい穿いて、それから、また僕に返してもらいたいんだよ」

「ゴムのパンティ？」

絹子の顔は暗かった。

「サービスしてくれよ、ねえ、絹子ちゃん。一時間、穿いてさえくれたら、そのあいだ、君は他のお客の所へいっていてもいいよ」

私は囁いた。

「しょうがないわね」

「頼む」

と、ゴムパンティの包みを手渡した。

「今、穿いているのを替えたら、ちょっと僕の所へ来てくれよ」

暫くして、絹子が戻って来て、私の横に坐った。

「君、穿いて呉れた？」

「ええ」

「ほんとうに穿いているかどうか、確かめさせておくれよ」

私は確認のために手を裾に差し入れる許可を得た。ぬるっとした手触りが感じられた。

いつまでもそのまま居たかったが、あまり過ぎると目的が達せられなくなる恐れもあるので、心に鞭打って控えることにした。

「有難う。穿いて呉れたのだね。すこし汗ばんでくれると、なお一層、有難いんだがな。」

……踊ろうか」

私は絹子の弾力のある体を抱いて踊った。ラ・クンパルシーターの曲がかかっていた。

私は望みを遂げ得た喜悦に酔っていた。だがこの絹子とは、今後は、もう会うまいと決心した。しかし、その決心とは逆に、後に思いがけないことで会うことになるうとは、その時は夢にも思わなかった。

帰宅後、戦利品である二枚のパンティを妻に隠れて出して見た。鼻を当てると、どちらも甘ずっぱいような薫りがした。私は嬉しくなり、トイレに入って代わる代わる穿いてみた。絹子が、ついさっきまで穿いていてくれた生ゴムパンティを穿いた時には堪まらなく

なり、遂にその場で解決してしまった。

その後私は、絹子が穿いて呉れたあめ色の生ゴムパンティをつけ、真紅のガーターベルトを嵌め、それでストッキングを留めて、町に出ることが多くなった。こうしていると、絹子に、真紅のガーターベルトを身に付けているのを見せた時の興奮状態や、絹子が穿いているのを確認したゴムパンティのぬめぬめした感触が甦ってきて、恍惚としながら歩き廻れるのであった。

しかし、そんな喜びも回を重ねるごとに、だんだん薄らいできて、物足りなく感じられる時が、やってきた。

○

ある夜、絹子に穿いてもらったゴムパンティを穿き、ストッキングを付け、それを真紅のガーターベルトで吊って、その上には、ぴっちり背広を着て、ストリップ劇場へ入った。女性の下着を身につけてストリップを見ていると、そうでない時よりも、強い陶酔感を覚えることが出来た。

舞台では、一人の若い子がバタフライだけの姿で、エキゾチックな音楽に合わせて均斉のとれたピンクがかった滑らかな肉体をくねらせていた。ふと私は、あのバタフライを躰

に付けてみたくなった。あの細い透き通ったようなナイロン紐で留めてある銀色のつるつるしたバタフライを、私が手に入れることができたなら、どんなにいいだろう。しかし、これは難かしい事に思えた。バーの絹子の時のようには、いくまい。しかし、欲しい気持は募るばかりだった。私の目は舞台に向いていても、心は、そこには無く、いろいろと手に入れる方法を練っていた。

入口のキップを受け取る女性に尋ねたところ、このストリップ団は、あと十一日間、ここで演じているとのことだった。

二日後、私は劇場の事務室へ行った。

「あのう、ストリップのマネージャーに会わせて頂きたいんですが」

「どんな御用ですか」

事務室の男性は怪訝そうな顔をした。

「はい。マネージャーにお願いしたいことがあるのでちょっと会わせて頂きたいのです」

「今、外出していて居りませんよ」

「そうですか。じゃあ、また出直してまいります、これを、帰られたらお渡し下さい」

と、包みを渡した。包みにはこの町の老舗の菓子箱が入っており、ファンの工藤よりという添え書きを付けておいた。そして、あつ

さりとその場を去り、その足で花屋へ行き、花束を、あの劇場へ送るよう頼んでおいた。その花束にも、ファンの工藤よりという添え書きを忘れなかった。本名でなく、工藤という偽名にしておいた。

次の夜は仕事の都合で行けなかったが、その次の夜を待ちかねて出掛けた。事務室でマネージャーに会いたい旨を告げると、少し待たされた後に会わしてくれた。思ったより若いハンサムな男だった。

私が、記念にバタフライを欲しいと申し出ると、

「時々、貴方のようなお客さんも居られますよ。でも、こんな事は特別ですから、高く付きますが……」

私は勿論承知だと告げ、更に、本人の体から直接外して、手渡して欲しいと頼んだ。

ストリップが済むまで見た後、いわれた通り、暫く事務室から舞台裏に通ずる所で待っている、マネージャーと、銀色のバタフライを付けていた若い美しい娘が、ネグリジェ姿でやって来た。そして、いきなり、

「はい、これがあるんですよ」

と、こともなげに、その娘は後ろ向きになり、銀色のバタフライを外した。娘は微笑み

ながら、白い滑らかな手で、その銀色のバタフライを私に渡して呉れた。

私は、わくわくとした嬉しさを感じながら受け取った。貰ったバタフライから、この若い娘の薫りが漂って来るような気がした。その場で、すぐ、そのすべすべしたバタフライに顔を埋めたくなった。だが、さすがに、そうは出来なかった。

「有難う」

と言う私の言葉は、心からのものだった。

劇場から出た。もう、深夜だった。暗がりに入るとバタフライをポケットから出して匂いを嗅いだ。甘ずっぱいような薫りがした。

帰宅後、トイレで貰った銀色のバタフライを着けてみた。気持良かった。

その後、妻と子の居ない時に、真裸に銀色のバタフライだけで、等身大の三面鏡の前で身をくねらせてみた。あの若いスタイルの良いいストリッパーが、むっちりした肉体をくねらす様子が頭にありありと浮かんできた。あの娘の姿と自分のこの姿とは比べものにはならないが、このバタフライは同じものだと思うと、心がぞくぞくとした。そのすべすべした感触が何とも言えず快く、あの娘に抱かれている幻想に溺れて、忘我の一瞬を過ごすこ

とが出来た。

次の日、私は、すべすべした銀色のバタフライをびっちりと嵌めて、また、あのストリップ劇場へ行った。銀色のバタフライを着けていた子が、今日は金色のバタフライを着けて身をくねらせていた。あのむっちりとした肌に、きのうまで貼り付いていたものが、今私をびっちり包んでいるのだ。私は、私のバタフライを、そっと触ってみた。つるつるする感触が快かった。

私は、それから、銀色のバタフライを嵌めたまま暮した。勿論、妻子には知られぬよう、細心の注意を払った。

しかし、汗ばんで痒くなったりするので、四日後には取り外した。もうこの時には、バタフライの感触にも堪能した思いだった。

○

私は、外部まで完全な女装をして、女装故に遂げられるある種の望みを叶えたくなくなった。しかし、こんな自分が恐ろしいような気もしていた。こんなことをし続けているといつか破綻が来るような気もした。だが、その願望には負けてしまった。テレビによると女装学校も有るそうだし、またサカサマシヨウでは、男性が上手に女装している。出来な

い筈はないという理由を見付けた。

かつらは高価だった。でも、無理をして買ってしまった。大きな容れ物に入っていて目立つため、会社の自分用のロッカーに納^{しま}めておいた。そして、妻子が留守にする日を心待ちに待っていた。一カ月に一回位は子供を連れて里帰りする妻だが、やっと、その日がやって来た。その前日に、会社から、かつら箱を大きなハトロ紙に包んで、機械の部品だといって持って帰っておいた。

妻子が家を出た後、妻の鏡台の前で化粧をした。それとなく妻が化粧するのを見ていて化粧法を知っていた積りだが、口紅一つにしてもうまくいかなかった。左右が不釣合になり、それを直そうとしているうちに、アイヌ人の唇のように大きな唇になって、おかしくなって笑ってしまった。

口紅をおとして塗り直し、アイシャドウを付け、白粉を軽くはたき付け、なんとなく女の顔らしくなるまでには、二時間位かかっていた。女性の下着の上に、とっくりの毛糸のセーターを着、パンタロンを穿いた。

しかし、この姿で、ある種の願いを叶えに行くのには自信が無かった。それで残念ではあるが、それは次の機会に譲ることにした。

その後は、妻の化粧法を注意して見ることは勿論、女性らしい話し方を人通りのない道を歩きながら声を出して真似したり、女性らしく歩くことも機会あるごとに練習した。そんな練習に熱を上げていたせいか、日のたつのが早く、また妻が里帰りする日が来た。

その日は、この前よりは、ずっと女性らしく化粧が出来た。パンティ、ブラジャー、ガーターベルト、ストッキングを付け、その上に、スリッパ、ブラウスをつけ会社のロッカーから、かつらと一緒に持ち帰っていたグレイのパンタロンを穿き、ベラクール製で一見革製のように見える茶色の上着を付けた。頸には、幅の広いドックネックを付け、喉仏を隠した。そして、羊皮の手袋をつけた。化粧の際、付け方を練習していた付け睫も付けたため目の感じが変わり、自分でも惚れればするほどだった。内股に立ち、しなを作るとエロチックにさえ見えた。私は満足した。

玄関から逃げるようにして出ると、タクシーを拾って町へ出た。

踵の低いハイヒールを穿いているのに、歩きにくかった。女はよくこんなものを穿いて歩きまわれるものだと感心した。洋品店に入って、ネックレスなどを選ぶ振りをして店員

と対話したが、別に店員は私を男性と気付いた様子もなかった。それで、機械の再点検を終えたような、すっきりとした気持ちになり、かねてからの願いであった女装故に遂げられる「ある種の望み」を叶えることにした。

百貨店に入り、私は落着いた足取りで、婦人用化粧室へ向かった。足取りは落着かせてはいたが、心臓までは落着かすことはできなかった。

戸を開けて入ったとたん、さっと目の前に展開した光景は、色とりどりの女性の締めきだった。鏡の前で化粧を直す婦人、幼児のパンツを脱がす若婦人、トイレ個室から勢いよく跳び出てくるミニスカートのティーンエイジャー。化粧の薫りと女性の分泌物の匂いの中で、それぞれ忙しく活動していた。

順を待つ女子高生校生の後に私は並んだ。私を男だと気付く者は誰もいないようだ。その女子高生がトイレ個室に入ると、暫くしてシャワーと勢いのよい音がし、満足そうな顔をして、しもぶくれの目のぱっちりした女子高生が出て来た。その女子高生が今まで入っていた個室に、すぐ入れるのだと思うと嬉しさで胸が一ぱいになった。急いで中に入って、鍵を掛けた。あの女子高生が処理した

ものが残っていないかと物色したが、そんなものは見あたらなかった。だが、この匂いの中にはあの女子高生校生の匂いも残っている筈だと思ふと快かった。

服装を整えて個室から出ると、中年婦人が待っていた。私を男と感じた様子はない。

○

婦人用トイレで、別に怪しまれなかったもので、いよいよ私は自信を強めた。そこで、次の望みも、叶えることにした。

私は、平素行きつけない場所にある、歓楽街に近い風呂屋に入った。四時頃だった。この時刻だと、バーのホステスなどが来ていると思われたからだ。番台でも、私を怪しむ風はなかった。まず、安緒した。脱衣場には上がると、風呂場の湯気の薫りとともに化粧と女性の薫りが漂って来た。私の胸にワクワクする喜びが漲りだした。

五、六人が衣服の着脱をしていた。私は、ゆっくりと脱衣箱に近づきながら、それらの女性に目を配っていた。バーのホステスのような上着を着ているのに、パンティ、ブラジャーが平凡なものには、がっかりした。だが、ブラジャーを外し、パンティを脱ぐさまは、妻のそんな動作から受けるものとは違った、

僕のイメージ画集『人形じごく』室井亜砂路



なまめかしさを感じさせた。私は、ゆっくり上着を脱ぎかけながら、目は、しきりに女性の方を探っていた。

湯殿から全裸の女性が上がって来た。湯気に包まれた幸福そうな顔をして乳房がぴんと張っていた。私が、じっと見ているのを感じたのか、その娘は私を怪訝そうな目で見返し

てきた。私は目をそらした。なんだか回りの女性たちが私に注目しだしたように感じた。こんな時は、早く逃げるに限ると思って、私は、皮の上着のボタンを掛けると、
「忘れ物をしたので、ちょっと取りに帰らせてちょうだい」
と、女性用の声で言って風呂屋から逃げ出

した。後ろから、風呂屋の人が追っかけてくるような感じさえした。

○

私は、女装で風呂屋巡りをした。平素行きつけない場所の風呂屋に行き、しかも、一度行ったところは、用心のため、二度とは行かなかった。

その際は、銀色のバタフライをしつかりと締めこみ、その上にバーでもらった白いパンティを穿くことが多かった。ゴムパンティは蒸れて痒くなるし、もし、下着姿になった時ゴムパンティでは、目立つと思ったから、それは使わなかった。

風呂屋を渡り歩いたため、だんだん行けるところが少なくなり、ある日、遂に、時々行くことのあるバー街の風呂屋へ行くようになってしまった。その風呂屋の脱衣場は、賑わっていた。そこで思いを遂げ、風呂屋を出て間もなく、後ろから一人の女性がやってきて私の前へ回りこむなり

「やっぱり！ ねえ工藤さんでしょう？」

私は、どきっとした。遂に、破綻が来たかと思ったが、逆に、人違いをされているかのように、怪訝そうな表情を作った。

「まあ。誤魔化そうとしても駄目よ、判って

いるんだから。私、覚えているでしょう。大切な物をあげたんだから」

ぼけの花が咲いたような、ぼちちりとした唇が動いた。とたんに思い出した。バーでパンティを貰った絹子だった。わるい女に見つかったものだ。しかし、なおも私は、人違いのような振りをして歩み去ろうとした。

「工藤さん。しらばくれないでよ。大声で人を呼ぶわよ」

柔らかいが弾力のある、すべすべした絹子の手が私の手首を握った。私の顔が悲しそうになったのか、

「でも、そんなに悲しまないでもいいのよ。お客さんの誼で、貴方を風呂屋に連れ戻し、白状さすようなことはしないわ」

女装をしている上に、付け睫までつけて、化粧して顔の様子も変えているのに、なぜ、私は見破られたのだろう？ と不可解な思いだった。

「貴方は、うまく化けたつもりだったのでしょうね」

私の手首を離さないまま、連れだって歩きながら絹子は言った。私は警官に連行されているような気持になってきて、絹子の弾力のある柔らかい手も、手錠のようにおっかない

ものに思えた。絹子のピンクの、ぼけの花のような唇は、なおも動いた。

「私、あの風呂屋で服を着ていたの。するときよろきよろしている人に目が止まったの。初めは、女でないとは思わなかったわ。でも回りの人の下着や躰を、憑かれたように見だしたのが気になり、よく注意して見ていると服を脱ぐのが馬鹿に遅いし、好色そうな目が隣の人の腰のあたりに釘付けになったし、どうも変だと思ったの。そのうち手袋を外したでしょう。その手が男の手に見えてきたの。頸に幅の広いドックネックをしているのも怪しく思え、顔を見ているうちに、私、思い出したわ。忘れるものですか。私が穿いていたパンティを喜んで買い取り、それに、ゴムパ

ンティまで私に穿かせた人ですもの。工藤さん。もう逃げられないわよ」

絹子の柔らかい手が、ギュッと私の手首を締め付けた。私は、喘ぐように呟いた。

「許してくれ」

絹子は、突然、大きな声で笑った。周りの通行人が、私の方を振り向いた。私は狼狽した。絹子は、小さい声で、

「工藤さん。許してあげてもいいのよ」

と、みずみずしい唇が開閉した。私は急い

で財布から五千円札を取り出し、

「これ、小遣いにしてくれ」

「まあ。そんなもの、いらないわよ」

といったが、私が、なおも勧めると受け取った。だが、また、柔らかい手錠は私の手首に掛かってきた。

「私、得しちゃった。でも、何だか悪いみたいね。じゃあ、その代わりに貴方を喜ばせてあげるわよ。いらっしゃい。私のマンションは、すぐ近くだから」

私は、やはり、連行されるような気持を拭い去ることはできなかったが、喜ばせてあげるといふ絹子の言葉に期待をかけて、手首を握られたまま、従った。

四階くらいの大きなマンションの三階まで上がり、ドアに302と書かれた部屋に連れ込まれた。意外に豪華だと感じた時、

「あの、ちょっと外へ出て待っててね」

と、私は外に出された。三分位も待たされただろうか。

「工藤さん、お待たせしたわね」

と、また部屋に招き込まれた。えんじ色のソファが、赤い絨毯と、よく調和していた。

「あのね。貴方、風呂屋に女装してくるほどの人でしょ。用心してもらってもかまいま

せん？」

私は、その言葉の意味がよく判らなかつたが、とにかく頷いた。

「私、お客さんに貰ったおもちゃの手錠を持っているの。それを貴方に嵌めさせてね。すめば、すぐ外してあげるわ。貴方に非道いとされたら困るからよ。工藤さん、承知してくださいさる？」

可愛い、ぽっちりした、ほっぺに、えくぼを浮かべながら絹子は言った。私は頷いた。

「すみませんが、両手を揃えて前に出してくだらない？」

ぽっちりした目が誘いかけるように笑いかけた。催眠術を掛けられたように、私は両手を差し出した。そのとたん、後ろにしていた絹子の右手が素早く動いて、私の手首に冷たいものが喰い付いた。銀光りする手錠だ。おもちゃだといっていたが、本物みたいだ。此処に連れて来られるまで嵌められていた、絹子の手の柔らかい手錠とは大違いの、強烈な拘束感に襲われた。

「心配することはないわよ。後、すこししたら外してあげるから。それでは約束通り貴方を喜ばせてあげるわね。でもね、ちょっと待ってね」

絹子の白い手は縄を取り出してきた。私は

知らず知らず後退りをしていた。

「これでね、留めておかせてね。私ね、貴方の前で、裸になり、私の脱いだ下着を貴方に着せてあげるわ。貴方は、そんなことが好きなんでしょう。その時、貴方がもし変な気を起こしたらいけないから、留めておくのよ。

いいこと。あのドアは閉める時、ボッチを押しておいたから、外から開けることはできないわ。その点も安心だわよ」

風呂上がりの女体のなまめかしい薫りに包まれた絹子が近づいて来て、私に嵌めている手錠に縄を結び付けだした。

私は、絹子の言うように、この可愛らしい妖精のような、ふっくらした肉体を抱き締め、なろうことなら、変な気を起こしたかった。しかし、手錠が、がっちり両手首を繋いでいるので、それは叶わなかった。

絹子は手錠に結び付けた縄の他の端を室内のアクセサリーとなつて天井に近い所の横柱の様な物に投げ掛けてから、たれ下がってきた縄を下に引っぱった。それと同時に、手錠は縄で引き上げられ、私は手錠の掛かった両手を頭の上に上げざるを得なかった。

「あまり変なことをするなよ」

私は抗議した。

「変なのは工藤さんでしょう。すぐ放してあげるから、辛抱してね」

優しい声が返って来た。絹子は縄の端をドアの把っ手に、しっかりと結びつけた。その縄のため、私は手錠を嵌められた両手を、万歳のような恰好に上げたままの姿勢にされてしまった。私は何だか不安になってきた。

「こうしてみると、工藤さんも、もうされるままだわね。懲らしめられなければいけないような事をしたのだから、これくらいのことには我慢なさいね。それにしても、お客さんに貰った手錠がこんなところで役に立つとはね。さあ、喜ばせてあげるわよ」

彼女は、私の目の前で服を脱ぎ始めた。ミニのワンピースを取り、シャツを脱いでいくにつれ、乳房を覆った白いブラジャーが現われて来た。あめ色のガーターベルトが、あめ色のナイロンストッキングをぴんと吊り上げていた。その白い滑らかな内股から、甘ずっぱい薫りが漂ってくるように思えた。

「私が下着を脱いでも、工藤さんが脱がなければ、着せてあげることはできないわね。でも、工藤さんは、そうして両手を吊り上げられてるので、自分では脱げないでしょう。」

私が脱がせてあげるわ。これ、スペシャルサ―ビスよ」

絹子は石鹸の匂いの混じった甘ずっぱい薫りを漂わせながら、ブラジャー、パンティ、ガーターベルト、ストッキングだけの姿で近づいて来た。私は絹子にしゃぶりつきたい衝動に満たされた。しかし、両手を頭上にがっかりと手錠で繋がれているので、どうしようもない。

「やっぱり工藤さんの両手を繋ぎ上げていてよかったわ。悶えているようね。フッフ。あぶない、あぶない。でも、男の人って面白いものね」

ブラジャーの上側からのぞく、むっちりした白い乳房の谷間が息づくのが、なまめかしかった。

柔らかい絹子の手が、私のパンタロンを、ずり降ろした。

「まあ、工藤さんも、ストッキングをガーターベルトで留めているのね。それに真紅のガーターベルトとは強烈だわ」

絹子は、私のガーターベルトから、ストッキングを外し、巻き降ろした。

「揃ったいな」

私は、臍をくねらしながら呟いた。

「まあ。これは、私があげたパンティのようね。やっぱり穿いていてくれたのね、うれしいわ」

私は絹子に貰ったパンティを穿いて来ていてよかったと思った。絹子が喜んでいようなので……。こうして、両手錠のまま縄で吊り上げられている現在、絹子が上機嫌なのはなによりだ。

「私があげたパンティも、脱がせてあげましょうね」

と、絹子は優しいしぐさでパンティに手を掛けたが、

「あら、工藤さん。下に着けている銀色の物は何なの？」

驚いたようである。絹子は、私のパンティの下に着けていたバタフライを、しげしげと眺めた。

「まあ、嫌だわ。これ、ストリップパーが使うものじゃない。こんなものまで、身に着けているのね。工藤さんも相当なものだわねえ。呆れたわ、まったく。でもこれナイロンの細い紐で、結ぶように出来てるのね。あなたにぴったりだわねえ。女だけのものかと思ったけど、男性が使っているのも面白いものね。あら、工藤さん、いやだわ……。これは外して

あげませんからね」

と言うと、絹子はバタフライの上を、ポンと軽く叩いた。羞かしい快感が、ずんと私の背を走った。

「工藤さん、スネ毛を剃っておいた方が良かったわよ。せっかくの美女が台なしじゃない。でも、こんな姿をストリップ劇場で演じたら、受けるかもしれないわね。手錠を嵌められた両手を吊り上げられ、かつらを被り、付け睫をつけ、アイシャドウや口紅を塗り、黒いドックネックを頸に嵌め、茶色の革の上を着を着、革手袋を嵌めた上半身は、強烈な女性のイメージだわね。足はスネ毛もじゃもじゃの男性剥き出し。男性と女性の境目に、ぴっちり銀色のバタフライだなんて、特に印象的だし、変わってるわ。面白い姿を見せてくれたわね」

絹子は感じ入ったように眺めてから、
「それでは、今までののを第一景として、第二景は、いよいよ、私の下着を貴方に着ける場面にしませう」

絹子のすべすべした手が、いま脱いだばかりのストッキングを、私の右足に穿かせてくれだした。

甘ずっぱいような、女体の薫りが漂ってき

て、きゅうと足を引き上げられるような感じを受けたと思うとパチッと微かな音がした。絹子のストッキングは私の右足を包んで真紅のガーターベルトに留め上げられた。白いブラジャーとあめ色のガーターベルトとパンティを着けただけの、むっちりした絹子の白い体が私の足許で蠢いていたが、間もなく私の左足も、すべすべしたナイロン地に包み込まれ、きゅうとガーターベルトに留め上げられた。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

| | | |
|----|-------|-----|
| 優作 | 一篇につき | 参万円 |
| 秀作 | 一篇につき | 五千元 |
| 佳作 | 一篇につき | 三千元 |

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

つづいて絹子は、あめ色のパンティを、さりげなく脱いだ。

「それを嗅がせてくれないか」

私の口からは、思わずそんな願いが迸り出していた。

「嗅がせろって？ まあ、大変な趣味ね。いわ、やってあげるわよ」

絹子は私の鼻に、そのパンティを当てがってくれた。私は、むさぼるように嗅いだ。その甘ずっぱい匂いは、私を、恍惚とさせてくれた。

手記、体験／原稿募集

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

れた。

それから、絹子は、私のガーターベルトの上から、そのパンティを穿かせてくれた。

そして、バタフライを取り付けた箇所を、柔らかな弾力のある手で、ポンと叩いてくれた。その一打で、私は一層、恍惚度を高めていった。

「また、どうやら女性に戻ったわね。でも、この美人さん、バタフライまでも着けてるなんて、傑作だわ」

私の下半身は、足を包んだ絹子のストッキングをガーターベルトに留め上げられ、更に銀色のバタフライの上に、絹子のあめ色のパンティを穿かされたことになる。

そんな私の姿を絹子は、ぱっちりした目でしばらく眺めていたが、やがてパンタロンも穿かせてくれた。

彼女は、新しいパンティとストッキングを身に着け、その上に衣服も着た。それから、私の両手錠を外して呉れた。

体が急に楽になったのを感じたが、今までの恍惚状態から去り難く、私は呆然と、その場に突っ立ったままだった。

——(おわり)——

断 根 式

首席審問官の説明が終わったとき、ジャンヌは目の前が、まっくらになって、思わず円台に坐りこんでしまった。

ショックだった。

今まで、ありとあらゆることを、自発的、又は強制的に体験させられ、大概なことには心を動かされなくなったと思っていたのに、それは飛んでもなく、あさはかなウヌボレだったと、はげしく臍を噛む想いだった。

「どうした、しっかりし給え。君はもう、地

上のモラルの外にいるんだよ」

有明の声に、ハッと気持を引き締めるジャンヌの姿は、いっそ、いじらしかった。今度も有明は、ジャンヌのため、わざわざ最終判定に立ち会ってやることにしたのである。

本審問と同じ、暗いゴシック風の審問法廷だった。静、動二修法を勤めあげたジャンヌは、休養所で一週間、手厚い看護を受けて、やっと、もとの身体に戻った。心技体の誓いは、それ程、辛い修行だった。個々の動作や言葉を端よることが出来ず、一定のペースを守らなければならない。立礼、伏礼はまだしも、中腰で行なう礼は最も苦しかった。疲れ



第三十六回

切った足腰は、直立した姿勢から前こごみに移ろうとした途端、体重を支え切れずに、スボンと膝をついてしまうのである。そうした姿勢では聖液が出ない仕組みになっていた。一つ一つの姿勢まで、コンピューターが監視していたからである。聖液が出なければ、次の動作に移ることが出来ぬ。時間は刻々に失われ、遂には休息時間も、とれなくなってしまうのであった。眠るどころの話ではない。是が非でも、一日一日、千七百回のノルマを消化しておかないと、あとからは詰めるわけに行かない。疲労という要素を考えると、はじめのうちに少しでも余計、稼いでおかな

ければならぬ。だから、お手伝いと称して、アマゾン女兵が一人ずつ、交替で付き添い、激しく追いあげるのである。

それでもジャンヌはよく耐えて七昼夜、通算一万四千五百三十二礼を遂げた。終まいにはもう、無我夢中だった。そして、静の修行で破碎された自信が再び猛烈に蘇ってきた。有明への愛が復活する。しかしながら、それは、以前のものとは根本的に異なるものであった。今度のそれは、むしろ、神に対する愛といった方が適切なのかも知れない。スピノザがエチカの中で言っているように「神を愛すれば愛するほど、神が愛し返すことを求め

前号まで 有明の独裁する秘密国家の描写が続く。世界各地から誘拐されてきた数多の美女達が、ただ有明一人の為に畜従隷従を強いられている。お手付きのジャンヌは、無事一カ月の懲治檻暮しを勤めあげて、いよいよ最後の関門に差し掛かった。カンヌ映画祭に出たのが運の尽きだった女優、望月レイ子も、様々な屈辱、試練を経て、漸く本判定の日を迎える時が近づいていた。混血の美女イーラムも、今は懲治檻で膏汗を絞らされている。

てはならない」のだ。求めない愛、プラトニックな愛、ジャンヌの心は清々しく昇華したのであった。

とに角、ジャンヌは、もとの審問廷へ戻ってきた。最終判定を、受けるためである。本審問で受けた判定は、B B A A dであった。最後の小文字が、改めて大文字に置きかえられて、五つのアルファベットが全部、大文字になって、はじめて一人前と見做される。

だが審問官たちは、そう簡単に大文字をくれない。その前に、どうしても果たさなければならぬ儀式があるのだ。

「断根式」と呼ばれるこの儀式を今、首席審問官が説明したところでジャンヌは、あまりのことに貧血を起こしてしまったのである。それもその筈、断根式というのは犠牲として提供された男性の火柱を大鋏で切断することだという。跨いだ女が、芝刈鋏のような大鋏で根元から一気に切りとってしまう。

犠牲に供せられる男達は、美女誘拐の副産物として捕獲されるから、むしろフンダンに供給される。又、儀式の済んだあとは断根手術を施し、ポートエリアの男奴として労役に使うので、無駄にはならない。

嚴重に封印されたカプセルが、例の断崖を落下して、池に水しぶきを立てた。

ジャンヌのために提供される犠牲が到着したのである。

梱包を解き、発泡スチロールの詰めものはがすと、まだ年頃二十才ばかりの全裸の青年が、高手小手に縛りあげられている。

落下の衝撃で気絶してしまっただけ。その眠っているような肉体は、よく締まった筋肉質で、まるでアドニスを見るように美しかった。一瞬、アマゾン女兵たちの間に動揺が起ったのも、その故かも知れない。だが、すぐに厳しい号令がかかって、つかの間のゆるみ心を制止させられてしまう。アマゾン女兵たちは、青年の裸体を木製の担架にギリギリと固定してしまった。

担架ごと、審問廷に運び込む。大理石、モザイク模様のフロアであった。

医務官の女医が気付けの注射をする。たちまち、薬が効いて、囚人が動きはじめた。あらかじめ声をカットしているので、口をパクパクさせるだけで音にはならないけれどもはりさけるほどに開いた目は、何よりも雄弁に、この青年の恐怖を現わしていた。

例によって、体毛を悉く剃りとられた裸身のまん中に、儀式の主役が小さく縮み上がっている。アマゾン女兵の一人が、いきなり口による事前攻撃を加え始める。青年は身をよじって、もがくけれども、どう仕様もない。それで、この若さだ。如何に恐怖のまっ只中にいるからといって、生理的な反応は押えることが出来ない。

「もういいだろう」

首席審問官がいう。有明をはじめ、五人の審問官たちは、夫々定められた席に着いていた。審問官席でつくられた円陣の真中に担架が昇き据えられ、そのすぐ側に放心したようなジャンヌが立ちつくしている。

アマゾン女兵の攻撃が止められる。

首席審問官が合図をすると、アマゾン女兵がジャンヌの前に屈み込んでカプセルをとった。ジャンヌは不快そうに顔をしかめただけで、何の抵抗をも示さない。もうどうにでもなれ——といった棄て鉢な気持ちになるのも無理からぬことであつたろう。アマゾン女兵にうながされて、青年に馬乗りになった。

「徐々に、やりなさい」

審問官の一人が注意をした。事実、ジャンヌは、自らすすんでやるという気分ではない

のだから、うまくいく筈はないと思われたのである。

みじめな洗面を見せながらもジャンヌは、やっとのことで指示された、形をとった。しかし、審問官たちの目に映る形態と、ジャンヌの心情とは余りにもカケ離れたものであった。所謂、ブルーフィルムの俳優たちが、その演技を極めて事務的にして見せる状態と幾分、似通っていたといっても言い過ぎではあるまい。

地上的な尺度で見たら、これほどの恥辱はないであろう。みじめさそのものであった。だが、このあと、ジャンヌが為し遂げなければならぬ儀式に比べれば、それさえ問題にはならないことだった。

半ば気を喪ったようなジャンヌに、芝を刈るときに使うような大鋏が手渡された。刃先を下に、柄を両手に持たせる。

犠牲の青年が、今度こそ絶望的な、あがきをはじめた。どうせ甲斐のないことだと判っているが、文字通り必死の形相で身をよじるのである。そのはげしさに、担架ごとガタガタと揺れて、ジャンヌが思わず落ちそうになったくらいだった。それでも、馬乗りになっているので、辛うじて転落をまぬがれるこ

とが出来た。

「何をグズグズしているの、早くやってしまいなさい。楽になるから……」

容赦のない叱声が、とぶ。やっとのことで刃先を当てた。何しろ剃刃のように、といであるのだから、たまらない。たちまち、鮮血が流れ出てくる。

「イーッ」

悲鳴とも叫喚ともつかない奇声をだしたジャンヌは、一層、両手に力を入れた。青年の身体が拘束を振り千切ってしまいそうに激しく痙攣したかと思うと、すぐに、ぐったりと静かになってしまった。気絶したらしい。

ジャンヌとて同様だった。肌を感じる生暖かい噴血が、ますます虚脱感に拍車をかけることになった。しばらくの間、白い肌が鮮血にまみれるのも忘れて、痴呆のように長鋏の柄をかざっていたのである。

応急処置で止血を施された青年は再びカプセルに包装され、例によって有明だけが操作出来る秘密の通路からポートエリアに送り返されて行った。

有明が席に戻ると、その間に男の血に染ま

った裸身を洗いきよめたジャンヌが円台の中央に正坐させられていて、その前に炎々と燃える風炉が置かれていた。ジャンヌは長い鉄串を両手に持って、その先を火中にかざしている。

肉片がジュージューと音をたてて焼け焦げる。異様な臭気が、あたりに、みなぎっていた。

今のジャンヌは、完全に意思を失ったアヤツリ人形のようなものであった。さもなければ、人間性をこのように無視した残酷な仕打ちを、たとえ強制されたものであっても、見ず知らずの青年に加えることが出来たであろうか。

やがて肉片が炭化して真黒になると、アマゾン女兵が進み出て、ジャンヌの手から鉄串を受け取り、串を抜いて持っていた銀盆の上にのせると、それをジャンヌの前に置いた。

「立ち上がって」



フラと立ち上がると、
「それを、カカトで踏みつぶしてしまいなさい」

いわれるままに、ジャンヌは銀盆の上に右足をのせ、思い切って踏んだ。それは、ひどく熱かったけれど、炭のようになっていたので、すぐに崩れて粉々になってしまった。踵にコビりついたような感触が、ひどく不快だった。

「よろしい。それでは、もう一度、正坐して下さい。両手を前について、そうそう。そして脊を伸ばし、まっすぐマスターの方を向いて、いいですね。これから宣誓してもらいます」

「今、おまえが見知らぬ男性から切りとり、焼き、踏みくだいた肉体の一部にかけて、おまえはここに、地上的なもの一切を断ち切ったのだ」

首席審問官が、形をあらためて唱えはじめる。

「今よりは、自らの自由な意志をもって、進んでこの国の一員たることを志願し、国法を遵守し、命ある限り忠誠と愛とをもってマスターに奉仕し、マスターの限りないお恵みに恥じないように、その心身を練磨精進することを誓うか」

戦慄しながらジャンヌは辛うじて答える。

「誓います」

「よろしい。それなら、もう一度、繰り返していうから、一区切りごとに心をこめて復誦しなさい。——いいね。——わたくし、肉体番号F―七五三番、俗名小林敏子は、尊いマ

スターのご恩寵により、厳肅に宣誓いたします。——さあ、大きな声で唱えてご覧」

途切れ途切れだったけれども、ジャンヌはどうやら言われた通りを唱え終わった。

「では、次」

首席審問官が唱えた。

「わたくしが只今、見知らぬ男から切りとり焼き踏みくだいた肉体の一部にかけて……」

つまり、先程、首席審問官が「おまえ」といったところを「わたくし」と置きかえてジャンヌが宣誓するのである。そして、ジャンヌが唱えた部分だけがテープに保存される。

それにしても、今まで打ちのめされ、罪障感にオロオロしていたジャンヌの心は、マスターに対する忠誠と愛とを誓うくだりになって、再び大いに力づけられた。事実、その顔はパツと輝きを増し、美しく冴えかえった。

悪でもあれ罪でもあれ、マスターのためなら火にも水にも飛びこんで行なうという、絶対随順の覚悟が全身にあらわれていた。まことに、愛とは、このような条件下にあっても、失われたものを復活せしめ、汚辱の泥沼を甘美な清泉に浄化する不思議な働きを持っているのである。

宣誓が終わると、審問官たちはホッとしたように立ち上がって、口々に祝福の言葉をジャンヌに浴びせるのだった。

しかしジャンヌは、それさえも上の空だった。何故なら終始一言も発しなかった有明が黙ったまま立ち上がって、後をも見ずにスタスタと後の扉から出て行ってしまったからである。たったひと言でも、声をかけてくれたら、ジャンヌはそれこそ、天にも昇るような気がしたであろうに、ジャンヌの今の段階は未だ、有明から直接、声をかけられる状態に達していなかったのである。彼女の有明への道は遠く、けわしかった。

戦 斗 服

望月レイ子も、ジャンヌにおくれること数日で無事？ 断根式を終わった。

ジャンヌの場合とちがって、レイ子は有明を殆ど知らないのです、ただ畏れおののくばかりであった。それは到底、愛という言葉の意味とは遥かにカケ離れた感情であった。しかし、これでもうお終まいだ。二度と地上には帰れないのだ。という諦めが彼女の心底に定着したことも又、疑いをいれない。これこそ

この国の自由人となるための前提条件だったのである。そうなってくれば、ここでの生活を少しでも充実した、楽しいものにしたいのが自然の人情というものである。云いかえると、地上的な尺度をあてて見た場合、彼女たちは有明の共犯者になったことを意味する。

断根式を終わった女囚たちには、もう縛られる心配はなくなる。ただし、首と両手首、両足首に嵌めた金輪は外すことが許されないいや、正確にいうと、今までの未決用のゴツイ拘束具から、若干、装飾性が加わったものに交換されるのである。それでも、銅が一番太く、銀、金と上位になるにつれて次第に細く、優美なものになってゆく。

望月レイ子の「機質」はBBBBEと定められた。このことによって、彼女が自由人としての最下級である奴位、つまりドレイ階級に属させられることがわかる。

様々の検査や検定の結果から、文官か武官か、どちらへ向けるかが決められる。望月レイ子は武官、つまりアマゾン女兵として訓練されることになった。兵制によれば、奴位は兵に相当し、婢位は下士官兵に当たる。人位以上は将校となる。将校以上でなければ自由

に営門を出入することが許されない。

望月レイ子を受領に来たのは、ネプチューン号に乗り組んでいた特科N第四分隊長小川晶子だった。彼女は部下であるB―二〇三号すなわち杉本美和子脱走事件の責任をとらされて、四品少佐から一挙に五品少尉に降等させられてしまっていた。

ネプチューン号作戦のような特別プロジェクトには銅のクラス、つまり婢位、奴位に相当する下士官、兵は参加する事ができない。したがって将校のうち、尉官が最下級となり下士官、兵の職務を果たすことになる。簡単にいえば、この国の兵制では、尉官が軍人の最下位になるともいえるであろう。分隊長であった小川晶子でさえ、少尉に降等されたのだから、その部下たちは推して知るべきである。彼女らは夫々の責任に応じて、下士官、兵に降等されてしまった。ついにながら、望月レイ子がアラビア海に飛び込むことを許したアマゾン女兵も軍法会議にかけられて伍長に降等させられている。こうした降等は、五段七階級にも影響し、銀のクラスから銅のクラスへの転落を意味するのだから大変なのである。

黒色の戦闘服で裸身をタテ、ヨコ十文字にキリリと締めあげた小川少尉に導かれて、望月レイ子は暗い地下道を歩いて行った。

十五分ばかりして、目の前が急にひらけ、あかるい広場が見えてきた。地下道の出口は大きな鉄格子で遮断されていた。小川少尉が持っていた鍵を、坑道の壁にとりつけてあるボックスに差込んで、それを開き、何かゴソゴソすると、鉄格子全体が音もなく上へあがって、広場へ出られるようになった。鉄格子の下部は鋭い爪になっていて、下をくぐる人間を、おびやかしている。

広場を入れて右手を直角に曲ると、正面に隊門があった。中央に馬車で出入できる大門その右が通用門、左が不浄門となっている。大門は将官以上、又は隊伍の出入時のみ開き一般には通用門を使用する。不浄門は罪人および死体を出入させるときに用いる。大門の両脇には、戦闘服を着け、槍と丸楯に身を固めた衛兵が四六時中、立ち番をしている。キツチリ五分おきに鈴が鳴らされると、二人の衛兵は、例のイギリス近衛兵を思わせる厳粛さで立哨位置を交替する。

「敬礼！」

望月レイ子は胆を、つぶしてしまった。通用門を入ったすぐ右側に衛兵詰所があって、立哨中の二名以外は、班長を正面にして詰所の丸椅子にキチンと腰掛けている。一班は伍長である班長を入れて六名で構成されるからいつも四名は残っている。これに衛兵司令として、軍曹が一人、交替で勤務する。それが上官である小川少尉の入門を見て一斉に立ち上がり、不動の姿勢をとって、大声を揃え、「敬礼」と叫んだからである。小川少尉は拳手の礼で、これに答えて、

「新兵を一人、受領して来た」

「ハイッ、承知いたしております。週番士官殿が待っております」

衛兵司令が早口で答えた。

衛門の内側は白砂を敷きつめた百坪程の庭になっていて、人造の樹木や庭石が程よいレイアウトを示していた。どういう仕掛けなのか、青空を模した天井はボカしたように溶け込んで、一寸、限界がないように見える。そして、人口光線とは思えない程の陽光が燦々として降り注いでいる。だから望月レイ子は一瞬、地上の世界へ帰ったような戸まどいさえ、覚えたのであった。

二人は庭を横ぎると本部の玄関に入った。落ちついた装飾のホールがあり、正面が階段になっている。それを昇らずに、左手に折れる。中広の廊下が際限なく続いていた。

一つの扉をあける。タイプを叩いていた秘書のアマゾン女兵が立ち上がって敬礼した。

「すぐ、お通り下さい」

衛兵司令から連絡があったらしく、奥の扉をあけて二人を通してくれた。

今度は小川少尉がコチコチになる番であった。週番士官は中隊長である大尉の職分だったからである。

窓形にくり抜いた壁にグラウンド・キャニオンのカラー写真が明るく輝いていた。その前の事務机に、全裸の美女が坐って執務している。

「小川少尉、入ります」

入口で不動の姿勢をとった小川少尉が叫んだ。週番士官は書類に目をおとしたまま、

「よし、入れ」

とだけ、言った。望月レイ子の肘を押し出すようにして、小川少尉は週番士官の前に立って、気をつけの姿勢になった。

週番士官は、それでも目をあげようとしないう。二人を立たせたまま、五分ばかりも書類



BBBEEであります」

「よし」

といって週番士官は立ち上がると机を回って、望月レイ子の後ろに立った。彼女は、小川少尉が、あまりにも、うやうやしくしている態度に氣押されて、心細く慄えていた。

「肉体番号を確認する。足を開いて両手を床につける」

アツと思う間もなく、小川少尉が脊中を押した。今まで、何度となくこのいまわしい検査を受けて来たので、押されなくても、どうすべきかは判っている。ただ、その度毎に、こみあげてくる屈辱感は、如何ともすることもできない。唇を噛んで、それをこらえると、泪が一つ、ポツンと絨氈の上に落ちて、みるみる毛の中にしみ込んで行った。

「たしかに、F—〇一八号。間違いない」

遅く盛り上がったレイ子の臀をポンと平手で、はたいた週番士官が、いった。

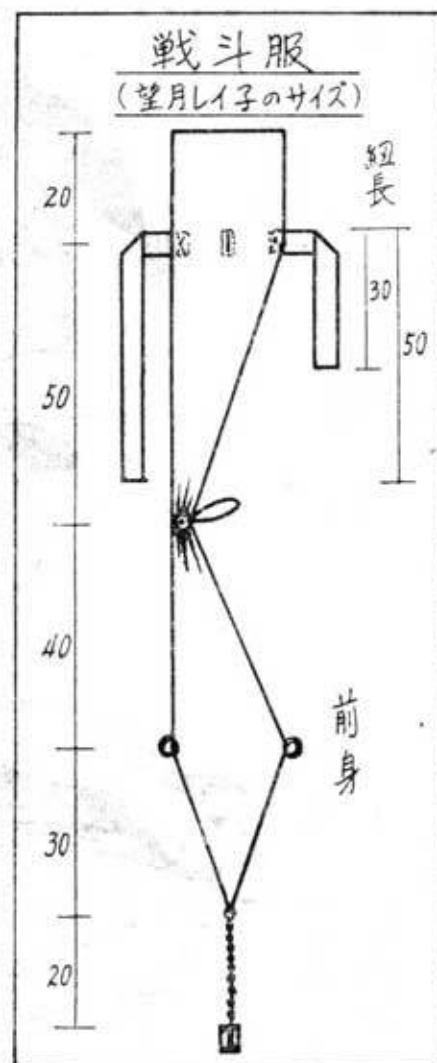
入隊手続が終わると、配属分隊を言いわたされた。彼女は訓練B中隊第一分隊だった。

めくりをつづけた後で、漸く二人の方に視線を向けてくれた。切れ長の大きな目だった。その目にうながされて、小川少尉が畳みかけるような早口で申告した。

「小川少尉、只今、新兵一品を受領してまいりました。肉体番号F—〇一八号。俗名、望月レイ子、二十一才、捕獲地モナコ沖。材質

小川少尉が、被服装備庫へ連れて行ってくれた。

連隊本部付の庶務下士官が、望月レイ子のために戦闘服を二着、裁ってくれる。例の、なめし皮である。わずかに二十五センチ巾の柔らかい牛皮で裸身をタテに蔽うのである。前にも記したように、古代ギリシアのアマゾネスは、弓を引くときに豊満な右乳房が邪魔になるというので、幼いときから、それを切りとっていたという。有明のアマゾン女兵はその代わり、右乳房を皮で、おさえることにしている。戦闘服はウエストのところを帯紐で絞る。デルタをカバーする部分は三角形に次第に細くなって、その先は約二十センチの紐状となり、その先に金メッキのバックルがついている。そのバックルは肩を回って後に下がって来た後身のウエストの位置でボタン



コ、十文字に身体を固定することになるわけである。

戦闘服の色は階級によって異なる。この色わけは文官も武官も同じである。

天位 白 大后又は大将

地位 緋 准后又は中将 (エミー司令)

人位 一品 赤 長官又は少将

二品 紫 部長又は大佐

三品 緑 課長又は中佐 (高橋)

四品 黄 係長又は少佐

五品 黒 班長又は尉官

下士官および兵は特に色を染めず、生地のまま、揉したものを使用する。

ここで小川少尉は、今でこそ黒色の制服になっっているが、曾は、黄色を着けていたのである。その小川少尉が親切にレイ子の戦闘服

を着付けてくれた。馴れば兎も角、はじめてこれを着た望月レイ子は、喰い込む紐の不快感に、思わず顔をしかめてそれを耐えるのであった。

右肩を回った皮が、肩からズレ落ちないように、首輪に細い銀鎖をまわして、皮をバックルで留めるようにしている。人位のバックルは銀。天、地位は金である。更に様々の私物が交付される。階級章、これは左の上膊にはめられる腕輪である。将官—金、佐官—銀、尉官—銅、下士官—黒皮鉄、それに上、中、下、夫々星三、二、一が、ちりばめられているのである。星といっても、ダイヤが埋め込まれているのだから、たとえ下士官といっても地上的には大変、高価な腕輪なのである。望月新兵には、それから兵器が渡された。短槍と楯である。これが、この国のアマゾネス装備の一切だった。

はにかむレイ子をうながして、小川少尉は記念写真をとった。その写真も、いずれマイクロフィルムにおさめられ、彼女のポケットのカプセルにファイルされる筈である。

恥じらうように、不得要領の微笑を浮かべた望月レイ子がカメラに向かったのは、彼女がやさしく待遇される最後の瞬間であった。

古文書「新翁唄目録」より

宝曆美女相撲

(下)

須田

司

カット・妙花山人



品川屋敷

品川の山手あたり緑のおいしげる台地に、

だ。小鳥や獣は又戻ってきた。彼が世間から「大通」と呼ばれる理由もこんな所にある。この庭園の一角に土俵が設けられ、女力士達

升屋新十郎は別宅を構えていた。彼はこの台地全部を買収して大庭園を造った。自分の思い通り、

大勢の庭師、人足を動員して、一山まるまる改造してしまっただ。さながら、江戸版万国博である。而も彼が人並みでないのは、ここに全く人工の痕跡を残さなかった事

の決戦場になるわけだ。

海路、陸路次々と江戸に到着した女達はこの屋敷に逗留させられた。可成り余裕のある日程が組まれており、その間を休養と稽古にあてるわけである。現在流に言えば、体調を調整するトレーニング・キャンプといったところだ。何せプロモーターが天下の豪商升新であるから、その優遇ぶりもひとかたならず栄養食からサウナ風呂、専用の女中からアンマまで取揃えたから、田舎娘のお甲やおせい

は、大きな体をすくめて恐縮するばかり。而し戦いを前にして、この屋敷には重苦しい空気が立ちこめていた。女達はいわば宿敵同志、よそよそしい素振りで警戒心を解かず

ましてやお互い同志で稽古するどころではなかった。ただ例外的に、お甲の使う肥後弁の周囲だけは明るい笑いが絶えなかった。

彼女は無意識の中に、摩擦を防ぐ潤滑油の役目を果たしていたのだ。彼女等の体のなまりを心配した升新は、先年江戸相撲大関を引退した虎面山大七を、スパリング・パートナーに委嘱した。ひげが売物のこの男、早速三人の恰好な弟子を引連れて、とんできた。

少し遅れて、最後にキャンプ・インしてきたのは、大阪女相撲の代表選手として送られた須磨浦松江である。

招請を受けた大阪方では代表の選考に苦勞した。天津風や竜田川の実力は関西迄ひびいている。大阪の業界では、彼女等に匹敵する人材を持たなかったのだ。といって種々庇護を受けている升新の招きを断わる事など思いも及ばない。苦肉の策として、未だ前頭クラスではあるが思い切った相撲で大物ぐいの異名をとる須磨浦が選ばれたのだ。彼女なら敗けてもともと、大阪女相撲の名誉が損なわれる事もない、而も、江戸の名女力士との対戦経験は、彼女の将来に必ずプラスになるだろうと打算したからだ。彼女には、未来の大阪相撲を背負って貰わねばならない。

須磨浦松江、二十二才、五尺六寸近くの長身だ。父は西国浪人、一説には播州赤穂の浪人だともいう。小さな町道場主であった父の死後、みよりたよりとてなく、母弟妹を抱えて途方にくれた松江は、人にすすめられる俚思い切つてこの社会に飛込んだのだ。際立つ美貌のせいで水商売から随分さそいがかったが彼女は嫌った。とんだりはねたりする方が性格に合ったのである。柔術に自信があったのかもしれないが、とに角、金が欲しかったのである。武家の出らしく、秀でた富士額に鼻筋が通り、一寸あごがしゃくれている。切れ長の目が鋭く、女芸者の面持ちがあった。女相撲には勿体ない程の美貌の持ち主で肌は桜色に輝き、突起した双臀の下から伸び切った長い脚が、殊の他見事であった。彼女だけを見に通う客も多く、北浜の旦那衆方が後援に廻ったので先輩力士の嫉妬を買った程だ。今少し経験を増し、腰高の姿勢の欠点さえ直れば、三役入りは間違いないと太鼓判を押されている有望な女角力である。

こうして升新の品川屋敷には、六人のアマゾンが勢揃いした。その前日、虎面山は廻しをつけ、自ら女達に稽古をつけた。実力をテストしてみたかったのだ。四十を過ぎても、

さすがに元大関のタイガーマスクは、強かった。闘志を燃やしてぶつかる六人の女丈夫を次々と土俵の土に埋めたのである。

その夜、新十郎の居間で畏まった虎面山の姿があった。日頃は傍若無人の大男も、この旦那には全く頭が上がらない。

「さて、明日はいよいよ殿様がおでましになるが、女共の調子はどないなもんや。あまりに力に差がありすぎても困るんやが……」

「はい。わしのみたところ、一番勝負でぶつければ、何せ初顔合せだけに若い娘にも勝てるチャンスがあると思います。三番、五番と番数をふやすと、これは経験の長い古参が有利です。ただ一発勝負でありますと、お互いが負けまいとばかり守りだけ堅くなって相撲が萎縮してしまいます。これでは折角の勝負も面白くありません」

「成程、そんなら勝抜きで、いこか」

「これだけ実力伯仲したメンバーですと、五人抜ける者は恐らくでないだろうと考えられます。無理に続けますと体力の損耗が著しくて、とてもよい相撲はとれません。はい」

「難しいな。アマとプロに分けてやるか」

「リーグ別にいたしますと一寸、公平を欠くような気がします」

「うむ。まあいい。いろいろやってみよう。ところで親方、ズバリ優勝は誰やるか」

「旦那は、いかがで」

「さて、となると矢張り本命は天津風やな。うば桜というものの、優勝経験が多いし、地力もまだ捨てがたい。従って対抗馬は竜田川。取りこぼしさえなければ二重丸やろが。穴馬は大阪の須磨浦。あれはきれいな女子やな……あつ、玄人ばっかしや」

「失礼乍ら、それはお素人衆の予想でございましょう。わしは天津風は買えません。もう盛りを過ぎております。今日の稽古でも竜田川の方が当りがきつうございました。対抗は常陸の七時雨、自分の押相撲が、でき上がっております。穴は漁師の娘ですな。上り坂で一番一番に力がついてくる感じです。ここへ来てから二、三枚は上がっているでしょう」

「誰か抜けておるな。そうや、九州弁の娘を忘れていた。あれは、どないや」

「はい。相撲のカンは悪くないようですが、どうも熱が入っていない様で」

「あれでも、九州一円の男を投げとばしているそうな」

「さあ、どこまであてになりますかな。田舎者はホラが多くていけません」

自分も武州の田舎出だ。

「まあ、誰が勝つにしろ、明日は相当な取組が見られるでしょう」

英語も交えて虎面山、仲々のタレントぶりで、この分なら、NHKの解説者にもなれそうだ。

自分達が、あて馬扱いにされているとは露知らず、明日を控えて彼女達は寝つきの悪い夜を過ごしていた。ただお甲一人が、健康な寝息をたてている。

女 体 激 闘

風薫る初夏の一日、ここ緑濃い庭園の一隅に、改めて本式の土俵が築かれ、準備を終えた進行係一同が殿様のお成りを持っていた。正式の衣裳をまとった行司を始め、四人の検査役、呼び出し、きびきびとした雑用の若衆まで、すべて江戸相撲界の本職ばかりで、虎面山の肝煎で集まった者だ。

下座には、この企画の関係者が、それでも数十人、控えている。一切非公開の建前であるが物見高いは何とやら、伝手を頼つてのもぐりこみ連中だ。この家の主人が黙認したからだ。見物がいなければ相撲は面白くない。新十郎の先導で二人の殿様がおでましにな

る。而し観覧席のことでご不満の色をみせられ、関係者の間で一揉めおきた。兼ねて用意のご座敷内では、勝負を見るのに遠すぎる。相撲は砂かぶりに限ると仰せられたかどうかとに角、急いで庭に赤い毛センが敷かれて、そちらへお移りになったのである。

やがて時刻、合図の太鼓が鳴り、六人の女力士が肅々と入場してきたのを見て、待ち兼ねていた人々は、どよめいた。

さすがに粒よりの女角力、いずれ劣らぬ豊かな肢体に、きりっと黒い締め込み姿。絢爛豪華な化粧廻しが陽光にきらめき、艶やかに結い上げた大丸髷に女っぷりも一段と映えてまるで絵草紙から抜けだしたようだ。美人はとくと見馴れておられる筈の高貴な方々も、こういった健康美女は初めてであるから痛く感動せられたらしい。折角の虎面山の名解説も上の空で、ポカンと口をあいて、見とれておられたという。さすが通人、升新の演出は見事であった。

次第に戦機も熟し、愈々トップバッターが土俵に上がる。勝ち抜き戦が始るのである。東から扶桑村のお勢。西方から大阪相撲の須磨浦松江。若手同志の対戦は無論、初顔合わせである。

若い二人は、土俵を一杯に使って熱戦を展開した。突き合い、押し合い、引き合い、殆ど互角の戦況であったが、突如、松江は長い脚をとばして蹴たぐりの奇襲にでた。柔術の出足払いによく似た技であったが、これが利いてお勢の膝がガクンと傾く。そこをすかさず、左から強烈な突きを入れたので、たまらず、お勢は転がった。

「ようやる」

人々は、女人とは思えない激しい相撲ぶりにビックリしたのである。

口惜しげに両手で砂を落としながら退場するお勢に代わって、早くも優勝候補の最右翼竜田川お勝が悠々と土俵に上がってきた。

初代竜田川せき自慢の秘蔵弟子。鍛え込んだ筋肉質の浅黒い肌はよく締り、かたいゴムまりのように弾力的だ。女性には珍しく肩が張り、広い胸に仰角をもった乳房が高く峙ち分厚く円い乳量も逞しい。一かかえもありそのような腰廻りから発達した太腿、彫刻の様な見事な裸身だ。目鼻立ちも造りが大きく、頬骨がやや出っばっていたから美人と迄はいかないが、精悍な顔つきで、特に玄人筋には人氣が高かった。この点、普遍的な美貌を持つ天津風が大衆的人氣があったのと好対照を示し

ている。組んでよし、離れてよし、実力ももう、天津風を追い抜いていたかも知れない。二十六才は女としても、力士としても最盛期であった。

この強敵を迎えて緊張する松江、上背はあっても、体重で負ける。有利な態勢に喰い下がって得意の足業をとばす以外、勝目は薄いと作戦を練って立ち上がる。だが、それにし

ては立ち会いが正直すぎた。組まれては面倒とばかりお勝は猛然と突いてでた。松江もよく応戦したが、腰の入ったお勝の突張りの破壊力は、すさまじい。忽ち突き負けて俵につまってしまう。回り込んで残そうとする所、双手でズンと胸を突かれた松江、「あっ」と悲鳴を残し乍ら土俵の外へとびだしてしまった。

お甲は敵のわなに、はまってしまったらしい。立会い甘い相手の両腕にズブリと二本差した迄はよかったが、ここでお勝がかんぬきを下ろしてしまったのだ。（失敗った）と氣のついたお甲、力一杯ふりほどこうとしたがお勝の太い両腕にはさまれた自分の腕は、びくとも動かない。じりじりと恐ろしい程の圧力で絞りあげられたから、もう両腕は痺れて覚えないお甲、「くっ」とのけぞって苦鳴を

もらす。その悲痛な顔をみながら土俵際までもってきたお勝、はたく様に大きく振ると、お甲の体は弧を描き溜りに転落していった。

機先を制して立ち上がったおりんは、双はまずで一気に押しでた。得意の速攻である。さすがのお勝もタジタジと土俵につまる。が「ううっ」と強靱なバネ腰に物をいわせ危く立ち直り、土俵中央まで押返し左を差すや、とっさに強烈な下手投を打った。おりんの肉づきのよい脚がパツと宙を蹴って危うかったがよく残した。今度はおりん、両廻しを引きつけるや力にまかせて吊りにでる。お勝も強い足で外掛けに防ぎ、吊らせない。おりんがあきらめたところを、今度は上手投、更に二枚蹴りと攻めるが、おりんの重い腰は動じない。さればとお勝、双差しを狙って巻きかえにゆけば、おりんはその機を逃がさずグイグイと西土俵に寄りつめ、もう一息まで追いつんだが、お勝は辛くも土俵際で残して右から捨て身のすくい投をはなてば、惜しくもおりんは崩れ落ちた。

女角力とは思えない両者多彩な業の応酬に観客は酔いしれていた。

精鋭三人を打ち破ったお勝、さすがに肩を喘がしていた。いずれも自分の予想より手強

かったのだ。しかも、これから宿命の大敵、天津風を迎え討たねばならぬ。

一方の天津風も、この一番には絶対負けられぬ、女としての意気地があった。

(ここでわたしが負けると、ライバルお勝の五人抜きが殆どきまっちゃう。冗談じゃないわ。こんな女に日本一をきめられちゃあたまるものですか。今迄の戦歴からみても当然、わたしがならなくちゃあ)

天津風お竜、三十四才。勝率抜群の不世出のこの女大関も、年令的には全盛期を過ぎていた。目尻の辺りに小じわがふえて、評判の容色も褪せつつあった。修練の賜物か、或は固太りの体質のせい、瑞々しく張りのある体に年を感じさせないお竜ではあったが、それでも、こうしてはちきれそうな若い娘の間に入ると、肉体の凋落ぶりは歴然たるものがあった。豊満な乳房の張りも何時とはなしに弛んでいたし、横腹や腰の辺りの年令的な衰えは隠すべくもなかった。而し、豊かな土俵経験と円熟した技倆には、天下一品の味があり、お竜の総合的な相撲力は未だ他の追隨を許さなかった。ただ、取り口のスピードが鈍ってきたし、スタミナに、昔程の粘りがなくなっていたのである。

お竜には自信があった。そして何よりもこの大会に優勝して、揺ぎつつあるとみられる自分の王座が、未だ健在であることを世間に証明したかったのだ。

他方、竜田川お勝にしても、負けたくない同様の理由がある。

(天竜時代などと人は謂うが、このところ私の方に分があるではないか。何時迄もあんな大年増を偶像視している世間の目をさませてもらなきゃあ。それには、ここでわたしが優勝することが絶対に必要だわ。お竜にも、世間の人にも、はっきり私の方が強いことを見せつけてやろう。何をおいてもお竜には負けられないわ)

双方の意地と意地とが土俵上で火花を散らしている。こう見たところ、肌の色こそ違えよく似た体つきだ。上背も目方も殆ど変らない。片方が若さを誇れば一方は貫録を示す。「天竜時代」とはよくいったものだ。段々に闘志が高まって、女ながらも凄いい目つきで仕切りに入る。

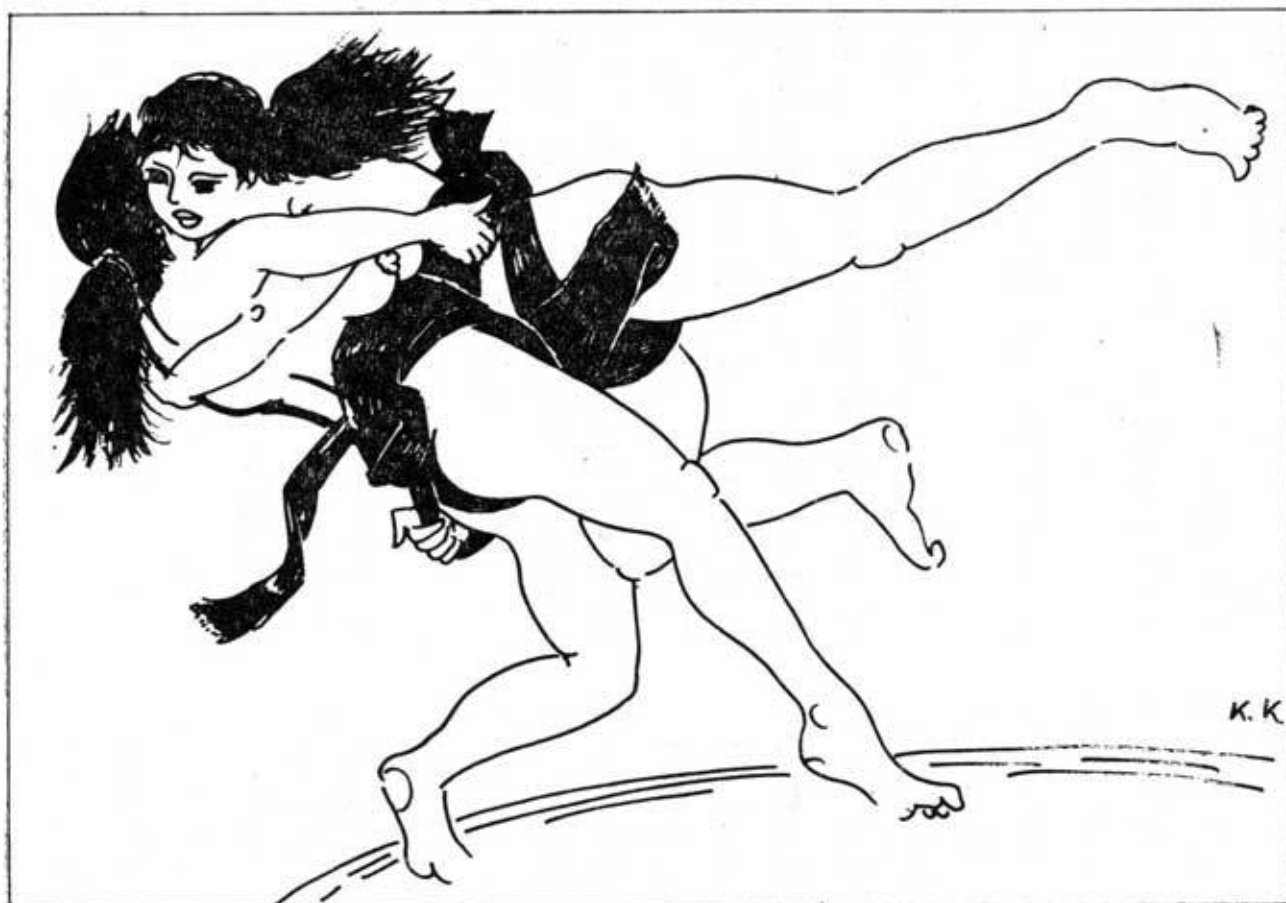
二つの雄大な女体は「パシッ」と音をたてて激突した。激しい差手争いが始まった。お竜は老巧に左上手をとって右を入れた。お勝は下手廻しは引けたが上手がとれない。止む

を得ず相手の右腕をまきつけ稍不利な体勢。お互い手の内は知りつくしている。お竜はお勝が疲れているのを体で感じとっていた。そこで強引に差し手を呼びこんで突きつけ、左から上手投げを放つ。お勝もさるもの、体をそらしながら右から外掛けにでると、さすがのお竜もたじろいで、グラリと危かった。がすぐ立ち直って右差し手で廻しをさぐったがお勝巧妙に腰を引いて取らせない。暫く両者動かず機をうかがう。互いに相手の肩にあごを埋め、耳許の荒い息遣いを聞いている。

と、廻しを握り直したお勝、一気に寄って勝負にでた。お竜は回りこみながら、右からすくって巧みに下手廻しをとるや「えいっ」と声をかけて猛然と相手を追いつめた。土俵際につまったお勝は、強靱な腰でよく耐えながら、差し手を左から抱えて、うっちゃろうとする。だが、お竜はベテランだ。差し手を抜き、体をのしかかる様にして豪快に寄ってでる。弓なりになったお勝も今や必死、眉を寄せ、口をあけ、全身の力をふりしぼって頑張っている。

ぴったり密着した二人の胸で大乳房がかみ合いゆがんでみえる。と見る間、突然、弦が切れた様に二つの女体は折り重なって土俵下

読者ギャラリー『激突する乙女の斗志』 桂 和 之



へ転倒した。背中を打ったか、お勝は暫くは起き上がれない。

最年少のお勢と対峙した時、お竜はふと羨

望を感じていた。自分の失った若さを、この娘はふんだんに持っている。お勢はお竜の感傷に頓着なく懸命に挑んでみたが、この母親

の様な女の堅陣は遂に抜けなかった。

次に松江の挑戦。

どういふものかお竜は、初手から誰よりも、松江に敵愾心を持っていたようだ。自分より美貌の持ち主に対する嫉妬心の反映か。浅ましい女心といわねばならぬ。(どんな手で土俵に叩きつけてやろうか)観衆は誰もお竜の勝ちを予想している。お竜自身もこの時、後からでてくるおりんを一番マークしていたのだ。

松江のつかかけをぐっと胸をつき出し受けて立つお竜。

余裕充分の横綱相撲だ。しばらく揉み合った後、松江は右を差した。その時何を考えたかお竜、松江の右腕を泉川にためて、右に振りとはそうとした。自分の腕力を過信した

か、お竜らしからぬ軽卒な業であった。この時、夢中とばした松江の右足が、相手の右足首をすくった結果になった。「あっ」思わず悲鳴をあげたお竜、右足が宙に流れて、遅い女体がぐっとのけぞった。そこをすかさず体をあびせかければ、さしものお竜もたまたま、背中からドスンと仰転したのである。

さすがに御前を憚ったか手こそ鳴らなかったが、人々の間から大きな嘆声が聞かれた。思わぬ伏兵に野望を挫かれたお竜、無念の表情で土俵を下りる。その豊艶な背中や尻には砂が、べっとり、ついていてた。

強敵を葬って意気上がる松江は次のお甲も連破した。お甲は、先程痛めつけられたショックから未だ恢復していなかった様だ。その松江も、おりんの疾風の如き出足に圧倒され廻しに手をかける暇もなく土俵を割る。

雪辱の意気込みすぐく再登場したお勝、立会い一瞬のはたき込みでおりんを降し、次のお勢を土俵際に追いつめた。更にかさにかかっているしかかるところを、お勢は撓やかな身体で弓なりに反りながら、きれいにうっちゃった。まるで画を見るようなきれいなうっちゃりだった。これが下町の場所であれば、さぞかし、座布団や煙草盆が雨の様に降りそそ

ぐ光景が、見られたことだろう。

こうして相撲は、その後も延々と続けられた。が、五人抜き勇婦は遂に現われなかった。最初の頃、さすがにプロのお竜とお勝の勝率が群を抜いていたが、やがて手口に慣れたか、エンジンのかかってきたおりんとお甲が、中盤では互角に戦った。松江とお勢は矢張り力不足の感じをまねがれなかったが、屢々相手をくって観衆を沸かせたのである。終盤戦ともなると、女達は汗みどろ、砂みどろ髪が乱れてひどい姿になってしまった。年配のお竜とおりんの負けが目立ってきた。逆に若いお勢や松江などは、一番々に力をつけてくる感じであった。特に三十を越えたお竜は、既にスタミナを失って苦戦を強られていたが、気力だけで土俵をつとめていた。

「本日はこれまで」

漸く響いた行司の宣言に、ほんと救われたのは、むしろ観衆の方である。

すぐ星取表が発表される。予想通り、むらなく星をあつめたお勝が一番。次に前半の貯金が物をいったお竜、お甲は僅差でおりんを押えて、決勝戦への出場権を手に入れたのである。

「中納言殿、御武運があらせられなんだ様で

すな」

「ああ。いや。全く」

九州の殿様から慰めの言葉をかけられて、水戸侯は、はっと我にかえられた。国許の代表二名とも落選したのであった。初めて見る女相撲の、エロティシズムと激しい勝負に陶酔されて、そのことを忘れていたのだ。卒直に細川侯にお祝いを述べられたのは、強情な水戸侯にしては珍しいことだ。そればかりか明日も又来て今度はお甲に応援するとまで、約束されたのである。

両侯は御気嫌うるわしく御帰館になる。

敗れた三人は、それ迄の緊張から解放されて、急に顔付きまで明るくなった様だ。精一杯戦ったのだ。悔いはない。その上、殿様やこの家の主人から、山の様な褒美を頂けたのだ。相撲を離れば普通の娘と少しも変わらない。そこへ屈託なくお甲も加わり座は益々明るくなった。その姿はついさっき迄、土俵で死闘を展開した仇敵同志には全く見えなかった。お勢が、こっそり褒美の包みを開けてみたらしい。

きゃっきゃっと笑いさざめく声を遠くに聞きながら、お竜は自分の歳を考えてみる。もう疲れ果てて、その大柄な体はぐったりして

いた。なんとか明日迄に、この疲れをとらなければならぬ。

お勝は若いだけに一風呂浴びただけで、もう疲労は抜けていた。今日の相撲でも、もう一周りか二周り長びけば、必ず五人抜けた自信があった。

(今日は特にお竜に邪魔された。あんなに疲れていたのに、私に当たるとむきになって頑張った。そんなに私が憎いのかしら。まあいいわ。明日こそ、きっぱり白黒をつけるわ)

山道の様な庭園を散歩しながら、お勝は遠くの池へ石を投げてみた。

決

戦

昨日の勝負の様子は、たった半日の間に江戸市中に拡がっていた。その故か、また、めぐり込み連中の数がふえて、昨日の倍はあるうか。お殿様も待ち切れず定刻前から着座されて、落ち着かない御様子である。

昨日の戦跡からみて優勝はお勝にほぼ固まってみえた。みものはお竜が持前の意地で阻止できるか。九州の暴れ娘がどの程度影響してくるか。こんな話が、ひそひそとあちこちで囁かれた。今日は幾分雲あしが早い様だ。土俵の砂はその度に光ったり曇ったりしてい

る。

三人が入ってくる。中のお竜をみて観衆は驚いた。昨日迄の、女王の誇りに満ちた面影はない。見栄もなく不吉に張られた膏藥が、左肩と腰のあたりに、目立っていたし、膝には包帯が、巻かれていた。曾の、傷一つない白磁の様に美しいお竜の裸像を知っている者はあまりの痛ましさに声をのんだのである。

最初に土俵に上がったのは、お甲とお勝である。緊迫した空気の中で仕切りに入る。突然、観客の中から娘の声が、お甲に走った。

「お甲さん、しっかり」

思わず出た、お勢の声援であったが、この一声で場内の空気がガラリと変わったから恐ろしいものだ。やがて声援を呼び、何となく村相撲のフンキで一杯になったのだ。殿様もむしろ、お喜びの様子さえ窺われ、何よりも土俵上の二人の、肩のあたりが軽くなった感じなのだ。

お勝は世間でいわれる程、お甲を過少評価していなかった。むしろ誰よりも彼女の實力を評価していたのだ。右上手を取った時のお甲の上手投は、神技に近い程の威力がある。事実、自分も昨日は二度ばかり、これを喫して土をつけられている。どうにも残せなかつ

た。而し右四つに組止めてしまえばその戦力は半減する。あとの料理はお好みのままだ。何はともあれ、まず右を差すことだとお勝は考えている。一方お甲には別に作戦はなかった。尤も、こんな強敵に通じる作戦などはない。ただ、その場その場でカンの命ずるまま体の動く通り闘う他はないと思っている。

行司の軍配が入った。両者五分の立会い。

お甲の当りも激しかったが、お勝も弾力のある体ではね返し、差し手争いに入る。お勝が差し勝って作戦通り右が入る。お甲も右から左上手廻しに手がかかった。と、その間髪を入れず、乾坤一擲、思い切った上手投げをうった。「あっ」意表をつかれたお勝の、一瞬の油断がそこにあった。殆ど同時にお勝も下手投げをうち返した。両者の脚がぱっと空中に舞い上がる。しばらく二人の筋肉がきしんでいたとみる間、踏み込みのよかったお甲が投げ勝って、やがてお勝の体はスロー・ビデオを見る様に、大きく足をあげたまま、裏返しになって仰転した。大の字に倒れたお勝の胸に、反動で双つの乳房が、ぶるぶると無念げに、ふるえていた。

観衆は我を忘れて喚いたという。騒ぎが漸く静まった頃、太い吐息をはかれ

た細川越中守、升屋新十郎を顧みられて、「どうじゃ升新。みどもはお甲に賭けるが」残るは満身創痍のお竜一人、勝ち運に乗ったお甲が勝てぬこともあるまいとの御推測。

「お受け申します」

「若しわしが勝ったら、何をくれるかのう」

「さあて……それでは、お貸し申しております貸金全部、棒引に致しましょう」

とズバリいう、升新。

これには、さすがの豪腹をもって鳴る越中守も驚かれた。精しいことは知らないが、三万両は下るまい。一体、正気なのか、この男は。傍の水戸候も又、啞然たる表情。たかだか娘相撲に、どういう料簡か。まさか、代わりにお城でもよこせといいたす積りでは？

「若し負けたら」

乾いた声で細川候。

「若しお負けになりましたならば……あの娘を頂きましょう」

何か変だなとは思われるが、相手がよしというなら、それでよいではないか。

「確かじゃな」

「御意」

証人には、天下の副將軍水戸候がおいでになる。これ以上念を押すのはみっともない。

新十郎自身、それほどお竜に肩入れしたかった訳でも、又、お甲に執着した訳でもなかった。ただ肥後様への貸金は五分、元をとっている。おまけにこの金は焦げついて、いずれはふみ倒される性質のものである。この機会にこの方法で、お殿様の顔を立てておけばいずれはいい事があるだろう、ぐらいにしか考えていなかった。尤も、お竜が勝てば勝ったで、その時のことさ、と新十郎。

お甲が勝ったことにより、観客の態度はガラリ一変した。江戸っ子の判官鼻根で、勝味の薄い田舎娘に応援した人々も、今度は一斉にお竜に声援を送りだしたのである。江戸で長い間、人気一等の女角力ではあるし、今や手負いの体で必ずしも有利とはいえないお竜に同情もあったが、それより、ぽっと出の九州っぺに江戸の庭内を荒されてたまるか、といった気持が強かった。

頼むぞ天津風、人々の熱っぽい期待と声援の中で、敗れたお勝も又、溜りで同じことを祈っていた。そうすれば勝負が振り出しに戻ってチャンスがくる。而し、お勝はこの時、不思議に自分の事は考えていなかった。それより土俵上のお竜のことが気がかりだった。昨日迄、明日から、いや早ければ数分後には

戦わねばならぬかも知れぬ宿敵であるのに、この気持はどういうわけだろう。同じ江戸仲間、プロ仲間といった連帯感だけでもない。もっと切実な、何か血のつながった肉親の様に心配であるのだ。この複雑な気持は、自分でもよく判らなかつたが、お勝は何年か後の自分の姿を、今、土俵上のお竜とダブって見ているのかも知れない。

一日のことですっかり年をとった様に、お竜の筋肉は張りりと艶を失っていた。昨日からの疲労が累積していて、いい体調ではない。而し勝気なお竜の気性は、敵前逃亡を許さなかつた。(私も長く相撲をとりすぎた。もう若い人に代わってもいい時期かも知れない。而し、今日の相撲はどうしても勝ちたい。勝って、引退の花道を飾るのだ)と執念を捨て切れぬ。

お勝が水をつけてやる。一瞬見交した目と目で、このライバルはお互いの気持がすべて通じ合ったのである。

さすが土俵上のお竜は悪びれない。年季の入った美しい型の仕切り。早くも両腋が汗に濡れて艶やかに光る。だんだん闘志が昂まって、凄艶な眼差しに炎が燃えてきた。

お甲は、自分が途方もない賭けの対象にな

っているとは無論、知らない。お竜の激しい闘志にそそられて、今や気合いも充分。後々まで「三万両勝負」と噂された決戦の幕が、今、切られようとしている。

「やっ」とかけ声もろとも両者いさぎよく立ち上がった。右肩からドンと当たったお甲は左差しに行つたが、お竜はその手を払って差させない。しからばとお甲、突くとみせ叩いたが、お竜はその隙につけ入って右差し、左前みつを引く。お甲は左で上手を引き右で相手の左肘をこじあげ、じりじり寄り乍ら足をとばし、或は吊りで攻めたが、お竜も、よく残して右から下手出し投げを放つ。お甲は危うかつたがよく残し、土俵中央へ寄り返した。そのままガップリ右四つに組んだ両者、殆ど動かない。

数呼吸のあと、力をためたお竜、長びいては不利とばかりに腰を落として廻しを引つけ吊りの攻勢にでた。お甲も必死に足を掛けて防戦する。遂にあきらめたお竜、今度は上手投げを放つが、相手も足を送ってよく残す。又もとに戻って数呼吸。

今度はお甲の攻勢が始まった。上手投げを連発し、お竜の体勢の崩れに乗じてぐっと寄ってでるが、敵もさるもの巧みに回りこんで

残される。

期待通りの大相撲。四つに組んだまま二人は動かない。汗は全身からふき出してまるで水をかぶった様、二人の腹は苦しげに波立っている。お互いに相手の荒々しい呼吸を聞きながらも、もう攻勢にでる力は残っていないのだ。ここで水が入った。

土俵を下りてくるお竜に大きな拍手が沸いた。彼女は見るも哀れな程、精根つき果てていた。美しい顔は苦しげにゆがみ、豊かな乳房が喘いで大波の様に揺れていた。お勝が汗をふいてやったが、とめどなく湧きでてきて立っておることすら辛そうであった。これ以上続けるのは、もう残酷というべきだろう。

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いません。致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

而し、結末はつけねばならない。

水入り後、元の形に組み直す時、お甲は、相手の体にもう殆ど力の残っていないことを感じとっていた。若い彼女は、数分の休憩で殆ど疲労は消えていたのだ。

戦闘再開。廻しを引きつけたお甲はぐんぐん寄ってでた。遂にあとのないお竜、剣が峯でふみこたえ、左手をお甲の首に巻いてうっちゃろうとする。最後の力をふりしぼって逆転勝ちを狙ったのだ。予想外の抵抗に驚いたお甲、ここが勝負所と、若い力にまかせて懸命に寄るが、お竜も分厚い二枚腰でよく耐える。

壮絶な力比べが続く。それは生々しい乳房の争いでもあった。乳房自体が別の生き物の様に、激しく押し合い、揉みあった。二人のとがった乳首がぬめぬめ光る柔肌につきささり、ひき裂かれた乳房は悲鳴をあげていた。やがてお竜の逞しく爛熟した乳房が徐々に萎えて、無残にもお甲の張りの強い乳房の下に押し潰されてしまう。

弓なりにのけぞったお竜、もとどりが切れ髪ふり乱した凄愴な姿、目を閉じ口をあけて断末魔の形相。お甲の腰が、ぐっと入った。「ああっ」さしものお竜も遂に力つき、白い

女体を朱に染めながら、どっとばかり崩れ落ちていった。行司の軍配が、さっとお甲に上がる。場内には一瞬、悲愴な空気が流れた。

夕方、お甲は技折戸を押して一人、庭へでてみた。他の女達は、既にこの邸を去って行った。明日からは又、巡業にでなければならぬのだ。

可愛想に、とお甲は思った。もう再びあの人達に会うこともないだろう。おりんさんもお勢さんも、元気でね、と呟く。そうだ、お殿様のあの喜び様といったらなかった。きつと御褒美も沢山頂けるわ。ああ私も早く帰りたい……。

いつしか土俵の所まで来ていた。すっかりとり片づけられたその辺には、激闘の名残りは何一つ残っていないかった。つい先刻、こで行われた熱戦、渦まいた喊声と拍手など、お甲にはまるで遠い日の出来事のように感じられた。

陽がまたひいて、独り佇むお甲の影が長く尾を引いた。

S M カメラ・ハント……龍珠子の巻

化

け

身

しん

女は生涯でいくたびか化身を

こいねがうものである……。

辻村

隆

『化身』の語義をひもとくと、仏教語で、神

仏が姿をかえて、この世に現われたものとあ
る。女性是一只管に美しくありたいと本能的に
ねがうものである。顔面は劣か、全身に亘っ
て次々と整形を施し、別個の女人が誕生する
世の中、これを化身と呼ぼずして、何と形容
すればよいのであろうか。

全然、流行らぬ歌手がいる。一念発起して
スタイル、容貌、感覚を変え、歌手名を変え
て登場し、それが忽ち、押しも押されもせぬ
一流歌手に、のし上がることもある。『男と
女のお話』で一躍、スターダムに、のし上が

った日吉ミミなど、そのいい例であろう。

芸能人は勿論のこと、一般の若い女性にと
っても、イメージチェンジしてみたい欲望は
誰しも願望するところではなからうか。

男が女風に、女が男風に化身する世の中で
ある。そんな前置きをしたのも、私がフトし
たことから、そうしたハント女性に、奇しく
も遭遇したからに外ならない。

……………

もう、二十数年、奇ク一本槍で、雑文を書
き綴っている、いつしか同好者の数も次第
にふえ、うたかたの如く、消えては現われ、

又消えてゆくという仲間も多いが、Sと一口
にいても、その趣味趣向が合致し、経済的
余裕のある御人とは、かなり長く交際が続い
ている。

年令と共に枯淡的になり、且は幾分の飽和
状態もあって、最近はずんずんガツガツせぬよ
うになったが、そうなればなつたで反対にア
レコレの話が持ち込まれてくるのは、何とも
皮肉なことであった。若さに任せて突っ走っ
ていた頃は、仲々オイソレとハント女性など
にブツからぬのに、これも最近のフリーセッ
クス風潮を反映して、女性もそれだけ解放

的になったのかと、フト苦笑を誘う。

私等が提唱して書き始めた、SMなんて言葉も、すっかり今では普及されてしまった感がある。古い同好仲間の久下先生は、もう二十年来の旧友で旧作『奇譚三十九夜物語』でも、パイプ氏の仮称で登場させたりした人であるが、数年前から名誉職につかれてからはあちこちとかけもちで、身辺多忙のせいか、日頃はトンと御無沙汰勝ちである。その癖、忘れた頃に、ヒョコッと思い出したように電話してくるのであった。それが私との、唯一の繋がりのようにでも考えているらしい。もともと経済学の方であるが、沢山のコンサルタントで、頭が疲れた時など、その明晰な頭脳の休憩のつもりで電話をかけてきては、短くて三十分、長い時になると、延々一時間近くも喋り、SM的な莫迦ばなしに興じ、こちらがウンザリする程の長電話で粘り、あれこれと聞き出しては、いつも実現不可能のくせに、是非近いうちに、一度プレイしましょうと、明日にでもやりたそうなの、いい調子で喋るのである。その癖、もう五年近くというものの、先生とは、ついぞ会ってもおらず、ましてや一緒に遊んだりプレイしたことなど一度もないという、奇妙な同好の間柄であった。

その久下先生から、これで数十度めの、何カ月振りの電話がかかってきたのであった。

偶々来客中であつたので、いつもの長話になつても困ると、早々に電話を切ろうとする。と、あんたの為にハント女性をみつけたから是非きいてくれというので、一寸待ってもらつて来客と数分で話をすませ、お引き取り願つたあと、腹を据えて受話器と取り組む。彼は最近の、ハント女性のことなど一しきり訊ねる。何かメモでも傍においてあるかのよう、よく知っていて驚いたが、どうやら、奇クだけは几帳面に、月々、直接購読をしていて、私の書いたカメラ・ハントなど、よく御存知の様である。先生が趣味の囲碁に凝つておられたことは、彼の言葉からも、早くから知っていたが、その内向性SM家の久下先生が、近頃どんな風向きか、トルコ風呂に熱を上げ始めて、面白い子がいるから、一度行かないかとの熱烈な、すすめである。トルコ娘にスゴいM気のある子がいて、それがどうやら混血のハーフ娘で、その気で誘えば、必ずプレイするだろうと仰有るのであった。

先生の電話の話を断片的に要約すると、次の様なことになる。

「とに角、凄いんだ。あれはマッサージでな

もんじゃないね。わたしやオスベって意味が分からなかったんだが、つまりスペッシャルということなんだね。知ってたのあんた?」

「そりゃ知っていましたよ。一度オスベしてもらつて、恥をかきましたからね。いや恥をかかせたのかな」

「かかせても、かいてもいいじゃないか。所謂、オスベは、かくことだからね」

「うまい洒落ですよ」

「ところで、どうして恥をかいただね」

「汗をかいて、カイてくれるのですが、ハハどうも駄洒落めきますね。つまり、感度なしってわけですよ。一向に擦っただけで――糖尿のせいもありましたが、オスベでダウソするぐらいでしたら、ハント女性との最高の状態の折に苦勞しませんからね。あんたはダメ、インポだからと、ギョウと抓られたのがオチです」

「ごもっとも、ごもっとも」

確かにトルコ娘の練達した子は、巧みである。意馬心猿で、その気になっていて、一度は血管が充血するのに、フト、ハントの女性などに思いをはせ、女日照りで困っているわけでもあるまいに、何を好んで弄ばれるのかと考えると、急に意気消沈して、トルコ嬢の

懸命の努力の甲斐もなく、いよいよ阻喪をきたして、見るかげもなく、憐れに成り果てるのであった。その一度の経験で、すっかり自信喪失して、その後はオスぺなど、ついぞ縁のなくなった私である。

今は亡きゲイの大姐御早苗さんと、一夕SM談のあと、戯れから実技に移った時も、彼女が指をクリームで潤滑させ、相手が私だからというので、精一杯努力して、ウンチクを傾けてくれたにもかかわらず、私はくすぐったいばかりで、快感には程遠く、果てはクスクス笑い出してしまう始末に、流石の早苗さんもサジを投げ出して「阿呆、笑ったらアカンガナ」と、どやされた思い出があって到底ゲイボーイや、おカマ嬢を相手に出来る私でないことを、自分で確認し、私という人間は、やはり健全な男なのかと、シミだらけの天井をにらんで呟いたことがあった。私の傍で、箕田氏がニヤニヤ笑い乍ら、早苗さんの懸命の行為をみつめていたのに氣勢を削がれた原因もあろうが、所詮、不自然行為はどうも苦手であったのである。

「それで先生の方は、オスぺで御気嫌、いとうるわしい様ですね」

「オスぺも段々でな、わたしやフィンガーテ

クニックは、もう飽きたといってやったら、されば手加減ならぬ加減みせんと申してな実に巧みにフリュートを吹きよるの。いや上海にいた時代を憶い出して、懐かしかったのなの」

先生が戦前の数年間、今の中国のシャンハイに滞在していた時、その味を覚えられたのだそうである。中国人の女性は、男を飲ばせる手段には徹底していて、不自由なテンソクなど、その最もいい例であるが、最近の若い姑娘は、そんな悪習を打破して、一樣に人並みの足に発達しているらしい。その男性用のものとして、戦前には、小さい子供の頃からすべての歯を抜去して歯無し娘となり、柔らかい歯茎で、男性に奉仕するための娘が、人工的に作られて、専ら口腔術のみに生きる少女も実在していたのである。一度その持味を知ったら忘れられないらしく、久下先生も上海で口腔の虜になったのは、三十九夜物語でも、少し触れたような気がする。先生は今、トルコ娘に、その味を思い出し、かくも熱心になっているかのようであった。

微に入り細に亘って、先生はトルコ娘のその巧みさを延々と説くのであるが、余り詳述は出来ない。覚えのある人は微笑を泛かべ

て、そのテクニックのさまを想像していただくより仕方がない。

「いや、あれは確かに上海の野雞ヤーチーの血を、うけついでるよ。華僑の中国人と、日本女性の混血娘だがね。家庭が複雑らしく、他のトルコ娘と一緒に寮生活をしとるのじゃが、わしがチラッとSM的な話を仄めかすと、いったわしが、びっくりするほどに、話に喰いついて来たんだよ。わたしや勿論、その時、あなたのことを頭に思い浮かべて、あわよくば、あなたにハントの材料を提供する気で喋ったんだよ。奇クを始め、一連の、そのような風俗雑誌は何も知りやせんし、読んどらんよ。それでいて、苛められてみたいとヌケヌケとぬかすのよ。どう、面白くないかね」

「イヤ、たしかに面白くなってきました。でもヒョッとと思ったのですが、或いはその娘、先生の歓心を買う気でいったのじゃないのですかね。もっといい方に解釈すると、先生にイカれてるんですよ」

「ああ、確かにイカれとるね少し……。いや、わしにじゃないよ、ちよいとおツムの方が」

「というと、パーで？」

「いや、パーということもないが、いささか知能指数は低いようだね。しかし、例えお脳

は少々ぐらい弱くても、あのサービス精神は大したもんだよ、あんた。一度、一緒に行ってみんかね」

「そりゃ行ってもいいですが、先生との約束はどうも実現した験がありませんのでね」

「いや、きつと実行してみせるよ」

「まさか、先生へのサービス振りを、傍で眺めているわけにもゆかないでしょう。昼でも連れ出してみたら如何です？」

「あんたがやる気あるのなら、早速、連れ出してくるよ。いつが、いい」

「いつでも——」

「といわれても、わしにも予定があるのでなあ。それじゃ連れ出せたら連絡しますよ」

「ええ、当てにして待っています」

尚も久下先生は、クドクドと、そのトルコ嬢、リュウ・タマコなる二十三才の娘について、のろけまじりに繰り返し説明していたが埒があきそうにもなく、私はいい加減に調子を合わせておいて、やっと電話をきる。長電話は、どうやら女性ばかりでもないらしい。

結局、いつもの様に、日程も時間も、場所もきまらず、そのうちにといいことで、話は終わってしまった。勿論、私は先生のハナシを当てになどしていなかった。それが珍しく、

ヒョータンからコマで、まさか実現しようとは——。だから、この世は面白い。

× × ×

月のうちの二十日以上は、私の仕事の性質上、家にいるのに、偶に外出した時に限ってプレイ仲間からの電話が、よく掛かってくるのは、何とも皮肉であった。とは思うものの在宅の場合の仲間からの電話は、意識せずに聞いているから、偶然にそうなったのかも知れない。五月中旬のその日、私は友達と三軒ばかり飲み歩いて、帰宅が夜の十一時過ぎになった。

本職の方で二件、プレイ仲間が三件で、久下先生と、谷山久美子と、滑川幾代からであった。二人の女性は用件を言わなかったらしいが、谷山久美子は目下Mと同棲中であるが初恋？ の人、山本一章に連絡してほしいという電話だと推察された。既に手紙や電話で数度、頼まれているのである。どうも彼とのプレイが、数多の男性群の中でも抜群であったらしい。滑川幾代は東京からで、用件不明で残念である。彼女のアパートの電話番号を聞き洩らしているので、こちらから連絡のしようもない。久下先生は家内に判つきり用件を伝えていた。わざわざ家内に告げなくても

いいのに、やけに堂々と、

「明日の午後一時、天王寺の料亭“H”に、リュウ・タマコを連れて行きますから、万障を繰り合わせてお越し下さい」

ということ、家内の口は、どうも重たげであった。

「よくモテ結構ですわね」

と、これは家内の皮肉である。日に三件も掛かって来ては、如何に理解深き女房殿でも少しは頭にくるらしい。こんな時は、うかつに逆らわない主義である。娘二人が嫁いで、残る二人の子どもも銘々の部屋に引き籠って、ポツリと独り、茶の間で私の帰るのを待っていては、つい言いたくもなる愚痴であつたろう。土産の寿司を拡げ、酒の燗をして家内に奨めると、どうやら御氣嫌が治まって来たらしい。

「ねえ、リュウ・タマコって誰？」

「ウン、全然、知らない。久下先生がみつけてきたトルコ嬢なんだ」

「行くのでしょうか？」

「ハントの材料を提供するとかいってたからね。でもまさか、あの先生、実現するとは考えていなかったよ」

コンピューターの手相占いで、私の愛情線

に「ハゲシイアイジョウガ、リセイヲコエズハツキリトワリキルタチノヨウデス」と出ているので、家内は私を信じている。私も家内を裏切りたくない。その相互愛情によって円満は保たれているようであった。

家内は、それ以上、深追いはしない。酒の酔いが、心をほのぼのと温めていったのである。五年前、キタで一タ、宴を張ってくれた夜、酒の酔いを藉りて、久下先生と二人で深夜の一号線をタクシーで飛ばし、伊吹真砂子を京都伏見の藤の森のアパートから引っ張り出し、三人で京、木屋町界隈のバーを数軒歩いたあと、先生の顔のきく木屋町の旅館で体よくいえば三人雑魚寝、有体にいえば、私も先生も、のみ過ぎの為、奮斗甲斐なき乱戦の荒模様の末、朝の十時過ぎまで寝込んでしまった、あの時、以来の明日であった。

伊吹真砂子とも、あの夜の二カ月許り前に会って緊縛フォトを撮ってプレイし（昭和四十一年三月号、SMカメラ・ハント『断層の女』伊吹真砂子の巻）その時の余勢をかっていささか強引に押しかけたのであったが、久下先生と三人のあの夜以来、もう長らく会っていない。風の噂では、彼女のレズ精神は、いよいよ実現化し、阪神沿線のアパートに女

性と同棲中であるそうで、梨花悠紀子の頃から、伊吹真砂子の同性好みは本格的になっていったらしい。それだけに、私達と遊んでも彼女のセックスは、意外なくらい淡泊であった。

久下先生との、そんな過去をフト憶い出し数年振りで会う彼に、久瀧の情を覚えると共に、M願望という、中国混血のリユウ・タマコに、激しい期待を疼かせるのであった。

翌日、約束の午後一時前、茶臼山の料亭旅館「H」の玄関に立つ。鎧、かぶと、駕籠など武具をあしらったフロントを抜けて、箱根の閑所に模した石だたみを昇ると、大名藩主の何十万石××侯と、板ぎれのかかった部屋が庭園を中心に点在している。夕餉になると給仕の女性群は、矢立緋の腰元風で、サービスしてくれるが、昼間だと、もっさりした事務員風で、いかにも女中さん然の人が数人しか、いない。

徳川御三家の部屋らしく、広い二間の襖や床の間、鴨居、置物に、葵の紋が描かれてある。徳川時代なら、忽ち打首になりそうな部屋、奥の机に向かって、久下先生と、リユウ・タマコが正対して坐っていたが、入って来た私に、彼は、やあと大きく手を振った。

「実にお久し振り。もう何年になるかなあ」
「あの夜以来、五年振りですよ、センセエとお眼にかかるのは」

「そうもなるかね。わたしや、二、三年ぐらいだと思っと思ったが、ちよくちよく電話をするものだから、時々会っているような感じがしてならんよ」

「五年振りとは感じませんねえ」

「万博の後始末や選挙で、すっかりコキ使われちゃってねえ。最近どうやら自分の時間を持てるようになりましたよ。ああ、早速紹介しましょう。この人、リユウ・タマコ君」

私は氏名をなりの、よろしくと、軽く会釈した。彼女は坐り直すと、私に丁寧に頭を下げる。ビラビラの飾り褌の多い、黒地に白をあしらった、手首まであるピーター風の上衣にパンタロンといったスタイルであるが、いつも乍ら服飾の方には弱いので、その程度しか説明のしようがない。チラチラっと走る視線が斜視がかっていて、とりようによっては蠱惑的な妖しい淫らさが泛かんでいた。

「十二支の、トラ、ウ、タツの竜に、真珠の珠と子。わたしや竜という苗字は、劉（リウ）じゃないかと思うんだがねえ」

と、机上に指で書いてみせ、

「まあ、名前のことなんぞはどちらでもいいや。今日は、たっぷりプレイをやりましよう。よかったら、お手伝いしますよ。それとも邪魔になるかね」

「いいんです。一緒に是非、どうぞ」

「といわれても、正直いって、わたしや未だ口説いちゃいないんだよ。その方は、あんたがお手のものだから、精しく話しておいて下さらんか。出来ればその間、一時間ばかり時間をもらって、用事をすませてくるよ。いや実は人を待たせてあるんだ」

お膳立てをしておき乍ら、人を待たせてあるという言葉に、フト不審を覚えたが、私と竜珠子を、暫くの間、二人きりにして忌憚なく話をさせてやろうという配慮かと察して、黙ってうなづく。どうも勝手が悪いといった風で、久下先生はソワソワと立ち上がると、一寸、腕時計をのぞき込み、床の間の書類靴を取り上げて、私にそっと眼くばせすると、部屋を出ていった。酒の入らぬ先生は、しらふでは、どうもこんな雰囲気は苦手だった。

私達は一寸、手持無沙汰である。髪は断髪にして、上背はありそうだが、かなり痩せすぎの感じがする。トルコ娘にしては、さして

擦れた風もなく、もじもじして、茶菓子をもいた紙を指先で、もてあそんでいた。容貌は十人並みだが、頬骨がややとがって見えた。

久下先生にいわせると、少しパーだということであるが、こうして傍から眺めると、そうは見えない。学識高い先生から見ると、普通程度の娘でも、浅学菲才、知能不足に感じたのではなからうか。学者に、まま有り勝ちな偏見が、サービス精神旺盛のトルコ嬢を、知能の低下とみてとったようでもあった。

「お父さん、中国の人なんだってね」

「ええ。神戸で貿易をしていたそうです。母がその世話になりました、私が生まれたという事です。父には、幼い時に数度、会いましたが、母が大阪へ移ってから、その後、会っていないのです」

「寮生活をしているんだってね」

「家が面白くないんです。母は再婚して、小さい弟妹が二人おります。母の再婚の相手とどうしても、うまく行きませんから、中学校を出た時、家出したのです。母に一年ばかりして住所を知らせましたが、その時、お金を送ってくれただけで、戻ってこいとはいいませんでした」

「失礼だけど、年をきいていい？」

「昭和二十三年生まれです」

「ということは、満で二十二、三才か。」

「敗戦の悲劇のようだね」

「父も母も分かっているけど、天涯孤独みたいな境遇です。教養ありませんし、ルックスも大してよくないし、女子工員を振り出しに結局、一番稼げる、こんな仕事に辿りついてしまいました」

先生のいうパーどころか、しっかり自分をみつめて、話は簡略で要を得て伶俐である。

「こんなことを聞くの残酷だけど、混血をどう思う？」

「今の生活では、別段、何の抵抗も感じません。中国と日本では、もともと同じ黄色人種ですものね。いま話題の中国問題も、私にとっては関心の薄い、他人事みたいなんです。でも懼らく、幸福な結婚は考えられないと思います。私にとって命の次はお金。それしか頼れるものはないように思えるのです。あんなところで、バカな真似をして働いていても、稼ぎは、とても、いいのです。だから私、人一倍サービスし、その努力をしているつもりです」

珠子は悲劇の生い立ちを淡々として語るのであった。この雰囲気、下手な冗談や、擲

揶は挟めなかった。プレイ開始前の空気にしては、余りにも重苦しく、真剣であった。

「先生、そのこと、知っているの？」

「いえ、話したことありません。あのような場所で、こんなことを打ち明けると、愉しさが失われると思うからです」

「何故、私に告白したの？」

「真面目にお聞きになったから……」

「先生と真面目な時間、なかったの？」

「ハイ、バス以外でお目にかかるのは、今日が始めてなんです」

「どんな方か知ってるの？」

「詳しく聞いたことありませんし、先生も仰いません。唯、エライ立派な先生ぐらゐに感じていました」

「先生は君に熱を上げてるよ。先生のこと、知りたいと思うの？」

「いいえ、別に……。知ったからって、どうにもなりませんわ。いつも山田先生と自分で仰有っているだけですわ」

「フーン、山田先生ねえ」

久下先生は、流石に淫靡な場所で、本名は避けておられたらしい。

「私のこと、知ってるの？」

「何も存じませんわ。先生が友達を紹介する

からって仰有っただけです」

ハキハキと答え、竜珠子は聡明な正体を現わして、何か近附きがたい威厳すら感じさせた。この雰囲気では到底、プレイの話など切り出せそうにない。

中国の華僑は、生国にならって三号夫人、四号夫人と、数人の側妾を侍らせるのは悪徳ではなかった。むしろ甲斐性のある華僑程、夫人の数は多かった。戦後の混乱の神戸で、実力を握った華僑に、彼女の母が、なびいたとしても、あの当時、それは不自然ではなかった。その落とし子の珠子をつれ、大阪へ移った母は再婚する。世の中が平和になり出した頃の、それも時代の推移であらう。そして珠子はハミ出してしまった。

母の珠子に対する母性愛は変わらなくても新しい夫の手前、そして夫婦の間に出来た二人の子供の手前、どうしようもなかったのではあるまいか。トルコ娘達は、案外、珠子と似たり寄ったりの境遇で、こうした環境の吹き溜りの中へ、掃きよせられてきたように思えるのであった。オスぺと称し、マッサージもロクロ出来ぬ女達が、唯その一点にのみ練達して、もとは特別待遇のスペシャルであったのが、スペシャル以外、何の取柄もない

女ばかりが、いつしか、こうしたトルコ風呂やサウナバスを占拠しつつある様であった。マッサージの本当に出来る人や、良識ある女性、ここをやめてゆくより仕方なかったであろう。求める客も客なら、むしろそれが当然のサービスと心得て、それを強要して専念する女も女であった。手練の技を生かして次々とカキ立てた男性群の数の多さを誇るトルコ嬢たちに、私は何故ともなく佗しさを感じるのであった。

そして今ここに、静かに身の上を語る竜珠子も亦、その流転の女性の一人に違いなかった。私は珠子の身上話を、この種の女性に往々にして有り勝ちな虚構とは思いたくない。若し虚構とすれば、珠子のこの真剣な面ざしは何と説明すればよいのであらうか。

沈潜した雰囲気と和らげようと、煙草に火をつけ、彼女にも奨める。

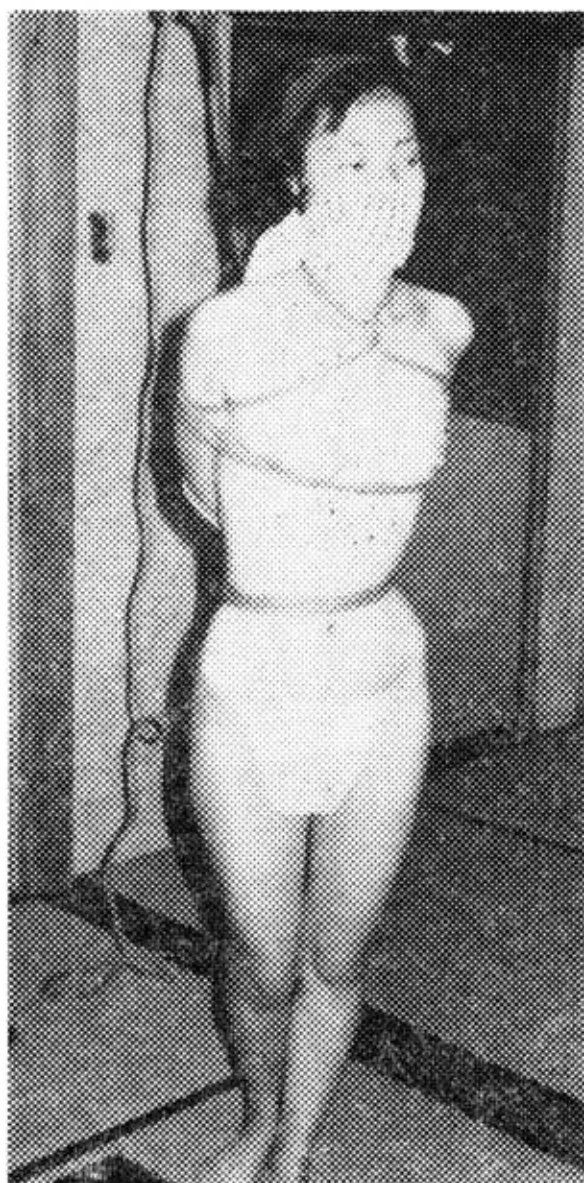
「あたし、吸わないんです」

「珍しいね」

「その代わり、お酒は洋酒かビールを少しのみます。淋しい時、苦しくてやり切れぬ時、友達の女の人等と、のみ始めたのです」

「合部屋なの？」

「上下二段ベッドが向かいあっていて、一室



に四人、住んでいます」

「いろいろな話、出るだろうね」

「お客さんの品定め、それも殆ど下半身のことなどワヤワヤいって騒ぎます。でも、あの入達も、身の上をきくと皆、不幸ですわ。中には、世帯持ちの人もいますが、寮に入っている人でも、やくざのヒモみたいな男に貢いだり、恋人といっても大抵は、たかられているようです。男達は、真剣に結婚の対象には考えてくれませんもの」

「あんたに恋人あるの？」

「あります」

「若いの？」

「……」

珠子はフト押し黙って眼を伏せた。言おう

か言おまいか、暫く思案しているようであったが、やがて顔を挙げると「奥さんとは別れるとって呉れますが、当てにしません。子供さんも二人いるのです。三十一才のデ

パートの人です。刹那的に愉しいし、その人親切で優しいから、それでいいと思っています。一度、妊娠してオロシました。いけないと思いつつ、月に二度ばかりデートしています」

私は深々と、うなずく。何故、彼女は初対面の私に、在りの俣の告白をする気になったのだろうか。その疑問で、

「どうして、今日始めて出会った私に、何もかも話すの？」

「同室の仲間とは、すべて話します。でも第三者の方に、こんな事、真剣に話す機会がなかったのです。辻村様と仰有いましたね。何だか何もかも話したくなる人に思えますの。自分でもこの気持、分からないんです」

「あんたの話を茶化したり、揶揄する気は毛頭ないけれど、正直いって私は困っているんだよ。今日の目的が、先生と二人で、あんたを少々苛めるつもりだったのだからね」

「分かっております。先生もそう仰有いました。苛められるということに、私自身も興味をもって来たのです」

「SMのプレイって知ってる？」

「言葉だけは聞いたたり、町の本屋でみかけますが、本当は何も知りません」

これは少々、厄介になってきた。最近の私のハントする女性は、大抵、SMプレイについて、一応の知識を持ち、或は夫婦プレイによって飼育ずみの人が多かっただけに、こうして、正面きって開き直った恰好になると、どうも説明が、しにくくなってくる。

「ヘンなこときくけど、今迄に縛られたことある？ 例えばだなあ、その恋人にとか、誰かにでも……」

「縛られたこと？」

珠子は私の言葉に反射的に応えたが、何を思い出したのか、みるみる頬を染め、気愧しげに、うなじを傾けてじっと私をみつめた。これは脈がある。咄嗟に私は、珠子が既に緊縛に経験のある事を感じとった。更に言葉を

つづけて、

「何て言うかな、つまり、恋人との愉しい、ひとときに、単なるセックスの繰り返しではなく、刺激を求めて、彼が、あんたの自由を束縛して、体の隅々まで好きなようにする」とだとか——そんな経験ない？」

「それをSMのプレイといいますの？」

「プレイは多種多様だけど、こうしたことも勿論、SMプレイの一つだよ。いや、主流といってもよいかな。単調なセックスに飽いた夫婦は、倦怠期を、SMのプレイの開眼によって、うまく切り抜け、仲の良い夫婦生活をつづけている人も多い」

「私、今驚くべき真相を、辻村さんによって知りました。私の家出の一番大きい原因は、養父が母を無茶苦茶に苛めることでした。いつも夜になりますと、母の魂切するような悲鳴が聞こえるのです。それでフト眼覚めて、そっと二階から降り、二人の様子を窺うと、養父が母を虐めているのでした。私は二人のそんな姿を何度、覗いたかしれません。あんなに苛められているのに、母が、どうして養父と別れないのかと、不思議でなりませんでした。朝になると二人とも嘘のように仲良く、子供の私がみてもイヤらしい程、イチャ

イチャしているのです。苦しそうな悲鳴のあと、呻くような激しい声に、私は未知なくせに、薄々男女のセックスというものを感じて体がカッと火照り、一途に二人が、うとましくなったのです。それで分かりましたわ」

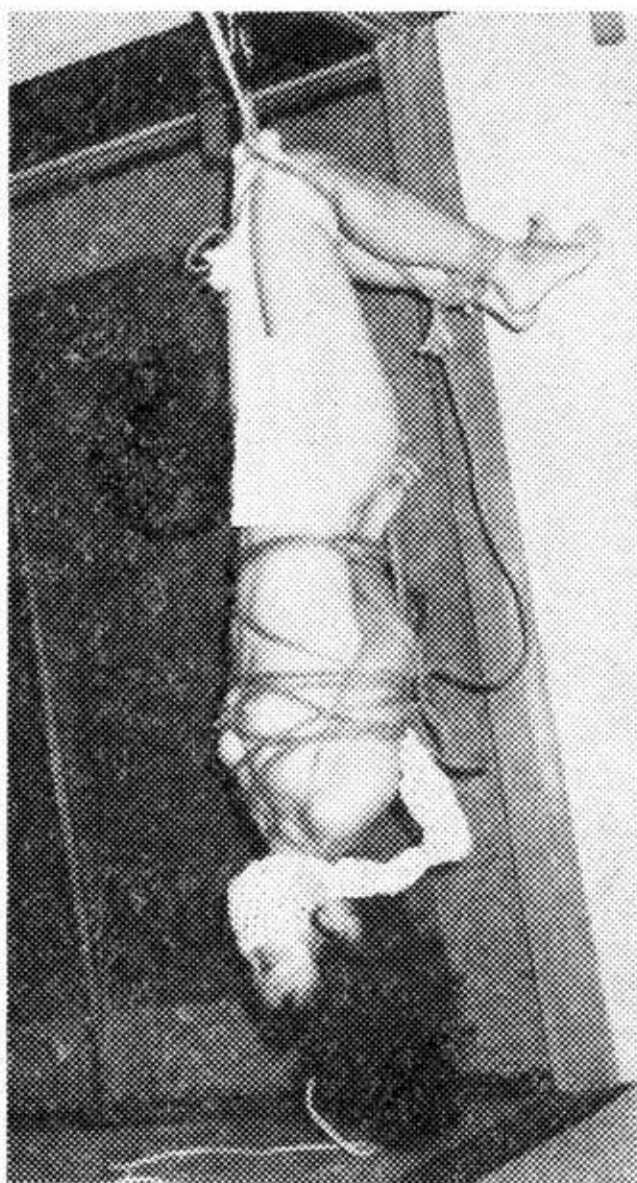
それは少女に理解の出来なかった、情痴の世界であったことだろう。家出した娘を心配しながらも、被虐の奴隷と化した、もう一人の女が、母親である前に、妻でありたかったに違いなかった。成長した娘の帰還は、喜びであると共に困惑でもあった。被虐の化身、娘を転落の世界に導入したといっても過言ではなかった。しかし、おのずから、SMの夫婦プレイに喜びを見出す二人にとって、やはり、娘の前途よりも、その方の誘惑に勝てなかったのであろう。私の直感を裏書きするように珠子は言葉をつづけた。

「母が裸にされて、荒縄で縛られ、ローソクを垂らされたり、紐でぶたれたりしているのを、数度、覗き見し、その都度、私の血は逆流するのです。その生々しさが、私を早熟にしたようです。中学一年の頃から、私は自分の体に、いたずらを覚えしました。そのくせ、二人への嫌悪は激しさをましてゆくばかりです。

続いて生まれた二人の弟と妹は、小さくてよく寝た伝ですが、私は何かノイローゼみたいになり、眠いくせに眼が冴えて毎夜、眠れず、静かに何事もなく過ぎた夜など期待を裏切られたようで、嫌悪を感じているくせに、何故ともなくガッカリしてしまうのです。二人の、のたうち廻り、格闘みたいなセックスを、まざまざとみたこともありましたが、殆どは養父が母を、雁字搦目に縛って行なうのでした。そして家出する前夜、遂に私の憂憤が爆発してしまったのです。

寝苦しい梅雨の頃でしたが、裏の方で、しきりに物音がしますので、そっと、いつもの様に、足音を忍ばせて部屋を覗くと、二人がおりません。ドキッとして、物音のする方へ一步一步、近づきました。

裏口に通ずる通り路から、母の悲鳴が洩れますが、暗くてよく分かりません。じっと、しゃがんで眼をこらしていますと、ボーッとした月明かりで、私は二人の有様が徐々に眼に、うつって来たのです。梯子を屋根のひさに立てかけ、それに二本の棒を上下に結びつけ、母は裸で、その梯子に逆さに大の字に縛りつけられていたのです。母の口から、絶え間なく、ヒイヒイと苦しげな呻き声が流



れ、父も裸になって、もう口でいえないような苛め方を続けていました。苦しい苦しいと呻く母の逆さの顔に、養父は体を押しつけてゆきました。

私の血は逆流し、もう矢も楯もたまらず、いきなり飛び出したのです。やめてえ、やめてえと泣き叫び乍ら、養父の腕に噛みついていました。母の驚愕の声、養父の困惑と怒りに震える顔。それは今も、まざまざと私の臉に灼きついております。

翌朝、学校へ行く姿の俤で家を飛び出し、そしてその俤、三年生の一学期で中退してしまっただけでした。どうしても帰れず、又帰りたくなかったのです。

一人たべて行くには誘惑も多く、何度も欺され、私の体も何人かの男によって汚されました。今、やっと二人のあの行為が、愛情の表現だと知りました。すぐく日常は仲のいいのが、その証拠ですわ」

数奇な運命の珠子であった。それと共に、彼女自身、嫌悪の眼でみつめた、悦虐の行為に対し、ひそかに羨望を覚えていることを見抜いた。それは母子に亘る血縁的な被虐の、内潜する感覚であったかも知れない。

男性遍歴の経験を通じて、誰も試みてくれなかったSMのプレイに、珠子は挑戦する気でやって来たのではなかったか。母が、あれ程までに悦虐に陶醉し、歓喜に咽ぶ姿を垣間

「新世界の、うどん屋の住み込み女中、女工員、喫茶店を転々として、今の姿になりました。家出して以来一度も家へは帰っておりません。唯時々、無事であるというハガキを出す程度です。少女

見た少女のイメージが、遍歴の結果、いつしか快樂と愉悅をおぼえるようになった自身の肉体に、その被虐の悦樂を試してみたくなったのではないか。偶々、久下先生の言葉に、フトその気になり、私という人間に会ってみる気になったのではなからうか。

もっと突き進んで考えた場合、竜珠子は、私という人間の性質すら知って近づいたのではないかという疑念に捉われるのであった。初対面の私に、生い立ちや、養父と母の、あからさまな葛藤を告げる女の心の奥底には、告白にかこつけて、私の心を刺激しているように思われる面が多々あったのである。

それに、久下先生が、もう一時間以上も戻って来ないのも可怪しかった。彼と珠子の間には、既に暗黙の諒解があったのではなからうか――。

私は深い昏迷に陥っていった。すべてが事実か、すべてが虚構か――。事実にしては余りにも巧みにつくられ過ぎ、私の琴線を否応なく刺激するよう出来過ぎているのだ。次から次と、巧みに誘導されている感が、ありはしないだろうか。

わざわざ私を呼んでおき乍ら、所用にかこつけて、席を外した先生にも、私は疑念を抱

き始めていた。何か、たくらみが二人の間に隠されているようであった。それは何か、私にも分からない。珠子は尚も話を続けたそうである。彼女のプライドが、被虐を望む女であることを告白するのに、躊躇しているように私には思えた。私がここで、それに触れるのを待ちのぞんでいるかのである。

「辻村さんは、沢山の女の方を縛られたそうですよね」

「先生が、いったのですか」

そら、おいでなすった。話は、いよいよ核心に触れる。

「ええ、確か、そんなことを聞きました」

「そうですよ、プレイとしてね。被虐と加虐をミックスした遊びなんです」

「愉しいでしょう」

「私にとってはね」

さりげなく応待しながら、私は珠子がSMプレイの本質を、適確に知っている事を感じた。とぼけながら、言葉のはしはしに、語るに落ちることばが、しばしば出てくる。SMのプレイの解釈に、女は「愉しいでしょう」と応えている。それは裏返せば珠子自身、愉しみたがっているようである。養父と母の、SMプレイの語りにも、夫婦プレイを心得え

て、それを前提において、私を刺激しているかのようなであった。この謎めいた女に、私の興趣は激しく盛り上がってきた。

「プレイしてみませんか、私と——」

思い切ってズバリというと、

「まあ、そんなこと」

と珠子は、うなじを紅らめてうつむいた。

「先生は戻ってくるんでしょうね」

「ええ、一時間ばかりで話が片附くとか、いつてましたわ」

（それみる、ちゃんと知っているんじゃないか——）

「それを知っていたのですね。ヘンだな、何だか」

彼女は慌てて、つけ足した。

「辻村さんと、ゆっくり話をする機会をつくってやるといわれました」

「どんなハナシ——」

「今、仰有いましたような、プレイのこと。」

私、何でも知りたいたのです」

この言葉、この話術、この口調——これが中学中退の娘の、トルコ嬢の口吻であろうか——。何かある、何か隠されていると知りつつ、それを掴みかねて、私は白ばくれ、彼女の告白に乗っている方が賢明だと、咄嗟に判

断した。

私だけでなく、彼女も何となくジリジリしているらしい。話を早く結末に持ってゆき、プレイへと結びつけたかったらしい。珠子の会話が巧みすぎて、いきなりプレイへと自分自身を持ってゆきかねている感じである。

「先生が私を逆さに吊って苛めてみたいなんて仰有いますの。怖いわ……」

「私も吊ってみたいです」

彼女はフト欄間に眼をやった。鴨居は細く長い。そして彼女の身長をもってしては、タミヘ頭が届きそうであった。

「でも、こんな場所じゃダメですわね、とて——」

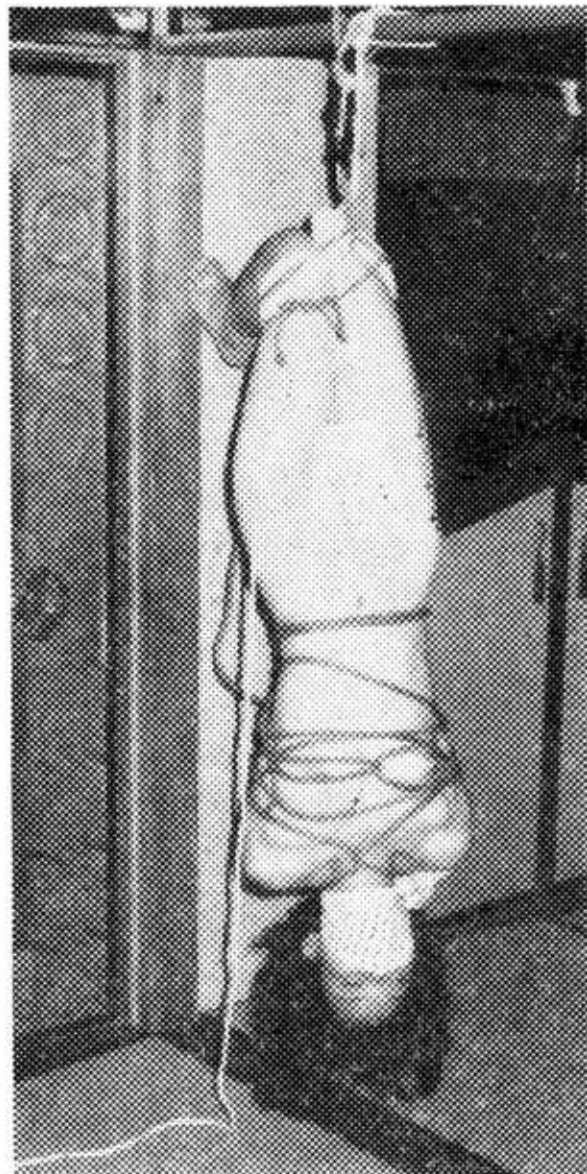
「私一人じゃダメだ。でも、先生と二人でやれば、何とか出来そうですよ」

「先生の言うことをきかないと、もう来て戴けないかも知れませんから、我慢します」

「じゃあ、とも角、お風呂へでも」

「部屋にもあるそうです。私ここで入りますから、どうぞ岩風呂の方へ行っていらっしやいませ」

いつしか珠子の言葉は、徐々になまめかしく変化していた。その変化に、珠子自身、果たして気づいたかどうか。



岩風呂でゆっくり思考をねるべく、私は浴衣の上に丹前を重ね着すると、部屋を出る。庭園を横切って岩風呂へ通ずる石段を下がってゆく。まさしく竜珠子は、被虐の願望を、燎らかに露呈して私に求めていた。

カマトト振りは、いつしか曝露して、私が最初に感じた、聡明と教養が、言葉のはしばしに、にじみ出ているようであった。

中学三年中退のトルコ娘——聡明と教養。久下先生は珠子をパーといった。

この不可思議な方程式と取り組みつつ、私はたった一人、少しぬるい岩風呂の湯に、じっと身を沈め、深い思索に耽るのであった。

× × ×

部屋に戻ると、久下先生が何時の間にか戻

っていた。何かひそかに話し合っていたらしいが私が戻ったのをシオにさりげない素振りになったのを、ありありと感じる。

「私にも話したこのない告白を、あんたにしたらしいね。すっかり興奮してますよ」

「正に一篇のSM小説ですね」
久下先生は一寸イヤな顔をした。が、すぐに表情を戻して、

「世の中には、事実は小説よりも奇なりなんてこともあってね。彼女、大分、苦労したらしい。ウスウスは聞いていたんだが——」

と言葉をきくと、

「あんたの御意に添うよう、今も口説いていた処なんだ。OKをとったよ」

「そうですか。私は又、彼女が先程、先生の言いつけに背いたら怖いからといって、その気になったのかと思いましたよ」

「まあ、そりゃどちらでもいいがね」

有耶無耶に濁して、先生は私の少し針を含

んだ言葉を瞬間に察知していた。

在りの俣で彼女を紹介すればいいものを、何か小細工を弄しているのが歴然としてきただけに、どうも釈然としない。折角のプレイが、ひどく遠廻りをした感じであった。

しかし、とりようによっては、五年振りで会う私に、先生は先生なりに何とか趣好を凝らそうと努力しているのかも知れなかった。

入りそびれていた彼女が、私達に会釈して戸襖を開いて、浴室に消える。

「本当にトルコ娘なんですか」

と私は早速、疑問をぶちまける。

「いや、それは絶対、本当だ。私はウソはつかない」

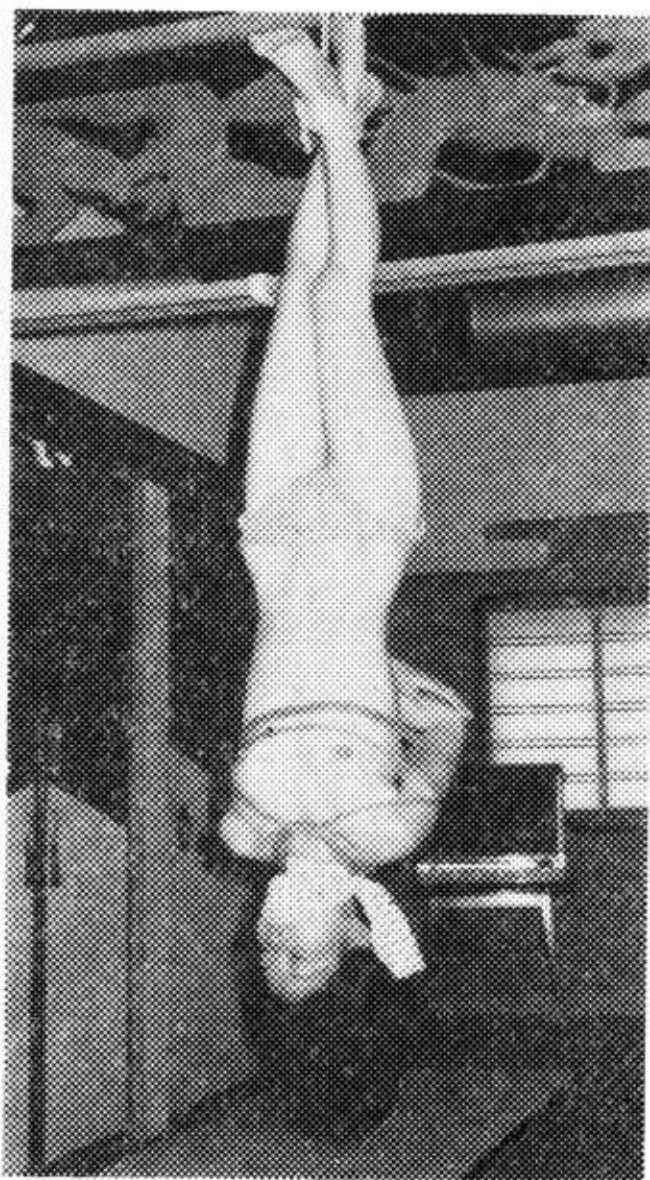
先生は、まるで池田首相がいったような言葉を、そっくり附け加えて、あわてて汗を拭いた。

「それにしても彼女は、パーどころじゃありませんよ。話が、とてもしっかりしています。聞き惚れました」

「それに完全なMだ」

「彼女は、Mを知らないなんて、トボけてたけど……」

「なあに羞かしいのさ、自分の心をのぞかれるのが。わしゃ、もう二、三度、ホテルで思



う存分、縛ってヒイヒイいわせてやった。すっかり陶醉しとったよ」

「彼女は、先生と外で会うのは初めてだといっていましたよ」

「それも女の虚勢さ。今日はあんたと二人で逆吊りオンパレードの約束をとってある。あんたを、この道のえらいベテランの小説家だと吹聴してあるから、そのつもりでね」

淡白に語る先生の言葉に、私はいよいよもって竜珠子の正体が分からなくなってくる。

しかし、正体は不明にしても、確かにこの場所、M性の長身の才女が独り、実在していることは、まぎれもない事実であった。

相手の素性を、これ以上、深く探索するこ

ついで先生と相談する気になったのである。

竜珠子が、本当のリユウ・タマコであってもなくても、プレイには何ら関係なく、逆吊りになって責められ、緊縛されるのは、彼女自身である事は間違いない事実である。私は余りにも、こだわり過ぎていた様だ。架空の物語でも、紅唇について出る夫婦プレイの現状は生々しく、激しく私の心を攪乱したではないか。それでいいのである。才女の口から語られた告白も、フィクションとしてきけば又愉しいものであった。もっと寛容に、大らかにならねばならなかった。私を一廉のSM作家として紹介してあるから、彼女は精一杯の告白を展開したのであろう。フト笑いたく

となく、実状に甘んじて、プレイに耽溺すれば、誰を傷つけることもなく、三人各様に愉しく過ごせるのだと、やっとその考えに到達した私は軽く笑みを泛かべて、これから始める逆吊りの構図に

となく、実状に甘んじて、プレイに耽溺すれば、誰を傷つけることもなく、三人各様に愉しく過ごせるのだと、やっとその考えに到達した私は軽く笑みを泛かべて、これから始める逆吊りの構図に

「今日は徹頭徹尾、吊りオンリーだぞ。わし一人ではでけんから応援に辻村君を頼んだのだよ。珠子が希んでいた写真もとってももらってやるからな。どうだ、本望を達して嬉しいじゃろうが——」

私は、チラッと珠子をみつめたが、彼女はあえて反撥せず、素直に黙って、うなずいていた。こと茲に到って最早、珠子は告白を糊塗する気持は失くしているようであった。何故ならば、彼女の目的は、それにあったのだから——。彼女は、私という人間を先生からかなり聞いており、その言葉を真に受けて、自分を売り込もうと必死に喋っていたのだ。

それもいい、それでいいのだ。初対面の羞恥を、何とかカバーしようと、珠子は珠子なりに努力していたのであろう。

「じゃあ、そろそろ」

私は、おもむろに立ち上がる。サッと珠子

の表情に緊張が走る。

長身瘦躯の才女に、私の情熱は、激しい吐
け口を求めて、ぶつかっていった。

× × ×

しつとりと湯気に濡れた髪を、紫のリボン
で結んで珠子は、いさぎよく浴衣をぬぎ、両
掌を組んで前を蔽って直立し、静かに私の行
動を待っていた。

上背は一六五センチ以上もあるうか、敷居
近くに立ちつくす珠子の頭上と、鴨居の距離
は十センチぐらいしか間隔がなかった。しか
も長い鴨居の材木は粗雑で、力をこめて両手
でのりかかってみると、ビヨンビヨンとしな
って、若し私が両足を浮かせば、間違いなく
ボキリと真中から折れそうなひ弱さである。

吊り責めには、全くふさわしくない部屋の
しつらえで、見掛けは、定紋入りの襖や調度
品を使っている、建材の方は至ってアヤシ
げな材木である。吊りの場合、いつも感じ、
この稿でもよく書くことであるが、タタミす
れすれに吊っても、高々と吊り下げても、女
体に与える緊縛の苦痛は等しいものである。
しかし、吊り責めの構図が、低いのと高いの
とでは、その迫力の差において格段の相違が
あった。京都のホテル「H」で、飾り梁に高

々と谷山久美子を吊り下げてこそ、息をのむ
迫力を感じたが、長身の竜珠子の頭が、タタ
ミすれすれに浮いていても、さして吊り責め
の凄みは感じない。高々と吊り上げた時、そ
こに始めて、吊り責めの醍醐味を沁々と覚え
るものである。しかし、今ここで愚痴をいっ
ても始まらない。プレイの期は既に熟してい
て、珠子は裸身を曝して、私の緊縛の手を待
っているのであった。

久下先生は、私の背後で、黒革袋の縄束を
とり出し、ゴソゴソいわせていたが、
「これを使ってみないかね」

と先日、高村浩子を雁字搦目に縛り上げた
強靱な麻縄を差し出した。よく締まるし、堅
いから、かなり耐久力のある女性でないと使
わなかったシロモノである。御意にうなずい
て受け取ると、珠子に近づき、背後に回って
両手を、ぐいと背に振じ上げた。

首に一巻きして、背後で両手を縛り、胸か
ら腰をしめつけ、兎も角、直立の尽、余った
縄を鴨居につなぐ。先生は豆絞りの手拭いで
深々と珠子の紅唇を蔽って、猿轡を嵌めてい
た。

「いいね。ナマの女体緊縛は、実に久し振り
だよ」

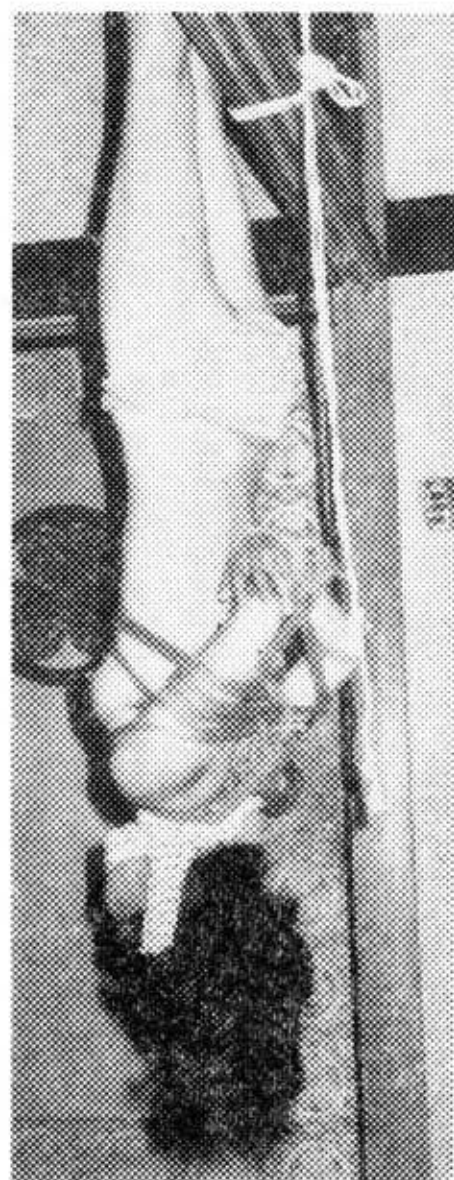
「二、三度、ホテルでやったのじゃなかった
んですか——」

「いや、なに、あれは……」

先生は、あわてて言葉を濁す。ホテルの緊
縛云々は、どうやら私と対等の位置におこう
とする、先生の虚勢らしい。或は珠子のいう
トルコ風呂以外での先生とは、今日が始めて
という言葉の方が本当しかった。先生の虚
勢を裏書きするように、彼は昂奮に火照った
顔で、珠子の緊縛された女体を、さも物珍し
げに、うっとりで見惚れていたのである。

珠子は意外に神妙であり、平静であった。
瘦身の均整のとれた女体は、思ったより荒れ
てはならず、乳暈も淨らかであった。唯、前
に回ってカメラを構えた私は一驚した。

異常とも思える程の毛深さ。しかしそれは
熊襲的な毛深さではない。かたちよく整って
いて、独特の縮れというものが全然、見当た
らず、まるで頭髪のように、十数センチ以上
も房々と伸びているのである。沢山の女体を
みてきたが、この様に素直に房々と伸びたの
は見始めであった。愛すべき同好者の、毛相
学のセンセが、これを眺めたら、どんな判断
を下すだろうかと、私はフトそんな興味にう
たれた。



麻縄は、かなり強く肉体を犇々と、しめつけている。

「縄が、きつい？」

顔を近づけてきくと、蔽われた手拭いの奥で

「ええ、でも我慢、出来そうです」

珠子はチラッと斜視を走らせて、潔く応えた。

「どうしましょう、先生。この俣、逆さに吊り下げても、頭がタタミにつかえてしまいうですよ」

「さあ、わたしは分からない。あんたの、いように——」

と、先生の返事は甚だ頼りない。私に、いい智恵が浮かばないものを、俺に分かったたまるか、といった口吻である。

要するに、女体を短くして吊れば何でもな

いことだと、こんな簡単な論理に途惑っている私自身が可笑しかった。鴨居の上には、彫刻の欄間もあることだし、長々と吊り下げようとすれば、いいではないか。

私は鴨居の弱さや、珠子の身長に、こだわっていたが、吊り様によっては、どうにでも変化出来るものであることを咄嗟に、さっと。

鴨居につないだ麻縄の、長々と残った分を外し、更に胸を数重、締めつけて、足首と両膝を縛って、やっと長い一本の麻縄にピリオドをうつ。女体を短く吊り上げるため、膝を晒布で、しっかりと縛り、別の縄を膝で結んで欄間にかけて渡し、鴨居で結ぶようにしてから、先生に珠子を抱いて貰った。嬉しそうに先生は、いよいよ時節到来とばかり、立ちすくむ珠子を背後から抱きかかえる。縄を引くと、女の膝頭から、じりじりと上昇を始め、女体は頭部を逆さにして徐々に傾いてゆく。ぐいと持ち上げてくれたのをシオに鴨居で、

しっかりと繋ぎとめる。微かに、微弱な鴨居の材木がきしむ。力が欄間の上にかかっているから、折れる懼れはない。先生は珠子の体を、そっと離してゆく。膝で吊られた彼女の体が見事に逆さに、ぶら下がって揺れた。

先生は激しい昂奮の極みを、こらえようもなく、荒い息をハアハアと吐き続けている。空間にゆっくりと回転する逆さ吊りの女体へ私のカメラは、とめどなく閃光を走らせる。珠子の表情に苦悶はなかった。否、むしろ細めた切れ長の目に、うっすらと陶酔の色の浮かぶのを逸早く認めて、私の心は激しく疼き出した。珠子の内潜する願望が、今一挙に逆吊りという、強烈なプレイで実現して、女は途惑い乍らも、逆流する血の疼きの中で、激しく被虐の悦楽を、噛みしめている様であった。

母と養父の悦虐のプレイ談が、虚構であれ事実であれ、それを語る珠子の本心は、ありありと、それを望んでいた事を、私は陶酔の表情の中に、みとめた。彼女は唯、こうしてブラリと逆さに吊り下がっているだけではなく、肉体への愛虐の折檻や愛撫を、心ひそかに願っているのではなからうか——。と、私には、そんな気がしてならない。それがSM

のプレイの本質でもあったからである。

「少し叩いてみましょうか」と私。

「反応はあると思うがね」

先生は感無量の体たらくで、そう応えて、珠子のそばに近づくと、ポツンと突き出して、いる柔らかい淡紅色の乳首のモミモミを始めた。

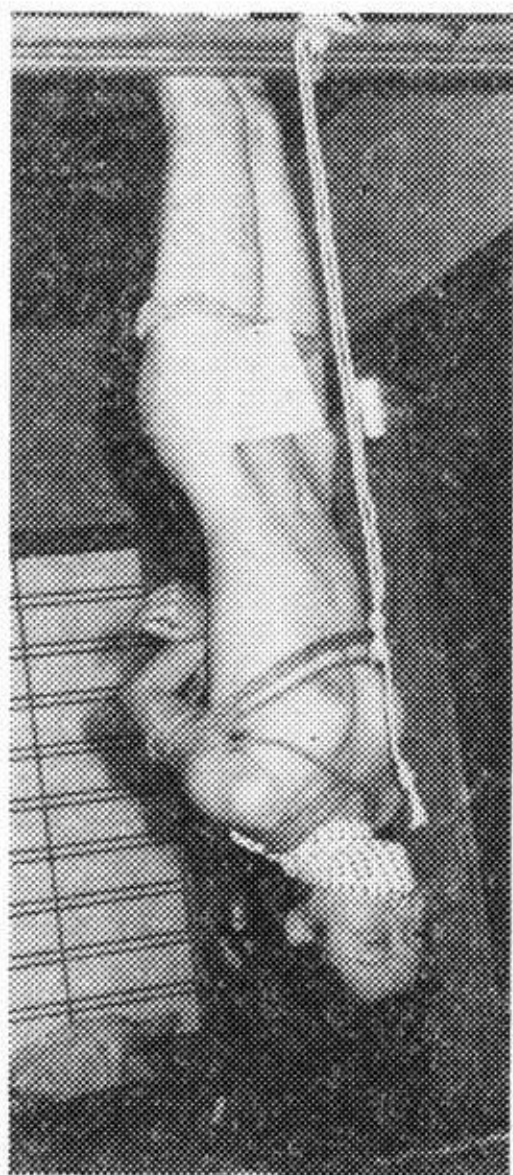
「あッ、ウーッ……」

猿轡の奥で、呻きをくぐもらせて、女体は宙に、なよなよと蠕動する。彼は指先を離すと、かなりの力をこめて珠子の胸を押した。二度、三度——女体に弾みがついて、逆吊りの女体が半円を描き、大きく空間に揺れる。ミシッ、ミシッと鴨居がきしみ、人間振子は珠子の呻きをエコーさせて大きく右左に振幅をつづけた。

揺れる女体の、振幅の距離をはかり、立ちはだかった私は、眼前に迫る白く円やかな双丘に、発止と平手打ちを、くらわせた。

「アウウウ」と、くぐもりの悲鳴が飛びちがい、先生は女体を押しつづけ、私は受けて、双丘に掌のピンクの烙印を次々と灼きつけていった。くつきりと指痕を染めて、双丘は赤らんでゆく。五度—六度—七度……。

目配せに応じて、先生の押す手が止まる。



振幅は次第に狭まり、鴨居を芯として、ゆらゆらと、いつ迄も揺れつづけている。珠子の顔面は逆流する血で紅潮し、充血していた。

「どうだ、大丈夫か——」

しゃがみ込んだ先生が、猿轡すれすれに口をよせて訊ねる。

「苦しい……とても……でもスゴく嬉しい」

きれぎれの低い声が、かえる。

「フフ、こいつ——。とうとう本音を吐きよって」

坐った俤、手を伸ばし、逆吊りの乳房を狙い撃ちする彼。充血の顔に、甘い恍惚が流れる。竜珠子は、まぎれもなく、この極限のプレイの逆さ吊りの、いたぶりに陶醉し、悦楽を覚えていた。

先生の手が徐々に処を変える。じっと私の

見守る眼前で、彼は私の存在すらも忘れたかのように、只管に女悦を掻き立てようと、珠子の裸身を探知していった。

くぐもりの愛欲の喘ぎ、そして、めくるめくような甘い呻きが、珠子の感情を如実に示していた。久下先生は、いつかな降ろそうとは、いわない。そして珠子も、それを請わない。転倒し、倒錯した逆吊りの俤、彼の愛のくちづけは続いている。この苦しい吊りの俤珠子は、いつまで耐え続けるつもりなのだろう。今は、見得も外間もなく、赤裸々に吐き出される悦虐の呻きをヒタと耳にし、もう十数分近くも、こうした愛を甘受する珠子に、私は強烈なる女のM性を、この眼で判つきりとみてとったのである。

×

×

×

長い逆吊りで血行の逆流した体を竜珠子は二度目のバスの湯で、いやしている。

「どう、大した耐久力だとは思わな

いね」
先生は未だ昂奮

の醒めやらぬ、弾んだ顔付で、半ば得意気に私に声をかけた。

「ええ、確かに……。それに、かなりM性ですね」

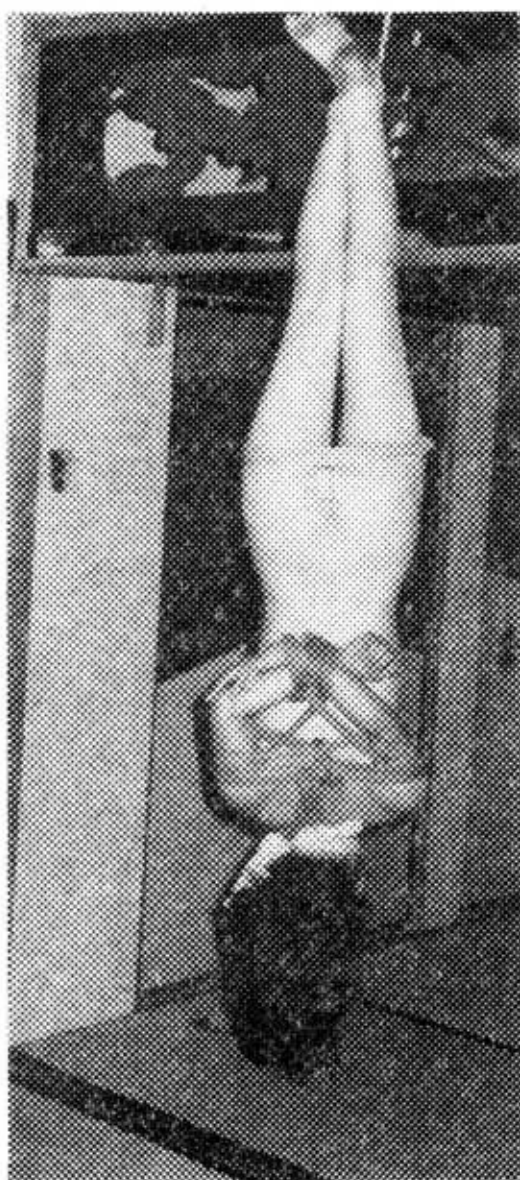
「だろう。私の飼育にもよるが、彼女のM性は、多分に先天的の様に思えるのだよ」

「最初は気がつかなかったのですが、こうしてフォトを撮っているうち、何だか彼女を、どこかでみかけた様に思っんですがね」

「あんたは数が多いから、誰かと混同しているんだよ。恐らく他人の空似だろう」

「私は始めてです。しかし、どこかでみかけた顔です」

徐々に輪郭が浮かび上がり、それは一つの既成事実を形成してゆく。それは誰だか私には分からない。分からない俚に、心の片隅に



どこかで見掛けた記憶が蘇るのであった。「それならそれで、いいじゃないか。兎も角現時点では、竜珠子に対して、やりたいことをやればいいのさ」

確かに先生のいう通りである。この混血のM性を吐露した女性を思いきり、さまざまに縛り上げて、愉しめばいいに違いなかった。「それにあんた、あの子はオスpegが凄く、うまいんだぜ。何なら逆吊りにしておいて、ひとつ、試みてみちゃ、どうだね」

「面白いですね。よかったら先生、どうぞ」
「それにさ、あんた、パイプ御持参なんだろう。並行して使うのもオツじゃないかね」

先生は、実行したい口吻である。日頃は謹厳な先生も、このひとときは、赤裸々な人間に還元して、ハイド氏になりたがっていた。

先生は単なる緊縛よりも、吊り責めに一入、関心が深い。出来得べくば吊り責めオンリーでプレイしたいと判っきり仰有る。一対一なら、到底疲労して出来ない

が、中年とはいえ、男性がこうして二人、揃っている、それも可能である。私も大賛成であるが、当の珠子自身、果たして耐えうるかどうかは分からない。

「それにしても彼女、随分、濃いですね。ハントにのせるとなると、又ぞろ斜線の連続ですな。横から撮っても、斜めからでも駄目です。いっそ、パンティはいてもらっちゃ、どうでしょう」

「あんたらしくもないね。全裸の方が味があるんだけど……しかし、バカ長いからなあ。そりゃ構わないさ」

「最近はずど全裸ばかりなんです、吊り責めオンリーとなると、フォトはすべてカットしなくちゃなりません。白線は見苦しいので近頃はハント向きに、幾らかは考えているのです」

私にとって、パンティをつけるのは本意ではなかったが、薊魔子をプレイの間に撮って、殆どをカットせざるを得なかった。それで、先月の妊婦、富田由美子さんのフォトなど、かなり考えて撮ったつもりであるが、眼前の竜珠子の房々ぶりには少々辟易して、かくはパンティ着用を頼んだのであった。全身を桃色に染めて、竜珠子が部屋に戻っ

てくる。軽くタオルを腰に巻きつけた後、ニタリと笑って突っ立っていた。

「どうだい、気分が直ったかい？」

先生は眩しいように見上げて声をかける。

「ええ、ぬるいお湯に長い間、じっとつかっていましたが元に戻りました。体中の血が、すっかり頭に下がったみたいで、顔が蒼血してしまっ」

「逆流したら、又、入ってくるさ。さあ、もう一丁、辻村君に縛って貰うとするか。逆吊りだぜ、覚悟はいいね」

彼女は黙って、コックリと、うなずいた。

既にMづいた感受性は、そうした強烈な刺激を彼女自身、期待しているようであった。

「辻村君がパンティを、はけてさ。少し、散髪しないとダメだぞ」

珠子の顔に、さっと羞恥が走った。妙なもので、むしろそれが珠子にとっては、羞恥と屈辱を感じたらしい様子である。

ツンとした表情にかえって、部屋の間隅にかけよると、衣類の下から、薄い桃色のパンティを引っ張り出して、素早く穿き終わる。

「これでいいの？」

怒ったようにいつて戻ってくる。既に全裸で吊り下げられての一幕を経た、今となって

は、パンティの着用は確かに奇妙であった。

「この旦那は紳士やからなあ」

とってつけたようにいう先生に、

「あら、そうでしょうかしら」

珠子は私をチラリと見やって、軽い皮肉をこめていった。その言葉のウラに、私という人間の正体を知っているらしいことが、チラリと口ぶりに顔を出す。

「ハハ、このわしが、いずれ、ぬがせてやるよ。さあ、早く縛られてこいよ」

ボンと磊落に珠子の肩を押して、先生はチヨツと片眼をつぶる。早くやれという意味なのだろう。

「先程もいったように、鴨居からでは、頭がタタミにつきますよ」

「そりゃ判りきっているよ。だから欄間から逆吊りにすれば、いいじゃないか」

成程と見上げた欄間に、珠子の苗字にふさわしい、竜の凝ったほりものが、私をにらみつけていた。

目測して、大体、吊る位置の見当をつけ、立ちすくむ珠子に近よると、堅い麻縄で、容赦なく後手にギリギリと縛り上げ、ぐいぐい二の腕も締めつけて、私にしては近頃、珍しく荒々しい緊縛を仕上げた。猿轡の好きな先

生が傍から珠子の口中にハンカチを押込み、その上から手拭いできつく口をしめつける。

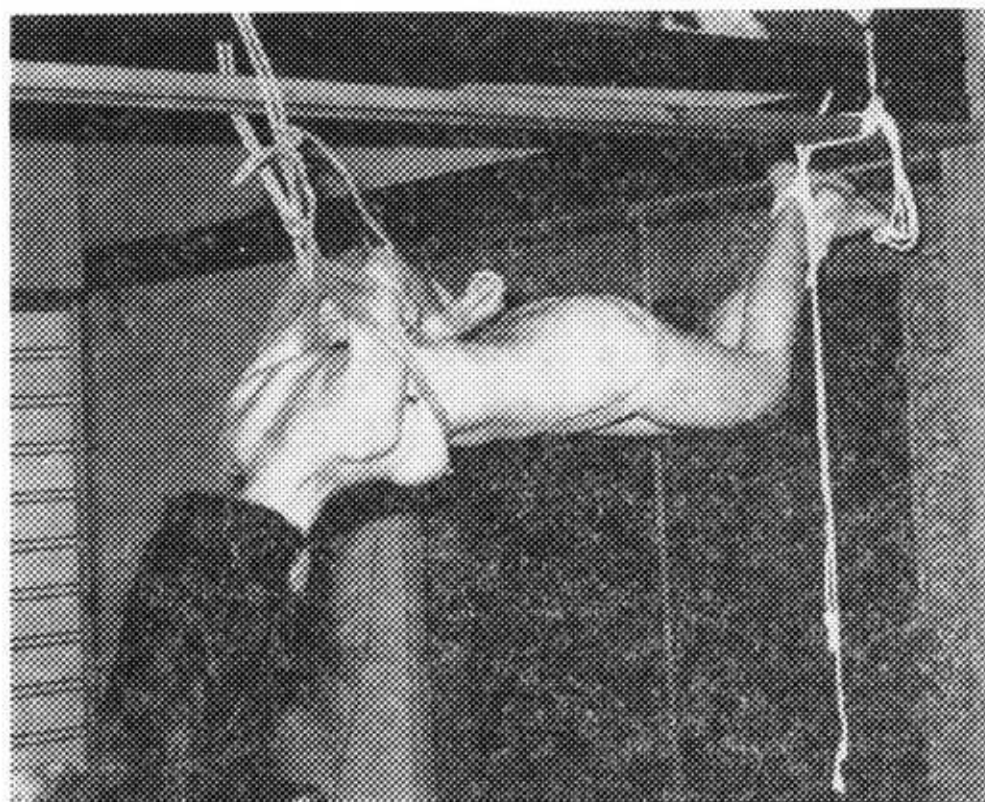
斜視をあげらせて、彼女はちょっと眉をひそめたが、緊縛に対しクレームはつけなかった。鴨居の真下に体を押しやって、両足を揃えさせ、旅館の腰紐で、かたく足首を縛り合わせる。それに長目の縄を通して結び、ボンと欄間越しに抛り投げて逆吊りの準備は終わる。

「今度は、わしが縄を結びますよ。あんた、この子の体を抱き上げて下さい」

交替だといわん許りに、先生は垂れ下がった縄を握った。

瘦身長躯の体でも、抱きかかえると流石に重い。滑車を使えばラクラクと上がるが、欄間越しでは使いうもなく、女の体をジリジリ抱き上げてゆくより仕方がない。

先生は、ぐいぐい引っ張るが、容易には上がらない。欄間はギューギューと、きしみの音を、あげる。一方の手で縄を引き乍ら、片手で先生は助太刀して、珠子の尻のあたりを昇き上げてくれる。二人がかりでフウフウいって、やっと珠子の体は逆さに垂直になったが、未だ未だ低い。腰骨のあたりを抱えて、よいしょ、よいしょと掛け声に合わせて、ズ



珠子の臉は、うっとりとしめりを帯びてこの、めくるめくポーズに、自虐の念を一入かき立てるかのように、恍惚としていた。

あわただしく閃光は走る。

「いいね、いや、実にいい。日頃の念願が叶ったよ。こりゃ、あんた、とても一対一じゃ出来るワザじゃないからね」

「ええ、確かに——。素晴らしいポーズです」

私も思わず見とれていた。SMプレイの同好者ならでは分からぬ、歓びの極みの、しばしの間であった。

「ウーン、こうなると、やはりパンティが眼触りだね」

「どうぞ、御自由に——」

裸身にそよぐものに心を逸らせるのは、究極の本音であろう。先生は、つかつかと近づくと、くるくるっと、腿のあたりまでパンティを丸めていった。背後からカメラを構えていた私も、そわそわと本来の欲望をむき出しにして、次いで前へ迫る。結局すべてをカメラに納めてしまったのだが、長々と伸びた裸身のウェストは極端に扁平になり、腰骨が痛々しい程に尖って突き出ている。この長身

が、腰紐一本に全体重をかけて、ぶら下がっているのだから、その足首にかかる苦痛は想像に余りあった。

「そろそろ、降ろしましょうか」

「いや、まだまだ」

先生は激しく、かぶりを振ると、この優艶な逆吊りの印象を、深く脳裡に刻み込まそうとするかのように、ピタピタ平手で叩きながら、何度も何度も珠子の周りを、ぐるぐると歩き廻るのであった。珠子とのプレイの時間は再び持ち得ても、男二人掛かりの、こうした逆吊りシーンには、いつ又、お目にかかれるか分からないといった感懐が、先生の愉しげな表情から、歴々と窺えた。

「どうだ、苦しいか。まだまだ辛抱するのだぞ、いいな」

自分に、いいきかせるように先生は、恰好のいい臀部をピシャピシャと叩いている。

恍惚の中に、いつしか苦悶が、にじんでいる彼女は、猿轡で押し殺された呻きの中に喘いでいた。

「あれを——」

といわれて差し出したパイプを、先生がひたたくようにして微かな電動音が伝わり始めると、逆吊りの裸身が空間に蠕動を始め、

ルツ、ズルツと女体を上昇させてゆく、欄間の上部に両足が届いたところで、先生は鴨居に縄を結ぶ。上に引っ張る力だから、鴨居の折れる懼れはない。

腰が伸び、スラリとした両脚が長々と伸びて、恰度、珠子の膝が鴨居に添っていた。欄間が支えになっているから、女体は回転せず長身は見事に高々と逆吊りになっていた。

ぎゅっと固く閉じた双眸が、疼痛と悦楽の谷間を象徴するように激しく歪み、眉間の皺が深まっていった。くぐもる呻きは、鼻腔をつらぬいて走る。

「猿轡を外してやってくれませんかねえ」

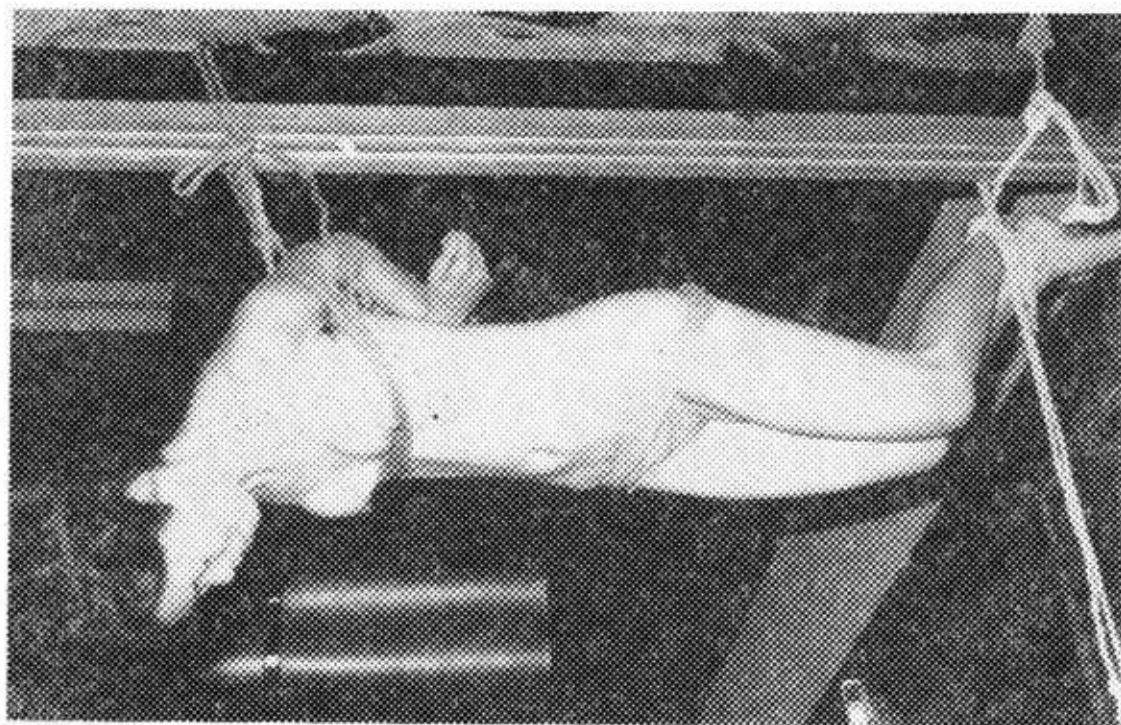
火照った顔が、私に命ずる。言われる俚に豆絞りの手拭いを外すと、グェッとハンカチを吐き出した紅唇が爆発したように、悲鳴に近い嬌声を耐えようもなく撒きちらして、キリキリと噛み鳴らす歯列の奥から、苦悦の叫びが燦爛と迸っていた。

パイプは見えない。ドサリとタタミに腰を落とした久下先生は、放心状態で、珠子の悦虐の歓喜を、冥加に余る面持ちで見守っていた。今回の竜珠子に対するプレイでは、私が脇役であることを、この時、判っきり自覚したのである。

× × ×

竜珠子のこの変貌に、唯々啞然とし乍ら、

私は脇役でプレイを続けている。一見、変貌の様に見えても、これが珠子の究極の願望であった様に思われるのであった。私という人間を意識して、わざと嗜虐慾を昂めるような母と養父のプレイの会話——。それが虚構か事実かは、珠子自身が一番、知っている筈で



ある。私のカンでは、彼女は緊縛に対しては絶対、未経験ではなかった。いや、むしろ常日頃、激しい被虐の欲情の虜になって、折あらば、自己の願望を露呈したがつている様にすら思えた。

何処かで見覚えのある、あの斜視がかった

淫情を秘めた表情は、私という人間を知りつくしているようにすら、思えた。茫漠とした一枚の幕で隔てられた珠子の正体に私は焦立たしい未踏の焦燥を覚えながらも、この謎めいた混血の艶女に、そこはかとなき興趣を燃やし続けるのであった。

珠子は、今やすっかり被虐願望の正体を曝け出して、浮々と心を弾ませているかのようである。この俄か劇に、久下先生が一枚、噛んでいることは確かであるが、彼も一向に口を出さない。そして正体の掴めぬ俚、SMのプレイは、いよいよ佳境に入っていた。

珠子の被虐性を逸早く見抜いてから、私の縄は仮借しない。一見、縛り方は平凡で乳房の下に一条の縄をかけただけにみえるが、堅い麻縄は二の腕をギリギリと噛んで、両手首は色が変わる位に、きつく締め上げてある。

ドラドラと縄をかけたものより、本当の緊縛とは、こんなものであるうか。欄間の下部に麻縄を通し、爪先すれすれに吊って、よろめく珠子の臀部に激しい縄鞭を飛ばしていた。交叉するピンクの条痕は、束ねた縄ムチの苛責を物語っている。

久下先生は泰然と坐して、私の嗜虐のさまを見つめていた。加虐に対して一言もいわず

い。私は急激に、いきり立っていた。脇役から一転して、プレイの主役を演じたがってに違いない。それと共に、この謎めいた竜珠子という被虐女性の正体を、あばき出した欲望にも、かられていたようである。

私はツカツカと先生の許に歩みよると、やや、きつい口調で、

「彼女に、きいてみたい事もあるのです。私の一存で、好きなようにプレイしても構いませんか」

と切口上で言って、彼をみつめた。やや、たじろいだ風情で先生は、

「勿論、いいともさ。どうぞ御自由に。あの子も、それを望んでいるんじゃないかね。何なら私は、一風呂浴びてこよう。入り損ねたからね」

と、やおら腰を上げる。引きとめず私は軽く会釈して、

「それじゃ、どうぞ。その間に、ちょっと痛めつけますよ」

「ああ、だけど、わしにも愉しみを残しておいて呉れ給えよ」

恬淡といって、先生はタオルを握って部屋を出てゆこうとしたが、ツト振り返って、珠子に向かい、

「ようく、可愛がって貰うんだよ。いいね」

と、一寸意味ありげな言葉を残して出ていったのであった。

「あんたは私という人間を知っているんでしょう？」

「……………」

「どうなの？」

パシッと力をこめて尻を平手で叩く。チラリと恨めしげに眉をあげたが、女は、かたくなに応えなかった。

「縛られたのは今日が始めてじゃないね」

微かに、うなづく。イライラしてきた私は又ぞろ、腰紐で両足首を縛ると、それに縄を通して、ぐいと体を持ち上げ、両足を高々と欄間に縛りつけた。珠子の体は水平に宙に浮く。麻縄が見るも無惨に、胸や二の腕に深々と喰い込み肩胛骨がむき出しに尖っている。激痛に近い苦しさがついてくる筈である。にもかかわらず、竜珠子はハアハアと、たえだえの苦悶の吐息をはきながら、懸命に、この



強烈きわまる水平吊りを耐え忍んでいた。

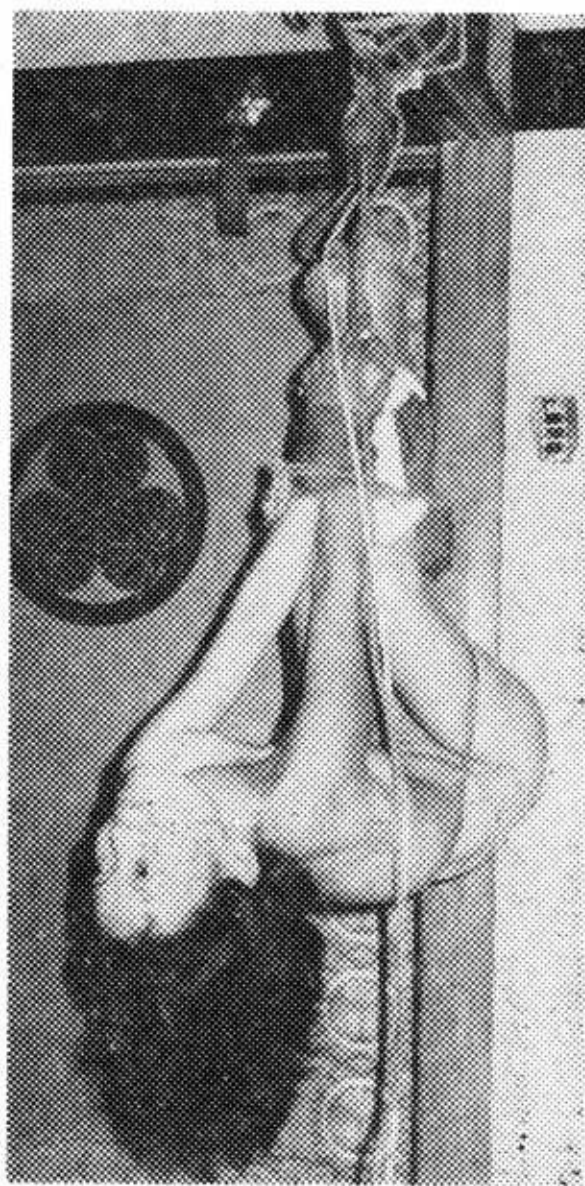
凄い！この忍耐力——私は心底から感嘆した。さぞかし苦しいだろうと思う。フェミニストの、いつもの心とは対照的に、この姿で言葉の責めをつづけて、珠子の正体をあばき立ててやりたかった。

おもむろに私はカメラを構え、このポーズを凡ゆる角度から納める。二の腕は、もう殆ど骨折寸前まで折れ曲っている。この得難いシーンに、めくるめく思いで、熱い血をたぎらせ乍ら、私は尚も匍匐して、仰ぎ見てのポーズに閃光を瞬かせ続けた。

「あんたを、どこかで見た記憶がある。正体は一体、誰なのだ」

「……………」

「何故、いわない。いえないのか？」



責めの一手に使って、ピシリと激しく尻を

打つ。苦しげに宙に揺れて、珠子はそれでも黙っていた。私は太いローソクをとり出すと火を点じ、水平に吊られた珠子の胸に、下から徐々にローソクを持ち上げていった。

炎の尖端が針とがって、チリチリする熱痛を珠子に伝播してゆく。

苦しく悶え、折れそうな腕をもがかせて、珠子は必死にこらえる。

パシリ、パシリ、連続して平手打ちが、苛責のむちとなって、女の横腹を、腿を打つ。

「ああ、もう辛抱出来ない。降ろしてエー」

「降ろしてやるから、いうのだ」

「いいます——」

「よしッ」

た。

彼女は眼を伏せて、はにかんだ。

「年が分かるわ——」

と小さく呟く。

「何だって？」

「今から恰度、四年前の今頃、雑誌にお便りを出して、山本一章さんと会ったの。生まれて始めて縛られた——」

呀っ！ と私は思わず叫んだ。そうだ、思

い出した。

「川越美佐子だね」

「山本さんがつけてくれたの、その名前」

記憶に乏しい筈である。彼が昭和四十二年七月号の『この女と——』において紹介した彼女のフォトは、山本一章好みの、眼隠し、

猿轡で、判っきりした彼女の顔は、一枚も現われていなかったのである。その後、編集部が数度彼女を撮り、分譲フォトにもなったいたが、私は何かの折、編集室でチラッと眼を通しただけだったからである。瘦身長軀の二十一才の女性という記憶だけであった。

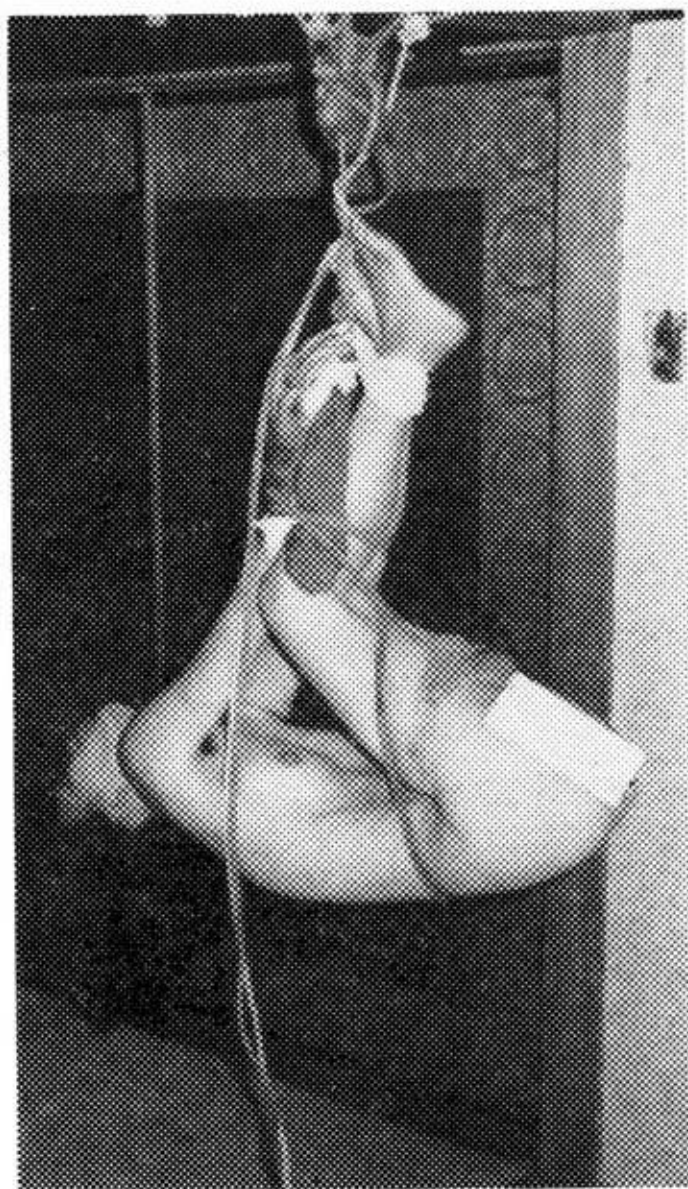
当時は、彼と張り合う様な気持で、私は私なりにハント女性を探究していたから、山本一章の発表した川越美佐子には軽い関心を抱きながらも、彼女が山本一章を指名した手前その後塵を拝して、ハントするのも二番煎じの感で、その俚になり果ててしまった女性であった。

川越美佐子の『この女と——』のカメラ・ルポの同月号には、私は河森真理子という、堺の女性のハントを掲載している。

四年前のあの頃、久下先生の要請で、山本一章を彼女に紹介したことなど、すっかり忘れていたのであった。

川越美佐子—山本一章—久下先生と、このルートで、先生は彼女を知ったとしても不思議ではない。

山本一章の巧みな文章は、緊縛やプレイの本筋のみを描いて、女性のプライバシーは余り触れてはいない。川越美佐子にしてみても



大阪のどこかで出会って、プレイして別れたという程度で、彼女についても、その私的な面には何も触れてはいなかったようである。彼女の表情に、何故ともない安堵の色が浮かんでいた。私に対し、新たな竜珠子という女性として化身し、仮面をかぶり通す後ろめたさは、彼女自身、或は最も気にしていたのかも知れなかった。

「先生が、そうしろと仰ったのです」

「だろうね、多分——」

「正直いって、先生とは、つかず離れずの、もう三年越しのおつき合いです。山本さんと始めてお目にかかった時も、トルコに勤めて

おりました。勤め始めの頃でした」

「近頃、彼と会ったこと、あるの」

「全然、音沙汰なしです。あの方、

一方的な人ですから、こちらからは連絡のしようもありません。今でもお目にかかりたいと思います、あ

の方はもう、こんなプレイに飽かれたのでしよう、きつと……」

「書いてもないからね。私とも御無沙汰だよ。年賀状と暑中見舞ぐらいは届くがね。それで、被虐の願望を、山本一章の代わりに、私にぶつけて来たってわけ」

「最初から、辻村さんにお目にかかりたかったのです。でも、ベテランの怖い人のように思われて、あの方宛に便りを出したのです」

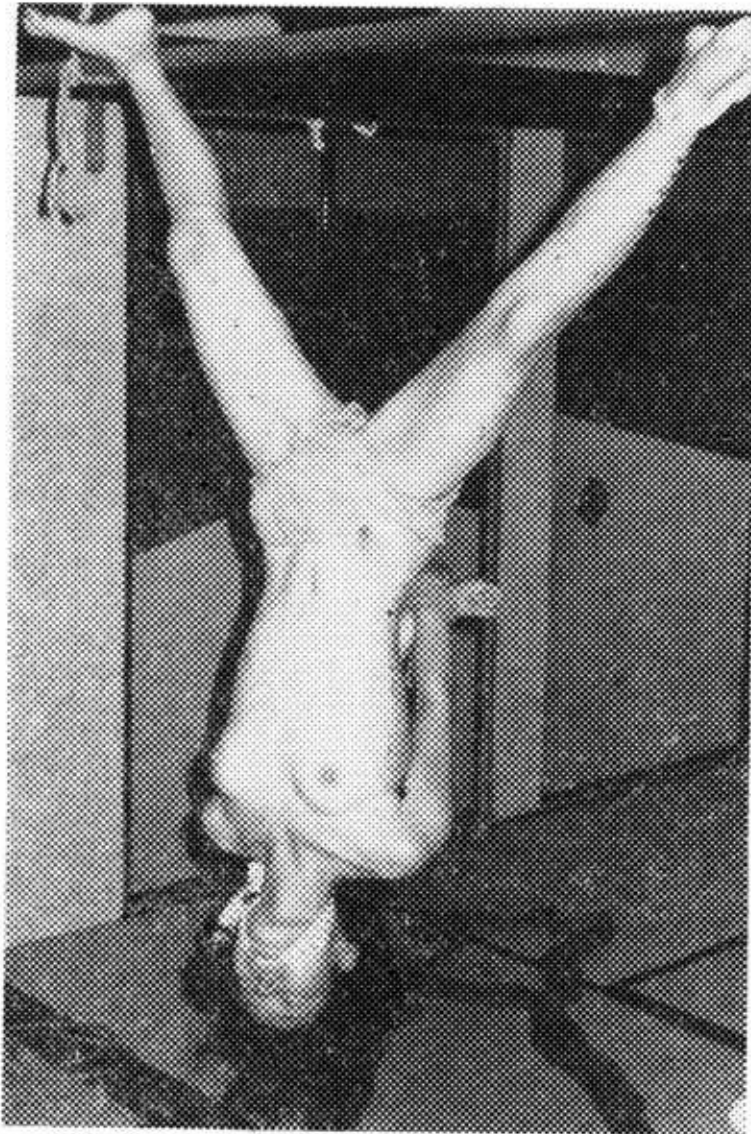
「その気持、分かるよ。谷山久美子は私とプレイしながら、今でも山本一章を恋慕っているよ。トクな人間だ」

まるで台風の眼のように突然ある日『痴人

の糧』を発表し、余勢をかって、一気に私に對抗して、カメラ・ルポを次々書き始め、谷山久美子を最後にして、風のように消えていった山本一章の、ルポの女性に与えた衝撃は今も尾を曳いて大きい。

川越美佐子は、M性の昂進に、久下先生では飽きたらず、竜珠子という化身となって、混血の正体を曝露させてまで、私に近づいたのであった。母と養父の話は、虚構と現実を巧みに交錯させた、彼女好みのフィクションに近かったが、二人の関係は万更の出鱈目でもなく、夫婦プレイに近いことを行っていたのは確かに目撃し、養父が、彼女にも近づこうとしたのが母と娘の相剋となり、奇妙なジェラシーが彼女を出奔させたというのが真相らしかった。

かつて昭和二十八年頃、釜ヶ崎界隈の一廓の今池に住む、若い娘がM願望で、箕田氏と二人、嗜虐の限りを尽したことがあったが、三年後、別人の様に登場し、最初は初めての女性だと思っていたのが、ある個所の特長を全裸にした時、発見し、さては同一人かと気付いたのが、木村洋子である。彼女も無名のM女性から鮮かに化身した女の一人であった。今、ゆくりなく木村洋子の化身を憶い出



し、川越美佐子も亦、あの頃より一段と強烈なM女性と化身して、竜珠子として私の前に登場したことに、私は眼に見えぬ妖しい糸にたぐられる、SM相寄る魂の、奇しきえにしを泌々と感じるのであった。

堅い麻縄を解いてやると、腕に手首に、胸に、さながら烙印のような、深々とした縄痕が、くつきりと白い肌を赤く染めていた。

無言で珠子の手が私の首にかかる。ぐっと抱きしめて、熱気で、ほの酸っぱい、唾液の枯れ果てた口腔に、私の舌端は、ぬめりを与えるように忍び込んでいった。

裸身が私の肌を撫でる。立ちほだかった俤、私と珠子は固い抱擁に、時の流れを忘却していた。

× × ×

ほのぼのとした部屋の雰囲気、岩風呂から戻った久下先生はすべてを察したらしい。無言でニヤリと笑うと、艶々した頬に一層、赤味がまし、うまそうに煙草をふかした。

珠子を膝に抱いていた私は、表の開く音にパツと離れたが、私達の表情で、どうやら、すべてを、お見通しの様であった。敢えて、その事には言及せず、やおら立ち上がると、

「さあ、次は猪吊りといきますかな」と独り呟いて、

「辻村君、やってくれる？」

と、私に問いかけ、少々憶劫であったが、考えてみれば逆吊り二種と、水平吊りをやったに過ぎない。すでに珠子はイソイソと立ち上がって、どうにでもし

てくれといわん許りに、裸身を私達に預けている。折角、わざわざ持ち込んだ木製の滑車だ。こちらで一つ使ってやろうと、その氣になつて滑車を欄間ごしに鴨居にとりつける。

珠子に対する愛情の発露が、いつしか、いたわりの気持となつて、サジストに徹し得ない私は、不甲斐なくも、晒布や猿轡の赤いきれはしを使って、柔らかい布で珠子の両手両足を一つにして括っていた。

「急にお手柔らかだね、どうなったの」と先生。さもあろう。堅い麻縄にうって変わる、いたわり振りだから、先生の思惑外れも無理からぬ次第であった。

「先程、強烈な水平吊りをやりまして、大分痛がっていますので――」

と、苦しい弁解をして、その上から吊り用の麻縄をかけてゆく。

「優しいのね。辻村さん」

珠子が私にだけ、ききとれる小声で、嬉しげに呟いた。

「フフ、痛いめに合わせてやるからな」

言葉とはウラハラに、口調は甘くなる。

この吊り下げは、比較的ラクであった。滑車が私達の力の何十パーセントかを引き受けてくれたからである。フォトを撮ろうとする

いとまもなく、先生は素早くパンティをまくり上げてしまった。又ぞろ、フォトはカットせざるを得ないだろうよ、全くの話——。

そのくせ、めくり上げたパンティの在った辺りに私のカメラは集中する。そこが凡人の悲しさでもあろうか。

人間独楽の一回が始まる。ゆらゆらと宙に揺れる女体を、先生は根よく回転させる。手を離すと、徐々に逆転する裸身に、はずみがついて、急速に廻り始める。ストロボで撮れば停止していても、八ミリか、ビデオなら、嘸かし見事な光景が映像されたに違いなかった。私に代わって、先生の革バンドが加減して、珠子の回転する臀部を、バシリバシリと打つ。悲鳴が断続して廻る。やがて静止し始めたと思うと、先生はローソクをとり上げて立てた。ゆらめく女体に、炎も陽炎のように妖しく揺れて、傾斜したローソクから、熱い蟬涙が、じりじりと流れ始めた。

ガクンと垂れた顔に、愛虐の陶酔が走り、突き出した顎がヒクヒクと震えて、傍にただずんで、じっと見守る私に、まるで、くちづけを求めるかのように、紅唇が繚乱と喘いでいた。先生がローソクを取り上げると、魂消る悲鳴と共に、独特の灼け焦げる異臭がプー

ンと鼻をついたのである。

「いよいよ大詰は、開股の逆吊りだ。さあ、やりましょう」

気負い立つ先生は、荒々しく珠子を降ろすと、手早く縄をといていった。布地での縛りなど意馬心猿の先生にとっては、物足りなかったのであらう。

手首だけで簡単に後手に縛ると愛情をこめて私は珠子を抱きかかえる。片脚をかつぎ上げるようにして先生は鴨居に縛る。大きく広げた両足が戻らぬよう、欄間の彫刻に縄をかけめぐらせて、残る一方の足も、ぐいぐいと縛り上げてゆく。

「そっと離して——」

声につられ、じわじわと体を離してゆくと瘦躯が鮮かに逆さに安定して吊り下がっていた。先生好みの猿轡は、今度は唇を開いて噛みしめるようにして、はめられる。

激しく感情をもつれさせ乍ら、カメラは、その極致をフィルムに納めて行く。

かもしかの様に、すらりと伸びた両肢は、開股逆吊りに、一種の芸術感すら、漂わせていた。吊り責めに次ぐ吊り責めで、流石にM願望に狂おしく沸騰する珠子もかなりへばっている様であった。齒列から洩れる呻きは、

刻一刻と切迫し、苦しげである。

「もう、カメラの方、いいかね」

先生は私に向かって、ダメを押した。

「ええ、相当、撮りました」

「よし、それじゃ、やるよ」

というなり、ぐいと力をこめて先生はパンティを、ビリビリと引き裂いてしまった。

パイプが又ぞろ、妖しく響き始める。逆さに垂れ下がった髪の毛を掴んで、先生はグイグイと引っ張る。苦悶の呻きは一入、昂まってゆく。

「辻村君、うんと熟練した、トルコ娘のサービスをやらそうというのだ。このポーズでねえ。どうだい、いいアイデアだろう」

「まさにスペシャルですね」

「そうだよ、君——。先程、わしは気をきかせて風呂へいっとった。どうだい、二十分ばかり気をきかさんかね」

「いいでしょう」

私には先生の心中が分かっていた。傍に第三者が介在しては、気が散るのであらう。それにしても、この逆さ吊りで二十分は、長すぎる。ずっと吊りっ放しにしておくつもりなのだろうか。そのことが気になって、「気をきかすのはいいんですが、二十分も逆

吊りにしておくんですか？」

「そりゃ無理だろうね。まあ片足ずつでも、ぼつぼつ解いて降ろしてやるから、あんたは心配せんでいいよ」

やれやれ、と私はタオルを握って、多少の未練を残し乍ら部屋を出る。

あの強烈そのものの極限のポーズで強要している久下先生のハレンチな姿が、ありありと臉に浮かんで、カッと熱いものが体内を駆け巡る。湯の中で、この日、始めて私の大脳神経は一点に集中して猛り始めた。

想像が幻想を生み、妄想が情念をきざし、生々しい逆吊りの映像が、蜃気楼のように、黒光りする岩風呂の岩面に浮かび上がるのであった。二十分が、いやに長い。カッキリ二十分に戻るのも気が引けて、幾分の時間をおいて、部屋に戻ると、珠子は後手に縛られた俛、裸身をタタミに転がせて、肩で激しく息づいていた。先生もまた、ゴロリとタタミに寝そべっている。

すべては終わったらしい。先刻、先生が戻ってきた時、その場の空気で察した如く、私も亦、すべてが推察出来たのであった。

「あんたは何なら残ってもいいよ。わしは帰るからね。いずれ又、精しく電話で報告する

としよう。いろいろと有難とう。久し振りに愉しかったよ」

先生は呵々大笑して、立ち上がると、さっと身繕いを始める。台風一過の清々した顔付であった。

「私も帰りますよ、疲れましたからね」

一方的な先生の行動に、半ば反撥しつつ、私も手早く片付け始める。ノロノロと珠子が体を起こし、バツタリ合った視線に、万魁の思いがこめられていた。恨めしげな瞳がツト外れると、彼女は手洗いに消える。激しいプレイの、名残りの熱気が、部屋中にこもっていた。

料亭「H」の道化めいた箱根の関所を先生は先に立ってドンドン下がって行くとフロントに寄った。私と珠子は先に外へ出る。日は未だ赤々と西の空を染め、頬をなぶる晩春の風は、やわらかい。黄昏前の静けさの中で珠子は、うつむいた俛、囁くようにいった。

「こんな私、お嫌い？」

「嫌いじゃない」

「今度、辻村さんとだけ、お会いしたいわ。いけません」

「機会があればね」

何を思ったか、珠子はハンドバッグを開く

と、大急ぎで赤い小型のボールペンで、メモした紙片を、私に手渡した。(スチームバス「J」と、TELが書き込まれ、TELの横に××寮と書いてある。電話してくれというのか。私は黙って交換に、プレイ専用の名刺を渡した。私のネームとTELだけの――

「一章に会いたい？」

「会いたいわ」

「今度連絡があったら、知らせておくよ」

「でも今の心境では、あなたの方に心を走らせています」

私はそっと、珠子の手を握ってやる。力強い撓やかな指先が絡みつく。

「ハントに書きます？」

「多分ね」

「竜珠子としてね、お願い。川越美佐子なんて、もう四年前に消えた見知らぬ人よ。恐らく、もう誰も記憶していないでしょう」

夕陽が、かげった。フロントから、勘定を済ませた久下先生が足早に出てくる。彼の車と一緒にのり込むと、

「どや、精力をつけに、スッポンでも喰いに行かないか」

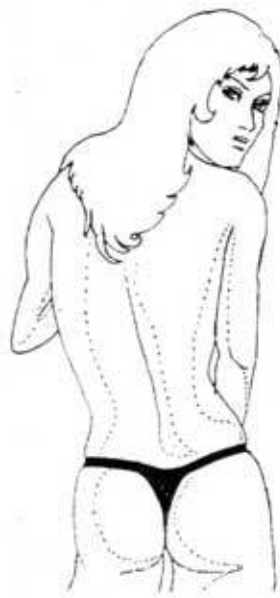
磊落に笑って、先生は大きくエンジンをふかした。

(完)

そのウソ、ホント？

ピンクの褌

八代 令子



中島一郎・画

女だてらに褌のお話なんて……と顔をしかめられるかも知れません。でも、ぜひ聞いてください、とっても奇妙なことですから。そりゃあ、信じられるかどうかは、あなたのご自由ですけど、でも、きっと信じてはいただけないでしょうね、わたくし自身でも

変なことだと思ってるんですもの……。でも、心当たりは、三年も前にたしかにあることはあったのです。

あたくしが、まだ丸の内のOL（オールドレディ）っていうみたいで、いやな言葉）だった頃、課長さんのおすすめで、今の夫、芳夫さんとお見合をし、おつき合いをし始めました。もちろん結婚を前提としたおつき合いですから、わたくしはもとより、彼のほうも気に入った点があったのでしよう。

連日のようにデイトを重ねているうち、愛し愛されているという実感が湧いてきました。わたくし、とっても幸せでした。一カ月ほど経ちますと、二人はデイトのたびにキスを交す仲にまで進んだのです。（ごめんなさいね、あたくし、別におのろけ話をするつもりじゃあなかったのですけれど、つい——）愛し合った二人がそのまま進めば行きつくところまで行くのが自然ではないでしょうか。あたくしは当然のように誘う彼に従って、ドキドキしながらホテルの門をくぐりました。

でも、彼にならあげてもいいと思っていましたから、あたくしは、むしろ期待にふるえながらバスで肌を清めていたんです。

そこへ芳夫さんが入ってきました。ハダカで——いいえ、全裸じゃありません。ビキニの水着よりもっと小さな、黒い布きれを着けていたんです。あたくしは、男の人の下着に

は、こんなものもあるのかしら？ と思ったものでしたわ。

わたくしの初体験はバスのタイル上でしたが、気の遠くなるほど倅せでしたわ。（おのろけばかりで申し訳ありません。でも、もう少し聞いて下さいまし）

ポーツとしたような気持で、わたくし、あの人が身づくろい？ するのを見るでもなく見ていたのですが、入ってきた時と同じように黒い小さな布きれが、いかにも可愛い感じがして、つい声をかけてみたんです。

「変わった下着ね」

「これかい」

と、芳夫さんはニコリしていました。「これは褌の一種でね、ぼくの趣味なんだ。締めると、とても気分がいい。こんなに小さいけれど、特別にオーダーしたんだぜ」

褌のオーダー・メイドだなんて、変なことをする人だと思いましたわ。

「そうだ。今度、持ってくるけど、女性用にデザインしたのが、もう一組あるんだ。令ちゃん、着けて見せてくれよな」

女性用だなんて、いったい、だれに着けさせるつもりで作ったんでしょう。

そして、二度目にホテルで二人きりになった時、あたくしは、芳夫さんの持ってきたピンクの褌をつけさせられることになってしまったんです。ちっぽけなそのピンクの布ぎ

それは、女として、とても屈辱的でしたわ。あたくし、それを着けただけで立たされて、彼にじろじろ眺められるのが恥かしく、顔もあげられないでいたんです。

でも、芳夫さんと同じ下着、いいえ、禪をしているって思うと、なんだかゾクゾクするような気持はありました。それに、体のホンの一部分だけに布ぎれがある、ということはあたくしの全然しらなかった感情が、湧き上がってくるものだったんです。

「令ちゃん、とても素敵だよ」

といって、彼がそのピンクの禪に手を伸ばしてきた時、あたくし、いやって身をかわすつもりだったのが、あべこべに、もたれかかってしまったんです。

気の遠くなるような倅せが、再びあたくしの全身を包んでくれました。でも、あの人、決してあたくしのピンクの禪を取り去ろうとはしませんでした。あたくしも外した覚えはありません。ですのに、不思議なことに無くなってしまったのです。いくら小さいとはいったって、無くなるほど小さいわけではないのですのに――。

「へんだなあ、禪の神隠しなんて聞いたことないよね」

と、芳夫さんは呟いていました。

「どこかへスツとんだのかな」

二人してずいぶんさがしたのですけれど、それは、どこへ行ってしまったのか、とうとう見つかりませんでしたわ。

それからあたくしは、禪がないと芳夫さんに済まないような、あたくしだって何か頼りないような気がして、新たにオーダーしなおした禪を手放せないようになったんです。

今から二年前に、あたくし達、正式に結婚式を挙げましたけれど、ウェディングドレスの下には特別オーダーのフリル付禪をしていましたし、新婚旅行のスーツの下は、お色直し? の禪だったことは、いうまでもありませんわね。

それ以後、禪のプレイをするたびに、芳夫とあたくしの間に、あの無くなったピンクの禪のことが話題になりました。

――これだけなら、わざわざ、お話するほどの奇譚とはいえませんがね。でも、この話はまだ続きがございますの。

結婚してから一年と少し過ぎた頃、あたくしは、妊娠いたしました。周囲の者から、顔を見る度に、まだか、まだかといわれ、あたくし達も待ち望んでいた妊娠で、芳夫の喜びようは、たいへんなものでした。

その嬉しさに心をうばわれ、体のことを気遣ってくれる芳夫と、あたくしの間の話題からは、いつの間にか、消えたピンクの禪のこ

ともまた、消えてしまったのでした。

そして何も心配する兆候はなかったのですが、初産だからいうことだけで、夫はあたくしを大きな病院に、予定日の半月ばかりも前から入院させてしまったのでした。もちろん彼は、毎日、会社の帰りに寄ってはくれるのですが、あたくしは、むしろその心遣いが恨めしいほど、たいくつな半月でした。

でも、いよいよ、あたくしが母となる日が来ました。予想以上の苦しみも、元気なベビのウブ声で一ぺんに、ふきとびました。

ところが、ホッとしたあたくしを世話してくださる看護婦さんや、先生の表情に何か妙な素振りがあるのです。あたくし、とっても不安になりました。ひょっとして奇形児なんかでは? という不安です。第一、男か女かも、まだ聞いてないのです。必死の気持で、たずねました。

「いえいえ、とても元気なお子さんですよ」
先生は優しく答えてくださいました。

「ただ奇妙なことに――」

あたくしはドキッとしました。

「たいへんお行儀のよい赤ちゃんで、ピンクの禪をして出てこられたんですよ。ちょっと失礼して外させて貰ったら、女のお子さんでしたかね――」

(おわり)

カット・岡 たかし



誇りたかき男

広告代理店博通社の広報課長の荒木氏は、極めて明るい性格で、開放的なM派の紳士だった。

仕事に対しても積極的なやり手であろう。女性に対しても、自分からMのプレイをリードして行く、やり方であった。

玉井ひろ美と組んでM写真のモデルになってくれたが、玉井ひろ美に対しても、彼女を単なる平凡な女性として扱おうとした。それ

が、ひろ美の逆鱗に触れた。

かつて、ひろ美の前に現われた男性は、総べて卑しい奴隷として、ひろ美を崇拜する態度で接してきた。それが荒木氏の場合は、ひろ美のストリップパーという職業から、バーの女なみにさげすんだ様な話のしかたをした。

実際は、それほどでもなく、荒木氏のような人ずれのする職業では、相手が男だろうと女だろうとズケズケと不遠慮な話し方をする。

Mのプレイにしても、いままで荒木氏の接してきた女性にはSの女性がなく、すべて荒木氏の方からリードして行くやり方を、そのま

連載・アブ紳士行状記

M 派 交 友 録

— 荒木高実の巻(2) —

鬼山 絢 策

ま、ひろ美に、ぶっつけただけである。だがひろ美は内心、この野郎、と思っただけでいい。話をしている時は別に怒った様子も見せなかったが、イザ撮影となると、俄然、態度に現われた。

部厚いロイド眼鏡をかけて、ニヤニヤと微笑を絶やさず話しかけるところは、藤原弘達のような厚かましさを思わせたが、いま、裸に剥かれて、両手をひろげて、片方ずつ縛られ、鞭代わりの靴べらで眼鏡をとばされ、背中や頭を思いきり足で踏みつけられる、ひろ美の強烈なハッスル振りに、トレードマーク

だった微笑も消えて、驚愕とも恐怖とも思える表情に変わっていた。

うつ伏せになっての責めの写真を数カット撮ったが、腕が逆になって痛いというので、今度は仰向けに引っくり返し、改めて、ひろ美が両手を縛り直した。

私はライトを真上から照らすべく、天井の電灯の笠にライトのコードを引っかけたが、離れてライトを見ると不安定で、いまにも外れて落ちてきそうである。

「これじゃ、危いわ。イヤよ、頭の上に落っこってきたら」

そこでテーブルを持ち出してきて、仰向けに寝ている荒木氏の腹を跨いでテーブルを置き、その上に上がって電灯の笠を取りはずしそのあとへ、ライトのコードを引っかけた。

テーブルがグラグラして足もとが危い。

「ちょっとテーブル押さえていてくれない」

ひろ美が荒木君の頭を跨いで、テーブルをおさえている。電灯の笠をはずすと、埃がパラパラと落ちた。「ウワー」と、ひろ美は逃げ出したが、下に寝ている荒木君は身動きできないから、埃をモロに顔へかぶってしまった。

「あ、ごめんなさい」

私はあやまったが、荒木氏は目をつぶってフーツ、フーツと口へ入った埃を吹き飛ばしていた。

「かわいそうね、拭いてあげるわ」

ひろ美がタオルで荒木君の顔を拭いてやった。一見、親切そうだが、これは自分が乗っかるためには、自分の身体が汚れるから、自分自身のためにやっていることなのだ。

タオルでギュウギュウと拭かれて、荒木氏は痛そうに顔をしかめた。一応、それもカメラに収めた。

「サア、行きましょう。ひろ美ちゃん、皆さんのおなかの上に跨がって下さい」

「よいしょっと——」

ドスンと荒木氏の腹の上に尻をのせる。

「これで顔をなぐる処から行きましょう」

スリッパを取って、ひろ美に渡した。

ひろ美はスリッパの元の方を握って振りあげる。そこをワンカット——次にスリッパを振り下ろして顔にあてる。

「もっと顔を、しかめて痛そうにするのよ。感じが出てないじゃないか。ほんとに殴ってやろうか」

ピシャッと軽くスリッパで、ひろ美は荒木氏の横っ面を殴った。

「痛ててッ！」

「フフ、なにさ、このくらい。痛かったら、十万円、出せっ」

モデル二人には一応、役を振ってある。荒木氏は会社の重役で、ひろ美は、そのおめかけさんという設定。おめかけさんは、旦那が会社の仕事でリベートをとっている秘密を知っている。

旦那に金をせびる時は、それをたねにして脅迫し、責める。Mの旦那は、それを楽しむために金をケチって小出しに出している。

ひろ美がモデルをやる時は何かしらストーリーを組み立てて、それに従った組写真をつくることにしている。ひろ美はストリッパーでもあるが女優でもあり、演技力も豊かだから、役を振った方が彼女自身も興味をもってはりきってやってくれるのである。

舞台の上で

玉井ひろ美のヌードは実にすばらしい。

東宝の水野久美にそっくりな顔立ちだが、アイラインを入れ、つけまつ毛が似合って、妖艶である。身体は水野久美よりも大きく、一米六五ぐらいあるし、体重も六十キロぐら

い、ありそうだ。総体に太り肉（じし）ではあるが、足が長く均齊のとれた、すばらしいグラマーである。

それにも関わらず、いままでは着衣が殆どで、ヌードを撮っていない。というのは、ヌードは、いつでも撮れるという安易感がありまたヌード自体に飽きていたせいもある。

だが、これほど美しいヌードを撮らぬという法はないし、彼女に対しても失礼である。

ちょうどフィルムが切れたところで、彼女にヌードになってもらった。黒いワンピースの背中のファスナーをスーッと下げてクルッと脱ぐと、もうそれでヌードだった。最初からブラジャーもパンティもしてこなかったのだ。

色の白い、きめのこまかな、いい肌をしていた。引き締まった弾力のある肌は、彼女の平素の行ないが、存外、規則正しい生活をしているのではないかと思った。御乱行の激しい女では、肌に艶がなく、皮膚もたるんでいるものだ。

荒木君は、まぶしそうに下から、ひろ美の裸体を見上げて、

「いい身体してるねえ」

身体が楽になったので、そろそろ得意の、

おしゃべりが出はじめた。

「フフ、商売ものだもん」

ひろ美は大きく足をあげて、荒木氏のおなかの上へ跨がった。

「重いでしょ」

「くすぐったいよ、モジャモジャして」

「バカ、何言ってるのさ」

ようやくフィルムが入った。消したライトをつけて、私は鞭代わりにしていた金属製の長い鞭べらを、ひろ美に渡した。

「これを両手に持って、喉のところへ当ててグッと押してみて下さい」

これは、なかなか、いい写真である。

「重役さん、もっと苦しそうにして下さい」

「コラッ、十万円、出せっ。出さないと、こうやって首を締めちゃうぞッ」

腕に力が入る。

「ウッ、苦しいよ。十万円、出すから勘弁してくれ」

「ばかに弱気ですね。そのくらいでネをあげる金じゃないですよ。いくら重役さんでもね」

「そうよ、口先だけじゃ、だめだよ。ほんとに出すか」

「出すよ。出すから、あんたの蜜を吸わせてくれよ」

「ねえ、十万円でなくてもいいから一万円、出す？　ほんとによ。そしたら、いくらでも吸わせてやるわ」

「俺、今日あまり持ってねえんだ」

「それみる、この野郎。口先ばかりで、よくも十万円を出すなんてデタラメを言いやがって！」

ひろ美は足をあげて、額を踏んだ。

ひろ美の身体が、セリ出して胸のあたりへ跨がる。見下ろす、ひろ美の眼ざしはサディスティックに、あやしく、ひかってくる。

「あんた、舞台でそうやったこと、ある？」

私は前々から質問してみようと思っていたことだった。

「あるわよ、大阪の天満座で、舞台から突き出しの一番、前へ行ったら、お客が花道へゴロリと仰向けに寝ちゃうのよ。上から乗っかってやったわ」

「大阪じゃ外人のストリップが、よくやるよね。あげられなかった？」

「大丈夫よ。お客が大勢、二重三重に取り囲んじゃったからね。その人垣の中なら、何やったら大丈夫よ。そんな時は、こんなまだる

「つこいこと、してなかったわよ。いきなり、こうよ」

私のテンポが遅いので、焦れたのか、ひろ美の方から、きっかけをつくってきた。

早晚、そこにおちつくのは、三人とも分かっていることなのだ。

「なるほど、人垣の中に密室が、できたか」私は冷静にピントを合わせた。

ここまでくると、さすがに心臓の強い荒木氏も目を閉じてしまった。

ひろ美は、いままで最初におさえつける時は、膝を立てて腰を浮かし気味にし、重量の負担をかけぬように加減するのが常だったが今日の荒木氏は、ずんぐりむっくりして、タフだと見たのか、それとも、まだ肚に据えかねたのが残っていたのか、今日は最初からドッシリと尻を落としてしまった。

荒木氏はテレビのコマーシャルなどで、人氣者のテレビタレントや、モデルのかわいい子ちゃんなどを使っているの、ちょっとやそつとの美人やグラマーなど子供扱いにしているのだが、今夜の玉井ひろ美にだけは、完全に圧倒された、かたちである。

股の下に征服してしまえば、ひろ美にとっては、ストリップ小屋にやってくる助平な客

と何ら変わらない無価値な一匹の男にすぎないのだ。

彼女は誇らし気に、女王の貫録を、その重味とともに、哀れな奴隷と化した男に味あわせていた。

「そんなことして、お客は怒らないの？」

「フフ、怒りゃしないわよ。そうされたくて自分から引っくり返ってきたんじゃないの」

ひろ美は片膝を立てたり、足をひらいたりすばめたりして、私が注文をつけなくても、すでに何回かの経験で、ポーズに変化をつける要領を心得ていた。

ある柔らかい物体の上におかれた女性の太股というものは、どうかした拍子に、平べったく、巨大な肉塊となって、おおいがぶさりに敷いたものの自由を、完全に制してしまふ。

その巨大な肉の壁に両方から挟まれて動きのとれなくなつたところで、真上から更に否応なしの圧迫を喰い込むように加えるのだから奴隷としては、かなり苦しいはずである。

この「絵」は何度、描いても美しいものである。

現代は女性上位時代と言われるが、この絵ほど端的に、それを現わしたものはない。

そこには何の説明も註釈も要しない。まことに分かりやすい、世界各国の、どの人種が見ても分かる男性征服の構図である。

それでいて細かく分けられ、いくらでもポーズに変化がつけられるのである。

両股を下ろしても、そのひらき具合、すばめ具合で、敷かれたものの、かたちも変化してくるし、片膝を立てても、上体を反り身にしても、かがみ加減にしても、それによって女主人の意図するところが、形にあらわれてくるように感ぜられる。

ひろ美は、ようやく苦悩の色を示してきた荒木氏に向かって、

「さっき、あんた、あたしに旦那がいるか、いないかって聞いたわね。教えてやるわ。あたしには旦那とか亭主と名のつくものは、いないわよ。だけど好きなひとは、いるわよ。

あたしの家へ泊まったり、ホテルへ泊まったりするのよ。ゆうべは、あたしの家へ泊めてやったのよ。朝まで寝かさなかつたわ。フフ、フフ、どう？ わかつた？」

ここへきてこの言葉は、荒木氏に大きな刺激を与えたようである。玉井ひろ美は心憎いまでにM派の心理のポイントを捉えている。

ひろ美の言ったことは嘘かもしれない。思

いつきのアドリブだったかもしれない。またほんとうかもしれない。だが、タイミングがいかにも、よかった。

いま——この状態で言うのが、押しひしがれた荒木氏にとって一番こたえることを承知して言ったのである。彼女自身も、男を責めながら、ストリーを描き、それによってプレーを盛り上げる、すべを知っているのだ。

こうなると私の方が彼女の描いたストリーにのって行くことになった。

「そう、あなたには恋人がいる、若いハンサムのね。その恋人と行く行くは店を一軒、持ちたいと思っている。そうなれば重役さんはお払い箱だ。金さえ絞り取っちまえば、あとは汚れを拭いた、ちり紙のようにトイレにポーンと捨てちまうつもりでいるんだ」と助言した。

荒木氏の顔が、まっ赤に紅潮した。

六十キロ近い重量を顔の上にのせられているためか、いや、それもあるが、ひろ美のせりふが、口からナイフのように荒木氏の心臓を刺したのだ。

「ウ、ウー……」

獣のような、うなり声をあげた。

「もう、お店が買えるぐらい巻きあげた？」

私はシャッターをきりながら、ひろ美に聞いた。

「そうね、まあ、いい線まで行ってるけど、もう少し絞ってやらないとね。コラ！ 十万円出せ。出さないと息の根とめちゃうぞ」ひらいていた両股がグッと閉じられて、肉の万力に力がググッと加わる。

「ウ、ウッ——」

と荒木氏が、うめく。

苦悶する荒木氏の顔を見下ろしながら、ひろ美は激しく身体を前後に揺り動かした。

荒木氏の顔は、もりもりと盛り上がる肉塊の中に埋没して、鼻も目も見えなくなり、僅かに片目だけが隙間から見え、その目が昂奮の極に達して、目の玉が、とび出るほどに見開かれて、残酷な女主人を見上げている。

遂に、こらえきれなくなったか、左手で床をバタバタと叩いた。右手は、ひろ美の膝で押さえつけられて自由がきかなかった。プロレスの「参った」のサインだった。

ちょうど私のフィルムも、きれた。

「ストップ！ ひと息、いれましょう」

ひろ美は、それでも直ぐ退こうとせず、フオールした相手の頭を足で二、三度、踏みつけるレスラーのように「ウムッ、ウムッ」と

力を入れて押し潰しにかけておいてから、ゆるやかに足をひらいて許してやった。

一巻の終わり

「ああ、おどろいた。すげえなあ、あんたってひとは……」

息を吹き返した荒木氏は、ようやく自分を取り戻して、又おしゃべりが出来るようになった。しかし、その言葉には力がなかった。

「フフフ、これでも遠慮してやってるのよ。はじめてのひとでしょ、だから、加減してあげてるのよ」

「俺、ちょっと風呂へ入ってくる」

荒木氏は起き上がるとバスルームへ、とびこんだ。

ひろ美は、いたずらっぽい目で私を見てウインクした。

「少し、きつ過ぎたかな」

「そんなこと、ないわよ。あのひと、存外タフよ。まだ平気よ、あのくらいじゃ」

「分かるの？」

「そりゃ、分かるわよ、手ごたえで。手ごたえじゃなく、なにこたえて言うのかな。アハハハハ」

ひろ美は男のような太い声で笑う。

「まだ動いてたもの。舌の動きがとまった時が、ほんとに参った時よ」

ヌードのまま椅子に腰かけて煙草を一本、抜いたので、ライターで火をつけてやった。

「なるほど、そういうもんかな。だけど、それなら何故『参った』のサインを出したんだろうな」

「あのひと、こらえきれなかったのよ。一巻の終わりを、やっちゃったのよ。あのひと、足を、ずいぶん、動かしていたもん」

「あッ、そうか」

私はカメラの方に氣をとられていて全然、氣がつかなかった。それと荒木氏が足を動かしていたのは、ひろ美の陰になって、私からは見えなかった、せいもある。

荒木氏は、これまで数多くの女の子を、こなしている経験豊富な人だと思っていたからまさか、あの程度で参ってしまうとは思わなかった。

だが荒木氏にとっては、ひろ美のような積極的なSの女性は、始めてだったのだろう。それだけに、いままでない激しいショックを受けたのかもしれない。

荒木氏の風呂は長かった。

水音がしないところをみると、身体を洗っているのではないようだが、何をしているのだろう。

「あの人はね、自分の屈辱を受けるところを誰かに見てもらいたいという慾望が強いんですよ」

「ヘーエ、変わってるわね。でも、そんなもんじゃないの？ マゾのひとって多少は誰でも、そういう氣持があるんじゃないかしら」

「そうね、自分の一番恥かしいと思うことを隠そうとする理性と、見てもらいたいという慾望とが、自分の心の中で、かみ合っているんだね」

「舞台へ仰向けに寝ころがって、跨がってくれというゼスチュアをする人だって、やっぱり、まわりの人の見ている前でやられるという、その刺戟が欲しいんじゃないの。それと同じよ」

「そうね、あの人の一人よりは大勢の人にってもらうことを欲するし、更に、見てもらっては一番、困る人に見てもらいたいという慾望が強いんだね。たとえば自分の子供とか親兄弟とか、更には自分の細君などが最高なんでしょう。だけど事実上は、そこまでは踏みきれないらしいけれどね」

「それじゃ、恋仇に見られてるってのは、どう？ かなり刺戟が強いんじゃない」

「そりゃそうだ。だから、さっき、あんたが言った言葉ね、あれが、ずい分、利いたんだよ。あれ、ほんとのこと？」

「ウフフフ、どっちだっていいじゃないの。そんな、せんさくセンセらしくもないわ」

「いや、これは失礼。私も興味をもったもんだからね」

「ほんとの方がいいんじゃない。効果的に」

「その通り。とにかく、すばらしいタイミン

グだった。あなたの本能に敬服しましたよ」

「何の本能？」

「いや、SMに限ったことじゃない。あなたは舞台でもケースバイケースで、ああいう当意即妙のアイデアが、ひらめく、ひとだと思

たんだよ。振られた役柄になりきる女優としての一番大切な才能をね」

ほめられると満更でもないらしく、煙を天井に吹きあげて、目を細くした。その表情が美しい。

「こんどは、どんなの、やるの？」

「そうだ。いま、あんたが言ったように、ラ

イヴァルに見られているという設定が面白いね。あんたの恋人、若いハンサムの青年が、

こっち側で見ているというのが、彼の喜びそのうなストーリーだよ」

それにしても、荒木氏の風呂は長い。或はこれで今夜は、お終まいにしてくれと言うのではないかとも思った。

バスから出て来た荒木氏は、テレくさそうにモジモジとしていた。見るとタオルを腰に巻きつけて出てきたのである。

「パンツを濡らしちゃったもんで……」

私は、なるほど、ひろ美の言ったことが、ほんとうだったと、この時、はっきりと確認した。

「疲れたでしょう。どうします。今夜は、このくらいにしておきますか」

「イヤ、僕は平気ですよ。そちらの都合で続けるなら、まだ相勤めますよ」

荒木氏はプライドを傷つけられた時のように言葉を強めて言った。

ひろ美は煙草を吸いながら、顔を動かさずに、ジロリと荒木氏を横目で見た。そういうとき、一瞬、ひろ美の瞳にサジスティックなひかりが流れる。それが又、例えようもない凄艶さを見せる。

「あ、この表情が欲しいな！」
と思う。この表情は、演技の上で生まれた

ものではなく、彼女自身の中から発見されたほんものの表情だからだ。

「この野郎、性懲りもなく、まだ虐めてもらいたいのか」

と、その目は言っているからだ。この目を見て私も制作意慾が盛り上がった。

セルフタイマー

荒木氏が、ヌードは勘弁してくれと言うので、ワイシャツを着て、ズボンをはいてもらった。

一方、ひろ美の方は、変化をつけるために頭をスカーフのような布で巻き、腰に赤いタオルを巻きつけてもらった。

「今度はね、旦那と別れるシーンを撮りましょう。もう、お金も絞れるだけ絞ったし、お店を買う資金も十分できた。これからは恋人の若い青年と二人でバーを経営して、あなたは、その店のマダムになろうと思っている。ちようど、うまいチャンスがきた。あなたが恋人の青年とイチャついてるところへ旦那がやってきて「間男、見つけた」と怒る。あなたはこれ幸いと、そんなら別れようと切り出す。旦那さんの方は女に惚れきっているから

ここで主客てん倒して、どうか別れないでくれ、と旦那さんの方が哀願する。そこで、あなたは恋人の見ている前で旦那さんを虐めて見せる——と、こういう筋で行きましょう」

「旦那様の暴落か。結構ですよ。何でもやりましょう」

荒木氏は大橋巨泉の口調をまねして、ニヤニヤ笑い、ムードを、やわらげた。

「それじゃファーストシーンは、旦那が入ってきて怒ってるところ。ここはネクタイと上衣をつけて下さい」

「あたしの彼氏は、どうするの？ センセがなるの？」

「いや彼氏は、こっち側に居る——というつもりでやるんだよ」

「だってカメラに入らなきゃ、居る証明がでないじゃないの」

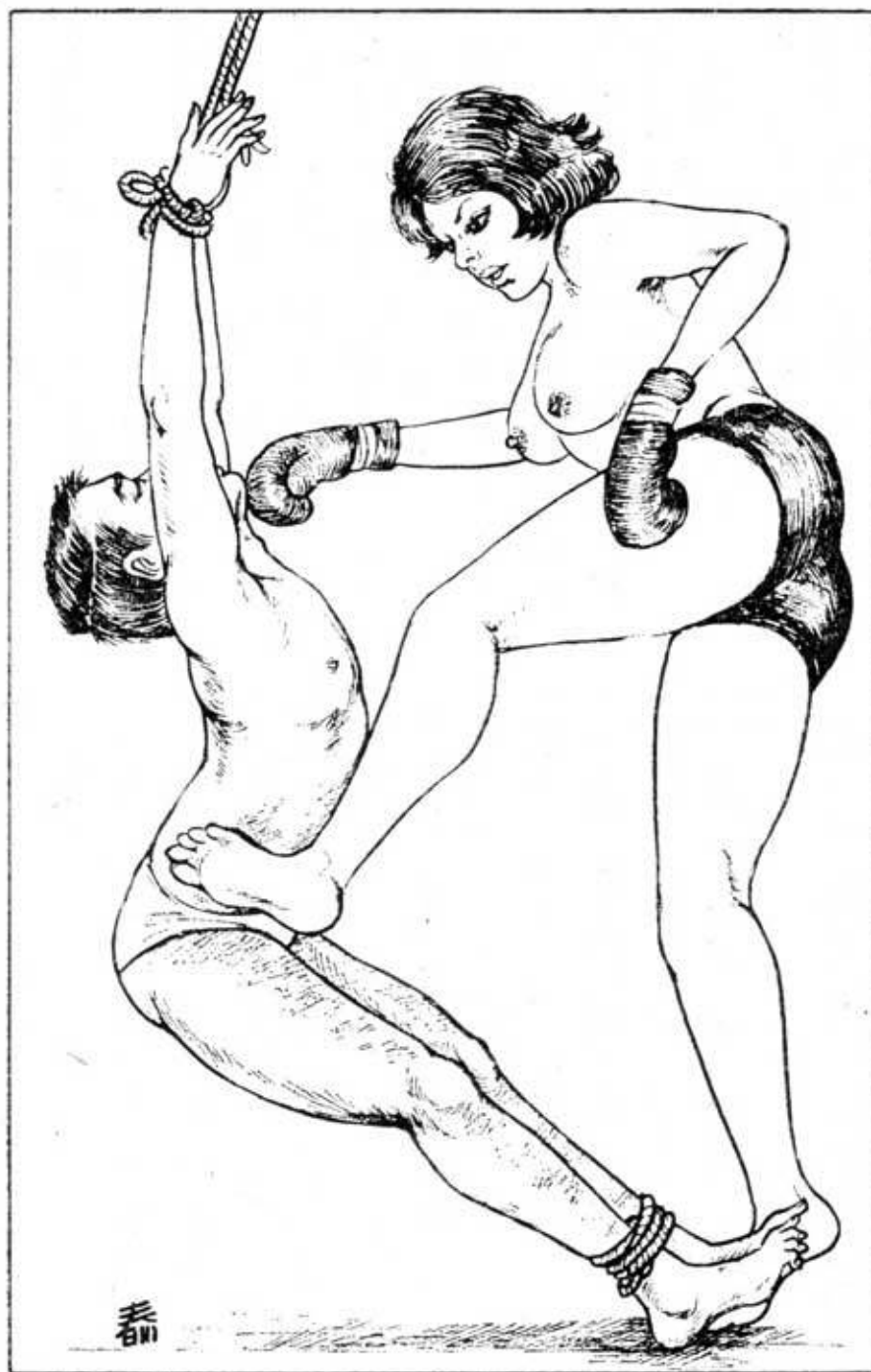
「ハンサムの青年というのにゃ、ほど遠いからね」

「あら、そうでもないわよ。フッフ」

「じゃ、後姿だけ入れよう。ファーストシーンだけね」

そこで蒲団を敷き、私も裸になって、ヌードの、ひろ美を抱いた。いままで何回も、ひろ美をモデルにして撮ったが、ひろ美の肌に

読者ギャラリー『甘い痛撃』春川 ナミオ



手を触れたことはなかった。写真を撮っている間は、その女性が、どんなに美しくても、魅力的でも、肌に触れたいという気持は全然起こらなかった。

それが今、あぐらをかいだ私の膝の上にドッシリと腰を埋めて、ひろ美が肌をピッタリと、おしつけてきた。

「仲よくしましょうね」

笑いながら私の目をジッとみて、ひろ美は

片手を私の首に巻きつけてきた。

むっちりとした乳房が、胸にひしゃげるほど、おしつけられてくる。私も手を回して、ひろ美を抱いたが、指の先が乳房に触れるのを避けて、胴なかを抱いた。

ひろ美の肌は、きめが細かく、色が白くてほんとに餅肌と言う表現にピッタリであり、弾力に富んでいた。

私達の前に荒木氏が仁王立ちになって、私

達を指さしながら怒っている——というポーズをつけた。

位置の決まったところで、ひろ美を振りほどいて、カメラに三脚をつけて、セルフタイマーを四十五秒に設定して、ピントを合わせた。ライトの方向を変えたりしてセルフで撮る場合は、まことに手間がかかる。

シャッターを押してジーンとセルフが鳴り出すと、私は「一、二、三……」と秒を数えながら、大急ぎで元の位置へ戻って、あぐらをかく。その膝の上に、ひろ美が大きな、お尻を落として、片手を私の首へ巻きつける。身体は私の方を向いているが、首だけ振り向くように荒木氏の方を見る。ひろ美の、やわらかい乳房がピッタリと私の胸におっついてくすぐったい。ポーズができるまで二十秒とかからなかった。まだ二十秒以上ある。その間の間の悪いこと。荒木氏が怒った顔のまま指さして、動きをとめている。

「長いわね」

振り向いていた、ひろ美が私の方へ顔を向けた時、カチッとシャッターが切れた。

「だめだよ、こっち向いちゃ！」

私は思わず大きな声を出した。

「御免なさい。シャッター、何秒かかるの」

「四十五秒さ。そんなに要らなかったかな」
そこで三十秒に切り替えて、もう一枚、撮った。

今度は間合いが分かったから、ゆっくりやって、ちょうど間に合った。ひろ美はシャッターが切れた瞬間に首を回して、私の頬に接吻して笑った。これは荒木氏にあてつけるための、いたずらである。

次は荒木氏が上衣を脱いで、あぐらをかいている。その前にタオルを腰に巻いただけのひろ美が長々と寝そべって、手枕をして、煙草をすっている。

「二号さんが居直ったところ。どうでも勝手にしやがれ、といった格好。いいですね」

そのカットが済むと、次は旦那さんが折れて出て、別れないでくれと頼むところ。ひろ美は片足を大きく上げて旦那の肩にかけ、見せびらかす。

「ハイ、そのポーズ！ ひろ美さん、視線はカメラの方を見て。つまり、こっちに君の恋人が見ているんだからね、こっちの方を見て笑う」

「さっきの見幕は、どうしたのさ。ええ？ 間男だなんて、ちょんまげ時代のせりふなんか使いやがってさ。旦那づらするなよ」

「でも、お前には何百万という金をやっているんだよ」

「当たり前じゃないか。ひとの身体を、いいだけ舐めやがって、もう、てめえの舌にも飽きたから、クビだよ」

「そ、そんなこと言わないで、ね、考え直しておくれよ」

荒木氏もムードにのってきて、アドリブのせりふのやりとりが板についてきた。

「フッフ、そんなに、あたしに惚れてんの。あたしの、どこがいいのさ」

「全部だ。どこもかしこも……」

「バカヤロ。いい年して、何言ってやがんだい」

ひろ美は肩へかけた足で荒木氏の横顔を蹴つとばした。荒木氏の丸い身体は、まりのように引っくり返った。

「ハイ、そこで両手をついて頭を下げ、哀願する」

「クビだなんて言わないでくれ。サラリーマンにとっちゃ、クビと言われるのが一番、恐いんだよ」

「フーン。重役になっても、やっぱりクビは恐いのかい」

「ねえ、この通りだ。僕を捨てないでくれ」

荒木氏はペコペコと、ひろ美の腰に向かって頭を下げ、両手を合わせて拝んだ。

「情けない野郎だね。これで、会社じゃあ重役だなんて、えばってやがるんだから笑わせよ」

ひろ美は寝そべったまま片足をピンと垂直に立て、それを、くの字に曲げて平伏した荒木氏の頭の上にドスンと落として踏みつけ、
「ねえ、あんた。どうする？ こうやって頭を下げてきてるんだから、もう少し、つないでおいてやろうか」

カメラの方に向かって話しかける。

「そうだな。いままでの義理もあるし——」

「義理なんかいいわよ。出した金の分だけ、ちゃんと、それだけのことはしてやってるんだから。もったいないわよ。あたしほどの美人を、こんな助平野郎のめかけみたいな、まねさせられてたんだから。ながい間、屈辱にあまんじてきたんだからね。やい、サア、これで、お別れだからね。せめてもの、お情けに最後の味を味あわせてやるよ」

踏んでいた足が首へかかると、枕でもたぐり寄せるように、荒木氏の頭が太い足の間に挟まれた。彼女が上になった足を、ちょっと弛めるたびに、荒木氏の首は、まるで吸い寄

せられるように、根元の方へ近寄って行った。

その、ひとこまひとこまを撮って行った。アングルも変えて撮った。

「サ、もういいだろ。これでお終まいだよ」「そんなこと言わないで——じゃ最後の蜜を吸わせてくれ」

「こんちく生。図々しい野郎だ。よし、十万円、持ってこい。そしたら可愛がってやる」「持ってくる。必ず持ってくるから、いま吸わせてくれ。お願いだ」

ひろ美はサッと半身を起こすと、仰向けに寝た荒木氏の頭の方に回った。

「お前のマゾ度合を見てやるわ」

荒木氏のタオルはほどけてしまっていた。荒木氏は、肌の色と同じぐらいに色白だった。女性との交渉が少ないか、多いとしても

——ご投稿下さる方へお願い——
各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメーヅ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

存外、淡白なのではないか。その色白に変化が起こった。

荒木氏にとっては顔が全然、見られてないということ、これが救いとなっているのではないか。婦人科の診療室には中間に遮蔽幕があるし、外科の手術でも、下半身の場合は両眼を掩う。これが羞恥を大きく救っている。それと同じなのだ。

ひろ美は親父の顔に重圧を加えながら、笑って息子の方を見ていた。

「うんと背のびしてそれだけなの。フフフ」

ひろ美はカメラの方に笑顔を向けた。

「いいかい。これから十万円分いじめてやるけど、それ以外はシャットアウトだよ。わかっているんだろね。アハハハ」

ひろ美の野太い声が部屋中に響きわたるほど大きく聞こえたように思った。

「ねえ、あんた。こうやってやるくらいならいいでしょう。お金も入ることだしさ。これで喜んでるんだから、これくらいの情けは、かけてやっても、いいでしょう。どう？」

私の方に向かって、問いかける。

顔の上で、いろいろポーズを変えて撮っているうち、五分もたたぬうちに荒木氏は、見事に玉砕してしまった。

「あら、ダメねえ」

私は掌を上にあげて、退くように、ひろ美にサインした。

ひろ美は中途半ばな、物足りなさそうな表情で、気だるそうに立ち上がると、

「お風呂へ入ってくるわ」

とバス・ルームへ消えた。

私は次のシーンの構想も描いていたのだが意外にもろい荒木氏なので、今夜は無理だと思ひ、ライトを消して、コードを外してしまったり、帰り支度を始めた。

荒木氏は目をつぶって死んだようにのびていたが、突然、立ち上がると、黙って風呂場へ入って行った。

あとかたづけを手伝ってもらうつもりだったが、しかたがないから私一人で、置き変えた家具を元の位置に戻したり、蒲団をきちんと直したりして、最後に熱のさめた写真電球をボストンバッグにしまった。

その時、風呂場の方で、パシーンと、音がした。

ひろ美が笑いながら濡れたままの身体で出てくると、バスタオルで身体を拭いた。

いまの音は恐らく、ひろ美が荒木氏を殴った音であろう。

「どうしたの？」

「ウフフフ、何でもないわ。もう終わりね」

「うん、彼も疲れたろうからね」

「そうでもないわよ、あの人。フフフ、でも今日は、お終まいにしましょう」

ひろ美はサッサと洋服を着はじめた。

「あたし、先に帰っていい？」

「ああ、どうぞ。いつも遅くなってしまつて悪いね。車、呼ぼうか」

「いいわ、拾うから」

ひろ美は何か、あわただしく部屋を出て行った。

入れ違いに荒木氏が、バツの悪そうな顔をして出てきた。

「あ、彼女、帰っちゃったんですか」

「ええ、疲れたでしょう。御苦労様でした」

「強烈でしたね。あんなの始めてでしたよ」

眼鏡をかけ、服を着ると、ようやく、いつもの荒木氏らしく、にこやかな微笑を、たたえながら、

「すみませんが、彼女の住所と電話番号を教えてくださいませんか」

ひろ美は荒木氏を避けるようにして帰って行ったので、荒木氏に彼女の住所を教えることは、彼女が迷惑するのではないかと思った

が、さりとて断わる理由もないので、

「住所は分からないのですが電話番号なら」
実際、私は電話番号しか知らないのだ。

ハナもひっかけない

それから四、五日して私は、銀座の喫茶店で荒木氏と会い、写真をあげた。

「彼女のところ、何度、電話しても留守なんですよ」

写真を見ながら、荒木氏は悩ましい表情でいかにも思いつめた風だった。私の目を、じっと覗きこむようにして、

「あのひと、あなたの愛人ですか」

「いや、写真だけのつきあいですよ」

「僕と二人だけで会っても構いませんか」

「もちろんですよ。そんなこと私が阻止する権利なんてありませんよ。どうしたんですいうね。彼女、旅にでも出たのかな」

その後、春木君が、ひろ美と二度目の写真を撮りたいというので、ひろ美のところへ電話した。

「ちょうど、よかったわ。今度、大阪の道頓堀劇場へ出るのよ。あした、行くの」

「へエ、内外ミュージックやめたの。あそこ入りが悪いからね」

そんなわけで、始めて彼女に断わられた。

「こないだの荒木さんね、ずい分、あんたを探してたようだけど、その後、会った？」

「会ってやってもいいけど、何だか、あの人へんなのよ。二万円でどうだなんて、ひとをホステスか何かと間違えてるのよ。からかってやろうかと思ったけど、やっぱり二人きりじゃねえ、事が荒立つでしょ。そりゃ、あたしは平気よ。喧嘩したって。だけどセンセのお友達だから悪いでしょ。だから会わなかったのよ。あたし面倒くさいこと、きらいだもん」

「あの晩以来、彼は、お熱が上がったようですね。一度ぐらい会ってやればよかったのに」
「あたし、嫌いな人にはハナも引っかけないのよ。イヤだわ、あんなやつ。ごめんなさいね」

その後、荒木氏はアメリカへ行つたとかで会っていない。

(この項終わり)

体 験 告 白

A 感覚に溺れて



夫 好 黄

程度の差こそあれ、人が生まれ落ちて初めて覚える快感は、尿道を進る暖かい小水の感触であり、括約筋を押し拡げて零れ落ちる糞便の感触ではあるまいか。

砂糖菓子の甘さを徹底的に好んでいた子供たちが、やがてコーヒーへと、その嗜好を変

えてゆくように、人は成長するにしたがって排泄時におけるある素朴な、極めて原色的な快感を、忘れてしまっていくように見受けられる。

それは、通り過ぎてきた幼年期の遺産として、記憶細胞の奥深く、容易にアクセスし得

ない領域に、閉じ込めておかねばならないものなのだろうか。

異性との交渉によって得られる感触のみが成人した人間にとっての正常な快感なのであるだろうか。

神の摂理は、常に賢明である。

人々が、何らかの理由によって、幼年期の思い出を忘却の彼方に追いやってしまったように、A 感覚も又、今さら陽の目を浴びるものであつてはならないのであろう。

だが、その人が成人して尚、甘いものを好きだというだけの理由で、彼の味覚が幼稚であると極めつけてしまうのは早計であらう。

古いもの、素朴なものからは、往々にして人間が忘れかけていた、極めて感動的な事実が発見されるものだからである。

○

私は小さい頃、尿道を進り出る小水を眺めて、ひどく興奮したことを覚えてい

右も左もわからない子供たちが、自分の性を弄るのは、それが性器であるからではなくて（もちろん快感を覚えるためでもない。

マスターベーションは、もっと成熟した意識下で認識されるものである）そこが水を噴き出す不可思議な器官であるからである。

そして、なによりも大切なことは、排泄の様子が目に見えるからということである。

成長した人間が、とりわけアヌスには何の興味も示すことなくA感覚を失おうとしているのは、そこが目に見える位置にないという事と密接な関係にあるのではないだろうか。

もしも、自らのアヌスが、性器と同じように目に入る位置にあるならば、子供たちは、同じようにアヌスを弄ったことであろう。

○

私が、浣腸プレイに興ずるようになって知った、いわゆる性感とは、およそ種類を異にする、その快感が、激しい便意に耐える苦痛と、その報酬としての爽快さに起因するものである以上に、実は、体外から加える嘴管という異物の圧迫感が、大きく作用しているのではないかということに気づいたのは、それほど昔のことではない。

浣腸器の細さに物足りなくなつて、肛門拡張を思いついた時、「この目で自分のアヌスを見る」という、久しく忘れかけていた命題に、直面したのであった。

当時、下宿をしていた私がプレイ出来る所といえば、唯一の個室、即ち部屋の押入れの中以外には、なかった。

私は、この暗い個室に、おまるを持ち込みエネマシリンジで、せっせと液を注入して、楽しんでいたものである。

命題を発見したからといって、貪乏学生に立派な装置をセットできる筈もない。

卓上蛍光灯スタンドを倒し、下から照らしておいて、片膝をついて私は、その上に跨がるように中腰になった。

鏡を、倒したスタンドの足にもたれかからせ、股間越しに、鏡に映った自分のアヌスが見えるように調整した。

食塩水による浣腸は、その性質上から筋肉を収縮させてしまうので、拡張には不適當であるということも、体験から知った。

千CCから千五百CCほどの石鹼水で腸内を十分に洗浄し、いよいよ、拡張にかかったわけであるが、さて拡張器に何を使うかで、だいぶ考えた。

大切な、わが身である。めったな物は使えない。人間の腸内は非常に柔らかい粘膜で覆われており、したがって固いものでは粘膜を傷つけてしまうであろうという恐れがあったからだ。

肛門科の医院などでも、ガラス棒等が一般には使用されているようであるが、素人の自

分がやるとすれば、下手をすると腸の曲部を痛めて、出血する可能性がある。

考えに考えた末、私は太いソーセージを用することにしたのである。

直径三センチ弱、長さにして十七、八センチほどの魚肉ソーセージを、熱湯で表面を柔らかくした後、慎重を期して十分にオロナイン軟膏を擦り込んだ。

次に、フィンガー・サックを着けた人差し指で試してみた。

いよいよ、ソーセージの出番である。急にスッポリという具合に行くわけもないので、用心深い徐行運転という格好で進めてみた。

肛門の位置から察して、大腸へは、まっすぐ上に続いているように思っていたが、実際には大きく曲っていることも、この時に実感で知ったのである。

全部がスッポリと納まりきった時は、さすがに出てくるかどうか心配であったが、少し力むとすぐにソーセージの端が顔を出した。安心して二、三度、繰り返してみたが、その鏡に映る様子は壮観ですらあって、私に未知の感激を与えてくれた。

私は、自身の器官の持つ、不思議さに溺れ

た。又、力を入れてみる。端がのぞく。力をぬいてみる。端が隠れる。

一センチほどが限界で、それ以上になるともはや腹筋の作用だけでは駄目であることも

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

| | | |
|-----|-----|------------|
| 一月分 | 1冊 | 三五〇円(送20円) |
| 三月分 | 3冊 | 一〇五〇円(送共) |
| 半年分 | 6冊 | 二一〇〇円(送共) |
| 一年分 | 12冊 | 四二〇〇円(送共) |

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上のお申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

分かった。

鏡に映る、別世界の生きもののよう動きに、私はひどく興奮した。

常に攻撃側にある男性としての本能を自覚

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

している私だけに、この感覚は尚更のこと、一種独特のものであった。女の気持は、こんなものなのであろうか、と分かるような気がした。

私は時のたつのも忘れて、鏡にうつるアヌスプレイに熱中していた。

○

もっと太いものとなると、ソーセージではばかでかくなってしまう、とても使えない。かといって、バイブレーターやガラス棒では危険なので、私は太いソーセージを丹念に削って、太さを調節した。

せいぜい直径にして三センチ半ぐらいまでで、それ以上になると、とても痛くて手に負えるものではなかった。

したがって、卵を使うなどということは、よほど小さなものでも探す以外に、不可能であるように思われた。

太さを諦めて、私は長さに挑戦した結果、例のソーセージなら、現在、二本は可能というところまで進んでいる。

鏡に映すという単純な着想が、私だけの世界に新境地を開く手掛かりになったようだ。

被虐の旅シリーズ

異国の椅子

由利美千子

午前十時に私たちの乗ったバスはホテルの前を出発した。

ロサンゼルス道路は市全体の面積の半分をしめているそう。スースーと、よどみないスピードでバスは走っていく。

日本の高速道路のような道なのだが、フリーウェイといって、通行料はいらないのである。

道のわきにドライブインシアターがある。

ガイドさんの説明によると、三分の一は映画なんかもいいという組で、車の中に二人でいることをたのしんでいるのだが、そ

ういうイチャツキを見るためにくる人があって、やっぱり映画なんかもいいという車が三分の一ぐらいあるそう。あとの残りは、まともに映画をたのしむことになる。雨の少ない国だから、野外で映画をみることが出来るのだろう。

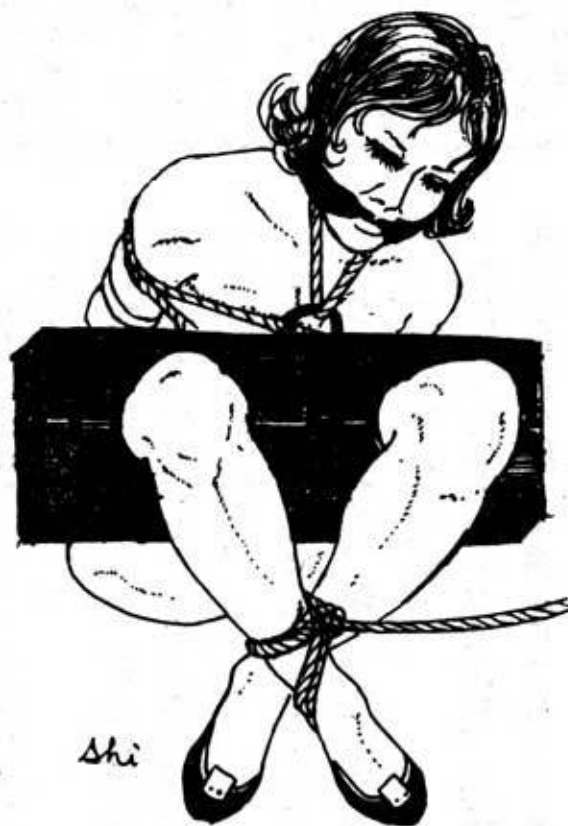
それに車は履物みたいなもので、一人一台ぐらいの割で、みんな持っているらしい。それほど車が多いのに、スースーと走れるのだから、うらやましい限りである。

(あの人は外国へ来たら、レンタカーを借りて乗りまわすのだろうか)

私は、ふと葉山のことを思った。
私の頭のどこか片隅に、葉山の細胞の一粒が巣くっているような感じがする。

いまましいと思ったなら、今度は、ジョンの顔が目の前に浮かんだ。別れを惜しんで今日のスケジュールを何度か確かめていたジョンが、どこかにあらわれるような気がしてならない。

恋というほどの気持を、私はジョンに持っているわけではないが、どうしても無視してしまえない印象の深さがある。彼の感情は恋に近いようにも思われて、我ながら、うぬぼ



志羽利也・画

れの強さに苦笑する。

しかし、

「さよなら」

といいながら握手した時のジョンの目は、まるで私の瞳を吸いこもうとでもするような感じだった。

(あなたを愛している)

と、目が語っていたと思うのは、うぬぼれだろうか。

「アイ・ライク・ユウ」

と彼は言った。

(アイ・ラブ・ユウ)ではなかった。

しかし、

「アイ・アム・フアンド・オフ・ユウ」

とも言った。

「イツ・ア・ウォーム・フアンドネス・ベリーウォーム」

ときこえたが、温かい好意と訳すのか、熱い愛情と訳すのか私は分からなかった。それは、もしかしたら求愛の言葉だったのかも知れない。

けれど、外国人と愛をささやいた経験のない私は、そういう英語を、とっさに理解出来るほど、英語にツヨクなかった。

よく日本人は、あいまいにニヤニヤすると

いわれるが、解らないのだから、ただ微笑して握手をかえすより仕方ないのだ。

窓外の風景が珍しいはずのバスの中で、ジョンのことが、しきりに気になるのは、やっぱりジョンの愛情が私の心にしみ通ったせいなのではないだろうか。

螢光灯のような、のろさで私の心に今頃、灯が、ともった感じだった。

バスはゴーストタウンの前で止まった。

一時間ほど、ゴーストタウンをみてから、デイズニールランドへ向かう筈だった。

ゴーストタウン……幽霊の町と訳すより、幻の町と訳す方が、いいのだろう。昔の西部の町を、そのままの姿で残しているのだ。

日本でいえば、明治村という所だろうが、明治村は敷地が広くて、明治の建物から建物へ歩いて行く道は、必ずしも、明治の昔の町ではない。

この西部の町は、もっとこじんまりと、どこを向いても、自分が突然、ゴールドラッシュ時代の西部のある町の町角にやってきたような感じに出来ている。

革の長靴をはいた、西部劇に出てくるような、たくましい男が二人、ベンチに腰かけて

いて、その二人の間へ恰度、一人坐れる余地がある。バスの乗客は次々にその間へ坐って男の腕に、もたれかかる。そこを、パチッと写すのである。

この男たちは、記念写真のための人形なのだ。しかし、実によく、出来ている。

私も坐って、男の腕に腕をまわしてみた。

それは、やはり葉山の感じではなく、ジョンやフレッドの触感だった。

(ジョンは何故、マゾなんだろう)

私は、それが残念だった。

そんならフレッドにいいてもらえばいいわけだが、私の被虐は、ぜいたくな願望で、愛情を通いあわせながら、いじめてもらうことに、よろこびがあるように思うのだ。

私はフレッドの鞭の下で、ある快感を感じたことは確かだが、それはジョンと一緒にいたから、たのしかったので、ジョンがいなくてフレッドにいいじめられて、はたして楽しかったかどうかかわからない。

フレッドは私に愛情はもっていなかった。好意はあったかもしれない。しかし、フレッドの場合はプレイそのものをたのしんでいたのだ。

ジョンは違う。

そして私も又、プレイそのものより、漂い出す別のものを望むのだ。

SMと一口に云っても、人それぞれの好みは違うと思う。私はプレイのためのプレイというのとは好きではない。浣腸というようなきたないことも好きではない。プレイの中に愛と美しさが、ほしいのだ。これは贅沢というものだろうか。

日本へ帰ってまで、ジョンのことが、気になるかどうかはわからなかったが、私は葉山のことを思う同じ心でジョンが気になるのだ。浮気心なのだろうか。そこが日本ではなく、外国映画でみるような、西部の町のせいかもしれない。

町の表通りの裏側に檻のような小さな牢屋があつて、人形の囚人が一人、机の前に腰かけていた。独房なのだが、その囚人が西部の歴史上のどんな人物なのか、私には解らなかった。

しかし、馬小屋よりも小さい小屋だった。

囚人は格子のはまった小さな窓越しにみんなに見られるようになっていた。日本の罪人がさらし者にされたように、この豚小屋みたいな牢屋につながれて、衆人の視線をあげ、罵声をあげたのかもしれない。

この人形が、もっとボロボロの衣服をまとい、手も足も鎖でつながれていたら、もっと効果的なのだと思った。

そして、何が効果的なのかと、我ながら、おかしかった。

しかし私は、しばらくのあいだ、じっとその前に立っていた。

一寸のぞいて、すぐに立ち去って行く人ばかりなのに、その豚小屋みたいな牢屋は私をひきつけてしまったのだ。

やっぱり私は変わってる……。

そう思った。

私は、こんな陽もささない牢屋につながれてみたいと思った。首には板の首枷をはめられ、まるで、獄門台にのった首のように固定されてしまう。足も手も、木の枷の方が、手錠や鎖でくくられるより不自由なのではないだろうか。それも、一ぺんに首枷や手枷をかけられるのではなく、一日一つずつ、ふやされていくのだ。

首にも手にも足にも、がっしりした枷がはめられたら、今度はその枷をまわりの壁の釘と鎖でつながれる。

その度に大勢の見物人が見に来ては、罵声をなげていくのだ。

つながれた姿で、歌を唄えと強要される。唄わないと、寄ってたかつて格子の間から突き入れた棒で、突かれる。

そして見物人の棒は私の衣類を破り、だんだんにボロをまといっているようになり、はては裸にされてしまう。

それでも枷と鎖は、といってもらえない。

私は身動き出来ない姿で、棒の先にさしたお芋を食べさせられ、果物を与えられる。

いつはてるかもしれない汚辱と凌辱の中で獣のように生きるとしたら……。

私の胸のあつくなくなるような白昼夢は、突然肩を叩かれて消えた。

「コンニチワ」

わざと日本語で云って、恥かしそうな顔のジョンが立っていた。

西部の町の中に見るものは、いろいろあるが、ジョンは私が必ずこの牢屋を見にくると思つて、何度かこのまわりをうろついていたのだろう。

二人の間の秘密が、私には何となく恥かしかった。

「このゴーストタウンからは、もうすぐ出発しなければならぬのよ」

私はジョンに言った。

「ディズニーランドは入園したら直ぐ自由行動で、三時半まで時間があるから、ディズニーランドで、もう一度、会いましょう」

「オーケー」

「ディズニーランドの、どこで会う？」

「アドベンチュア・ランドの海賊船の乗場の前で待っている。一緒に海賊船へ乗ろう」

「場所が、わかるかしら？」

「アドベンチュア・ランドがどこか尋ねてくれば直ぐわかると思う。ディズニーランドには五つの国がある。アドベンチュア、フロンティア・ファンタジー・ツマローランドにわかれていて。誰かにきけば直ぐわかる。じゃあ、又……」

ジョンは去っていった。

誰も私たちが話しているのを、特別の目で見ている人もいなかった。

ディズニーランド……。

一度は行ってみたいと思っていたが、それが可能になった今、私は、どこをどうみたらいいのか、あそこがれのわりには何も知らないことに一寸、うろたえた。

多分、こんなに早く、これらとは思っていなかったのだろう。死ぬまでの一生のうち

に一度はと思っていたが、さて、実現してみると、もっとよくしらべてくればよかったと思う。

何しろ三時間半しか時間がないのである。

その間に、ディズニーランドをまわるとなると、まるで万国博を、三時間半でまわるのと同じような、とまどいを感じる。

ディズニーランドのすぐそばにホテルがあって、いわゆる、おのぼりさんたちはこのホテルに泊まって、ゆっくりと、このお伽の国をたのしむらしい。だが、私にはその時間はないのだ。

私たちは、それぞれの国の乗物の切符を買って自由行動をたのしむことになった。

アドベンチュアランドというのは、すぐわかった。冒険の国というのだろうか。この国のよびものは、海賊船とジャングルを探検するボートである。

海賊船ときいた時には、帆柱をいっぱい立てて、ガイコツを帆に書いた海賊船のようなものがあるのかと思ったが、そうではなさそうだった。正式の名前は別にあったが、どう訳すのか私にはわからなかった。ただ一般に海賊船と、よんでいるらしい。

それを、うろろと探すまでもなく、背の

高いジョンの姿は、すぐ目にとまった。

ジョンに導かれて、私は一つの建物へ入った。切符を渡して奥へ進むと、三十人乗りぐらいの舟があって、順に並んでそれに乗りこむのだ。

舟は暗い洞窟のような所を進んで行ったが突然、滝へのったように急降下して、バシャと水を、はねかえした。

ジョンが私の手を握った。

大きな手に包まれて、痛かったが、その痛さが、こころよかった。

舟は洞窟を進み、宝石の散乱した箱のわきにガイコツがあったり、幽霊船が近づいて、私たちの乗っている舟をめがけて発砲すると水けむりがボートの横にいくつも上がる。それは、すべてお芝居的トリックであるのに、迫真力があって、飽きさせなかった。

私はジョンに「もっと強く握って……」

と言いたかった。しかし、「握る」という単語が頭に、うかばなかった。

私は、もっと痛さを感じたかった。暗い洞窟を進む舟の中で私は囚われた女のように、ジョンに痛いほど私を拘束してほしかった。

私は握られている手に力をこめて、握りかえた。

ジョンはそれにこたえて、私が望んだほど強く握りかえしてくれた。そして、握った手をかえて、私の肩をだくように引きよせた。私はジョンにおさえられてるように、そのたくましい体に自分の体をよせて、暗い水路を進んでいくのが、たのしかった。

火の放たれた模型の町があった。人形の女が人形の男に追いかけられている。人形とわかっていても、私がジョンに囚われているという被虐の妄想は変わらなかった。ジョンが真先にこの舟にのることをえらんだのも、デイズニールランドの、すばらしく明るい遊び道具の中で、これが一番、私たちの好みにあう何かを持っているからだっただろう。

実際、次に私の提案で、ジャングルをまわる舟に乗ったが、カバが大きな口をあけていたり、象がいたり、明るくて健康的で、海賊船のような雰囲気はなかった。

「このまま、別れるのは厭だ」

とジョンは言った。

私も心残りなものを彼に感じた。

「あなたがサンフランシスコまでくれば、もう一度、会えるわ」

私は言った。

「私たちはサンフランシスコへ行くのよ。あちらで二晩、泊まるの。だから、自由行動の時、会えるわ」

「すばらしい」

とジョンは喜びの声をあげた。

「サンフランシスコの近くに、叔母の家がある。ホテルへ泊まらなくても、そこへ泊まれる。あなたも、そこへ泊まればいい」

「叔母さんに紹介して下さるの？」

「多分……。しかし叔母がいるかどうかわからない。年中、旅行をしているから……。ボクは叔母がいらないことを望む。とにかく、叔母の家に電話する。別にホテルを予約してもかまわない。とにかく、行く。サンフランシスコへ行く」

（これ以上、ジョンと深くなったら、どうしよう）

私は、ふと思った。

しかし、坂道をころがり出した毬のようなもので、それをとめる力は私にはなかった。

私はジョンにサンフランシスコのホテルの名と電話番号を教えて再会を約した。

あとは集合の時間までに軽い食事を取り園内をまわる汽車に乗ったり円型のスクリーンにうつし出されるアメリカの美しい風景をみ

たり、ファンタジーランドでアリスの不思議の国をまわる乗物に乗ったりした。

私は葉山と一緒に時に味わったことのない明るい風景の中での、普通の恋人同志のような、たのしさを味わった。旅行に来てよかったと思った。

私たちは秘密の喜びの上で結ばれていた。たとえジョンがMであっても、昼間の太陽の下では、それはどうでもいいことだった。ジョンのたくましい腕が私をとらえている。日本人にはない、ほのかな体臭があった。異国人のとりこになっている自分を自分でたのしんでいた。

（今度はジョンに加虐のたのしさを教えてあげよう）

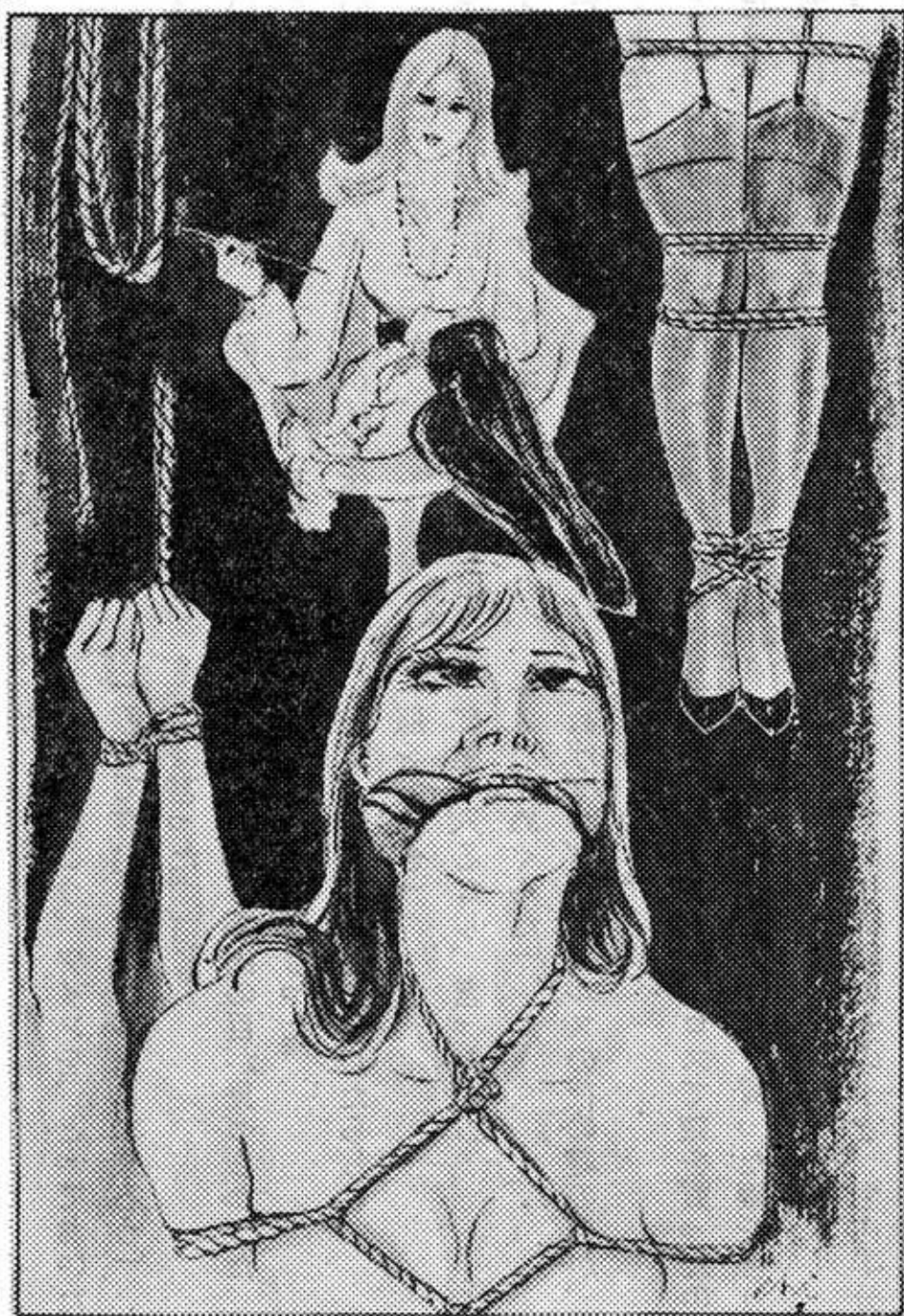
私は思った。

私はジョンの手で、ぐるぐる巻きに縛られてみたかった。それは葉山を裏切ることになるのかもしれない。

しかし私は、それも旅行の間だけの、おそらく、もうサンフランシスコの夜だけの、淡い夢のような思い出として、許されてもいいのではないかと思った。

サンフランシスコからハワイへ飛べば、同じアメリカとはいえ、ジョンが追ってくるに

読者ギャラリー『昼と夜の縮図』志羽利也



は遠すぎる。それはグレープフルーツのおいしさに似ていた。グレープフルーツの輸入が許可されても、カリフォルニアで食べるおいしさは味わえないだろう。いくらおいしくても、それはアメリカにいる間の味覚なのだ。日本へ帰れば、おいしかったという印象が残るだけだ。ジョンとの恋も、そういうものではないだろうか。

私は私の頭のどこかに巣くっている葉山に一生懸命、いいわけしていた。

夕方サンフランシスコのホテルについた。私はみんなが町の見物に出て行ったあと、一人ホテルに残ってジョンの電話を持った。電話のベルが鳴って、交換手が出た。その次にジョンの声がひびいてくるものと思った

私は、

「もしもし」

という声に心臓が止まりそうな気がした。ジョンではなかった。葉山なのだ。

(どうしよう)

とっさに私は言葉も出なかった。

「もしもし。ハロー」

相手は、こつちの返事がないのを不審に思ったのか、英語に云いかえた。

(どうしよう)

私は泣きたい気持で困惑した。しかし、どうしたらいいのか、わからなかった。

「もしもし、由利です」

私は答えた。

「ああ、いたね。どうしてる？ 出てこられるだろう。モーリスというホテルにいる。

そこからタクシーをよんでもらってモーリスといえはすぐわかる。ロビーで待ってるよ」

「一寸、待って」

と、私は言った。ジョンから、かかる電話を、どうしよう。

「何か都合が悪いことがあるのかい？」

「いいえ、今ついたばかりなので……リーダーに外出をこわってこないといけないし、いろいろ、あるのよ」

「ま、ゆっくり、いそいで出ておいで」

それで電話は切れた。

私の胸に新しい嬉しさが、ひろがった。

電話の最中には、あまり不意のことと、とまどいしかなかったが、電話を切ったら、とたんに葉山に会えるという喜びがひろがってきたのだ。耳もとに残る声音が体全体にしみ通っていくような感じだった。

私はジョンから電話のかかる前に部屋を出ようと思った。ロスアンゼルスから、わざわざ飛行機でくるジョンには悪いが、葉山が日本から来たことを思えば、ジョンのために葉山をことわるわけにはいかないのだ。

私はメキシコ村で買った鞭を手提袋に入れた。葉山に見せたかった。

「ジョンという人から電話がかかったら、今日はどうしても友達と町の見物にいかねければならないのでお目にかかれな。あしたの朝十時に電話してほしいと伝えて下さい」と私はフロントの男の人に頼んだ。

○

「ロス、どうだった？」

葉山は会うなり、きいた。

「よかったわ」

まさかジョンとフレッドのことはいえなかつた。

「部屋へ行こう。ツインを、とっておいた。」

「服を着て有名なケープルカーに乗ろう」彼は言った。

私は何となし葉山の目が見づらかった。ジョンのことが気になった。

彼は、それを敏感に感じたらしい。「服をおぬぎ」

部屋へ入るなり、言った。

「さあ、ぬぐんだ」

ぬげばロスアンゼルス夜の鞭の痕が、わかってしまう。

「ねえ、きいて。実はロスで鞭を買ったの」私は袋からメキシコ村で買った鞭をとり出してみせた。

「ホテルで同じ部屋の女の子と、面白半分に打ちあいっこしたの。だから、体にその痕が残っているの」

「みせてごらん」

私は服をぬいだ。

葉山の前には、もっと恥かしい姿をみせているのだが、やっぱり服をぬぐのは新しい恥かしさだった。

「パンティも、とるんだ」

「でも……」

「全部、おとり」

私は、いわれた通りにした。そして、片手で乳房をかくし、片手で前をおおった。

「手を上へあげるんだ」

葉山は命令する。

「手を頭の上に、のせろ」

私が、それに従うと、

「よし、うしろを向け」

と葉山は、いう。

部屋の中は寒くはなかったが、私は筆の穂先で逆なでにされるようなものを、彼の視線に感じた。

「ふん、大分、打たれたね。鞭の痕ではないアザもある。何をしたんだ？ 友達と、どうやって遊んだんだ？」

彼の問いに答えようもない。

「床の間も欄間もないが、ま、外国のホテルらしく椅子でも使うか」

彼はいうと、とびかかるように私の手を逆手にとった。

「痛い！」

思わず叫んだが、その手を後手に縛り上げられるのに時間は、かからなかった。

乳の上に二重三重にかけた細引は、乳房をひょうたんのように、ゆがめた。

彼は縄の間から乳首をつまんで、ひっぱり出した。

「あっ！」

私の体に瞬間、電気が走った。どうして乳首は、こんなに敏感なのだろう。

「そこへ腰かけろ」

私は椅子の上へ、つきとばされた。

両足は椅子の足の中だけ開かされて、くくりつけられた。

何という木か知らないが、厚味のある民芸品のような木の椅子だった。私は首も胸もぐるぐると縄をかけられ、椅子に固定された。

彼は、それを横に倒した。

私は椅子ごと床に横倒しになった。

「どうだ？ アメリカ人は、こういう縄のかけかたは出来なかったろう？」

葉山は言った。

「え、どうだ？ 言ってみろ」

彼は私が横倒しになっている前へ、ストールをもってきて腰かけると、靴の先で私の乳首を、はじいた。

部屋へ入っても靴をぬぐ習慣がないから当たり前前なのだが、私は靴の先で乳房をいじられたのは初めてだった。

「痛くされたいのか」

葉山は靴の先に力を入れて、グリグリと乳をついた。

「ああ……」

私は身をよじろうとしたが、靴の先から、のがれることは出来なかった。そして、下になっている手が折れそうに痛かった。

「大分、お苦しいようですね」

葉山は、わざと覗きこんで私の顔をみた。

「もっと顔をよくみせてもらおうか」

彼は靴の先を私のアゴにかけて、上へ向けた。いっぱいにのばしたノドに何かの痕をみつけたのだろうか。急に立ち上がると、私の顔を靴で、ふみつけた。

「うう……」

私は痛さを、こらえた。

「浮気したな」

彼は足に力をいれた。

「いいえ、違う……」

私は必死に言った。

彼は私の頬の上で、靴をギュウギュウと、まわすようにした。それは靴の裏で虫をおしつぶす動作に似ていた。

私は声も出なかった。

「いえ、言ってみろ」

彼は靴の裏で乳房を、おしつぶした。

「痛っ……」

私は悲鳴をあげた。

「そんなのは答えではない。誰と、どこで遊んだ？ 言え」

彼は横になった私の胸といわず腹といわず靴で、ふんで、こじった。

「痛い……ああ……かんにん……」

私は荒い息をついた。

彼は私の草むらまで靴でふんだ。よっぽど怒っているのだろうか。

「言う。言うから、おこして」

私は言った。体を汚してはいないことを、わかってもらいたかった。

「よし、言ってみろ」

彼は私の体から靴をはなして、今度は椅子の背を床につけて倒した。

縛られた手首が、硬い椅子の背に当たって体重をうけとめることになる。そして私の恥かしい姿勢が天井を向いてさらけ出された。

「おこして……おねがい」

私は哀願した。

「ダメだ。そのまま言ってみろ」

彼はベッドのはしへ腰かけて、私を縛った椅子を引きずるようにしてその前へすえた。私の胸は彼の靴のおき場にされた。

「いいクッションだよ」

彼は靴をはいたままの足を、私の胸の上においた。

「メキシコ村で鞭を買ったの」

私は、それから話し出そうと思った。

「おや。催促なのかい、鞭で打ってほしいという……」

「そんな……」

「いいよ、御遠慮には、およびませんよ」

彼は私の出してみせた鞭をとりあげると、

「どっちにする？」

と、私の前へ、二つの鞭を垂らした。

一つは革の色そのままだし、一つは黒と白と編みである。

私の皮膚はチリチリした。鞭の痛さは肌にくわえられるよりさきに、肌が知っていた。

「やめて、おねがい」

私は言った。

「それを買った時、アメリカの青年に話しかけられたの」

「それでその男に打たせてやったんだね、こんな風に……」

鞭が私のおなかに、とんだ。

「あっ！」

私は、思わず大きな悲鳴をあげた。

おなかにうける鞭は、背にうけるそれより痛かった。

「いくら外国のホテルでも、そんな大きな声を出すと、ボーイが、とんでくるよ。縛られた姿をボーイに見られたいのか。いい恰好なんだぜ」

彼は、いう。

私は首を振った。

「よし。でどっちの鞭を使わせた？ こっちか？」

ピシッと鞭が、うなる。

「ううっ……」

私は痛さを、こらえた。

「それとも、こっちか？」

ピシッ！

「あうっ！」

私はノドを鳴らした。

「よしよし、静かに、きいてやろう。さあ、それから、どうした？」

彼は又、ベッドのはしに腰かけて足をぶらぶらさせていたが、靴の先で私の乳首を、もんだ。

「でも、その青年はマゾだったの。私に鞭で打ってほしいというの」

「ふーん、それから……」

彼は平気で、さきを促すが、コリコリともまれている乳首は体中へ小波をおくる。

そして、それよりも手首が痛かった。

「話すから椅子をおこして」

私は言った。

「贅沢をいうな。これも、のせてやろう」

彼は私のおなかの上へ丸い椅子をのせた。

私は、それをおしのけることも出来ない。

手首にかかる重味が増しただけだった。

彼は私の顔を見ながら乳房の上へ足をのせ乳首を靴の爪先で、こすることを、やめなかった。

彼の方は、らかなものだろう。

私は顔を真赤にし、ハアハアと息をして、体中にひろがる波紋を、こらえなければならなかった。

それは鞭で打たれるのと又、違った苦しさなのだ。

天井に向けて、どうしようもない体が悦びを示し始めた筈だ。それを彼の目で、まともに見られてしまうのだ。

「さあ、それから……？」

といわれても、言葉なんか出てこない。

(何とかしてほしい)

と思う。

女の体は乳首から火をつけられて燃え出しているのだ。

私の体は明らかに悦んでいる。

手足を縛りつけられ、おなかの上に別の椅子までのせられ、みじめな姿で苦しめられているのに、苦しさとは別の快楽が体を、かけめぐる。

私が一番、乳首にヨワイのを百も承知で責

めている葉山が、にくい。

「もうやめて……もっと痛くしてもいい……」

オッパイは、かんにんして……」

私は言った。

「よし、じゃあ小休止だ。しかし、もう一寸椅子と仲よくしていてもおう」

彼は、おなかの上から丸椅子をとってはくれたが、今度は椅子を、いったん正常なポ

ズに戻してから、前に倒した。

「ああ……」

私は体中に枷をつけられて、のめらされているのと同じだった。

首が前へガクンと落ちるのを、首にかけた縄が椅子の背へ固定するため、ノドがしめつけられて苦しかった。

「こんな椅子は日本では、あまりない。この辺の郊外にレッドツリーという大きな木があって、木工が盛んなんだ。せいぜい、仲よくするんだな」

「もう、かんにん……」

私は泣き声をあげた。

足が折れそうに痛い。

首が苦しい。

「もうダメ……ああ……」

どうもがいても、椅子の重みが私を圧するだけだった。

それはもう本当に、お仕置という言葉がぴったりする苦しさであり、責められる姿なのだろうと思った。

「ああ……ああ……」

私は、うめき続けていた。

川路むら子子の狂態

本誌二月号のカメラハントで性川路むら子さんの典型的なM女性刻明に描き写し、ここにフアンの手元に提供することにします。

股間縛りにうめく

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
一条もまとわぬ裸身に只股間のような執拗な目だけが柔肌をじわじわと痛めつけてやまない。

羞恥責めに泣く女

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
如何に被虐を求めて泣き叫ぶのか、ええ余りのことに泣き叫ぶのか、それとも悦びに泣いているのか？

妖気溢れる開股責

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
ねっとりとした脂肪を浮かした素足に妖気溢れる妖気が充満して、左右に引き開

全裸縛りの引廻し

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
縄尻をとられて追いついては、うしろめたく開陳してゆく。

臀部晒し浣腸責め

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
後手に縛られたまま、臀部を高くし浣腸器が近々と迫ってくる。

露出した全裸肢体

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
締めきつた表情で若々しい肢体をマニアの眼前にあらわした。

両足挙げ羞恥責め

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
自分の顔面より上に両足を掲げ、自らの羞恥を耐える。

壮絶臀部責の妙技

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
ありきたりのM女性であったら、このような責めは許容しなかつた。

悶絶海老縛り地獄

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
身体が二つ折りになった苦痛も、さらさらなる無防備感のほどい

再びむら子子の狂態

本誌五月号で本誌三のペンで川路むら子さんの耐え難い被虐の妄想に描かれた三度、四度、鮮鋭な想

開股責と強烈縛り

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
横臥したままに開股縛りにした、開股縛りなどむら子好みの責め

緊縛と鼻責め悦楽

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
鼻責め悦楽、鼻責め悦楽、鼻責め悦楽、鼻責め悦楽、鼻責め悦楽

トイレの排泄縛り

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
全裸で後手に縛られたむら子、トイレに追い込んで無理矢理排泄

逆エビ責にあえぐ

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
縄を用いて逆エビ縛り、逆エビ縛り、逆エビ縛り、逆エビ縛り、逆エビ縛り

椅子責でいためる

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
椅子を使ったグルグル巻きに、椅子を使ったグルグル巻きに、椅子を使ったグルグル巻きに、椅子を使ったグルグル巻きに、椅子を使ったグルグル巻きに

柱に縛る全裸女体

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
柱に縛る全裸女体、柱に縛る全裸女体、柱に縛る全裸女体、柱に縛る全裸女体、柱に縛る全裸女体

後手縛り顔面玩弄

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
後手縛り顔面玩弄、後手縛り顔面玩弄、後手縛り顔面玩弄、後手縛り顔面玩弄、後手縛り顔面玩弄

両手挙げ縛り媚態

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
両手挙げ縛り媚態、両手挙げ縛り媚態、両手挙げ縛り媚態、両手挙げ縛り媚態、両手挙げ縛り媚態

悦楽責めアツプ集

川路むら子 一組 略号A〇〇〇円
悦楽責めアツプ集、悦楽責めアツプ集、悦楽責めアツプ集、悦楽責めアツプ集、悦楽責めアツプ集

女責め図絵の系譜

紅 絹 地 獄 秘 図



南

彦 造 (カットも)

遠の彼方に、そそり
たっている。

また、ここは伊勢

湾、琵琶湖、若狭湾
を結ぶ、本州で一番
せまい部分の谷間な
ので、織田信長や徳
川家康などの著名な
人物が残した足跡、
間道も多い。

ではなく、この峠道で関所のあった「関町」
あたりは、古い東海道の宿場としての面影を
いまでも、ひっそりと残している。

○ 鈴鹿の名の由来には、二ツの説がある。

その一ツ——鈴鹿の山々には、古くから鹿
が多く、雌鹿のことをスズカと呼んだので、
雌鹿の山という意味で、つけられた動物説と
——鈴鹿の山々はスズカケといわれる竹類が
多く、その意味から、万葉集でスズカネと歌
われたのによる——とする植物説がある。

○ ともあれ——鈴鹿7マウンテンと呼ばれる

七主峰(藤原岳、竜ヶ岳、釈迦ヶ岳、雨乞岳
御在所岳、鎌ヶ岳、入道ヶ岳)の悠容と連な
る底辺——海拔378メートルの谷合いに当たる

へ坂は照る照る、鈴鹿は曇る、逢の土山雨が
降る……などと、馬子唄に名高い鈴鹿峠。

この三重と滋賀を結ぶ鈴鹿山脈は、伊勢平
野と近江盆地の間に千メートル級の山波を、
南北60キロメートルにわたって連ね、アルプ
スのように雄大、かつ神秘的な歴史を秘め、雲

なかでも、前記した鈴鹿峠は8世紀頃「大
宝令」により、鈴鹿関が設けられて以来、昔
から交通の要所であった。

いまでは「国道1号線」が開けている。だ
から神代の昔から1号線だったわけで、所謂
——関東と関西をつなぐ境界線は本来、箱根

「鈴鹿関」は、その嚴重な警固のゆえに、さまざまな悲劇や警衛の苦難を秘めて、現代に到っている。

峠に絡まる道中師や女人哀話の数々——旅人目当ての雲助や、山賊、野伏りの群——など、その惨酷な凌辱の非行は、小説、秘録の素材として、興味ある資料を提供している。

○

ここで紹介する『紅絹地獄秘図』には、作者とか戯作者といったものではなく、確かな出処由来とてない巷の伝奇に過ぎない。

それだけに文献資料として「女責め図絵」の構成に、かなり役に立った。だが、石版刷りの懐かしい綴本は、終戦のどさくさで紛失して終まい、いまは無い。

以下、記憶の俤に、辿ってみよう。

物語は、江戸時代中期だったと思う。爛熟し切った町人文化が生んだ——浮世絵師、左近の画室での喋りから始まる。

○

「此の絵の由緒で御座るか？ ちと辛い、理^{わけ}由が御座るのである……」

と左近は瞑想した。

その日の生々しい光景が、臉の裏に蘇り、火花のように咲いて消えた。

左近は沈痛な眼ざしで、両腕を組むと、また瞑想した。

その膝元には、畳一枚ほどの広さもあるうかと思われる雪白の絹地に、紅絹鮮かに翻る「妊婦逆吊り」の地獄図絵が、画布狭しとばかりに描かれていた。

「誰にも、見せまい、と思って居りましたのに、とんだ、迷惑……と云うもの」

左近は、急いで巻き取り、用意の紙筒に納めようとして、はッと顔色を変えた。

冷たい戦慄が背筋を伝わり、尻の先まで、ねっとりと油汗を滲ませた。

嘉兵衛と称する、この裕福そうな老人は、血相を変え、じっと左近の、その絵の巻き手を眺めていたが、その両手の拳を震わせ、睨むように、彼の顔を睥睨したのだ。

「お、お話し下され！ のう、絵師どの。その絵は……その絵は、何、何処の、山家で、眺めなされたのじゃ！ のう、詳しく、お話し下され！ のう、絵師どの！」

左近は迷った。

へ話してよいものか？ 拒むべきか？——

彼は、何の予告もなしに、不意に現われたこの客人が、何者であるかを知らなかった。ただ、江戸は浅草橋の近くにある老舗の大

旦那様であることだけは、分かった。が、詳しい事情も、告げずに——へ実は……絵師どのが、秘蔵して居られる……芳年先生描く処の「妊婦逆吊り」の地獄絵にも等しい「胎み女の責め絵図」を、是非とも拝見させて頂きたいとの頼みだった。

出入りの画商からの噂で、左近が一カ月に一度は、決まって、その絵図を持ち出し、仏壇に御灯明を上げての懺悔だった。

聞けばへその手本となった女の冥福を祈っているとの事で……へ殊勝なお心根に感じて、お訪ねしたとの事であった。

今日は丁度、その命日に当たる「十三日」だったのである。

○

「語れ……と云われても、迷惑です。実は、私の落度で、いや、あの時の私は、どうかしていたのです。その時、私が誰かを呼んでいたら、いや、呼ばずとも、大声を出し……いや、語るまい、語るまい。心苦しうてのう。あるいは、あるいはあの時……と思えば、のう」

「あの時？ と、申しますと……」

「左様。こ、こんな、痛ましい、地獄の責苦に喘ぐ御婦人の、大切な生命を救うことも、

出来たのではないかと、思うので御座います。それを、野蛮な、絵師根性が災いして……いや、そうでは御座いません。私の、胸の……心の奥底には、そうした責苦を好む、腐った心根があったので、御座りましょう。

とにかく、とにかく私は、この地獄絵の様相を、丹念に見届けたかったので……御座いました。他に、他に何の願いが、御座りましょうや！ こんなにも優れた手本に、迫り会える日が、またと御座りましょうか？ いやありません。決して、決して、あるものでは御座りませぬ。恐らく私の、一生のうちで、恐らくは二度と再び、眺めることは出来まいと思われる、それは、それは、残酷な「逆吊り」の姿だったので御座います」

そこまで云うと、左近は想い余ったように肩を落とし、深い、深い、溜息を洩らした。

○

「しかと、左様で、御座りましょうか？」

「何で、この期に及んで、嘘など申しましょうや！ 亡き仏様の、為にも——」

突然、嘉兵衛は眉毛を吊り上げ、両眼をし、ばたたくと、大粒の涙をポトリと落とした。

「悲しや。こ、この女房は、確かに、私めの女房に、違い、御座りませぬ！ のう、絵師

どの、云って下され！ この、女房を、何処の峠で、見かけたのじゃ。この絵姿、この四肢、この形相の、凄まじきことよ！ 確かに……女房じゃ、私の女房に生写しなのじゃ！」

「ひエ！」

と左近は愕きの声をあげ、のけぞった。

「こ、この、手本の、お方が——？」

「は、はい。確かに……」

「しかし……？」

と左近は、まだ合点が、いかなかった。

彼が見たのは、貞亥二年の秋——だったから、一昨年の鈴鹿路のことだ。画業の旅路で目撃した、この無惨絵の手本の女が、この嘉兵衛という老爺の恋女房だった……のか？

へいや？ 女房ではあるまい。囲いものでもあろうか？と彼は思った。

へが、しかし何故に、あんな山路の、ただでさえ薄気味の悪い間道の岩場で、無頼の雲助どもの餌じきになったのか？

彼には分からなかった。

「して、何故の、旅路？」

「それが、急に、お伊勢詣りを思いたち」

「はて、分からぬ……あの、関町から外れた峠の難所で……」

「えッ関町で、御座りまするか？ あの、鈴

鹿路？」

「はい。入道ヶ岳の間道で御座いました」

「解せませぬ。何故、そのような処を？」

左近は、当時の絵姿を、もう一度、確かめるべく、瞑想した。

「して、供には、どなたが？」

「はい。街道筋には、かねてより噂の良くない群れも多いと聞いておりますので、番頭の灸助をつけてやっただけで御座います。その灸助の知らせでは、桑名へ渡る船旅で、おおしけに合い……」

「不運にも果てました、か？」

「はい。申訳ないと日夜の懺悔……暇をとりましたので御座います……はい——」

左近は思案の腕を組んだ。

へ灸助とは……どんな顔形の男——？

「あの、なにかお心当たりでも……？」

「いや、なに——」

と左近は、さりげなく装い、嘉兵衛の眼ざしから逃れた。が、妙に気掛かりであった。

○

へあれは確か、桑名宿のことだ。隣り部屋の男女の争い。と何か重い物が、いきなりドサリと押し倒される……ように思えたが……その時、確かに年増女の声で、九助とか……

灸助……と？

左近は恐怖を覚えた。

「あの相手の男が、灸助だった……としたら……？」左近は、へこれは、えらい事になった」と思った。その男がもし灸助だったとしたら、灸助は嘉兵衛の女房を犯したことになるかねないのだ。

悪く解釈すれば「不義密通」である。分かれば、二人の死罪は免れまい。いや、そんな事実より、嘉兵衛の悲嘆振りの方が気に掛かるのだった。

彼は女房の帰りを信じて居るのであろう。後添えさえも貰わずに神仏に祈っている——と云うではないか。

○

その日の鈴鹿路は、快晴の旅日和。左近は山水の名画を眺める想いで峠路に入る。

と……妙な男たちの一行に出会わした。

坊主、行者、薬売り、渡世人らしい旅姿が山路を駆けんばかりに急いで行くのだ。

左近は、この得体の知れぬ一行の、只ならぬ喘ぎに異常な関心を持った。

「何があるのだ？ 仇討か？ 賭場か？ それとも面白い見世物……でも？」

左近は、一行を追い始めた。それも、一人

旅の気安さが、興味を求めて道草をさせるのであった。

彼は、一行が街道をそれて道なき岩場へ進み、やがて灌木や、すすきの間を、奥へ奥へと、分け入る様子に、ふと「奇怪？」とは思ったが、いよいよ興味が湧き、一層、見失うまいと足を早めた。

と——彼は愕くべき光景を見たのだ。

○

白蛾のような女の肥えた裸身が、老杉の、こんもりと暗い翳りの間から、覗いて見えるのだ。

それが、まるで芋虫のようにのたうち、宙吊りの形で、激しく揺れているのであった。

よく見れば、むっちり突き出た下腹が、妙な形で、反り返っている。

さもあろう——女の裸身は、足を宙にあげ黒髪を、だらりと岩場に泳がせ、逆吊りに吊り下げられているのであった。

女は氣を失った。女の胸乳は、見事な大き

さで、熟れた蕾のように動んだ乳暈は、胎み女の確かな証拠だ。

「南無……鈴鹿大明神……南無波羅身陀——」奇怪な妖婆が、苔むした祠の前で、ぶつぶつと祈りを捧げていた。

生贅の儀式だ——。

祭壇の神酒で、女の裸身は清められた。脐穴の突き出た下腹を、捧げ持った櫛で叩く——樹齡百年もたつかと思われる祠の前の老杉が鬱蒼と生い茂っているのに、辺りは一層、薄暗く、杉の大樹に掛かった女の裸身は、それが逆吊りの胎み女であるだけに、生贅としての神々しさはなく、むしろ凄艶な地獄秘図に等しかった。

へ男たちは、何処で、誰から聴き知って、集まって来たのであろうか？

とにかく、この見事な儀式を掻い間見んものと、やって来たに違いなかった。

そして、その逆吊りの妊婦が、嘉兵衛の女房であり、男たちを手引きしたのも灸助であった——としたら——昨晚のあの隣室での激しい物音は——？

そこに想いが移った時——左近は慄然として、己の重大な立場に気づくのであった。

○

灸助は、俗称を睨見の権太と云って、鈴鹿路に巢喰う山賊の首領であったが、江戸で嘉兵衛を知り、その困い女お熊と密通。胎んだので邪魔になり、大金を持ち出させた上、守護神の生贅に捧げたのであった。

だがしかし、左近がすべての事情を語らぬ限り、お熊の惨状を嘉兵衛は知るまい。

また左近も、灸助の前身を、まだ、この時点では知る由もなかったのだ。

左近は、封建時代に生きた者として——奥州安達ヶ原の老婆もの（八幡太郎を呪う阿部貞任の母いばらが、妊婦の腹を裂いて、龍神に捧げ、天下を乱そうと計る芝居の一幕）とか、歴史に名高い中国の紂王と妲己（毀の紂王が妲己の容色に迷い、妊婦の腹を裂いて、楽しんでいたが、忠臣——雷震のため、妲己はキツネの正体を現わす）と云った故事に絡んだ芝居や、悲惨な事件なども見聞していた筈であった。

画家としての左近は、妙齡の女の「生き肝」とりとか「さかさ吊り」などの凄絵は、求められる俚に描きもし、手本女に頼んで、実際に画想を練ったりもして来たが、こんなにも美しい、優れた女体の「逆か吊り」を眺めるのは、初めてであった。

で、憶面もなく、身を乗り出し、足腰の陶器のような素肌美を眼底に留めるべく、必死で瞋め入ったのであった。

その上、彼は、男たちの視線が女体に集中し、夢中なのを僥倖に、急ぎ、矢立を取り出し、画帖挟しと墨を走らせた。

——と、彼は、背後から、襟の辺りを、むんずと掴まれ、愕いて振り向いた。

優美な歌舞伎芝居の女形を想わせる優男だが、何処となく鋭い眼つきの旅人が……

「只見たア……酷えぜ——」

と、詰るように云う。

「は、はい——」

左近が恐縮すると、男は、さっさと画帖を取り上げて眺めたが、すぐに

「絵師左近と見た！ 見事な手際だぜ！」

と笑った。

「だが、どうして、くれよう？」

と、震えている左近に、ドスの利いた混声

で脅しつけたが——

「ま、続けな！ だが、見料は、たっぷり落として行って貰うぜ！」

と、画帖を左近に返したのであった。

○

『秘密を知った者と、用のなくなった者は、生かして帰さぬ——』のが、悪党どもの不文律だった。見事な女体の「生贅の儀式」に、高い見料を支払い——集まった、野卑な旅の男どもは、すべて、山賊どもの計略で殺された。

秘密護持と、人間を人間と思わぬ山賊どもの非情な性格は、殺しを境に、いやが上にも昂揚し、燃え上がった。

妖婆は殺された男どもの衣類や、持物の値踏み調べに夢中だが、山賊どもは酒盛りの宴の方が先決だった。

殺された男どもの「生首」が祠の祭壇で、怨めしげに白眼を剥き、宙を睨んでいた。

老杉にはまだ、お熊の、蒼白くむくんだ肢体が、夜霧に濡れていた。

左近だけは、凶刃を受けずに描写を許されていた。いまの左近にとって、絵筆を走らせることのみが——生命への安全弁であった。

より時間をかけ、より優美に描き上げることのみが——殺されずにすむ道なのだ。時を稼ぐのみだ。左近は観念の臍を固め、描きに描く——。

絵師の本性で、それを描いている裡は、殺意の恐怖を忘れ、山賊どもの存在も忘れて、彼は、この責められる女体の構図に没頭し得たのであった。

○

気がつくと、その場所は森閑としており、山賊どもの姿はなかった。気味の悪い妖婆も祠も見当たらず——のであった。

読者ギャラリー『密戯発覚』岡たかし



へはて？ 面妖な——？

左近は辺りを見廻した。首を斬られた旅人どもの死骸もなく、勿論「生贅の女体」など煙のように消え失せていたのだ。

彼が心血を注いで描き上げた、凄惨な『お熊の責め絵』も見当たらない。

愛用の矢立だけが、空しく左近を待ち侘び

ていた。だから、確かに彼が細密な描写を続けた実績だけは、歴然としているのだった。

へすると？ いったい『お熊の責め絵』は、何処へ持ち去られたのであろうか？

左近の脳裏は、混迷と疑惑の渦で、濃霧の彼方にあつた。

へ分からない。いったい、昨夜は……？

昨日と今日の空間が、現実には繋がらないのであった。

とにかく『責め図』を描いた——のは事実だった——と思う。しかし、その事実の裏づけがないのだった。

へ狐狸の仕業か？ ——はたまた、怨霊の導きか？

左近は分からぬ俤に、奥深い杉木立の鈴鹿路を後にしたのであった。

○

左近は、いま一度——鈴鹿を訪れ、あの奇怪な「生贅」の儀式を確かめたい——と思うばかりであった。

その記憶にも生々しい「女体の構図」を、後日、絹布に移し描きしたが、この『紅絹地獄秘図』なのであったが——折も折、嘉兵衛の想いつめた来訪を受けようとは——。

左近は、遠い、何処か空の下の彼方で、嘉兵衛の女房お熊が、ひっそりと静かな余生を楽しんでいるように思えた。

灸助という下使いの男と一緒にでもよいし、それが睨見の権太という、鈴鹿峠に巣喰う山賊の首領でもよいのだ。

お熊が、生きていてあの年増盛りの陶器のような肌で、男たちを悩ましているような錯

覺に捉われたりしているのであった。

もし——あの「逆吊りの妊婦」が、嘉兵衛の女房お熊でなかったとしたら——あの祠の饗宴は、鈴鹿の主と云われる、神通力にだけた白狐の妖術に惑わされた不覚的一幕物だったのかも知れない。

○

あの霧深い山の部落での話だが——毎年、秋の収穫の頃になると、決まって一人は、若い稲刈の娘が姿を消すのであった。

しかも、目撃者はなく、何時の間にか、田畑から姿を消すので、部落の者は「神隠し」と呼び、女好きの山の神が若い娘を捕え、雪山の越冬を楽しんだに違いない——と、互いに語り合い、進んで守護神の祠に、若くて美しい娘を提供する行事をつくりあげたのであった。

山頂には人力ではどうすることも出来ない猛々しい荒神が住んでいて、その神に抗えれば忽ち旱魃、大飢饉、兇作などが襲い、部落は全滅すると云ったような因縁を占う祈禱師なども現われ、一層「生贄」を強調するようになった。

喜んだのは「野伏り」どもで、勞せずして若く美しい村娘が手に入るのだから、凡ゆる

策を弄して、部落一番の娘を、山の祠に捧げさせるように仕組むのであった。

純朴な部落民は、その季節が来ると、白羽の矢を射込まれた家の娘を、泣く泣く提供することとなり、娘と年貢米と海山の珍味とを山積みにして、山頂の岩場の祠まで担ぎあげるものであったから——眺める野伏りどもの愉快さは、想像するだけに憎らしい限りだ。

まして、その「生贄の娘」を、寄ってたかって裸に剥き、新鮮な女の味を、毎年、楽しむのだから、悪鬼の仕業だ。

何も知らない娘が、そんな秘密に気付いても、既に死が待ち受けているのだ。野伏りどもは、狒々の毛皮で顔を隠したり、大猿の剥皮を纏ったりして、部落民どもを脅せばそれで良いのだった。

かくて——好色な生神様の存在は、誠にやかに語り継がれ恐れられ——文明科学の発達した現代では、とても想像もつかないような伝説とか奇談が生まれていったのであった。

○

時代小説につき物の「化猫騒動」なども、決して動物のなせる業でなく、醜い人間同志の権力者や派閥抗争の原兇などが事件の顛末を、猫に転嫁したに、過ぎないのだ。人間の

仕業だったなら「お取潰し」となるので、公儀の眼を誤魔化す方法として「化猫の仕業なのだ」と説く処に、笑えない奸智がある。猫の仕業なら、お取り潰しの理由にもならなかったし、公儀としても、眼を閉じて知らぬ振りも出来たのだから、当時の人間の生活などというものはインチキものだ。

そんな見方で「水戸黄門漫遊記」や「大岡裁判」「黒田・鍋島の猫騒動」「伊達騒動」などの経緯を検討すれば、歴史家や作家ならずとも、大方の想像は、一致すると云うものだ。

○

私が、戦時中——ボルネオ島（今のカリマナン）の奥地の部落で、そこはダイヤ族の多い——カンダンガンという名の僻地の村に泊まった時のことだ。

こののパスサン・グラハン（ホテル）の離れの一室に寝ると、毎夜（丑三ツ刻）になれば、天井裏が裂けんばかりの凄まじい大音響が起るので要心せよ、と注意された。

私は憶病者だから、怪談は大嫌いだ。決して虎穴に飛び込まない主義だから、そんな危い部屋は避けて、安心して寝られる別室を選んで貰ったものだった。

しかし、天下の豪傑を任じて誇る商社のE君は、へよし！化物の正体を見届けてやる！と、わざわざ志願して、その離れ部屋に泊まったのだ。

だが、翌早朝を待たずして、E君は顔面蒼白の態で逃げ出して来た。まったく恐ろしくて眠れたものではなく、へ仮睡も出来なかったと、云うのだった。私は体験しないのだから、どの程度の恐怖なのか？見当もつかぬが、とにかく、これ迄の体験者で、一晚中ゆっくりと安眠出来た者は居なかった？と云うのだからその大音響の凄まじいこと——化物囃しどころの比ではない——と云うべきか？

ところが、である。ダイヤ族の狩猟用の網に、山の主とも思われる、年老いた大いたちが掛かった。その鋭い眼光と云い毛並と云い重量感溢れる巨体に、流石の首狩人種ダイヤ族も恐れをなして近寄れず、薬殺したと云う知らせだった。

その後——不思議なことには、この天井裏の怪奇な騒動も、すっかり鳴りを鎮め、幕を閉じて終わったのだ。

人間恐怖の盲点や、弱点を衝いたら、どんなでもない悪質な謀略も可能だし、大いたちを

眼に見えぬ呪いの怨霊に、祭り上げることも可能なのだ。

事実、この推理小説じみた異国の山荘に於ける怪事件でさえへ日本軍に殺された、ホテル管理のオランダ夫婦が、成仏出来ず、夜な夜な現われては、日本人の泊り客に復讐をしているのだなどと、怪談めいた噂が、でっちあげられていたのであった——から……

○

『紅絹地獄秘図』——その流麗な筆致の美しさ、構図の的確さ、艶麗な色彩感覚——などなど、とても絵師一人の空想力で補えるものではなく、確かな手本となるべき女体の移し絵に相違あるまい、と、左近の秘図は江戸の巷の評判となった。お蔭で、左近の仕事は増え、訪門者は断えなかった。

しかし、奇怪なのは、嘉兵衛のその後の生活であった。好事家や画商が日参したがへどうしても譲れぬと拒む左近から、その『地獄秘図』を借り受け——憑かれたように一室に、閉じこもっていたが、やがて、その「逆吊り」の女体よろしく、己れの肢体を縛り上げ、滑車で天井から吊り下がると、へお熊！お熊！と悲痛なしわがれた声で、いまは亡き女房の名を連呼し、その痛苦の様を再現し

ようと、努めるのであった。その老いた物腰に生氣はなく、ろくに食事も取らずに、只々——その「絵面」専一に被虐の日夜を、おのが肉体に刻み続けるのであった。

嘉兵衛が秘図を抱いた俛、悶絶死したのはそれから数カ月たった、やはり、運命の「十三日」であった。

○

故永井荷風氏は、肌身離さず、何時も「全財産」を身につけていた奇行の士だが、奔放な嗜好の持主でも知られている。

財界の有名人にも、こうした奇癖の持主は多い。だから、嘉兵衛のような古い時代の非行、老人も、案外に「現代的」なのかも知れない。私の知友でへ金は天下の廻りものだから貯蓄なんて阿呆だ。冥土へ持っては行けないし、ある額の貯金（病氣とか、不定の必要時に、間に合う程度）さえあれば、あとは生活の楽しみ、に使うべきで、死んでからでは、いくら遊びたくても遊べないし、他人に呉れるようなものだから損である」と安いアパートに間借りをし、妻帯もせずに、自分の嗜好の俛に、生きている男がいる。考えようによつては、生甲斐とは、至極簡単なものなのかも知れない。

(終)

コ
ン
トオ
ツ
な
生
首
人
形

有 幹 五 郎

ついでにいい時というものは、どうしようもないものである。

「だからおめえは間抜けだっていうんだぜ」

「面目ねえ、兄貴。おいら、てっきり金目のもんにちげえねえって思ったのによオ」

このところ、しげちゃって二人組だが、安が鞆一個、パクってきた、というわけだ。

「こいつは大物だぞ。札束が、つまってるにちげえねえ」なんて二人が、最初は威勢よく

鞆をあけようとしたものだった。だが、この褐色の鞆、一寸オツな仕掛けが、どこさ

れて簡単に、あきやしない。昔、よくあった『不思議な小箱』みたいなやつで、普通の鍵

式になっては、いないのだ。

でも、こんなことぐらいで引き下がっちゃあ泥の様の男がすたる、とばかり、ああでもない、こうでもない、と、いじくり廻していううち、鞆が急にパツクリと、河馬が、あくびしたみたいに大口を開けたものだった。と

同時に二人は「た、たすけてえ」なんて間抜けな言葉を発して、思わず、とびのき這いつくばっていた。

何故といて、鞆に入っていたものは、なんと生首だったからである。

「や、安。だ、だからおめえってやつは……」

ろくなものをパクツちゃ来ねえ、なんて言おうとしたのだが、舌がもつれちまって言葉になりやしない。

安の方は、あてがはずれて、がっかりするばかりだけど、こうなりや、もうやぶれかぶ

れ。「エイッ」なんて、から元氣のかげ声な

んぞかけちゃって、腹の立つ鞆を閉じようと

したけど、やっぱし、手がブルついている。

が、しかし、そのうちにケラケラと、ばか

たいに笑い出したのである。

「おい、安。おめえ、気がおかしくなっちゃ

まったんじゃねえのか？」

「大丈夫さ。こいつは、おもちゃだよ」

「なんだって？」

八は、きょとんとした顔つきになって、も

そもそと安の横に這い寄る。

「フーン、なるほど。ヘッヘッ、おどかしやがって……。しかしうまく出来てやがる。本

物そっくりとは、このことだぜ」

「でも、兄貴。こいつは、いってえ、女なのか男なのかどっちなんだろう？」

「おれにきいたって分かりやしねえや。モノセックスとやらが、流行だ。男か女か、はっきりしねえところが、いいんだろうよ」

「ちげえねえ」

あんまり薄気味がよろしくないのは、オモチャと判明後も変わりはないのだが、手にと

って、たがめつすがめつしてるうち、八が、

「これはただのおもちゃじゃないらしいぞ。眼の方は、とじたまんまだが、口の方は何となく、ピクピク動いたような気がするぜ」

「そうかな。でも材料は何だろう。本ものそっくりで、気味がわるいよ」

「みろよ。台の隅に釘がついてやがるぜ」

「ほんとだ。釘が二つ、横に何か印がついてやがる。……おや、兄貴」

「何でえ、とんきょうな声、出すねえ」

「穴があいてるじゃんか」

安の言う如く、生首人形には、おさんぼう

みたいな台座がついていて、その側面に、横

二ミリぐらい、タテ二センチぐらいの長方形の穴が、あいている。

「自動販売機みてえじゃなかよ」

「百円玉、入れるんじゃないの？ これ」

「そうかも知れねえ。安、早いとこ、入れてみるよ」

「おいらがかい？」

しぶしぶ、安が百円玉を入れるとブーンと微かにモーターが動き出した音がするのだ。

何のための電池仕掛けなのか。風呂屋の自動アンマ機じゃあるまいし。勿論タバコもコカコーラも出てきやしない。二人は、しきりに首をひねって、この奇妙な生首をながめるばかり。しかし、そのうち、何となく生首が表情を変えはじめたみたいなきもちもする。かすかではあるが、目が時々ウインクしてみたり、唇が確かに振動して、何か言いそうにしたりするのだが、さっぱり判らない。

「兄貴。どう考えたって、あんまり気味がよくねえよ。早いとこ、捨てちまった方が、

いいと思うけどよオ」

「だから、おめえって奴は、あわて者だといふのさ。この人形の口を見るよ。動くようにしてあるに、きまつてるんだ」

「ブーン」

八が鉦の一つを押してみると、レンズの両眼がパッチリ開いて赤色に輝き、同時に口がおちよぼ口みたいに丸く開いた。

「そおら、見ねえ。こりゃあ、きつと口の中にダイヤか何かを隠すようにしてあるに違いない。おめえ指をつつこんでさぐってみろ」

「マ、待ってくれよオ。お、おれ、や、やだぜ。だってさ、こいつは電気仕かけだろう。感電でもしたら、おっかねえじゃん」

「チェッ、情けねえ奴だぜ」

八は舌うちして、人形の口に、おそろおそろ指をつつこんで、調べ始めた。

「どうだい兄貴。ダイヤはありそうかい？」

安の問いには答えず、どうしたのか八は、目なんか細めちゃってる。

「兄貴、どうかしたのかい？」

「フッフッフ」

「変な兄貴だな」

「なるほど、そうか。わかったぜ、安」

人形の口に指をさしこんだまんまだった八が、そういうなり、「ウァッハッハ」

と急に大声で、ばかみたいに笑い出した。

「わかっただろ？ やってみなよ」

八から説明されて、そりゃスゲエとは思ってたけど、安はやっぱりウス気味悪い。

「喰いちぎられるんじゃないかあ」

「バッキヤロウ。俺の指を見な、ちゃんと無事にひつついてるじゃねえか」

「そ、そりゃそうだけだよ。とにかく一つきりしかねえ、でえじなもんだから……」

「いいよッ。いくじなしめ！」

安は、じれったそうに生首をひたたくてまわれ右をした。百円玉を入れたらしい生首は、両目をあげたり閉じたりし始めた。中腰になって、安はじりじりと近づいていった。かたずを呑んで見守る八の目に、それはあたかも毒蛇に立ち向かう狩猟者の構えのように見えたから、八はハラハラ。

「で、でえじようぶかい、兄貴」

八が、思わず声をかけたとなにに、安の体が進んだ。生首が、安の体に隠れて見えなくなった。緊張の時間が流れた。

「ど、どうだい？」

「ウン、ちよつとキツイようだが……」

八は、かたずを呑む。

「フッフッフ……」

含み笑いして安が、ザマみやがれといったように八を振り返ったとたん、パーンと破裂音がして、安は急所を抑えたまま、ひっくり返ったのである。びっくりする八の頭に、生首の破片が飛んできて当たった。思わず、それを手に取って眺めた八が、もそもそと起き上がった安に、差し出しながら吹き出した。

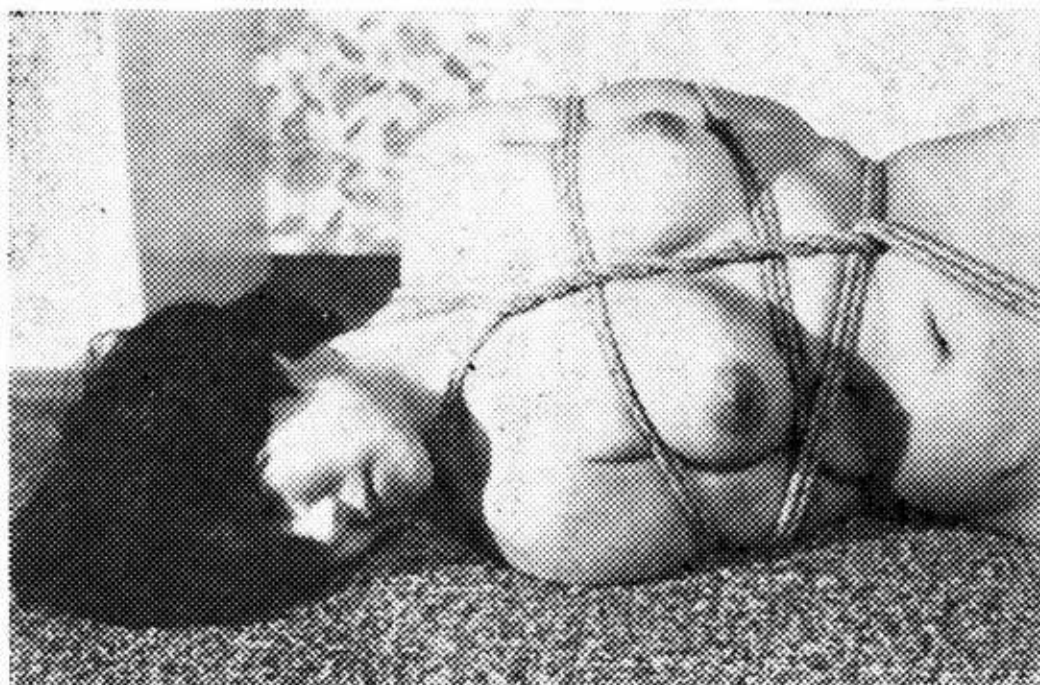
「あ、兄貴、これを見なよう」

それには、こう書かれてあった。

「サイズにご注意」

まったく、ついてない時というものは、どうしようもないものである。

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

ちへいせん かなた
地平線の彼方にあら
荒お
尾けい
慶こ
子

今年は梅雨になるのが例年より十日ばかり早いとかいうことで、六月になるかならないというのに、毎日毎日、雨ばかりで鬱陶しい

日が続いて気が、めいりそうです。私は別に殊更、外出しなければならぬ、差し迫った用件はありませんので、雨が降っ

ていても、特に差支えがあるわけではありませぬけれども、それでも、やはり、からっとした、よいお天気の方が、部屋にいても気が晴々します。

時間がたっぷりあるというのに、まとまった単行本なんかを、落着いて、ゆっくり読もうという気の起こらない、今日この頃の私です。

ラジオを聞いたり、テレビを見たり、読書といえば週刊誌の拾い読みくらいです。お嫁入り道具に持ってきたミシンを踏もうと、ミシンの前に坐ることもありますが、さて何を縫おうという気も起こらず、とどのつまり、油をさしたり、お掃除をしたりで終わってしまうのです。結婚式の一月程前に、母と一緒に、あわただしくお嫁入り道具を見にいったのも、ほんの、この間のことのように思い出されます。

あの頃は、希望に燃えて、はりきっていたのですが、今は虚脱状態とでもいうのでしょうか。何をやる張り合いも、失ってしまいました。

夫を交通事故で亡くした私が、生活に困っていたのなら、早速、明日にでも勤めに出なければ、いけないでしょうが、幸にして経

済的には困らないので、このように、のんびりと暮しながら、ゼイタクな悩みを、かこっておれるのだ、と思います。

そんなとき、私の退屈しきった心をなぐさめてくれたのは、七月号に載せていただいた私の拙い告白「流れる雲に身を托して」に対する、数多くの反響でした。

こんなに沢山の読者の方から、お便りをいただけるなんて、夢にも考えてみないことでした。結婚六カ月目にして夫を失った私に対して、なぐさめの言葉をかけて下さったり、プレイをしようという、おさそいを親切にかけて下さる方。中には、結婚をしようという気の早い方も、三人ばかりありました。

それらの思いがけない多くのお便りの中で私の心を、ぐっと掴んで離さないお手紙が、一通ありました。

そのお便りを読んで私は、しびれるような気持ちで、その方に傾斜してゆく自分を、どうすることもできませんでした。

筆力というのでしょうか。いや、文章の魔力というものはなしに、その方の人間的な魅力が、お手紙の文章に、のり移っていると感じでした。これは私の直感です。

七月号の告白に引続いて、もう一度、こん

な文章を書いてみたくなった理由というのもその方の通信が一つのきっかけになったのでした。

そのお便りの要点だけを、次に抜萃してみよう。

☆

荒尾慶子様へ。

7月号をペラペラとめくった瞬間、まさに「めくるめく」という形容がぴったりな貴女の緊縛写真を発見しました。とりわけ、私の美意識が最も刺戟を受けたのは、「流れる雲に身を托して」のタイトル上の写真です。

腰、太股から、足首へと流れるような脚線美。まさに魅惑のポーズです。

私は「奇ク」を読み始めて一年になります。が、緊縛写真から、これほどの衝撃を受けたのは、貴女が最初なら、思わず知らず筆をとってしまったのも、貴女が最初です。

恐らく、貴女の手元には「呼びかけ」の手紙が雲霞うんかの如く殺到しているでしょう。その中で、私のこの手紙に一瞥を与えて下さるならば、可と出るか不可と出るか、その瞬間に賭けるものです。

私は大それた野望にシヤイしながら、言いま

す。私に「カメラハント」させて下さい。そして「奇ク」に発表させて下さい。

△中略▽（彼の一身上のことなので――）

26歳。独身。趣味、カメラ、水泳。

身長一七四、体重八六。

私は一年前には不覚にも「奇ク」なる雑誌があることを知らなかった。

「山路来て何やらゆかし、すみれ草」なる句が発見のおどろき、よろこびを歌ったものならば、まさに私の「奇ク」発見の時の心境です。私は「奇ク」のおかげで緊縛がいかに序幕として素晴らしい役目をするかを発見し、同時に辻村氏に「SMカメラ・ハント」などから男女間の情事（love affair）という素晴らしい極致の間を覗きえたと思っております。

それ以来、「奇ク」のバックナンバーがあり、緊縛、羞恥写真収集という芸術行為？のために大分、投資させられました……。

右も左も判らぬ大阪へ、カメラ道具、レコーダー、無形文化財「道明」の紐をバッグにねじこんで、新幹線へ飛び乗れる日の来ることを願ってペンを置きます。もし、私のこの野心が、貴女にとって無作法、無礼にあたり



ましたならば、深くお詫び致します。全て消却して下さい。

最後に一言、社会生活にたえるだけの「自己制御」と「判断の能力」を有する人間の一人であることを付け加えます。

敬具

五月二十五日

(I・Y生)

☆

私は、このお手紙を読んで、今すぐにでも東京へ飛んでゆきたいと思いました。

このような方に、裸身を捧げて縛られるのだったら、女性として本望だと思います。

同封されていたI・Y生氏のカラー写真の男性的な魅力に参ってしまったのかもしれない。彼は大阪まで新幹線で訪れてもよいと言っています。

恋人を迎えるように、新大阪駅で彼を待つ自分の姿を考えると、胸が躍るような若やいだ気持ちにさえ、なります。

私は今年二十三才。これがまだ未婚のままの自分だったら、そんな気持ちも実現の可能性があるでしょうが、現在の私は夫を亡くしてまだ日の浅い身なので、精神的には三十五才も四十才にもなった喪服のままの女性として暮している現状なのです。

けれども、異性に縛られ、いじめられ、羞恥責めを受け、弄ばれたという私の希望をかなえていただけるのなら、このI・Yさんなんかは理想的な男性です、というよりも、私には勿体ないくらいの相手です。

喪に服している今の私には暇は有り余るほどあります。働きに出たりする考えは少しもありませんので、出来たら、私の方から新幹

線なり飛行機で上京したいくらいです。

そうして、一週間でも、十日でもホテルに滞在して、朝・昼・晩と部屋に籠ったきりで責め抜かれたいのです。

ホテルの一室にいる間は、私は彼のシモベでありドレイなのです。

ずっと素裸で、彼の言うがままに、思うがままに取扱われても何一つ、文句を言いません。文句を言うどころか、うんと激しい羞恥責めを加えられ、なるべくきびしく縛られている方が私は、うれしいのです。どんな責めでも甘受します。

ドレイであると宣言した私の方から、条件など、何一つ申し上げません。

彼のされたいと思われる通り、私を取扱って下さったらよいのです。遠慮されたり、責めに手心を加えられたりすることが若しあるとしたら、私は恨みに思います。

縛り方や責め方が、きつければきつい程、きつと私の身体は燃えあがってしまうでしょう。御主人様である方は、そんな私を、冷ややかに眺めながら無視されようと、また、哀れに思われて、お情をかけられようと、それは御自由です。

ただ、責め方に若し私の希望が、その一部

でもかなえられますものならば、股間縛りとか開股縛りを是非お加え下さい。

先日、海老責めの格好に縛られましたときは、本当に苦しくて、気が遠くなりそうでした。そのときの表情が非常にいいというのでアップで撮られましたが、ほんとうに恥かしゅうございました。

そのときは苦しくて苦しくて、お腹の中のものを吐きそうになったくらいでしたが、家に帰って夜一人になって静かに思い返してみましたら、非常によかったように思い出されもう一度、そういう海老責めに縛っていただきたく思いました。

それと、もう一つ。写真を撮られるために次々と縛り方を変えてゆかれますが、出来れば一つの縛り方で、しばらく放置して、そんな縛られた姿の私を、前後左右から、いろいろに鑑賞し、ときには転がして裏側にしたり或は身動きも出来ない私の身体を、触ったり抓ったり玩弄していただきたいことです。

ただ眺めていられるだけでも、私は逃げだすことが出来ないのです、それだけでも燃えあがってしまいます。もし、それ以上のことをされたら……。そう考えただけで、私は羞かしさに、消えいりたくらいです。

責めに入る前には必ず剃毛をお願いいたします。完全に剃毛されて、はじめて私は身も心も、その方のドレイとして仕えたいという気持ちにさせられます。

と、そんな自分の身勝手な空想を逞しくしてありますが、I・Y様には、お仕事もありますし家庭もあります。私のために何日も、ぶっ続けで、ホテル住まいをされるということは常識的には不可能なことです。

せめて、お仕事が終わってから、二時間か三時間、私の待っているホテルへ足を運んで下さって、ほんのひとときを、プレイにさいていただけたら私も本望です。

私は学生時代に学校から修学旅行で、日光へ行ったとき、東京へ立ち寄っただけで、東京のことは何も知りません。ホテル・オークラとか、パレスホテルとか、そのロビーで待合せて、お部屋へ一緒に行けたら、と夢を描いています。

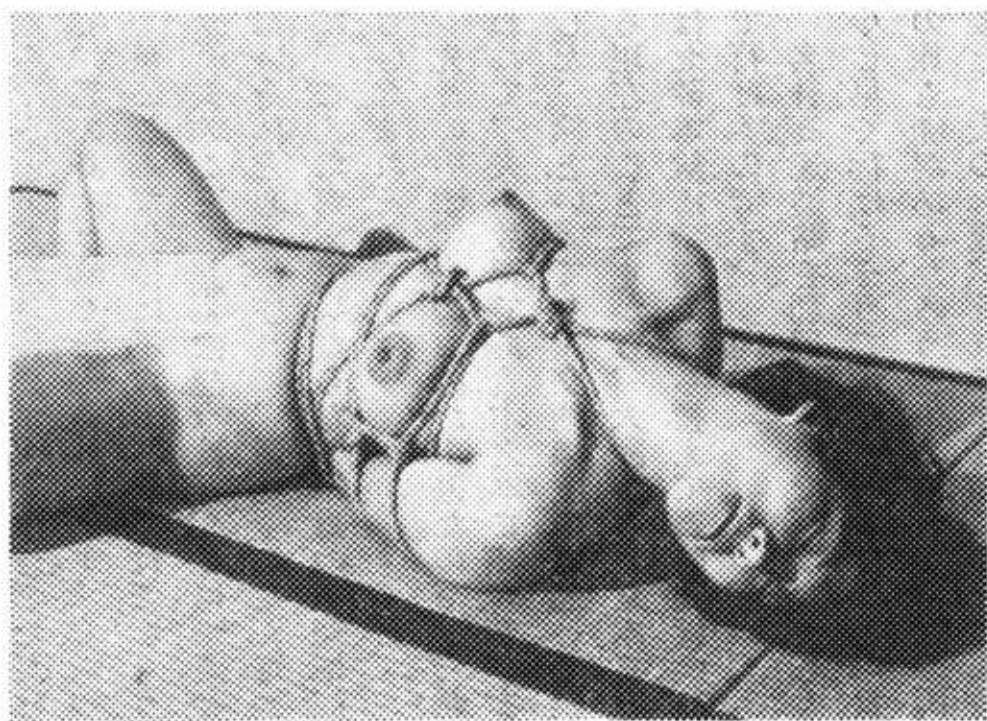
私は兄との二人兄妹きょうだいで、兄はすでに結婚して両親と一緒に住んでいます。「女は三界に家なし」と言われますが、今の私は、たった一人ぼっちで、行くところはありません。

昨年、結婚するとき、嫁入り道具を揃えて下さった両親は、

「慶子、お前に対する私たちの遺産分けは、この嫁入道具なんだよ。でも、これだけでは少な過ぎるから、お前の貯金に、これだけ足しておくからね」

そう言われて、私がOLでいただいた給料を預金していましたが銀行通帳に五百万円を入金して下さいました。

私は自分の預金は実家の両親に渡して裸で



嫁ぐ気持でした。それが更に増やして下さった両親に感謝の気持が、いっぱいでした。

山内一豊の妻ではありませんが、若し夫が経済的に生きるか死ぬかという絶対的なピンチに陥ることがあれば、そのときは、この銀行預金の通帳を無条件で全額提供しようと決心し、実家の父に保管してもらいました。

それが急に私が一人になってしまい、そのお金を夫のために使うチャンスもなく、かえって夫の遺産を多額にいただいてしまう破目になってしまったのです。

私が育った両親の住む芦屋の広大な邸は、今では兄の所有になっていきますので、私はその家に帰ることも出来ません。両親は「お前さえよければ、いつでも帰っていらっしやい」と

と言って下さるのですが、私が結婚後、すぐ兄も結婚して、私より一つ上の兄嫁がいますので、帰る気がしないのです。

兄は大学を卒業するなり、父の息のかかった中堅の証券会社に勤めていて、今では役付きになっています。

時たま、顔を合わしても株式の話ばかりでダウが上がったとか下がったとか、公定歩合がどうしたとか、円の切り上げの影響はどう

だとか、一向に私には珍パンカンのことばかりを話題にするので、とっつきにくいです。

商売柄、私の遊び金に目をつけて、「お前は来年の三月には相続税やなんかで相当税金を納めなくちゃなくなるから、ひとつ、こちらで増しておいたらどうだ」と抜目なく勧められて、手持ち金の一部を運用してもらいました。松下電器、前田建設、立石電機などを買って、平均して約一倍半ぐらいになったといって益金の明細を見せてくれました。「やはりプロは腕が違いますわね」と、ほめてあげましたら、「今回はタイミングがよかったから成功したが、いつもうまくゆくとおいたら間違いだ。こちらで固いものにしておいた方がよいだろう」という控え目な返事で二千万円ばかりになった私の遊び金を割引債券にして下さいました。

六月になって亡き夫の生命保険金の支払いがありました。これで夫との絆も、切れてしまふのだと思うと、ま新しい一万円札の束を手にしなが、また改めて悲しみの涙にくれてしまふのでした。

こんな悲嘆の気持を忘れてしまふのには、やはり、全身がくたくたになるまで縛られ、責められ、その挙句、激しい罵倒を加えられ

たら……と考えたりします。そう思っただけで、私の身内が熱く燃えあがります。

私のこんな気持は不貞のあらわれでしょうか。夫のことを想えば想うほど、私はやるせない身体と心のしびれに、耐えきれなくなつて、こんな考えてはならない不貞の欲望に、さいなまれるのです。

先月の中頃、夫のお墓が出来たので、と誘われて、夫の故郷である木之本まで旅をしました。旅といっても、交通機関の発達している現在のことですから、大阪から木之本までは北陸本線に米原で乗り換えて三時間ばかりで行けるのです。

名神高速道路を利用して車で行けば、もう少し早く行けるそうですが、のんびりと汽車の旅も味があるだろうということで、私の両親と、夫の両親、それに妹さん二人と親戚の方など、総勢十人で行きました。

私は久方ぶりに郊外へ出るので、まるで修学旅行へでも行くような、はなやいだ気持でマンションを出ました。喪服は車で先行しました夫の兄に持って行ってもらいましたので私は特に地味なのを選んでベージュ色のワンピースを着てゆきました。

大阪駅から九時五十分発の急行ゆのくに1



号に乗車、十一時二十五分に米原に着き、そこで各停の北陸線に乗り換えて、十二時十六分には木之本駅に着きました。

駅には車が迎えに来てくれていたので一先ず、お寺に落ち着いて昼食をしました。

新緑の青葉若葉のみずみずしさは、都会育ちの私にとって、久しぶりに生命の洗濯をしたような気持で、両親の勧めるように、旅行を試みたらという心が動きました。

親しい友達でもいい、誰か私と一緒に遠くへ旅行してくれる人って、いないかしら。

今の私でしたら、外国旅行の費用だって、負担してあげられるのだけど、男の方と違って、若い女性である私には、お金の使い方で知らないんですもの。じっとしていても、自分名義のお金が、だんだん増えてくるような気がしてなんとなく、その使い途にあせるような今日この頃です。

義父が、お墓の費用の半分は私たちが負担します、そうしないと自分たちの気がすまないからと言われて、私達の住んでいた家売却した代金をお預けしていた中から三百万円を私に返して下さいました。「これは、お父さんにお返ししたお金ですから」と申し上げたのですが、どうしても固辞してきいて下さいません。

若い女の身ですから、自分で事業をする能力もありませんので、ただ心が落ち着くまで自分の城である、このマンションの一室で、じっと物思いに耽っている私なのです。

元来、私は夫となる人につき従ってゆく性格の女です。若し、お勤めに出るとしても、バーやキャバレーのような水商売には、とて

も入る気がしません。やはり事務員といった地味な仕事に適しています。そういう仕事がないときは、ビルの掃除婦でもいいのです。

平凡な家庭の主婦が一番、私の性に合っているように思います。といって、簡単に結婚しようという申込みの方々に、素直に応ずる気にもなれないのです。前記のI・Yさんのような方だったら、そんな気持も動くのですが、彼は初婚で私は未亡人、一方的に私が希望したって、果たされる筈がありません。

二十六才から二十八才ぐらいまでの若い方が私に結婚を申込みれておられました。そんな若い男性の方でしたら、子供はないとはいえ、私のように一度、結婚生活を経験した女を選ばれなくても、二十才前後の初婚の方が沢山おられるのに、と思います。

三十代の生活力のある逞しい男性を夫として仕えたい私なのです。仕事のお手伝いでしたら、私は和文英文のタイプも打てますし電卓による計算や簡単な経理も出来ます。でもそんな年輩の男性でしたら、すでに結婚しておられて、お子さんの一人や二人、持っておられるでしょうから、私の願いもかなえられそうにありません。

亡き夫には、貞淑でありたいと願う私。だ

から、若し私を犯すのだったら、私の自由意志を奪う意味で縛ってからにして――。

そんなことを考えたりしている私です。縛られてしまって犯されるのだったら、縄の好きだった亡き夫も、私を許してくれるかもしれないものね。

六月に入って、梅雨の晴れ間の或る日。

私のお友達の悦子さんの兄さんが社用で東南アジアへ旅行するのを、大阪国際空港へ見送りに行きました。

彼女の自宅は西宮ですので、私は相互タクシーに電話してマンションまでハイヤーを呼び、西宮まで走らせました。

彼女は私より一つ年上の二十四才ですが、まだ未婚なので、私よりは若く見えます。身体にぴっちりノースリーブのワンピースが超ミニなので、如何にも挑発的なのです。

お化粧もツケマツ毛にアイラインも念入りで、女の私が見ていても美しいなアと感じるくらいです。素顔のままでも特に目立ったお化粧もしていない私に、「旦那さんを亡くしたからって、少し野暮ったいんじゃない」と忠告してくれます。

私の場合、ミニも膝上何センチという超ミニではなくて、膝頭スレスレのミニなので、

野暮ったく見えるのでしよう。ホットパンツや超ミニの洋服の奥さんが、子供の手を引っぱってスーパーマーケットなんかには、買い物に來ている風景をよく見かけますが、やはり結婚した以上は、少しは長目にした方がいいのじゃないかと私は考えていました。

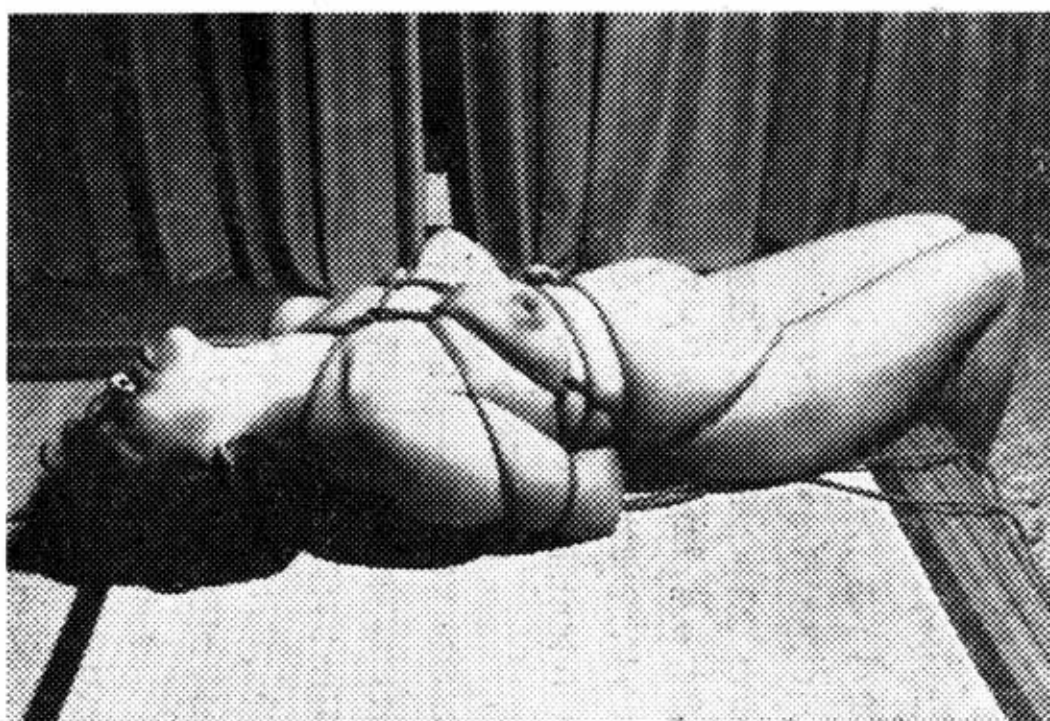
でも、彼女の場合は違います。文字通りのミスですから、カモシカのような脚線美を誇らし気に晒していても、誰に何の遠慮会釈もないのです。それに、背がすらりとしていてスタイルもよいので、よく似合います。

西宮の酒造家のお嬢さんというのですからきつと、よい縁談も沢山あるのでしょうか。快活で屈託がなく、のびのびとした性格は如何にも育ちのよさを物語っています。

私のようなヌカ味噌くさい家庭的な性格とは大分違っています。でも、今の私に、そのように背伸びせよといわれても無理です。

国際線のカウンターには、お揃いの日航の航空バッグを肩にした団体の観光客が沢山集まっています。行楽シーズンの賑やかさが、華やかな雰囲気の中で、如何にも楽しそうでした。

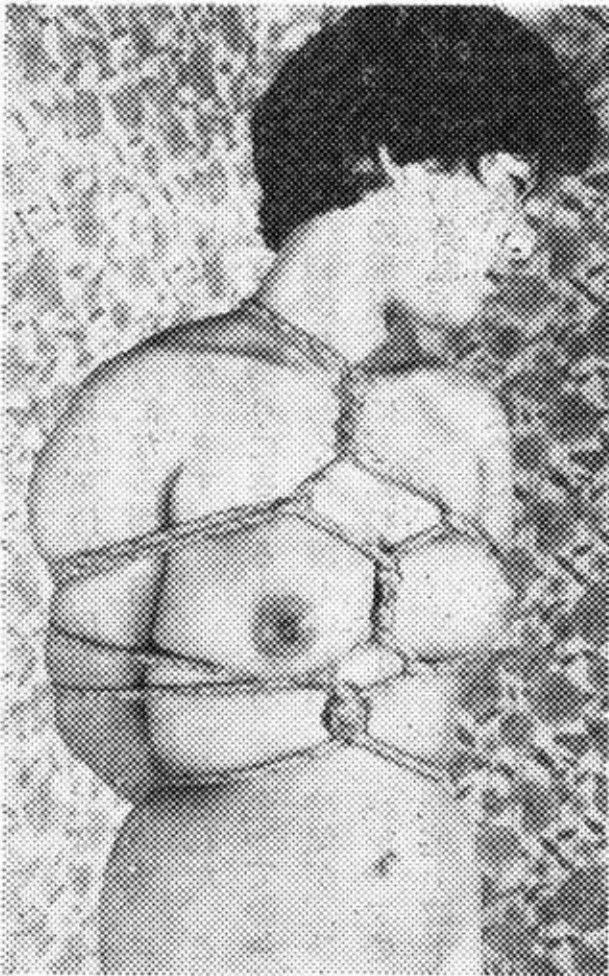
悦子さんの兄さんには会社の同僚の方達も見送りにみえていましたので、私達は待合室



の片隅のソファで、おしとやかに坐って雑談に楽しい、ひとときを過ごしていました。

本当は、お兄さんを見送るといのは、いわば口実で、「空港へ遊びに行ってみない。兄を見送りがてら――」という彼女の誘いでお喋りと食事、それにショッピング。

独身時代の私は彼女とよく逢っていました



が、それが突然の私の結婚で暫く遠のいていたのです。この頃は私も暇を持て余し、再び至って頻繁に往来するようになっていきます。

悦子さんは如何にも能弁で、読書もよくするの、なんでもよく知っていました。私はいつも聞き役で、そんなところから、よくウマが合うのか、仲のよい友達でした。

容貌といい、スタイルといい、とても私には太刀打ちの出来ない相手で、その点でも私は悦子さんを尊敬しているのですが、私が先に結婚したことでは、大分、彼女に恨まれました。彼女は私の結婚生活のことを、根掘り葉掘り詳しく聞きたがるのです。でも、どうして、私がそんなことを、あからさまに喋れ

るでしょう。いつも私はそんなことを尋ねる悦子さんに対して、言葉を濁して逃げてしまっています。

今日も、空港の見える国際線乗客の待合室の上にあるラウンジで、冷たい飲物を口にしながら、雑談を交しているうち、私に夫婦生活の体験を、どうだった？ と話すように迫るのです。私が、ぽっと眼もとを赤らめて、ためらっていますと、彼女は一層面白がって話せ話せと、せがみます。

たった六カ月とはいえ夫婦生活を経験した私が、ミスである彼女に対してたった一つ優越感に浸れる事柄なのかもしれません。体格がよくて健康な悦子さんは、今まさに結婚適齢期なので好奇心も人一倍なのでしょう。

本当は彼女のように、なんでもかでも、かくしだてせず喋る人の方が真面目で、私のように羞かしがって、ごまかしてしまう者の方が心の中が淫猥なのかもしれません。

発着する便のアナウンスを聞きながら、滑走する飛行機を窓越しに眺めていますと、

まるで、外国へでも来たような錯覚に陥ります。といっても、私はまだ一度も、国外へ旅行したことはないのですが……。

国際線のロビーから国内線の待合室に至るまでの廊下の両側に並んだショッピングセンタールのお店を一軒一軒、二人でのぞき込みながら、楽しいお喋りのひとときを、過ごしました。

「新婚旅行はハワイ？ それともヨーロッパに行くの？ とにかく、ここから出発するのネ。羨ましいワ」と私が彼女を冷やかしますと、「それも相手次第よ。今、私の好いている彼には、とても、そんな力はなさそうよ」と案外、彼女は淋しそうですね。

無二の親友の二人ですが、お互いに、まだまだ打ち明けていない面もあるのです。

伊丹空港から私のマンションまで、素晴らしいハイウェイが通じています。もっと車に乗っていたいと思ったのに、あっという間に着いてしまいました。

静かな夜――。

私はたった一人で、自分の城にとじこもって、なすすべもなく物思いに沈んでいます。

I・Y氏のことが、しきりに思い出され、一思いに東京へ飛んで行きたいという気持が

高まり、「今の私には誰も止めだてする者はいないのだわ」という安易な気持と、反面、溺れていってしまいそうになる弱い自分の心が、そら恐ろしくさえなります。

剃毛された上で股間縛りにされる——そう考えただけで、胸がわくわくし、誰もいない自分一人だけの部屋なのに、思わず知らず顔を赤らめている私です。

——もう一度、縛って、責めて、いじめてほしい。そして写真を撮って——。

そうお願いした手紙を、編集部へ送って、そして、直ぐOKの返事をいただいて、そのときになって、なんとなく心の抵抗を感じて電話でお断わりした私——。

もう私は若くはないのだ。そう考えますと一層自分が、はじめになってくるのでした。でも、でも。今のこの被虐に憧れる気持を抑えることも、むずかしいのです。

「プレイをしましょう」そういう呼びかけのお便りが、手元には何通もあります。

私の一つの心は、今にでもお返事を書いてお逢いしたいと、はやりきっておりませんが、もう一つの理性は、わけのわからないモヤモヤとした抵抗となって、心の奥底に深く淀んで沈潜してしまい、編集部へは一度はお願い

し、そして、お断わりするというようなことになったのでございます。

いま、コンクリートの厚い壁で外界と隔絶された、このマンションの七階にある一室は至って静かです。窓を開けますと湿った夜の冷気が、ひんやりと忍び寄ってくるようで、パジャマ姿でいると肌寒いくらいです。やはり地上数十米の高さのせいでしょうか。

『一人暮らしは至って気楽なものです』という手紙をお友達に書いたことがあります。ここへ移ってきました最初のうちは、自虐的な物思いに耽る自分を、映画やテレビの中のヒロインでも眺めるようなつもりで、甘やかしていました。が、やはり一人暮らしは淋しいものです。やせ我慢で、気楽だとか、のんきだとか言っていました。が、今では人恋しくて、淋しいのです。こんな私の気持は私の我儘勝手でしょうか。

世の中には、私なんかより、もっともっと不幸な人が沢山おられるでしょう。今の私の淋しさなんかはゼイ沢かもしれません。

でも、それはよくわかっていながら、なんといっても、私は緊縛プレイのパートナーがほしいのです。いつも、すべすべとした童女のような玉の肌を保っているように、私を剃

毛してくれる方がほしいのです。

嫌がり、羞かしがる私の両手を後手に縛り上げて剃毛されることを思うと、私はしびれるようなショックを感じずにはおれません。

私を縛り上げる縄は、きつければきつい程私は感度をあげます。遠慮や気がねは絶対になさらないで下さい。責められれば責められる程、私は喜ぶのですから——。

お逢いしたとき、私は羞かしくって、言葉に出して、よう言いませんから、ここに文章として書いてみました。

私にわざわざお手紙を下さった皆さまへ。私はいちいち、お返事を差し上げたいと思いましたが、でも、同じような文章を何枚も書くわずらわしさに耐えきれなくなって、失礼ながら途中で勘忍していただきました。

私は今、ベッドの中で、このとりとめもない文章を書いています。書き終わりましたらシャワーを浴びて寝ようと思います。

これからの私に、どのような運命が訪れますか、それは私にはわかりませんが、もし変わったことがありましたら、また書かせていただきます。

では、さようなら。

作 鬼 団



決 定 版

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

● 昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」

の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

／＼内容主要見出し一覧／＼

第一章 発端 第二章 人を探し 第三章 麗な来 第四章 援者の失 第五章 救済 第六章 餓魔 第七章 恐怖 第八章 淫蛇 第九章 美姉 第十章 色事 第十一章 落室 第十二章 密走 第十三章 脱走 第十四章 華やか 第十五章 地獄 第十六章 翻弄 第十七章 一万円 第十八章 身代金

第二十二章 身代金奪取の失敗 第二十三章 涙の宣誓 第二十四章 連命の逆転 第二十五章 奇妙な三々九度 第二十六章 飼育される白い動物 第二十七章 悪魔と悪女の悪業 第二十八章 屈辱の地獄 第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末 第三十章 悪鬼達の残忍な所業 第三十一章 落花無残の修羅場 第三十二章 淫らな美女の調教 第三十三章 すすまじいショーの展開 第三十四章 汚水にまみれた宝石 第三十五章 華々しき美女の屈伏 第三十六章 対峙する美女と美女 第三十七章 あくどい陥穽 第三十八章 羞恥図絵の展開 第三十九章 清純な令嬢の屈辱 第四十章 人身御供の令夫人 第四十一章 深夜の美少女とズベ公 第四十二章 小夜子への執拗な調教 第四十三章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇ショー 第五十三章 華々しきショーの展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の涕泣 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責め続く 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい儀の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなく汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。 5.58 暁出版株式会社宛

青春の陥穽(18)

女の意地

芳野眉美

A

帰宅したが、妻の葉子も、居候の勇もいなかった。

三田は、あわてて簞笥のひきだしや押入れを、あけてみた。葉子の着物も下着も、そっくりある。茶簞笥のひきだしに、貯金通帳も印鑑もあった。

三田は、ほっとした。妻の葉子と、居候の勇が駆け落ちしたかと思ったのである。貯金が、かなり引き出されているのを見る

と、葉子と勇が、どこかに遊びにいったらしいことはわかる。

落ち着いてくると、三田は、妻の葉子が外出したのは、二人で新世帯を持ってから始めてでないかと思った。

たまには、いいだろう。

三田は、のろのろと部屋の掃除を始めた。布団は敷いたままだし、長襦袢は脱ぎっぱなし、台所も洗い物で目茶苦茶で、勇も洗っていく、ひまがなかったらしい。葉子が帰ってくるまで、きちんと布団を敷き直しておか



春川ナミオ・画

ないと、葉子の気嫌が悪いだろう。

掛布団をはぐと、しわくちゃんになったシーツに、ちぢれたものが沢山落ちていて、まるまった毛布にかくれて、葉子のパンティがでてきた。

勇が居候するようになってから、妻にやいやいってパンティを穿かせるようにしたのは三田だが、あまり効果は、あがっていないようであった。穿いていようといまいと、男好きな女に関係はない。

パンティを穿かせれば、いつまでも脱がな

いというだらしなさだから、葉子のパンティは、いつでもしっとり湿っていて、体臭がこってり、ついている。

三田は妻のパンティをつまんだ。見ただけでも、かなり汚れていることがわかる。

葉子がパンティをきらうのは、

「お尻にくいこんで気持が悪いのよ」

というのが本当の原因だが、どちらかといえば、小柄な葉子で、小さなお尻がぷりぷりしているほうだから、パンティなど吸い込んでしまうのだろう。

無理に穿かせたものだから、三田は、妻のパンティについた汚れを、葉子に舐めさせられたこともある。

猿ぐつわ代わりに、口の中にぎゅうぎゅうと詰め込まれるのは、いつものことである。

葉子と三田の出合いは、パンティではなく生理バンドで、たまたま葉子がメンスだったとき、三田が便所まで葉子のあとをついていき、怒った葉子に、汚れたメンスバンドを、顔にすっぽりとかぶせられたのであった。

メンスで、葉子もそうとういらいらしていたのに違いないが、三田がああとき、なぜ、このこと便所までついていったのかわからない。

便所のドアを開けたままで葉子は用を足したのだが、尿ばかりでなく、赤いものが白い便器を汚してしまったのである。

「拭いてよ」

と葉子が、とげのある声でいい、

「はい」

と三田が、持って来た、手をつけていないおしぼりで拭こうとすると、

「誰が、おしぼりで拭けといったのよ」

と三田は、葉子の汚れた足の裏で、顔をけとばされたのである。

「おしぼりが使えなくなるじゃない」

「すみません」

友達に連れてこられた小料理屋で、いきなり葉子の素足の、汚れきった足の裏を舐めさせられたのが初対面であったが、あのままに終わってあれば三田は葉子と世帯を持つこともなかったことだろう。

「早く、お拭きよ」

白い便器にまたがったまま、葉子は便所にうずくまっている三田にいった。

「でも」

三田は、口ごもった。

「でも、なによ」

葉子は、ますます毒づく、

「おしぼりで拭いていけないとすると、なんでも拭きましようか」

「舐めれば、いいだろう」

と葉子は、いった。

「えっ」

「お前の舌で汚れたところをお舐めよ」

「――」

「舐められないのかい」

「い、いえ」

「それなら、早くおし」

三田は、便器をまたいでいる葉子の足元に四つ這いになった。

葉子の足の裏が、三田の顔を踏みつけた。

三田の顔が、赤く色どられた便器にこすりつけられ、葉子の足の下で、三田は苦しうに呻いた。

「オラオラオラ」

葉子は三田の顔を踏み潰しながら叫んだ。

「便器の中を、すっかり舐めておしまい」

三田の顔は、完全に便器に押し込まれ、水洗の水が、どっと三田の顔に襲いかかった。

葉子が、水洗の鎖を意地悪く引いたのである

「便器掃除が終わったら顔でも洗いな」

びしょ濡れの三田の顔を、葉子はゴムのメンスバンドで乱暴にふくと、三田の顔から、

すっぱりと、かぶせたのである。

布団の中に脱ぎ捨てられたパンティに、三田は顔を埋めた。そんな自分がなさけないとは思ふのだが、性癖がそうさせるのだから、こればかりは仕方がない。

ナイロンのやわらかな肌ざわりが、なんともいえないのである。

三田は全ストが好きでよく見に行くが、妙なことに、舞台衣裳としてのツンパにはそれほど興味が湧かないが、ツンパの下に穿いている、普通の薄いパンティを見ると、むらむらと興奮してくるのである。

パンティを脱いで全ストになったとき、彼女たちの多くは、パンティを丸めて腕に巻くというおかしな習慣がある。

その場合三田は、剥き出された裸身より、彼女の腕にまかれたパンティのほうが気になって、彼女が近づいたとき、腕にまかれたパンティへと首をのぼすのである。

男であれば、女のパンティが好きなのはあたりまえで、別にアブノーマルなことではない。ただ三田の場合、女のパンティに対する反応が、少々激しすぎるのである。

妻の脱いでいったパンティに顔を埋めて、三田は鼻をぴくつかせた。

パンティにしみついている妻の匂いのほかに、異なったものを三田の口と鼻が敏感に感じ取ったのである。

勇の匂いに違いなかった。

三田は、異様な嫉妬に全身が、がくがくになった。妻の葉子と居候の勇が、仲良く外出しているので、よけいに嫉妬心を、あおったのかもしれない。

B

三田が葉子と引越してきたとき、隣の空家に、留守番の勇が寝泊りしていた。

「隣の学生さん、おかしいわよ」

と、いいだしたのは葉子で、

「何かあったのかい」

と三田が聞くと、

「夜中、覗きにくるのじゃないかしら」

と葉子は、雨戸の節穴を指さしていった。

古ぼけた空家を安く手に入れたのだから、

覗こうと思えば、どこからでも覗けるのである。

「見られたな」

と三田が、ふくみ笑いをした。

男と女の平凡な構図を頭にえがいて覗いたとしたら、とんでもないことで、三田夫妻の

夫婦生活は変わりすぎていた。

晩酌風景にしたって、後手に縛られた三田が、お膳に腰掛けた妻の足に首を挟まれて、猫がミルクを飲むようにペチャペチャと音をたてているのを、眼を細めて見やりながら妻はビールを飲んでいて、といった具合であった。

葉子が口に含んだビールを唾液ごと、ぽとぽと三田の口にしたらせるのは、まだいいほうで、はだけた丸いおなかのあたりからビールを流して三田に吸い取らせたり、「葉子が、わざわざビールをあたたためてやっただぞ」

とわけのわからぬことをいって、三田の口に放尿したりするのである。

酒の肴といえば、指にはさんでたべさせるのは、まだ上品なほうで、お尻で肴を敷き潰したのを、そのまま三田の顔の前に突きつけてたべさせるのである。

「隣の学生さんも、そうとうなものよ」

とある日、葉子が三田にいった。

「事件かい」

一人で留守番をさせておくのだから、たいくつしのぎに、何かあったほうがいと三田は思っているのである。

「お便所に入っているとこまで覗かれちゃったのよ」

「ほう」

三田はあきれて、隣の空家を見た。

「下の小窓を開けておいたのと違うか」

「そうじゃないわ」

と、葉子はいった。

「汲み取り口よ」

「えっ」

三田は驚いた。いくらなんでも、便所の汲み取り口から覗く馬鹿はいない。

「本当かい」

「本当も本当。びっくりしたわ」

「それで、どうした」

三田は、葉子が、覗かれていると知って、排泄したのか、しなかったのか、そのほうに興味があったようであった。

「どうしたって……あんなものが途中で止まるはずがないでしょう」

葉子は不服そうにいった。

「最中に気がついたのか」

「そうよ」

「声を出さなかったのか」

「恥ずかしくて」

これは葉子のうそである。

汲み取り口から顔を出している勇にむかって、葉子はこういったのである。

「もう少し顔をおだしよ。ひっかけてやるからさ」

事実、勇は葉子にねらいうちされたのであった。

これが縁で、勇は葉子のいいおもちゃにされることになったわけだが、隣家の留守番の学生と妻の浮気を、三田はうすうす感づいていた。

それが、堂々と居候をきめこむことになったのは、学生が、葉子に海老責めにされ、炭俵詰めで床下の穴に閉じ込められて、発熱してしまっただけである。

だが妻の浮気を、三田はむしろ、夫婦生活の刺激剤にしていたといっている。

葉子が浮気をしていると思っただけで、三田は興奮出来たし、いくら葉子が火遊びをしたとしても、結局は自分から絶対はなれないという自信が、三田にはあった。

葉子は、三田の個人タクシーの収入に魅力を感じているのだし、古ぼけた家とはいいながら、土地つきの家が自分のものになるならば、三田から離れる理由はない。

それからもう一つ。絶対的な理由は、その

奇妙な夫婦関係にある。

三田と葉子のSEXは、単なる肉体の交合ではない。葉子が女王で、三田が奴隷というSMプレイを主体とするSEXなのである。

サディスティンの葉子は、マゾヒストの三田をはなすわけがない。

このSMプレイにしても、SEXの場合だけ単独におこなわれるのが普通なのだろうが三田と葉子の関係は、日常生活までSM関係が持ち込まれている。

部屋の掃除から食事の仕度、洗濯まで、主婦の仕事はすべて三田がやり、葉子は、ただ寝ていて、帰って来た三田を責めたて、年下の勇と浮気をしていればいいのである。

葉子に対しても勇に対しても、三田は、かなり自信を持っていたつもりであるが、帰宅してみても葉子と勇がいないと、つい、二人に逃げられたかと思って、三田は、あわてたのであった。

勇に対する嫉妬が強くなったことは、勇を意識しはじめたことになる。

三田は、はっきりと勇に憎悪さえ、感じてきている自分に気がついた。

「追いだすか」

と三田は、ひとりごとを、いった。

「追いだせるものか」

と心の中で思った。

「いや、追い出してやる」

と三田は叫んだ。

「葉子が反対するだろう」

と三田は、自問自答した。

勇を追い出すことは無理のようであった。

妻と居候が一つの布団に寝ていて、夫の自分が一人で寝ている。こんな馬鹿な話があるかと三田は憤慨した。

そのくせ、妻の葉子が勇と寝て、甘い声を出すのを聞き耳立てていると、なんともいえないマゾヒスティックな気分になって、三田は興奮しているのである。

SEXは理屈ではない。肌で感じ取れば、それでいいのである。このまま、M的生活を送りたいのならば、妻と勇の関係はこのまま認め、三田は二人の奴隸的役目を果たして、M的感興にひたっていればいい。

勇を追い出すという心境は、三田の普通の男としての考えである。M人間としての三田ならば、その屈辱生活の中に、被虐的なよろこびを見出すのに違いない。

妻の汚れたパンティをにぎったまま、三田は、しばらく、ぼんやりしていた。

C

葉子のいる小料理屋に三田が通い始めたのは家が面白くななくなってきたからであった。

三田は養子で、両親は養父母になる。

三田の別れた妻の君子は、平凡な、とりえない女である、と三田は思っている。

三田の商売は、お菓子類の箱をつくる零細企業だが、使用人も数人いて、けっこう、はやっていた。

三田が黙々と商売に、はげんでいたこともあるが、一家総動員で働いていたから、それだけ利益もあったものだろう。

使用人とはいえ、遠い親戚すじにあたる三田が、養父母にきにいられて、一人娘の君子と結婚して子供も三人できた。

結婚し、子供もつくり、商売も、うまくいってくると、三田の心に、ふと疑問が生じたのである。

一人娘の養子になったわけではないが、夜の夫婦生活が、いやに単調なのに不満を感じてきた。

君子も仕事をしているから、疲れて、SEXまで気が進まないのかもしれないが、だからといって、夫婦生活の中から、SEXをと

っていいものかどうかである。

ことに、子供を三人も生んだことによって責任を果たしたつもりなのか、君子の肉体がそれほど夫を求めてこない。SEXは快樂のためより、まだまだ子孫繁栄という本能的な生物の繁殖に支配されている。

三田は、君子の裸体を、あまり見たことがない。両親と一緒にあり、開放的な日本家屋だから、君子が裸体になれる条件はない。

そして、次々と子供が生まれてしまえば、小さな侵入者の目が、ことさら、君子の裸体を遠ざけてしまった。

三田は、妻の君子が女としての満足を知っているのかどうかも分からない。子供が寝つくのを待って、もそもそと妻の布団にもぐりこみ、ほんの二、三分で終わって、

「どうだった」

と、きくと、

「いいわ」

である。

君子の悶える声を三田は一度も聞いたことがない。もしかしたら君子は、一生、三田しか男を知らず、一生、女としての喜びも知らずに過ごしてしまうかもしれないのである。不感症でもないのに、自分から不感症にし

ているのが、妻という座にしがみついている女たちではないだろうか。

夫婦のSEXに疑問を持つてくると、ほかの夫婦の夜の生活が気になってくる。

最近の雑誌類には、特に夫婦交換の記事が多い。そんなことを君子に話をしたら、ヘンタイ呼ばわりされて侮辱されるだけである。

三田は、夫婦のSMプレイの記事が、うらやましくて仕方がなかった。

三田のM性は、葉子によって開花したといったほうが妥当かもしれない。

養子になるつもりで君子の両親をたよったわけではなかったが、生まれつき、三田の性格は、M的要素を多分に持っていたのかもしれない。

一人娘の君子の夫になったとしても、養父母にえんりょして、君子の尻に敷かれることぐらい、三田はわかっていたはずであった。

生活そのものが、はじめからM性をおびていたのである。

女の足を舐めたからM、女のパンティが好きだからM、女の尿を飲んだからM、というわけでは、ないだろう。たまたま、三田がサディスティンの葉子を知ったから、三田のM的要素が引き出されたのにすぎない。

マゾヒスティックな女に出合っていたとしたら、三田のM的要素が消えて、新しく、S的要素が生まれてきたかもしれない。

人間の性格を、そう簡単に、SだのMだのと分けられるものではない。影響をあたえてくれる人間によって、引き出される方向も違ってくるわけである。

三田は、悪友が、葉子のいる小料理屋に引っぱっていったことに、感謝していいものやら、うらんだほうがいいのか、よくわからない。ただいえることは、葉子によって、三田は生活を変えさせられたのである。

家の仕事をほっぽって、三田は葉子のいる小料理屋に入りびたりになった。

当然、仕事の金は使い込む、養父母から、それとなく注意をされ、君子は怒り、子供たちさえ、父親を白い目でみるようになる。

使用人さえ、馬鹿にしはじめる。

三田は、ますます家が面白くない。

小料理屋で得た三田の悦楽は、葉子のねえさん株の滝子の巨大な尻を舐めさせられ、屁をひっかけられ、葉子の歯をみがいた、うがい水を口で受けたり、便所のあとしまつを舌でさせられたりすることであった。

そのほか、部屋や便所の掃除、洗濯から着

物のほころびを縫うことまで、あらゆる雑用を、させられるのである。客ならぬ客が三田であり、三田は、滝子と葉子の、ていといい女中がわりになってしまったのであった。

遂に、自家用車と金を持って、無断で三田は家を飛び出した。したがって、三田は、まだ君子と離婚していない。

夫の前から蒸発した葉子と三田の結びつきは、だから、なかなか、こみいつている。

二人とも現在、正式に結婚している夫があり、妻がいるのである。離婚が成立しなければ、三田と葉子は、あきらかに重婚になる。

一人ぼっちになって、家を掃除し、洗濯機をまわし、夕食の仕度をする三田は、出て来た家のことが気になって仕方がなかった。

一人きりになったり、葉子から捨てられたのではないかと思ったりして気が弱くなるとやはり残してきた子供のことが気になり、会いたくなるから不思議であった。

しかし、今更のこの帰っても、妻の君子や子供たちが、暖かく迎えてくれるかどうかわからないし、養父母や使用人たちのこたわりをなくすことは、むずかしいだろう。

葉子が家にいないというだけで三田は、かなり、がっくりきたようであった。

D

布団をかたづけ、部屋の掃除をし、夕食もすませたが、葉子と勇はまだ帰って来ない。

しわくちゃだらけのシャツやら、どろどろになった長襦袢やら、黄色い染みが、こびりついているパンティやらを、みつけしだいに洗濯してしまったが、それでも、まだ、二人は戻らなかった。

一人で飲むビールは味気ないもので、葉子から後手に縛られ、葉子の白い、むちむちした太股の間に挟んだビールを、首をのばして飲むほうが、三田はどれだけ楽しいかわからない。本妻や子供たちを捨て、ささやかだが社会的地位、というより、世間なみのくらしまでも捨てて家を飛び出したのは、好きな女と自分の性癖に合った生活を送りたいためであった。

常識的に見れば、薄汚れた、じめじめした不潔な生活かもしれないが、うわつつらだけでうすっぺらな世間なみの生活より、どれほど時間を大切に使っているかshれない。

快楽と一口でいうけれど、日常生活に快楽を持ち込んでいるのは、ほんのひとにぎりの人種だけにすぎない。したくてもできないの

が世間の人間で、だから無責任が、こりかたまったような文学、特に小説が、はやるのである。

庭に出たが、何もすることがない。愛車もとうに洗ってしまった。三田の仕事は、せかせかしていて早いのである。気が短かくて、落着きがない。

大崎の家の窓から明かりが洩れていた。

大崎は、妻の絵里子を、仕事のために利用している。

妻の絵里子を、商売相手に売ってまで、仕事をとるということが、三田には、よくわからない。妻の肉体を売ってまでも、とらなければならぬ重要な仕事というものが、いたい、あるものなのだろうか。

妻の肉体を売るということは、サディスティックな行為のように思われるが、三田からいわせれば、妻がほかの男と浮気をする事と同じだから、むしろ、マゾヒスティックな行為に近いのではないかと思うのである。

妻を売ろうが売るまいが、妻が他の男とSEXをしたり、また、SMプレイをすることは同じことである。妻が自発的に浮気をするのと、夫に無理強いされて浮気をするのとは根本的に違うと言えはそれまでだが、男と女

のSEXということのみを考えたならば、理由はどうであれ、結果は、まったく同じことだと思ふのである。

ともあれ、大崎は妻の肉体を利用して多額の商取引をしたことは間違いないのである。

三田は、ひとつ、大崎にみならって、妻の葉子を、客に紹介して、金をかせいでやろうかと考えた。

個人タクシーをしていると、女を求める客が、いかに多いか、よくわかるのである。

「どこか、面白いところはないかね」

とくれば、

「女ですか」

「おっ、よくわかるじゃない」
と、きまっている。

三田から求めたわけではないが、トルコの女たちから、客の紹介をたのまれたり、小料理屋の女たちから、店が終わった頃、声をかけてくれたのまれてはいるが、葉子のような、SMプレイ向きの女は、いない。

トルコ風呂を利用する客のなかで、最近、特に、トルコ嬢の尿を求める客が多くなったのは、飲ませる、という感覚が一般的になりすぎたせいかもしれない。

女の尿を飲む、飲ませられる、という人間

便器願望は、空想的で、妙に甘美で、ロマンチックなムードがあるから不思議である。

M人間にとっては、こたえられない、皮膚的感情なのだが、現実となると、そうは甘くない。それでも、その実行者が、かなり多いのに驚くのである。

女たちにしても、飲ませるといふ行為に、それほど抵抗を感じていないのは、SEX感覚の時代の流れなのだろう。気軽に、別にサディスティックな感情も持っていないのに、平気でことをすましてしまう。

要するに、彼女たちにとっては、男の口に放尿すること、尿を飲ませるといふ行為は、単なる遊びなのである。

葉子が、三田が考えているほどサディスティックな女なのかどうか、本人がどう思っているのか、それはわからない。

小料理屋で、葉子にS的な行為を手ほどきしたお滝姐さんにだって、そのことはいえるのである。

肥満した中年の女の全ストなど、見たくはないだろう。若くて、すらりとしていて、綺麗な女を見たいのは人情だ。

ところが、その、顔もあまりよくない、肥満した中年の女が、真打ちであり、人気があ

るのは、その女が、客を小馬鹿にしたような大胆なポーズをとるからである。

たいていの女が尻をかくすのに、わざわざ後ろ向きになり、客の頭をまたいで、ひらいて見せる。

仰向けに寝て、大股をひらいたかと思えばわざわざ「ここが、オシッコの出口だよ。わかったね」と説明する。

彼女の行為は、いやになるほど、はっきりしていて攻撃型である。

そこが客に、うけるのである。

意識していなくても、彼女は、客に対して粗雑に、横柄に振るまうことによって、人気を得ていることに間違いはない。

そんな女は、やはり少ないのである。

葉子は、商売になる、と三田は思った。

トルコにも、クラブの女にも、飲み屋の女にも満足できない客を、葉子に送りどければ、貯金は一気にふえるのに違いない。

三田は自分の思いつきに、わくわくしてきたが、葉子が、はたして三田のいいなりに、客をとり、こなしてくれるかが、問題であった。とてものこと、大崎と絵里子夫人のように、いけないだろう。

「いい考えだがなあ」

と三田は一人言を、いった。

よほど、妻の葉子と居候の勇が遊びに出たまま、夜遅くなくても帰って来ないのが、気に入らなかつた。M的人間は、やきもちも、ねちねちしているのかもしれない。

庭においてある車のかげから、ぬっと人影が現われて、三田を、どきりとさせた。

「葉子かい」

と三田は、きいた。

返事はない。

「葉子かい」

と三田は、またきいた。

「やっぱり、ここだったのね」

聞き覚えのある女の声がして、

「あっ」

中腰になっていた三田の腰が、へたへたと

縁側に、くずれた。

「おっ、お前」

その先が声にならない。

「葉子さんでなくて、悪かったわね」

三田の本妻の、君子であった。

君子は怒ったような顔で、家出をした夫に近づいた。

「葉子さんという女の人は、いないの」

三田は、うなずいた。

「残念ね。会いたかったのに」

「会わなくてもいい」

三田は怒ったような声でいった。

「そうね、別に、葉子さんに会わなくてもいいのよ。会う必要もないし」

「何しに来た」

「何しに……あなたに会いによ」

と君子は落ち着いていった。

縁側に、三田と並んで坐り、家の中を、じろじろ見ていった。

「古い家ね」

「震災にも、戦災にもあっていない」

「震災って、大正の、関東大震災のこと」

三田は、うなずいた。

「古い話ね」

「俺とお前の仲のようにな」

「皮肉ね」

君子は、ハンドバッグから、ハイライトをとると、うまそうに吸った。

「お前、タバコを吸うようになったのか」

と、めずらしそうに三田が、きいた。

「お酒も飲むようになったわ」

「ほう」

しばらく別れているうちに、古女房が、急に色っぽく見えたから不思議であった。

「それで、仕事は、どう」

「いそがしくて、いそがしくて」

三田は、君子が自分を呼びに来たのだと解釈した。仕事がいそがしくなると、女手一本では心細いのだろう。やはり仕事は、男でなければ、だめだ。

「家に連れて帰るつもりかい」

と三田は、少々自慢そうに本妻にいった。

君子は首を振った。

「仕事のほうは、私一人で大丈夫。みんな親切な人たちがばかりだから、とってもよくしてくれるわ」

三田は、頭をガーンと、なぐられたような気がして、眼をむいた。

「今更、あなたが、のこのこ帰って来たって職人がいうことをきかないことぐらい、わかっているでしょう」

「――」

「それに、私の両親が絶対、許さないわ」

話が違って来たようであった。

「子供たちは、どうしたい」

三田は、急に心細くなって来た。誰からも捨てられたような気になったのである。

「私にね、新しいお父さんを、もらいなさいよ、っていうのよ。フフ」

「――」

「お見合の話もあるのよ、これでも」

三田は絶句した。

まるっきり、三田は無視されている。

家を出た三田の価値は、君子の家族の間でひとつも認められていないのである。

無価値、ゼロ、であった。

「で、どうするんだい、お前は」

三田は弱々しくいった。

「そうね」

君子は、急に小さくなった逃げ出した夫を見た。

「どうしようかしら」

「正式に離婚してもいいよ」

「ええ、有難う」

と君子は、にっこりしていった。

「考えておくわ」

どちらが男か女か、わからない。

「よくここが、わかったな」

と三田は話を、かえた。

敗北感が、身にひしひしと滲みこむのを感じて、三田は涙がでそうであった。

「車のナンバーよ」

と君子はいった。

「白タクとはうまく考えたわね」

個人タクシーを偽装した白タクだと、本妻の君子は見破っているのである。

「たのむ。バラすなよ、な」

三田は本妻に手を合わせた。

「誰がいうものですか、逃げていっちゃった夫のことなど」

「すまない」

「今更、あやまってほしくないわ」

君子は、洗濯ものに眼をやり、

「あら、葉子さんのパンティまで洗ってあげるの」

と三田にいった。

洗濯したばかりで、パンティから水がたれてるから、すぐわかる。

三田の身体が、また一段と小さくなったようであった。

「私のパンティも洗ってもらおうかしら」

「えっ」

「まさか、そんなことはないわね」

決定的な君子の絶縁の言葉であった。

「葉子さんって、綺麗な人なの」

と君子は立ち上がって聞いた。

三田は無言であった。

「綺麗な人でないと、私、いやだわ」

「君子」

と三田は叫んだ。

「お前、なんで、ここに来たんだ」

「気になったからよ、あなたのことが」

「君子」

君子は静かに手をあげると、車のかげに消えた。

「君子」

と、また三田は叫んだ。

車が、古びた家から、遠ざかったようであった。

E

「いいのですか、奥さん」

と運転している男が、助手席に坐ってぐったりしている君子に、いった。

「御主人を連れて帰らなくても」

「いいのよ」

けだるそうに君子は、いった。

「そんなに意地をはらないで、もう少し素直になったらどうです」

「女の意地」

君子は低い笑い声を立てた。

「流行歌の題名じゃありませんよ」

怒った声で男はいった。

「あら、相沢さんが怒ることないでしょう」

君子は、逃げだした夫と同年輩のこの男にいった。

「だって、奥さんは、御主人を愛しているのでしょう」

「愛しているわ」

君子は、相沢の横顔をじっと見つめながらいった。

「私の、たった一人の男ですもの」

「——」

「私はね、相沢さん」

と、君子は熱っぽい口調になった。

「ほんとに私は、男は、三田、一人しか知らないのよ」

「わかりましたよ、奥さん」

相沢の運転が乱暴になった。

「家に連れて帰れないのなら、どこかのホテルで、御主人と会ったらどうです」

「ホテルに連れて行って」

と君子がいった。

「ホテルですか」

「そうよ。今、相沢さんがそういったわ」

「御主人と会うわけですね」

相沢は君子を、にらみ返した。

「ちがうわ」

と君子が、ハンドルをにぎっている相沢の

手に、そつと手を添えた。

「相沢さんとよ」

「えっ」

「ねえ、お願い。ホテルへ行つて君子を、め
ちゃめच्याにして」

君子は叫んだ。

「もう、たまらないの」

「御主人の代用ですか」

冷たい声で相沢はいった。

「ちがうわ」

君子は相沢の手を、にぎりしめた。

「相沢さんが好きなの」

「――」

「だから、君子をめっちゃめच्याにして」

車が急カーブを切つてUターンすると、闇

の中を、ぐんぐんスピードをあげた。

「主人のところに帰るのはいや」

あわてたように、君子は叫んだ。

「帰るものですか」

と相沢は、いった。

「奥さんをめっちゃめच्याにしないと、ぼくま

で気が狂いそうだ」

急に気がぬけたように、君子はぐったりと

座席に身を沈めた。

君子は、ホテルに入るのは始めてだった。

三田が家出をしてから、なにくれとなく同
商売の相沢が相談相手になってくれるからこ
そ、女一人でも、どうにか仕事を続けられて
いるのである。

相沢は独身ではない。

ホテルに入るなり、

「お風呂に入りたいの」

と、君子はいった。

夫以外の男に、はじめて肌を見せるのであ
る。当然のことであつた。

浴室の脱衣場で君子は、あつという間に相
沢の手で全裸にされた。

「乱暴ね」

と君子は荒々しい男の手に翻弄されて、身
体を、ちぢめていた。

「この体を、めっちゃめच्याにされたいのでし
ょう、奥さん」

と相沢の眼が異様に輝いていた。

いつ持つて来たのか、相沢の手にロープが
にぎられ、君子は、抱きすくめられると同時

に、ロープで後手に縛られてしまった。

「あつ、なにをするの」

「だから、奥さんを、めっちゃめच्याにするの
ですよ」

と相沢は、にやにやしていった。

君子は、全裸で縛られた身体を、こごめる
ようにして、浴室に引き立てられた。

「このチャンスを待っていたんだ」

と相沢はいった。

「このチャンス逃がしたら、奥さんは、ま
た御主人のところに行つてしまう」

縛られたまま、君子は相沢に抱きすくめら
れて呻いた。

相沢の厚い胸に押し潰されて、君子の、ま
だ、おとろえていない、ふくよかな乳房が、
ひしゃげていた。

「奥さんに、もっとも羞恥にみちたことをや
らせてやる」

相沢は、興奮して叫んだ。

「こわいわ」

後手に縛られては、どうするすべもなく、
背中を丸め、君子はうなだれていた。

「足をひらいて」

と相沢が君子にいった。

「立ったままで、放尿をするのだ」

「いや」

と君子は、身をよじつて逃げようとした。

「するのだ」

縄尻をがっしりとつかまえられて、君子は
よろけた。

「そろそろ、尿意をもよおしても、いい頃でしょう」

と憎々し気に相沢は、いった。

「そんな」

相沢の車で家を出、三田と話をして、相沢とホテルに着くまで、君子はまだ一度もトイレに行っていないのである。

「吸い出してあげましょうか」

と相沢が、いった。

「いや」

君子の人妻らしいゆったりした腰に、相沢の両手が巻きつき、がくりと膝を折った。

「いやよ、いや」

相沢の顔が、じわじわと迫ってきた。

「ああッ」

と君子は悶えた。

「やめて」

「——」

「お願い」

相沢をはねのけようにも、いや、相沢の顔を両腕で力一杯抱き止めようにも、君子の両手は、背中にまわされて、ロープで固く縛られていたのである。

「ああ」

君子は、うらめしそうに呻いた。

「かんにんして」

すでに、尿意がきているのである。

「はなして」

「——」

「でちゃう」

「——」

「だめよ、だめ」

それでも、相沢は顔を上げようとしなかった。

「ああッ」

相沢は、とびのいた。

立ったまま、足を開いて、君子は羞恥でふるえていた。

相沢は、なんども、うなずいた。

「よし、これでいい」

と相沢は、いった。

「これで、奥さんは、ぼくのものだ」

君子の髪をつかみ、タイルに膝を折らせる
と、君子の顔の前に立ちはだかった。

「御主人には、こんなことをしたことはない
のでしょう」

君子は、眼を閉じて答えない。

「さあ、ちょっとでいいから」

君子の唇が小さく開けられた。

夫以外の男をはじめ知った君子にとって

は、あまりにも型破りな、残酷な相沢のやりかたであった。

やがて、石けんだらけの相沢と君子は、そのまま、浴槽に身を沈めたが、相沢の責めはまだ続いた。

浴室から上がると、相沢は君子をソファに坐らせ、後手に縛った両手を今度は鴨居から吊るして、両足を左右の肘かけに固定してしまつたのである。

君子は真赤になった。

女にとって、このポーズぐらい、羞かしい姿はないだろう。

「奥さんを、めっちゃめっちゃにしないと、気がすまないですよ」

にやにやしながら相沢は、いった。

「見ないで」

君子は半身を、のけぞらせて叫んだ。

「お願い、見ないで」

「こんな素敵な体を御主人は、なんで捨てたんだろう」

相沢は呻くように呟いた。



カット・黒田 縛

読 切 創 作

猫奇のみずどり

座 頭 木 之 介

(一)

あやしまれましたわ、お母さまに——とコ
ーヒー碗を受皿に置いて祐子は、はにかんだ
ふうに、わらった。

「どうしてだ、ン？」

城戸は、夕陽に映える祐子の片頬の美しさ
にみほれながら、コーヒーを口に運ぶ。赤い
ゴルフ・バッグを椅子に立てかけている。

「ちゃんと門限に間に合っただけだぞ」

「ええ。——でも、おうちに帰って何度もお
トイレにまいりましたのよ。エネマの量がず

いぶんだったのね、まだ残っていて、おなか
が苦しくておトイレに出たりはいたりして
いましたら、どうしたの、下痢でもなさそ
うね」とお母さまがおっしゃって、その眼が
こわかったわ、わたくし」

「ふむ。しかしそれは、おまえの気のまわし
すぎだ。エネマ責めなんということを、まさ
かおまえのママが察するわけがないだろう」
「はい、わたくしもそう思うのですけど、そ
のときは見やぶられたような気がして、顔が
まっかになって胸がドキドキいたしました」
「気のまわしすぎだって」

城戸は目じりに深いしわをきざみ、テーブ
ルの上で祐子のつやつやとしたミルクいろの
手をとらえ、花瓶のかげで愛撫した。
「かわいらしい手だ。おっぱいにさわってい
るような感じだ」

中垣祐子は臉をうす紅くして、ガラス窓へ
顔をむけると、ブラウンの小粋なアクリルジ
ャージの胸がひとときわもりあがって見え、
若さのうちに十分な成熟を秘めている新鮮な
姿態である。

「——痛い」

とっぜん指を噛まれて祐子の眉が翳った。

「専務さん、痛いわ。アア、は、離してっ」
苦痛に翳った眸が、ぬれたようなつやを帯びて、髪の毛の白な男の顔をみつめた。

「ここは喫茶店ですよ。人が見るわ……」

城戸は、さらに、がりりっと小指の骨を噛みくだくような衝撃をあたえて、おもむろに祐子の片手を口から、はなした。

喫茶店の、夕日をすかしている回転扉を出た。城戸は肩にかけたゴルフ・バッグをゆすりあげた。裏通りをえらんで二人は歩きながら、城戸の手が、そっと祐子のやさしいウエストにふれ、ときどき露骨に、かっこうのいいまるいヒップにさわる。いやいやと祐子の腰が逃げたりする。

土曜の午後で、都心の裏通りは裏通りなりに、さまざまなアベックが行きかうが、父娘のようなこの一対は、すくなくらず奇異な印象を与えて、ふりむいて見る男女もあった。

「二十一の娘に五十三の男じゃ、やっぱ釣り合がとれんらしいな」

城戸が祐子の耳に云った。

「今日は、どこのホテル？」

祐子は、うわめづかに城戸の顔を見た。

「ホテルは、もう飽いた。今日は、もっと、いい処へ、つれて行ってやる」

「いいところって、どこなのですか？」

祐子は気づかわしげに、また恥かしげにさやいた。小さなカソリック教会堂の裏にまわると、思いがけない小広草っ原があつてすすきや名もしれぬ灌木がいりまじって見え新築の一軒家のカラフルな模様が、まわりの風色と、はなはだ、そぐわない印象だった。

「いやよ、専務さん、どなたの家なのよ」

ブザーを押す城戸の横で祐子は逆らった。

「なに、いやだど？」

城戸の顔がふりむくと、バン！ 祐子の頬が鳴った。頬げたが、われそうな平手打ちを浴びて祐子が悲鳴をあげたとき、玄関の桃色のドアが内から、あけられた。

「——あら、専務さん」

色白な細面の美人がドアの隙間から顔をのぞかせた。そして祐子の顔を、するどく一瞥した。それから、こぼれるようにわらい、

「どうぞ——」

女は大きくドアを、くりあげた。

(二)

外観とはうらはらに、家の中のこしらえは和洋折衷の荘重な雅趣があつて、日本座敷は桧材が使われ、格天井で、床の間には漢詩の

懸軸が懸かっていた。そんなたたずまいを眺めながら中廊下をつたって、バーをしつらえたモダンな洋間にはいると、女はすぐウィスキーをもてなした。城戸は上等なブランドーしか飲まない。女が黙って棚からおろしたのは城戸の好みの銘柄のブランデーだった。

「どうぞ、お嬢さん、少し位いいでしょう」

祐子の前にもグラスが置かれた。

「紹介してよ、専務さん」

なまめかしい眼をして女が云うと、城戸は笑いながら、止まり木にのっかっている祐子のヒップをたたき

「この娘、秘書をしている中垣祐子だ」

「はじめまして、どうぞよろしく——」

祐子は目もとを紅らめて頭をさげた。

「やっぱ秘書さん？ ふふふ、思ったとおりね」女は齒なみのキレイな微笑をこぼして

「あたし、雨宮久美子。むかしは小室町で沙羅というバーをやっておりました。今はマンションを経営していますの」

女はチーズを切ってカウンターに置くと、バネ扉から外へ出て来た。久美子は、りゅうとした青い着物を着て、そばに來ると、エレガンスな香水が、におった。祐子の見るところ二十七、八という齡かっこうにうつった。

久美子が、ぼうず椅子に腰をおろすと、城戸京作は左右に美女をはべらした恰好になり、彼は青い着物の胸衿を両手で割った。

「ブラジャーをしてるのか？」

「いいえ」

久美子は臉を、ぼうっと紅くして首をふり「たまにいらっしゃったら、わかい人をつれて来て。あたしを妬かせて。——憎い、あなたは」

「すっぱだかになって、わかい娘に女ざかりの、いい躰を見せてやんな」

「しらない」

と、顔はすねながら久美子は、みずから胸もとをはだけて城戸の手をむかえ入れた。

「脱げ」

城戸が云うと、一種さわやかな衣ずれが鳴って、雨宮久美子は片肌ぬぎになった。

「はい、あなた。——ひさしぶりなこと」

白いむっちりした豊艶な乳房が、祐子の眼を打った。うるわしい丸い乳房だった。

「アア」

職工上がりの城戸専務の、ぶこつな手が、それをつかんでねじったり、双つをたたき合わせたり、押し揉みに揉んだり、さまざまに騷りはじめた。

「アア」

久美子は横木にとりすがって悲鳴をあげながら、虐められるままに胸をゆだね、さすがに祐子と視線を合わすことをさけていた。

「アア、ウムム……アア」

城戸は豊美な乳房に熱中して、きりなく騷りつづけた。祐子はブランドーを飲みほすと新たに注いで、またぐつと呻った。酒がいけるような女ではない祐子が、今はめずらしいふるまいをしていた。

「——ひさしぶりなこと……」

久美子は、あえぎながら、また云った。

「とつぜんやっていらっして……綺麗なお嬢さんなんかとやっていらっして……」

久美子の手がちいさくうごいて帯を解いている。床に垂れた薔薇模様の帯が、ひとりでにとけくずれたように祐子の眼にうつった。

「祐子」

城戸が、ふいに祐子の唇を吸ってきた。

祐子とはまり木から降り、ジャージーのミニたけワンピースを脱ぎ、まっ白いソックスを脱ぐと、海色の絨氈に脚をくの字にして坐った。久美子はすでに真紅の湯文字一つの姿に変わって、両脚を投げだした形で坐っている。

る。騷られて赤くなった乳房を斜めに反らした上体の姿勢で、久美子の眼は天井を見上げていた。

城戸が、赤い原色のゴルフ・バッグをひらいた。中から一条の細い革鞭をとり出す。ひゅーひゅーと素振りされるその細い鞭の運動を、二人の女は息を殺してみつめた。

城戸は鞭をひるがえしてビシッと祐子の太腿を打ち、ついで久美子の太腿も鞭を浴びてビシッと鳴った。

久美子は悲鳴をあげ、膝をくねらしつつ、

「さあ祐子さん、お云いつけどおりに初対面の儀式をいたしましょう」

「はい……」

祐子は青ざめた感じの顔でうなずくと、細腰をよじって、その腰から、しゃれたビキニパンティを脱ぎはじめた。雨宮久美子は紅い湯文字を左右に割って白い太腿をあらわにした。パンティを脱ぎ取った祐子の裸の脚が、そっと前へ伸びて来た。

爪先と爪先とがふれ合う。ついで足裏と足裏がぴったり密着すると、久美子の脚がリードする形で、四つの脚がクレインのように上へ持ち上がっていき、菱形になった。

「アア……」